

大分県文化財調査報告書 第一四八輯

大分の中世城館

第一集 文献史料編 1

大分県教育委員会

大分の中世城館

第一集 文献史料編 1

序 文

大分県は、古代以来の豊後国全域と豊前国の一部を含む地域によって成り立っております。この地に大友氏が守護職を得て以来、中世は大友氏の時代でありました。そこには有名な戦国代表大友宗麟が生まれ、九州六カ国に覇をとるほどに豊後は重要な地となりました。

現在、大分市内では大規模な開発事業により、はからずも大友氏の館跡やその周辺に展開した町の跡が、その生活遺物と共に再びその姿を現しつつあります。整備された道路、大規模な堀、礎石立ちの建物跡など、中世の府内の町が整備された都市であったことが確認されています。

しかし、そこで出土する貿易陶器などに示される南蛮交流都市としての華やかな一面とは裏腹に、一方では戦国時代の末期には府内の町が焦土と化すなど、中世という時代は戦乱の緊迫感に覆われた時代でもあったのです。

そのことを一番よく示すのが山城であります。しかし、それらの実態は必ずしも明らかではありませんでした。そこで、大分県教育委員会では、その保護と活用を図るための基礎資料づくりを行うこととし、平成七年度から九ヶ年計画で文化庁より国庫補助を得、県下五百六十箇所余の城館の調査を行ってまいりました。

本年度は、大分県の城館が文字として記された古文書に焦点を当て、集成を行っております。翌年度以降の刊行予定の現地調査資料と併せてご覧いただければ、より一層中世城館の姿が明確になってくるものと確信をしております。

最後になりましたが、文書の集成はもとより、長い間の厳しい現地調査を支えてくださり、ようやく報告書の第一巻が刊行することができます。のも、関係各位のご協力のたまものであると感謝しております。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

平成十四年三月三十一日

大分県教育委員会教育長

石川 公一

凡例

1. この報告書は、国庫補助事業「大分県中世城館等発掘調査事業」の報告書第一集文献史料編1である。ここには大分県内の中世城館に関わるものと見られる古文書・記録類を収載したが、一部は報告書第二集文献史料編2に掲載する。

2. 本報告書の構成は、凡例・目次・古文書部・記録部からなるが、大友家文書録綱文や同時代の日記等は、便宜上、古文書部に収載した。また、索引については、報告書第二集文献史料編2に一括して掲載する。


3. 史料の編年については、『増補訂正編年大友史料』を基本とし、『豊後国荘園公領史料集成』『大分県史料』で訂正が加えられたものについては、これに依拠した。



4. 史料の表記は以下の基準によっている。

(1) 文字は原則として常用漢字に改めたが、人名等で編年の参考となる場合は、常用漢字以外も使用した。

(2) 合字については今(より)はそのままとした。

(3) 本文には、適宜読点・並列点を付けた。

(4) 異筆・追筆・端裏書・裏書は「」で表し、右肩に(異筆)・(追筆)・(端裏書)・(裏書)と傍注した。

(5) 虫損等で文字が判読できない場合は、あるいはで表した。

(6) 本文のなかで、編者が用いた記号のうち、()は誤記・誤脱等に対する編者の案、(マ、)は文意が通じないものに付した。また、○は編者の説明にかかるものである。

5. 本報告書の作成にあたっては、豊田寛三(大分大学教授)・飯沼賢司(別府大学教授)・吉本明弘・高陽一(以上別府大学大学院生)野村智史・池田寛恵・宮崎由加(以上別府大学学生)の諸氏の御協力を得た。

6. 本報告書の編集は、三重野誠(大分県立先哲史料館)・櫻井成昭(大分県立歴史博物館)が行った。

目次

古文書部

一	建武三年三月三日	足利尊氏軍勢催促状写	二八	建武三年七月十六日	大神(都甲)惟世軍忠状
二	建武三年三月十三日	足利尊氏軍勢催促状	二九	建武三年七月十六日	大神(都甲)惟元軍忠状
三	建武三年三月十五日	足利直義軍勢催促状	三〇	(建武)三年七月廿七日	源(戸次)朝直書下
四	建武三年三月十五日	足利尊氏軍勢催促状	三一	建武三年七月廿八日	植田寂圓軍忠状
五	建武三年三月十六日	足利尊氏軍勢催促状	三二	建武三年七月廿九日	掃部助入道等三名連署軍忠状
六	建武三年三月十七日	足利尊氏軍勢催促状	三三	延元三年八月十五日	野上道圓軍忠状
七	建武三年三月十七日	足利尊氏軍勢催促状	三四	建武三年九月十日	野上資頼代資氏軍忠状写
八	建武三年三月十七日	足利尊氏軍勢催促状	三五	建武三年十月十四日	清原(野上)資頼軍忠状
九	建武三年三月廿日	足利尊氏軍勢催促状	三六	建武三年十一月十日	深堀時廣軍忠状
一〇	建武三年三月廿一日	深堀明意着到状案	三七	建武三年十一月廿日	清原重通軍忠状
一一	建武三年三月廿一日	深堀時綱着到状	三八	建武三年十一月日	野仲道棟軍忠状
一二	建武三年三月廿一日	深堀政綱着到状	三九	建武三年十一月日	屋形諸利軍忠状
一三	建武三年三月廿一日	深堀永浄着到状	四〇	建武三年十一月廿八日	藤原(近地)景能軍忠状
一四	建武三年三月廿四日	津守(平林)親澄着到状案	四一	建武三年十一月日	大神(都甲)惟世軍忠状
一五	建武三年三月廿四日	津守(平林)氏親着到状案	四二	建武三年十二月廿日	清原(野上)顯直軍忠状
一六	建武(三年)三月廿四日	津守(平林)行本着到状案	四三	建武四年三月日	深堀時廣軍忠状案
一七	建武三年三月廿七日	大神(都甲)惟世着到状	四四	建武四年三月日	志賀頼房軍忠状
一八	建武三年三月日	戸次頼尊軍忠状案	四五	建武四年八月三日	植田寂圓請文案
一九	建武三年四月十三日	足利直義軍勢催促状案	四六	建武五年三月廿八日	賀乘成阿請文案
二〇	建武三年四月十三日	足利直義軍勢催促状写	四七	建武五年三月廿八日	植田有快請文案
二一	建武三年四月十五日	清原(綾垣)政明着到状	四八	康永元年九月日	志賀頼房軍忠状案
二二	建武三年四月十九日	津守(平林)行本軍忠状案	四九	貞和四年二月廿三日	八坂道圓請文案
二三	建武三年四月廿五日	大神(都甲)惟元着到状	五〇	正平四年八月日	深江種重軍忠状写
二四	建武三年四月日	深堀明意軍忠状	五一	觀応二年正月日	成恒種定軍忠状
二五	建武三年四月日	深堀時廣軍忠状	五二	觀応二年正月日	土井種世軍忠状
二六	建武三年六月八日	植田寂圓軍忠状	五三	觀応二年正月日	河依(久恒)範房軍忠状案
二七	建武三年六月日	植田寂圓軍忠状	五四	(觀応)二年十月二日	一色道猷書状
			五五	正平六年十二月廿六日	都甲惟元軍忠状
			五六	正平七年正月二日	都甲惟元軍忠状
			五七	正平七年三月廿五日	大友氏泰書下写
			五八	觀応三年三月日	河依(久恒)範房軍忠状案

五九	正平 十年 十一月 日	於保胤宗軍忠状	九〇	建徳 二季辛亥霜月 十日	近地玄心讓状
六〇	正平 十年 十一月 日	橋薩摩公世軍忠状	九一	応安 四年 十一月 十四日	今川義範軍勢催促状案
六一	正平 十年 十二月 日	木屋行実軍忠状	九二	応安 四年 十二月 晦日	室町將軍家御教書案
六二	文和 五年 三月 日	田原直貞恩賞宛行状	九三	応安 四年 十二月 晦日	室町將軍家御教書写
六三	正平十一年 六月 日	恵良惟澄申状案	九四	応安 五年 正月 十三日	室町將軍家御教書
六四	正平十一年 十一月 十九日	大友氏時書下	九五	(応安) 五年 正月 廿日	貞直書状
六五		大友家文書録綱文	九六		吉弘一曇書状
六六	正平十四年 五月 日	木屋行実軍忠状	九七		大友家文書録綱文
六七	正平十四年 六月 日	草野永幸軍忠状	九八	(応安) 七年 九月 廿二日	今川了俊感状写
六八	延文 四年 十月 廿日	藤原(玄心)賀氏房軍忠状	九九	(応安) 七年	豊後国花岳合戦手負注文
六九		大友氏泰注進状案	一〇〇	応安 七年 十月 日	田原氏能軍忠状
七〇		大友家文書録綱文	一〇一	応安 八年 二月 日	田原氏能軍忠状
七一	(貞治) 元年	大友家文書録綱文	一〇二		大友氏繼感状案
七二		大友家文書録綱文	一〇三	永和 二年 卯月 五日	今川了俊感状
七三	(康安) 二年 八月 廿七日	斯波氏經書状案	一〇四	永和 二年 三月 五日	室町將軍家御教書
七四	(康安) 二年 九月 九日	斯波氏經書状案	一〇五	永和 二年 三月 廿一日	室町將軍家御教書
七五	貞治 二年 卯月 日	志賀頼房軍忠状	一〇六	永徳 二年 七月 十日	今川了俊感状
七六	貞治 二年 五月 二日	島津師久訴陳状案	一〇七	(元中) 八年 十二月 九日	五條頼治軍忠申状案
七七		大友家文書録綱文	一〇八		今川了俊書状
七八	正平十八年 九月 九日	征西將軍宮懐良親王令旨案	一〇九		今川了俊書状
七九	貞治 三年 正月 十日	斯波氏經書下	一一〇	応永 貳年 三月 四日	大内隆弘奉書案
八〇		直尚書状	一一一		大友親世書状
八一		大友氏時感状	一一二		洪川満頼書状
八二		頼直書状	一一三	応永拾三 八月 廿二日	頼宗知行宛行状案
八三	貞治 四年 十月 日	近地玄心目安案	一一四	応永十九年巳十一月 十五日	六郷満山離山衆徒等申状案
八四	おうあん二年 七月 十二日	藤原(田原)氏能讓状	一一五	(永享) 三年 六月 八日	満濟准后日記
八五	応安 三年庚戌七月 廿五日	近地玄心讓状	一一六		大内持世書状
八六	応安 四年	田原氏系図氏能譜	一一七	(永享) 七年 七月 廿五日	看聞御記
八七	(応安) 四年 七月 四日	今川義範書状案	一一八	永享 七年 十月 廿七日	飯尾為種・飯尾貞連連署奉書
八八	(応安) 四年 八月 三日	今川義範書状案	一一九	(永享) 七年 十二月 七日	大友親綱書状案
八九	応安 四年 十月 三日	室町將軍家御教書案	一二〇	(永享) 八年 三月 九日	大内持世書状案

一一二	(永享 八年)	五月 三日	大友親重知行預ヶ状	一一二	(明応 八年)	八月 一日	大友親治書狀案
一一三	永享 八年	五月 四日	室町將軍家御教書	一一三		十二月 廿五日	三田井長武書狀
一一四	永享 八年	五月 四日	室町將軍家御教書	一一四			大友家文書録綱文
一一五	(永享 八年)	閏五月 十四日	大友親綱書狀案	一一五		卯月 四日	大友親治感狀
一二六	(永享 八年)	壬五月 廿一日	弘忠書狀	一一六		六月 八日	大友親知行預ヶ状案
一二七	永享 八年	六月 九日	大友家文書録綱文	一一七	文龜 元年	八月 十三日	大内義興感狀案
一二八	永享 八年	六月 廿五日	姫岳着到人交名	一一八	文龜 貳年	五月 廿三日	大内義興下文案
一二九	永享 八年	六月 廿五日	看聞御記	一一九	文龜 貳年	八月 十日	中尾道厚書狀
一三〇	永享 八年	七月 五日	室町將軍家御教書	一二〇	永正 貳年	七月 日	佐田泰景軍忠狀
一三一	永享 八年	七月 五日	足利義教御内書写	一二一	(永正 三年)	十月 廿二日	大友義長感狀
一三二	永享 八年	七月 五日	室町將軍家御教書	一二二		五月 廿五日	建是書狀案
一三三	(永享 八年)	七月 八日	室町將軍家御教書	一二三	(永正十四年)	二月 廿八日	大友家文書録綱文
一三四	(永享 九年)	八月 廿八日	細川持之感狀写	一二四	(永正十四年)	二月 廿八日	大友親安感狀
一三五	(寛正 六年)	正月 廿三日	大友親重感狀	一二五	(永正十四年)	二月 廿八日	大友親安感狀
一三六		二月 三日	看聞御記	一二六	(永正十四年)	二月 廿八日	大友親安感狀
一三七	文明 三	三月 十七日	菊池為邦書狀	一二七	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
一三八	文明 三	三月 十七日	大友家文書録綱文	一二八	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
一三九	文明 三	三月 十七日	大内家奉行人連署奉書案	一二九	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
一四〇	文明 七年	三月 廿七日	杉重隆書狀写	一三〇	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
一四一	(文明 十年)	十二月 八日	志賀親家申狀	一三一	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
一四二	明応 四年乙卯八月	八月 十一日	少貳政資書狀案	一三二	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
一四三		八月 十一日	田原氏歴代勲功次第注文	一三三	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
一四四		十一月 十七日	大友親治書狀写	一三四	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
一四五	明応 七年戊午八月	十五日	大友親治感狀写	一三五	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
一四六			大友親治太刀等寄進狀案	一三六	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
一四七	(明応 七年)	八月 十三日	大友家文書録綱文	一三七	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
一四八	(明応 七年)	十月 十九日	大友親治感狀	一三八	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
一四九	(明応 七年)	十一月 十八日	大友親治書狀	一三九	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
一五〇	明応 八年	正月 廿五日	大友親治感狀	一四〇	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
一五一	(明応 八年)	三月 廿四日	大友親治感狀	一四一	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
			大内義興感狀案	一四二	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
			大内高弘書狀案	一四三	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一四四	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一四五	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一四六	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一四七	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一四八	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一四九	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一五〇	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一五一	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一五二	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一五三	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一五四	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一五五	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一五六	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一五七	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一五八	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一五九	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一六〇	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一六一	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一六二	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一六三	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一六四	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一六五	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一六六	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一六七	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一六八	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一六九	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一七〇	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一七一	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一七二	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一七三	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一七四	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一七五	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一七六	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一七七	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一七八	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一七九	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一八〇	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一八一	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀
				一八二	(永正十四年)	二月 廿九日	大友親安感狀

一八三	(永正十六年)	二月	六日	大友親敦書狀	二二四	(天文	元年	十一月	十八日	大友義鑑感狀案	
一八四	(永正十六年)	二月	六日	招然書狀	二二五	(天文	元年	十一月	十八日	入田親廉書狀案	
一八五	(永正十六年)	二月	七日	大友親敦感狀	二二六	(天文	元年	十一月	十八日	大友家加判衆連署奉書	
一八六	(永正十六年)	二月	廿八日	大友親敦感狀	二二七	(天文	元年	十一月	十九日	陶道麒書狀	
一八七	(永正十六年)	二月	廿八日	大友親敦感狀	二二八	(天文	元年	十一月	廿日	大友義鑑感狀案	
一八八	大永二年	三月	日	宇佐宮作事方条々御法度掟書案	二二九	(天文	元年	十一月	廿日	大友義鑑感狀	
一八九		十一月	十二日	大友親敦感狀	二三〇	(天文	元年	十一月	廿日	大友義鑑感狀案	
一九〇	(大永三年)	正月	廿一日	大友親敦感狀	二三一	(天文	元年	十一月	廿一日	大友義鑑感狀案	
一九一		七月	六日	大友親敦感狀	二三二	(天文	元年	十一月	廿一日	大友義鑑感狀案	
一九二		七月	六日	大友親敦感狀	二三三	(天文	元年	十一月	廿一日	大友義鑑感狀	
一九三		七月	七日	大友親敦感狀	二三四	(天文	元年	十一月	廿一日	大内義隆感狀案	
一九四	(大永七年)	十一月	十三日	大友義鑿感狀	二三五	(天文	元年	十一月	廿二日	杉興重書狀	
一九五	(大永七年)	十一月	十六日	大友義鑿書狀	二三六	(天文	元年	十一月	廿二日	大友義鑿感狀案	
一九六	(大永七年十一月)二十五日			大友家文書録綱文	二三七	(天文	元年	十一月	廿二日	大友義鑿感狀	
一九七	(享祿三年)			大友家文書録綱文	二三八	(天文	元年	十一月	廿五日	大友義鑿感狀	
一九八	享祿第三	十二月	六日	大友義長条々事書写	二二九	(天文	元年	十一月	廿六日	大友義鑿感狀案	
一九九	天文	元年	壬辰八月	大友家文書録綱文	二三〇	(天文	元年	十二月	三日	大友義鑿感狀	
二〇〇	(天文	元年)	十月	九日	杉興重奉書	二三一	(天文	元年	十二月	十一日	大友よし鑿感狀
二〇一	(天文	元年)	十一月	一日	大友家文書録綱文	二三二	(天文	元年)	十二月	廿六日	大友義鑿書狀
二〇二	(天文	元年)	十一月	一日	大内義隆軍勢催促狀	二三三	(天文	二年)	正月	十三日	大友義鑿感狀案
二〇三	(天文	元年)	十一月	二日	大友義鑿感狀	二三四	(天文	二年)	正月	十三日	大友義鑿感狀
二〇四	(天文	元年)	十一月	二日	大友義鑿感狀	二三五	(天文	二年)	二月	六日	大友義鑿感狀
二〇五	(天文	元年)	十一月	三日	大友義鑿感狀	二三六	(天文	二年)	二月	七日	田原親董感狀案
二〇六	天文	元年	十一月	八日	吉岡長増奉書案	二三七	(天文	二年)	三月	廿九日	大友義鑿書狀
二〇七	天文	元年	十一月	十三日	弥富代山副信次軍忠狀案	二三八	(天文	二年)	卯月	二日	大友義鑿感狀案
二〇八	天文	元年	十一月	十四日	佐田朝景感狀	二三九	(天文	二年)	卯月	二日	大友義鑿感狀
二〇九	天文	元年	十一月	十四日	佐田朝景合戰頸注文	二四〇	(天文	二年)	卯月	二日	大友義鑿感狀
二一〇	天文	元年	十一月	十五日	佐田右馬允合戰疵注文	二四一	(天文	二年)	卯月	二日	大友義鑿感狀
二一一	(天文	元年)	十一月	十五日	大友義鑿感狀	二四二	(天文	二年)	卯月	二日	大友義鑑感狀案
二一二	(天文	元年)	十一月	十八日	大友義鑿感狀	二四三	(天文	二年)	卯月	二日	大友義鑑感狀案
二一三	(天文	元年)	十一月	十八日	大友義鑿感狀案	二四四	(天文	二年)	卯月	二日	大友義鑿感狀

二四五	(天文二年)	卯月 二日	大友義鑿感状	二七六	〔天文三年〕	四月 廿日	大友義鑑感状
二四六	(天文二年)	卯月 二日	大友義鑿感状	二七七	(天文三年)	四月 廿日	大友義鑑感状
二四七	(天文二年)	卯月 二日	大友義鑿感状	二七八	(天文三年)	四月 廿日	大友義鑑感状
二四八	(天文二年)	卯月 二日	大友義鑿感状	二七九	(天文三年)	四月 廿一日	大友義鑑感状
二四九	(天文二年)	卯月 二日	大友義鑿感状案	二八〇	(天文三年)	四月 廿一日	大友義鑑感状
二五〇	(天文二年)	四月 十三日	大友義鑿感状写	二八一	(天文三年)	四月 廿一日	大友義鑑感状
二五一	〔天文二〕	卯月 十六日	大友義鑑感状	二八二	(天文三年)	四月 廿一日	大友義鑑感状
二五二	(天文二年)	七月 十三日	杉興重書状	二八三	(天文三年)	四月 廿一日	大友義鑑感状
二五三	天文二	十一 廿八	大友家加判衆裏封条々事書	二八四	(天文三年)	四月 廿一日	大友よし鑑感状
二五四	(天文二年)	十二月 一日	大友義鑑感状案	二八五	(天文三年)	四月 廿一日	大友よし鑑感状
二五五	〔天文二〕	十二月 八日	大友義鑑感状	二八六	(天文三年)	四月 廿一日	大友義鑑感状
二五六	(天文二年)	十二月 八日	大友義鑑感状案	二八七	(天文三年)	四月 廿一日	大友義鑑感状
二五七	(天文三年)	二月 廿三日	田北親興書状	二八八	(天文三年)	四月 廿一日	大友義鑑感状
二五八	(天文三年)	二月 廿三日	大内家奉行人連署奉書	二八九	(天文三年)	四月 廿一日	大友よし鑑感状写
二五九	(天文三年)	二月 廿九日	大友義鑑感状	二九〇	(天文三年)	六月 三日	粟屋重吉・庄田重満連署奉書案
二六〇	(天文三年)	二月 卅日	大友義鑑感状	二九一	(天文三年)	六月 十二日	仁保隆綱書状案
二六一	(天文三年)	二月 卅日	大友義鑑感状	二九二	天文三年	六月 十四日	大内義隆感状
二六二	(天文三年)	二月 卅日	大友義鑑感状	二九三	(天文三年)	七月 十九日	杉重信書状
二六三	(天文三年)	二月 卅日	大友義鑑感状	二九四		七月 廿八日	大友義鑑書状
二六四	(天文三年)	三月 十七日	田原親董感状案	二九五		八月 五日	大友義鑑書状
二六五	(天文三年)	三月 廿日	大友義鑑感状	二九六	天文四年	八月 十三日	大内義隆袖判下文案
二六六	(天文三年)	三月 廿日	大友義鑑感状	二九七	天文九	九月 三日	貫道敦書状
二六七	(天文三年)	三月 廿日	大友義鑑感状	二九八	(天文十三年)	三月 十一日	大内家奉行人連署書状
二六八	(天文三年)	三月 廿日	大友義鑑感状	二九九	(天文十三年)	三月 廿七日	右田興実奉書
二六九	(天文三年)	三月 廿日	大友義鑑感状	三〇〇	天文十四	十二月 廿二日	大内家奉行人連署奉書
二七〇	(天文三年)	三月 卅日	大友よし鑑感状	三〇一	天文十六	壬七月 十七日	右田興実書状
二七一	(天文三年)	卯月 八日	大友義鑑感状	三〇二	(天文十七年)	三月 廿一日	吉田奥種・杉宗長連署書状
二七二	(天文三年)	卯月 十日	大友義鑑感状	三〇三	(年未詳)	四月 十七日	大友義鑑書状写
二七三	(天文三年)	四月 十日	相良武任奉書	三〇四	(年未詳)	卯月 十九日	大内家奉行人連署奉書
二七四	(天文三年)	四月 十一日	大友義鑑感状案	三〇五	(年未詳)	四月 廿四日	大内家奉行人連署奉書
二七五	天文三年	四月 十七日	大内義隆感状	三〇六	(年未詳)	五月 十二日	萩原道昌条々事書

三〇七	(年未詳)	八月五日	某書状写	三三八	(弘治三年)	七月十一日	大友家文書録綱文
三〇八	(年未詳)	九月七日	大友家加判衆連署書状案	三三九	弘治三年	七月廿三日	大友義鎮感状写
三〇九	(年未詳)	九月廿一日	大内家奉行人連署奉書	三四〇	弘治參年	七月廿三日	田原親宏感状
三一〇	(年未詳)	九月廿二日	大友義鑑感状写	三四一	(弘治三年)	七月廿三日	田原親宏感状案
三一〇	(年未詳)	九月十九日	親榮・山下長就連署書状写	三四二	(弘治三年)		某手日記
三一一	(年未詳)	十月十九日	大友義鑑書状写	三四三	弘治三年	八月三日	田原親宏感状
三一二	(年未詳)	十月廿五日	右田興実書状	三四四	弘治三	八月十三日	田原親宏感状
三二三	(年未詳)	十一月十五日	大内家奉行人連署奉書案	三四五	(弘治四年)	五月十六日	首藤鑑秀・竹田津鑑和連署書状
三二四	(年未詳)	十二月四日	大友義鑑書状	三四六	(弘治四年)	五月十六日	大友家文書録綱文
三二五	(年未詳)	十二月廿五日	某書状案	三四七			宇佐宮一社中連署申状案
三二六	(天文十九年)	二月十九日	道中書状	三四八	(永祿二年)	八月七日	田原親宏知行宛行状写
三二七	(天文十九年)	三月	大友家文書録綱文	三四九	永祿二年	八月廿四日	大友義鎮書状案
三二八	(天文十九年)	三月	大内家奉行人連署書状	三五〇	(永祿二年)	八月廿六日	田原親賢知行預ヶ状
三二九	(天文廿二年)	卯月二日	大内家奉行人連署書状案	三五二	(永祿四年)	三月一日	大友義鎮書状
三三〇	(天文廿二年)	六月一日	大友義鎮書状	三五三	(永祿四年)	三月二日	吉岡長増書状
三三一	(天文廿二年)	七月廿一日	大内家奉行人連署書状	三五四	(永祿四年)	九月廿二日	吉岡長増書状案
三三二	(弘治二年)	卯月十三日	宇佐郡三拾六人衆着到状案	三五五	(永祿四年)	九月廿六日	田原親宏書状案
三三三	弘治二歲	秋	大友家文書録綱文	三五六			大友義鎮書状
三三四	(弘治二年)	二月廿九日	大友義鎮書状写	三五七		十一月十五日	大友義鎮書状
三三五	(弘治三年)	二月廿九日	大友家加判衆連署書状	三五八	(永祿五年)		大友家文書録綱文
三三六	(弘治三年)	五月廿五日	大友家加判衆連署奉書	三五九	(永祿五年)	八月九日	大友家加判衆連署奉書
三三七	(弘治三年)	五月廿五日	田北鑑榮・山下鑑心連署書状	三六〇	(永祿五年)	八月十三日	田原親宏書状
三三八	(弘治三年)	六月六日	大友家加判衆連署奉書案	三六一	(永祿五年)	八月十六日	大友家加判衆連署書状案
三三九	(弘治三年)	六月廿日	大友家加判衆連署奉書	三六二	(永祿六)	八月廿三日	大友宗麟書状
三三〇	(弘治三年)	六月廿一日	大友義鎮書状	三六三	(永祿八年乙丑六月)	十二月十二日	大友家文書録綱文
三三一	(弘治三年)	六月廿一日	大友家加判衆連署奉書	三六四	永祿八年	六月廿二日	大友宗麟合戦手負注文一見状
三三二	(弘治三年)	六月廿二日	大友家加判衆連署奉書	三六五	永祿八年	八月十三日	大友宗麟合戦手負注文一見状案
三三三	(弘治三年)	六月廿四日	大友家加判衆連署奉書	三六六	(永祿八年)	八月廿日	大友宗麟感状
三三四	(弘治三年)	六月廿四日	大友家加判衆連署奉書	三六七		九月十九日	大友家加判衆連署書状
三三五	(弘治三年)	七月七日	大友義鎮感状	三六八	(永祿九年)	三月廿四日	大友宗麟感状
三三六	(弘治三年)	七月七日	大友家加判衆連署奉書				
三三七	(弘治三年)	七月九日	大友家加判衆連署奉書				

三六九	(永禄 九年)	三月 廿四日	大友宗麟感状	四〇〇	(天正 七年)	二月 三日	安東某覚書
三七〇	永禄 十年		某手日記	四〇一	(天正 七年)	二月 四日	大友義統書状
三七一	永禄十一年戊辰正月	十一月	刀衆先代帳	四〇二	(天正 七年)	二月 十一日	大友家文書録綱文
三七二	「永禄十一」	六月 廿八日	田原親宏感状	四〇三	「天正七己卯」	三月 廿三日	田原親家書状
三七三	(永禄十二年)	三月 十七日	安東鎮景書状	四〇四	(天正 七年)	三月 廿二日	大友義統書状
三七四	永禄十二年己巳三月	十八日	刀衆先代帳	四〇五	(天正 七年)	三月 廿七日	大友義統感状
三七五	(永禄十二年)	七月 十三日	大友宗麟感状	四〇六	(天正 七年)		大友家文書録綱文
三七六	(永禄十二年)	九月 廿二日	大友宗麟書状案	四〇七			大友義統感状案
三七七	永禄十二年		某覚書	四〇八			大友義統感状案
三七八	(永禄十二年)		大友家文書録綱文	四〇九			大友義統感状案
三七九		七月 十六日	大友宗麟知行預ヶ状	四一〇			大友義統感状案
三八〇		九月 十日	大友宗麟感状	四一一			大友義統感状案
三八一	(元龜 二年)		大友家文書録綱文	四一二	(天正 七年)	三月 廿七日	大友義統書状
三八二		三月 十二日	大友宗麟書状写	四一三	(天正 七年)	八月 十七日	大友家文書録綱文
三八三		三月 十二日	大友宗麟書状	四一四	(天正 七年)	八月 十八日	大友義統感状案
三八四		六月 四日	鑑述・鑑忠連署書状	四一五	(天正 七年)	九月 十九日	大友義統感状
三八五		九月 廿三日	大友宗麟書状案	四一六	「天正 七」	十月 廿六日	大友義統感状
三八六		九月 廿四日	野仲鎮兼書状案	四一七	「天正 七」	十一月 一日	田原親家感状
三八七		十月 廿四日	大友宗麟書状	四一八	(天正 七年)	十一月 十一日	大友義統書状
三八八		十一月 十一日	大友宗麟書状案	四一九	(天正 七年)	十二月 十六日	大友家文書録綱文
三八九	(天正 元年)	十二月 二日	大友家文書録綱文	四二〇	(天正 七年)	十二月 十七日	大友義統感状案
三九〇	(天正 元年)	十二月 二日	大友義統書状	四二一	(天正 七年)	十二月 廿三日	大友義統感状
三九一	天正 三年	五月 廿八日	戸次道雪譲与立花城置物員教書	四二二	(天正 七年)	十二月 廿七日	田原親貫書状
三九二			大友家文書録綱文	四二三	天正 七	十二月 廿七日	田原親家書状
三九三	(天正 六年)	四月 廿四日	大友義統書状案	四二四	「天正 七」	十二月 廿七日	田原親家書状
三九四	(天正 六年)	五月 七日	大友よし統感状	四二五	(天正 七年)	十二月 十一日	大友家文書録綱文
三九五	天正 六年	七月 三日	大友義統感状案	四二六	(天正 八年)	正月 十一日	大友義統感状
三九六	(天正 六年)	十二月 廿四日	田原紹忍書状	四二七	(天正 八年)	正月 十一日	大友義統感状案
三九七	(天正 六年)	十二月 廿四日	田原紹忍書状	四二八	「天正 八年」	正月 十六日	大友義統書状
三九八	(天正 七年乙卯正月)	十一月 十一日	大友家文書録綱文	四二九	(天正 八年)	正月 十六日	大友義統書状案
三九九	(天正 七年)	正月 廿九日	田原紹忍書状	四三〇	「天正 八」	正月 十六日	大友義統書状

四三一	(天正八年)	正月十六日	大友義統書狀	四六二	(天正八年)	三月廿三日	田原親家書狀
四三二	(天正八年)	正月二十日	大友義統感狀	四六三	(天正八年)	三月廿三日	田原親家書狀
四三三	(天正八年)	正月廿三日	大友義統書狀案	四六四			大友家文書録綱文
四三四		五月廿三日	大友義統書狀写	四六五	(天正八年)	三月廿四日	大友円斎・大友義統連署書狀案
四三五	(天正八年)	二月八日	大友義統感狀	四六六	(天正八年)	三月廿四日	大友円斎・大友義統連署書狀
四三六	(天正八年)	二月八日	大友義統感狀案	四六七	(天正八年)	三月廿四日	田原親家感狀案
四三七	「天正八」	二月八日	大友義統感狀	四六八	(天正八年)	三月廿五日	田原親家感狀
四三八	(天正八年)	二月廿日	田原紹忍感狀	四六九	(天正八年)	三月廿五日	田原紹忍感狀
四三九	(天正八年)	二月廿一日	大友義統書狀	四七〇		三月廿六日	大友義統安堵狀案
四四〇	(天正八年)	二月廿二日	大友円斎書狀	四七一	「天正八」	閏三月四日	田原親家感狀
四四一		二月廿九日	大友義統書狀	四七二	「天正八」	閏三月五日	田原親家感狀
四四二	(天正八年)	二月廿九日	大友義統書狀	四七三	(天正八年)	三月五日	大友円斎書狀
四四三	(天正八年)	三月二日	田原親貫知行宛行狀	四七四	(天正八年)	三月十日	田原紹忍書狀
四四四	「天正八」		大友家文書録綱文	四七五	(天正八年)	閏三月十三日	大友義統書狀
四四五	(天正八年)	三月五日	大友義統書狀案	四七六	(天正八年)	閏三月十四日	田原親家感狀
四四六	(天正八年)	三月五日	大友義統書狀	四七七	(天正八年)	閏三月十四日	田原紹忍感狀
四四七	(天正八年)	三月十五日	志賀道輝書狀	四七八	(天正八年)	閏三月十六日	大友義統書狀案
四四八	(天正八年)	三月十六日	大友円斎書狀	四七九	(天正八年)	閏三月十六日	大友義統感狀
四四九	(天正八年)	三月十七日	田原親家感狀	四八〇	(天正八年)	閏三月十九日	大友義統書狀
四五〇	(天正八年)	三月十七日	大友義統書狀案	四八一	(天正八年)	三月廿日	大友円斎書狀
四五一	「天正八」	三月十九日	田原親家知行宛行狀	四八二	(天正八年)	閏三月廿六日	大友義統書狀
四五二	(天正八年)	三月廿三日	大友義統感狀	四八三	(天正八年)	三月二日	大友義統書狀
四五三	(天正八年)	三月廿三日	大友義統感狀	四八四	(天正八年)	三月三日	大友円斎書狀
四五四	「天正八」	三月廿三日	大友義統感狀	四八五	(天正八年)	三月九日	大友義統感狀
四五五	(天正八年)	三月廿三日	大友義統感狀	四八六	(天正八年)	三月十日	大友よし統感狀写
四五六	(天正八年)	三月廿三日	大友義統感狀	四八七	(天正八年)	三月十日	大友義統感狀
四五七	(天正八年)	三月廿三日	大友義統感狀案	四八八	(天正八年)	三月十日	大友義統感狀
四五八	(天正八年)	三月廿三日	大友義統感狀案	四八九	(天正八年)	三月十日	大友義統感狀
四五九	(天正八年)	三月廿三日	大友義統感狀案	四九〇	(天正八年)	三月十日	大友よし統感狀
四六〇	(天正八年)	三月廿三日	大友義統感狀案	四九一	(天正八年)	三月十日	大友よし統感狀
四六一	天正八	三月廿三日	田原親家書狀	四九二	(天正八年)	三月十日	大友よし統感狀

四九三	(天正八年)	卯月十五日	田原親家書狀	五二四	(天正八年)	八月廿日	田原親家感狀
四九四	(天正八年)	(四月)	田原親貫書狀案	五二五	(天正八年)	八月廿日	秋月種実書狀
四九五	(天正八年)	四月	大友家文書録綱文	五二六	(天正八年)	八月廿一日	大友義統書狀
四九六	(天正八年)	五月十二日	大友家文書録綱文	五二七	(天正八年)	八月廿一日	大友家文書録綱文
四九七	天正八年	五月十四日	田原親家感狀	五二八	(天正八年)	八月二十日	大友家文書録綱文
四九八	(天正八年)	五月十四日	大友義統感狀案	五二九	(天正八年)	八月廿二日	大友義統感狀
四九九	(天正八年)	五月廿日	大友義統書狀	五三〇	天正八年	八月廿三日	田原親貫恩賞宛行狀案
五〇〇	天正八年	五月廿六日	田原親家恩賞預ケ狀	五三一	天正八年	八月廿三日	田原親貫恩賞宛行狀案
五〇一	(天正八年)	六月一日	大友義統書狀	五三二	「天正八年」	八月廿八日	大友義統感狀
五〇二	(天正八年)	六月	大友家文書録綱文	五三三	(天正八年)	八月廿八日	田原親貫感狀
五〇三	(天正八年)	六月十三日	大友義統感狀案	五三四	「天正八年」	八月卅日	大友義統感狀
五〇四	(天正八年)	六月廿二日	田原紹忍書狀	五三五	(天正八年)	八月卅日	大友義統感狀
五〇五	天正八年	六月廿二日	大友義統合戦手負注文一見狀	五三六	(天正八年)	九月三日	大友田斎書狀
五〇六	(天正八年)	六月廿四日	大友義統感狀	五三七	(天正八年)	九月五日	鎮方書狀
五〇七	(天正八年)	七月一日	田原親家感狀	五三八	(天正八年)	九月五日	大友義統感狀
五〇八	(天正八年)	七月六日	大友義統感狀	五三九	(天正八年)	九月五日	大友義統知行預ケ狀
五〇九	(天正八年)	七月十日	大友田斎書狀	五四〇	(天正八年)	九月五日	大友義統知行預ケ狀
五一〇	(天正八年)	七月十日	田原親家書狀	五四一	(天正八年)	九月五日	大友家文書録綱文
五一一	(天正八年)	七月十五日	大友義統書狀写	五四二	天正八年	九月七日	田原親家感狀
五一二	(天正八年)	七月十八日	大友義統感狀	五四三	(天正八年)	九月九日	大友田斎書狀
五一三	(天正八年)	七月	大友家文書録綱文	五四四	(天正八年)	九月十日	大友田斎書狀
五一四	(天正八年)	七月十九日	田原親家感狀案	五四五	(天正八年)	九月十五日	大友義統感狀
五一五	(天正八年)	七月廿日	大友田斎感狀	五四六	(天正八年)	九月十五日	大友義統感狀案
五一六	(天正八年)	七月廿四日	大友義統書狀	五四七	(天正八年)	九月十五日	大友義統感狀案
五一七	(天正八年)	八月三日	大友義統感狀	五四八	(天正八年)	九月十八日	大友義統感狀案
五一八	(天正八年)	八月五日	大友家文書録綱文	五四九	天正八年	九月廿日	四日市切寄衆中給地坪付案
五一九	(天正八年)	八月七日	田原親家感狀写	五五〇	(天正八年)	九月廿日	大友義統感狀
五二〇	(天正八年)	八月七日	田原親家感狀案	五五一	(天正八年)	九月廿日	大友義統感狀
五二一	(天正八年)	八月十三日	大友田斎書狀案	五五二	(天正八年)	九月廿二日	大友義統書狀案
五二二	(天正八年)	八月十六日	田原親家感狀案	五五三	(天正八年)	九月廿二日	大友義統書狀
五二三	天正八年	八月廿日	大友義統合戦頭手負注文一見狀	五五四	(天正八年)	九月廿二日	大友義統感狀

五五五	(天正 八年)		安岐表御警固日記	五八六	(天正 八年)	十一月	廿六日	大友義統諸点役免許状案
五五六	(天正 八年)	十月	大友家文書録綱文	五八七				大友家文書録綱文
五五七	「天正 八」	十月	大友義統知行預ヶ状	五八八		(十一月)	廿六日	大友円齋書状
五五八	(天正 八年)	十月	大友円齋書状	五八九	(天正 八年)	十二月	二日	田原紹忍感状
五五九		十月	田原親家書状	五九〇	(天正 八年)	十二月	九日	大友義統感状
五六〇		十月	田原親家書状案	五九一	(天正 八年)	十二月	九日	大友義統感状案
五六一		十月	田原親家書状案	五九二		十二月	廿三日	田原親貫感状
五六二	(天正 八年)	十月	大友義統書状	五九三	天正 八年	十二月	廿七日	田原親貫感状案
五六三	(天正 八年)	十月	大友円齋書状	五九四	(天正 八年)			田原親貫書状案
五六四	(天正 八年)	十月	大友義統書状	五九五	(天正 八年)			大友円齋書状
五六五			大友家文書録綱文	五九六				林新九郎(田原親家)進退条々覚
五六六	(天正 八年)	十月	大友円齋・大友義統連署感状案	五九七	(天正 八年)		日	大友義統感状案
五六七	(天正 八年)	十月	大友円齋書状	五九八	(天正 九年辛巳正月)			大友家文書録綱文
五六八	(天正 八年)	十月	大友義統書状	五九九		正月	廿三日	大友義統感状
五六九	(天正 八年)	十月	大友義統感状	六〇〇	天正 九年	二月	五日	田原親家知行預ヶ状
五七〇		十月	大友義統感状案	六〇一	(天正 九年)	二月		大友家文書録綱文
五七一	(天正 八年)	十月	大友義統感状案	六〇二	(天正 九年)	二月	八日	田原親家書状案
五七二	(天正 八年)	十月	大友家加判衆連署奉書案	六〇三		卯月	三日	大友義統書状
五七三	(天正 八年)	十月	大友義統書状	六〇四	「天正 九」	卯月	九日	田原紹忍感状
五七四	(天正 八年)	十月	大友義統感状案	六〇五	「天正 九」	卯月	廿九日	大友義統感状
五七五	天正 八	十月	野仲鎮兼知行預ヶ状	六〇六	(天正 九年)	卯月	廿九日	大友義統感状
五七六	(天正 八年)	十月	田原親家感状	六〇七	(天正 九年)	五月		大友家文書録綱文
五七七	(天正 八年)	十月	田原親家感状	六〇八	(天正 九年)	五月	一日	大友義統書状案
五七八			大友家文書録綱文	六〇九	天正 九年	五月	三日	田原親家知行宛行状
五七九	(天正 八年)	十月	大友義統書状案	六一〇	天正 九年	五月	三日	田原親家知行宛行状写
五八〇	(天正 八年)	十月	高橋紹運書状	六一一	(天正 九年)	五月	五日	大友義統感状
五八一	「天正 八」	十月	大友義統感状	六一二		五月	廿八日	田原紹忍感状
五八二	(天正 八年)	十一月	大友義統感状	六一三	(天正 九年)	六月	八日	田原親盛感状案
五八三	(天正 八年)	十一月	大友義統感状	六一四		七月	六日	田原紹忍感状
五八四		十一月	吉弘親家書状	六一五		七月	六日	田原紹忍感状
五八五	(天正 八年十一月二十六日)		大友家文書録綱文	六一六	(天正 九年)	九月		大友家文書録綱文

六二七	(天正 九年)	九月 十一日	浦上宗鐵書狀案	六四八	天正 十年	卯月 廿三日	大友義統合戰頭手負注文一見狀
六二八	(天正 九年)	九月 廿五日	大友円齋書狀	六四九		五月 二日	大友府蘭書狀案
六二九	「天正 九」	十月 五日	大友義統感狀	六五〇	天正 拾年	五月 三日	田原親家感狀写
六二〇	(天正 九年)	十月 五日	大友義統感狀	六五一	天正 十	五月 三日	田原親家感狀案
六一一	「天正 九年」	拾月 九日	田原紹忍書狀	六五二	(天正 十年)	五月 三日	田原親家感狀
六二二	(天正 九年)	十月 十日	大友府蘭書狀	六五三	(天正 十年)	五月 三日	田原親家感狀
六二三	(天正 九年)	十一月 十四日	大友義統書狀案	六五四	(天正 十年)	五月 五日	大友義統感狀
六二四	天正 九	十一月 十九日	宇佐宮社僧大師供記裏書	六五五	(天正 十年)	六月 廿八日	田原親家恩賞宛行狀
六二五	(天正 九年)	十一月 二十日	大友家文書録綱文	六五六	(天正 十年)	十月 十九日	大友家文書録綱文
六二六	(天正 九年)	十一月 二十日	大友家文書録綱文	六五七	(天正 十年)	十月 廿一日	大友義統感狀案
六二七	(天正 九年)	十一月 廿五日	大友府蘭感狀案	六五八	(天正 十年)	十月 廿四日	大友義統書狀
六二八	(天正 九年)	十一月 廿六日	大友府蘭感狀案	六五九	(天正 十年)	十月 廿五日	大友義統書狀
六二九	(天正 九年)	十二月 七日	大友府蘭書狀	六六〇	(天正 十年)	十月 廿五日	大友府蘭書狀
六三〇	(天正 九年)	十二月 十二日	大友義統感狀案	六六一	天正 十年	十月 廿六日	田原紹忍感狀
六三一	(天正 九年)	十二月 十三日	大友府蘭書狀	六六二	「天正 十年」	十一月 廿七日	田原紹忍書狀
六三二	「天正 九」	十二月 十三日	大友義統知行預ヶ狀	六六三	(天正 十年)	十一月 廿八日	大友義統感狀
六三三	(天正 九年)	十二月 十五日	田原紹忍書狀	六六四		十一月 廿八日	大友義統感狀案
六三四			大友家文書録綱文	六六五			大友家文書録綱文
六三五	(天正 九年)	十二月 十七日	大友義統感狀	六六六			大友家文書録綱文
六三六	(天正 九年)	十二月 十七日	田原紹忍感狀	六六七	天正 十年	十二月 一日	大友義統合戰手負着到一見狀案
六三七			大友家文書録綱文	六六八	(天正 十年)	十二月 三日	大友府蘭感狀案
六三八	(天正 九年)	十二月 十八日	大友義統感狀案	六六九		十二月 十三日	田原親家感狀案
六三九	(天正 九年)	十二月 卅日	大友義統諸点役免許狀	六七〇	(天正 十年)	十二月 十六日	大友義統感狀案
六四〇	(天正 九年)		彦山焼打事情書上	六七一	(天正 十年)	十二月 十六日	大友義統感狀案
六四一	(天正 九年)	日	大友義統感狀案	六七二	(天正 十年)	十二月 廿七日	大友義統書狀
六四二	(天正 十年)	正月 廿四日	戸次道雪書狀案	六七三			大友家文書録綱文
六四三	天正 十年	二月 十日	宇佐鎮常軍忠狀案	六七四	(天正 十一年)	正月 十六日	大友義統感狀
六四四	(天正 十年)	卯月 六日	大友義統書狀	六七五	(天正 十一年)	正月 十六日	大友義統感狀案
六四五	(天正 十年)	卯月 十日	大友義統感狀	六七六	天正 十一年癸未正月	廿八日	大友義統書狀
六四六		四月 廿二日	宗勇書狀	六七七	天正 十一年	閏正月 廿四日	大友府蘭書狀
六四七	(天正 十年)	四月	大友家文書録綱文	六七八	(天正 十一年)	潤正月 廿五日	田原紹忍書狀

六七九	(天正十一年)	二月 廿一日	大友義統感状	七一〇	(天正十一年)	十一月 十二日	大友府蘭感状写
六八〇	(天正十一年)	二月 廿一日	大友義統感状	七一一	(天正十一年)	十一月 廿八日	大友義統感状
六八一	「天正十一年」	五月 七日	土師種專書状	七一二		十二月 二日	田原紹忍感状
六八二			大友家文書録綱文	七二三	(天正十一年)	十二月 三日	大友家文書録綱文
六八三	(天正十一年)	九月 廿六日	大友義統書状案	七二四	(天正十一年)	十二月 三日	大友義統感状
六八四	(天正十一年)	九月 廿七日	大友府蘭書状	七二五	(天正十一年)	十二月 三日	大友義統感状案
六八五	(天正十一年)	十月 八日	大友義統感状案	七二六	(天正十一年)	十二月 三日	大友義統感状案
六八六	(天正十一年)	十月 八日	大友義統感状	七二七	(天正十一年)	十二月 三日	大友義統感状
六八七	(天正十一年)	十月 八日	大友義統カ合戦手負注文一見状案	七二八	(天正十一年)	十二月 十三日	大友義統感状
六八八	(天正十一年)	十月 十日	大友義統感状	七二九	(天正十一年)	十二月 廿日	大友義統感状
六八九		十月 十一日	大友義統感状	七三〇	(天正十二年)	正月 廿九日	大友義統感状
六九〇	(天正十一年)	十月 十一日	大友義統感状案	七三一	(天正十二年)	三月 廿八日	大友家文書録綱文
六九一	(天正十一年)	十月 十一日	大友義統感状写	七三二	(天正十二年)	三月 廿八日	大友義統合戦手負着到一見状
六九二	(天正十一年)	十月 十一日	大友義統感状案	七三三	(天正十二年)	三月 廿八日	大友義統合戦手負着到一見状
六九三	(天正十一年)	十月 十一日	大友義統感状案	七三四	(天正十二年)	三月 廿八日	大友義統合戦手負着到一見状
六九四	(天正十一年)	十月 十一日	大友義統感状案	七三五	(天正十二年)	三月 廿八日	大友義統合戦手負着到一見状
六九五	(天正十一年)	十月 十五日	大友義統感状案	七三六	(天正十二年)	三月 廿八日	大友義統合戦手負着到一見状
六九六	(天正十一年)	十月 十五日	大友義統感状案	七三七	(天正十二年)	三月 廿八日	大友義統合戦手負着到一見状
六九七	(天正十一年)	十月 十六日	大友義統感状案	七三九	(天正十二年)	六月 廿四日	田原親家書状
六九八	(天正十一年)	十月 十六日	大友義統感状	七四〇	(天正十二年)	六月 廿四日	田原親家書状写
六九九	(天正十一年)	十月 十六日	大友家文書録綱文	七四一	(天正十二年)	六月 廿四日	大友家文書録綱文
七〇〇	(天正十一年)	十月 十九日	大友義統合戦打死頸手負注文一見状	七四二	(天正十二年)	六月 廿四日	大友家文書録綱文
七〇一	(天正十一年)	十月 廿八日	田原紹忍恩賞宛行状案	七四三	(天正十二年)	六月 廿四日	大友家文書録綱文
七〇二	(天正十一年)	十月 廿八日	大友義統感状	七四四	(天正十二年)	六月 廿四日	大友家文書録綱文
七〇三	(天正十一年)	十月 廿八日	大友義統感状	七四五	(天正十二年)	六月 廿四日	大友家文書録綱文
七〇四	(天正十一年)	十月 廿八日	大友義統感状案	七四六	(天正十二年)	六月 廿四日	大友家文書録綱文
七〇五	(天正十一年)	十月 廿八日	大友義統感状案	七四七	(天正十二年)	六月 廿四日	大友家文書録綱文
七〇六	(天正十一年)	十月 廿八日	大友義統感状	七四八	(天正十二年)	六月 廿四日	大友家文書録綱文
七〇七	(天正十一年)	十月 廿八日	大友義統感状	七四九	(天正十二年)	六月 廿四日	大友家文書録綱文
七〇八	(天正十一年)	十月 廿八日	大友よし統感状	七五〇	(天正十二年)	六月 廿四日	大友家文書録綱文
七〇九	(天正十一年)	十月 廿八日	大友よし統感状	七五〇	(天正十二年)	六月 廿四日	大友家文書録綱文

七四一	(天正十三年)	十月	十四日	上井覺兼日記	七七二	(天正十四年)	十二月		大友家文書録綱文
七四二	(天正十四年)	二月	五日	上井覺兼日記	七七三	(天正十四年)	十二月		大友家文書録綱文
七四三	(天正十四年)	二月	十六日	上井覺兼日記	七七四	(天正十四年)	十二月	三日	田原紹忍書狀
七四四	(天正十四年)	二月		大友家文書録綱文	七七五	(天正十四年)	十二月	七日	大友宗滴書狀
七四五	(天正十四年)	三月	廿一日	田原紹忍感狀	七七六	(天正十四年)	拾二月	廿日	島津義久書狀
七四六	(天正十四年)	四月	廿二日	上井覺兼日記	七七七	(天正十四年)	十二月	廿四日	大友義統感狀
七四七	(天正十四年)	五月	四日	上井覺兼日記	七七八	(天正十四年)	十二月	廿四日	大友義統感狀
七四八	〔天正十四丙戌〕	六月	八日	田原親盛感狀	七七九	(天正十四年)	十二月	廿七日	豐臣秀吉書狀案
七四九	(天正十四年)	六月	廿四日	上井覺兼日記	七八〇	(天正十四年)	十二月	晦日	豐臣秀吉朱印狀
七五〇	(天正十四年)	八月	十六日	上井覺兼日記	七八一	(天正十四年)	十二月	廿二日	毛利輝元書狀案
七五一	(天正十四年)	八月	廿二日	上井覺兼日記	七八二	(天正十四年)	十二月	晦日	大友義統感狀案
七五二	(天正十四年)	十月	三日	豐臣秀吉御内書	七八三	(天正十四年)	十二月		大友家文書録綱文
七五三	(天正十四年)	十月	六日	大友義統書狀	七八四	(天正十五年)	正月		大友家文書録綱文
七五四	(天正十四年)	十月	八日	上井覺兼日記	七八五	(天正十五年)	正月	三日	豐臣秀吉書狀案
七五五	(天正十四年)	十月	十日	豐臣秀吉御内書	七八六	(天正十五年)	正月	三日	豐臣秀吉朱印狀案
七五六	(天正十四年)	十月	十二日	大友義統感狀案	七八七	(天正十五年)	正月	三日	豐臣秀吉書狀案
七五七	天正拾四年丙子	十月	廿八日	田北統周知行預ヶ狀	七八八	(天正十五年)	正月	三日	大友義統感狀
七五八	(天正十四年)	十月	卅日	大友義統感狀案	七八九	(天正十五年)	正月	三日	大友義統感狀
七五九	(天正十四年)	十月		大友家文書録綱文	七九〇	(天正十五年)	正月	三日	大友義統感狀
七六〇	(天正十四年)	十月		大友家文書録綱文	七九一	(天正十五年)	正月	十三日	大友家文書録綱文
七六一	(天正十四年)	十月		大友家文書録綱文	七九二	〔天正十五年〕	正月	十四日	小早川隆景書狀
七六二	(天正十四年)	十月		大友家文書録綱文	七九三	(天正十五年)	正月	十五日	大友義統感狀案
七六三	(天正十四年)	十一月	四日	大友義統書狀	七九四	(天正十五年)	正月	十五日	大友義統感狀
七六四	天正十四年丙戌	十一月	七日	阿曾沼元秀感狀	七九五	(天正十五年)	正月	十六日	大友義統感狀
七六五	(天正十四年)	十一月	八日	大友義統書狀	七九六	(天正十五年)	正月	十六日	大友義統書狀案
七六六	(天正十四年)	十一月	廿日	豐臣秀吉御内書案	七九七	(天正十五年)	正月	十七日	豐臣秀吉朱印狀案
七六七	(天正十四年)	十一月	廿日	豐臣秀吉書狀	七九八	(天正十五年)	正月	廿三日	大友義統書狀案
七六八	(天正十四年)	十一月	廿一日	大友義統書狀案	七九九	(天正十五年)	正月	廿四日	大友義統書狀案
七六九	(天正十四年)	十一月	廿三日	豐臣秀吉書狀	八〇〇	(天正十五年)	正月	廿八日	大友義統感狀案
七七〇	(天正十四年)	十一月		大友家文書録綱文	八〇一	(天正十五年)	正月	廿八日	大友義統感狀案
七七一	(天正十四年)	十二月	二日	大友家文書録綱文	八〇二	(天正十五年)	正月	廿八日	大友義統感狀

八〇三	(天正十五年)	正月 廿八日	大友義統感狀案	八三四	(天正十五年)	三月	大友家文書録綱文
八〇四	(天正十五年)	正月 廿八日	大友義統感狀	八三五	(天正十五年)	□月 十五日	大友家文書録綱文
八〇五	(天正十五年)	正月 廿八日	大友義統感狀案	八三六	(天正十五年)	三月 廿三日	大友宗滴感狀案
八〇六	(天正十五年)	正月 廿八日	大友義統感狀案	八三七	(天正十五年)	三月	大友家文書録綱文
八〇七	(天正十五年)	正月 廿八日	大友義統感狀	八三八	天正十五年	卯月 廿八日	鎮真感狀
八〇八	(天正十五年)	正月 廿八日	大友義統感狀	八三九	天正十五年	五月 十三日	豊臣秀吉朱印条々案
八〇九	(天正十五年)	正月 廿八日	大友義統感狀案	八四〇	天正十五年	七月 三日	豊臣秀吉朱印狀
八一〇	(天正十五年)	正月 廿八日	大友義統感狀	八四一	(天正十五年)	七月 廿七日	大友義統感狀
八一一	(天正十五年)	正月 廿八日	大友義統感狀	八四二	(天正十五年)	八月 廿四日	大友義統感狀
八一二	(天正十五年)	正月 廿八日	大友義統感狀	八四三	(天正十五年)	八月 廿四日	大友義統感狀
八一三	(天正十五年)	正月 廿八日	大友義統感狀	八四四			大友義統感狀
八一四	(天正十五年)	二月 二日	長宗我部元親書狀案	八四五			田原親賢旗下妙見城番籠勢人数 岐部宮鬻合戰戦死分捕頸注文披見狀写
八一五	(天正十五年)	二月 六日	大友義統感狀案	八四六	(天正十五年)		黒田孝高書狀案
八一六	(天正十五年)	二月 十四日	大友義統感狀案	八四七	(天正十六年)	正月 十九日	豊臣秀吉書狀
八一七	(天正十五年)	二月 十五日	大友家文書録綱文	八四八	(天正十六年)	六月 十日	大友吉統知行預ヶ狀案
八一八	(天正十五年)	二月 十六日	大友義統感狀案	八四九	天正十七年	正月 五日	吉弘統幸知行預ヶ狀案
八一九	(天正十五年)	二月 十六日	大友義統感狀	八五〇	(天正十七年)	正月 廿八日	大友吉統書狀
八二〇	(天正十五年)	二月 十六日	大友義統感狀	八五一	(年未詳)	二月 八日	田原親家書狀案
八二一	(天正十五年)	二月 十六日	大友義統感狀案	八五二	(年未詳)	二月 廿二日	阿蘇惟前書狀
八二二	(天正十五年)	二月 十六日	大友義統感狀案	八五三	(年未詳)	卯月 十三日	田原紹忍書狀
八二三	(天正十五年)	二月 十六日	大友義統感狀	八五四	(年未詳)	卯月 廿八日	田原紹忍書狀
八二四	(天正十五年)	二月 十六日	大友義統感狀	八五五	(年未詳)	五月 十四日	田原紹忍書狀案
八二五	(天正十五年)	二月 十六日	大友義統感狀	八五六	(年未詳)	六月 十四日	田原紹忍書狀
八二六	(天正十五年)	二月 十七日	大友家文書録綱文	八五七	(年未詳)	八月 五日	田原紹忍感狀
八二七	(天正十五年)	二月 十八日	大友家文書録綱文	八五八	(年未詳)	九月 十八日	大友義統感狀案
八二八	(天正十五年)	三月	大友家文書録綱文	八五九	(年未詳)	十月 十四日	佐田鎮綱書狀
八二九	(天正十五年)	三月 一日	大友宗滴書狀	八六〇	(年未詳)	十一月 十七日	田北統周書狀
八三〇	(天正十五年)	三月 二日	大友義統書狀案	八六一	(年未詳)	十二月 九日	大友義統知行預ヶ狀
八三一	天ノ十五	三ノ 三	薩州軍某内覽	八六二	(年未詳)	十二月 廿四日	田原紹忍感狀
八三二	(天正十五年)	三月 五日	大友宗滴書狀案	八六三	(年月未詳)	八日	田原紹忍感狀案
八三三	(天正十五年)	三月 十三日	大友宗麟感狀案	八六四			田原紹忍寛書

八六五		某書狀案	八	天正十四年		北郷忠虎譜	
八六六	(慶長 五年)	乃美宗勝一代感狀陣所合戰場付立	九	天正十四年		北郷三久譜	
八六七	(慶長 五年)	細川忠興自筆書狀	一〇	天正十四年		島津義久譜	
八六八	(慶長 五年)	加藤清正書狀	一一	天正十四年		島津義久譜	
八六九	(慶長 五年)	太田一成書狀案	一二	天正十四年		島津義久譜	
八七〇	(慶長 五年)	松井康之・有吉立行連署狀案	一三	天正十四年		島津中務大輔家久譜	
八七一	(慶長 五年)	松井康之列書狀案	一四	天正十四年		樺山忠助譜	
八七二	(慶長 五年)	大友家文書録綱文	一五	天正十四年		樺山紹劔自記	
八七三	(慶長 五年)	大友家文書録綱文	一六	天正十四年		島津世録記	
八七四	(慶長 五年)	大友家文書録綱文	一七	天正十四年		長谷場越前自記	
八七五	(慶長 五年)	大友家文書録綱文	一八	天正十四年		勝部兵右衛門聞書	
八七六	(慶長 五年)	松井康之・有吉立行連署狀案	一九	天正十四年		日向記	
八七七	(慶長 五年)	黒田如水覺書案	二〇	天正十四年		日向記	
八七八	(慶長 五年)	細川忠興書狀案	二一	天正十四年		天正拾四年豊後へ発向之事	
八七九	(慶長 五年)	加藤清正覺書	二二	天正十四年	拾二月	廿日	島津義久書狀
八八〇	(慶長 五年)	黒田如水書狀案	二三	天正十五年		島津中務大輔家久譜	
八八一	(慶長 五年)	松井康之・有吉立行覺書案	二四	天正十五年		樺山紹劔自記	
八八二	(慶長 五年)	松井康之・有吉立行覺書案	二五	天正十五年	一月	七日	島津義珍書狀
八八三	(慶長 六年)	魚住右衛門兵衛書狀	二六	天正十五年			殉国名敷
八八四	(慶長 六年)	細川忠興書狀	二七	天正十五年			島津義久譜
八八五	(慶長 六年)	木付・立石合戦高名者回状	二八	天正十五年			北郷忠虎譜
八八六	(慶長 六年)	立石へ動之時木付留守番之老父交名案	二九	天正十五年			樺山忠助譜
			三〇	天正十五年			樺山久高譜
			三一	天正十五年	三月	三日	内覚

記録部一 (鹿児島県史料旧記雑録 後編二)

一	天正十三年	島津義弘譜	三一	天正十五年		長谷場越前自記
二	天正十四年	新納忠元勲功記	三二	天正十五年		長谷場越前自記
三	天正十四年	新納忠元譜	三三	天正十五年		長谷場越前自記
四	天正十四年	殉国名敷	三四	天正十五年		日向記
五	天正十四年	筑前岩屋城合戦従軍者交名	三五	天正十五年		島津義弘譜
六	天正十四年	大口土濱川西市丞覚書	三六	天正十五年		肥後口・日向口合戦従軍者交名
七	天正十四年	島津義久譜	三七	天正十五年		
			三八	天正十五年		島津義久譜

記録部二

- 三九 天正十五年
- 四〇 天正十五年
- 四一 天正十五年
- 四二 天正十五年
- 四三 天正十五年
- 四四 天正十五年

島津中務大輔家久譜

佐多久政譜

勝部兵右衛門聞書

勝部兵右衛門聞書

阿蘇玄與入道黒斎書出

新納忠元勲功記

宇目梓山覚書

豊後国古城蹟并海陸路程

一
二

古文書部

一 足利尊氏軍勢催促状写

○豊前辛島文書
南北朝遺文九州編四二七号

新田右衛門佐義貞与党誅伐事、所被下院宣也、差遣一色右馬助入道於豊後高勝寺之城畢、随彼催促、可抽軍忠之状、如件、

建武三年三月三日
尊氏(花押影)

□□□□□□□□

二 足利尊氏軍勢催促状

○諸家文書纂所収野上文書
大日本史料六ノ三

新田右衛門佐義貞与党誅伐事、所被下院宣也、差遣一色右馬助入道於豊後国高勝寺之城畢、随彼催促、可抽軍忠之状、如件、

建武三年三月十三日
足利尊氏(花押)

野上次郎三郎殿

○『南北朝遺文』九州編四六五号八、充名ヲ「顕直」ニ比定ス。

三 足利直義軍勢催促状

○蠣瀬文書
大分県史料八

玖珠城凶徒誅伐事、相催一族、属于右馬助入道之手、可致軍忠状、如件、

建武三年三月十五日
足利直義(花押)

蛸瀬又二郎殿

四 足利尊氏軍勢催促状

○足水家藏文書
大日本史料六ノ三

玖珠城凶徒誅伐事、相催一族、属于右馬助入道手、可致軍忠之状、如件、

建武三年三月十五日
足利尊氏(花押)

大友大炊助殿

五 足利尊氏軍勢催促状

○都甲文書
大分県史料九

玖珠城凶徒誅伐事、相催一族、属于右馬助入道之手、可致軍忠之状、如件、

建武三年三月十六日
足利尊氏(花押)

都甲四郎殿

六 足利尊氏軍勢催促状案

○深堀文書
大日本史料六ノ三

玖珠城凶徒誅伐事、相催一族、属于右馬助入道之手、可致軍忠之状、如件、

建武三年三月十七日
足利尊氏(御判)

深堀三郎五郎殿

○『大日本史料』八「深堀系凶証文記録」ト標スルモ、「深堀文書」ニ統一ス。

七 足利尊氏軍勢催促状

○深堀文書
大日本史料六ノ三

玖珠城凶徒誅伐事、相催一族、属于右馬助入道之手、可致軍忠之状、如件、

建武三年三月十七日
足利尊氏(花押)

深堀弥五郎殿

八 足利尊氏軍勢催促状

○深堀文書
大日本史料六ノ三

玖珠城凶徒誅伐事、相催一族、属于右馬助入道之手、可致軍忠之状、如件、

建武三年三月十七日
足利尊氏(花押)

深堀平三殿

九 足利尊氏軍勢催促状

○肥後森本延枝文書
熊本県史料中世四

玖珠城凶徒事、注進状到来訖、右馬助入道相共馳向彼城、可被致軍忠之状、如件、

建武三年三月廿日
足利尊氏(花押)

大友太郎藏人入道殿

○本文書充名ノ三字ヲ抹消シ、「森本次」ノ文字ヲ加筆セリ。

一〇 深堀明意着到状案

○深堀文書
大日本史料六ノ三

著到、

肥前国御家人深堀孫太郎入道明意、今月廿一日、為相向

玖珠城、令馳參候、仍着到如件、

建武三年三月廿一日

承了判 重義 ○佐判也

〔色類行〕

一一 深堀時繼着到狀

○深堀文書
南北朝遺文九州編五〇一號

着到、

肥前国御家人深堀彌次郎時繼

右、今月廿一日爲相向玖珠城、令馳參候、仍着到如件、

建武三年三月廿一日

承了、 花押

一二 深堀政綱着到狀

○深堀文書
南北朝遺文九州編五〇二號

着到、

肥前国御家人深堀彌五郎政綱

右、今月廿一日爲相向玖珠城、今馳參候、仍着到如件、

建武三年三月廿一日

承了、 花押

一三 深堀永淨着到狀

○深堀文書
南北朝遺文九州編五〇三號

着到、

肥前国御家人深堀平三永淨

右、今月廿一日爲相向玖珠城、令馳參候、仍着到如件、

建武三年三月廿一日

承了、 花押

〔色類行〕

一四 津守(平林)親澄着到狀案

○碩田叢史所収平林古文書
大日本史料六ノ三

豊後国毛井社一分地頭平林彦太郎親澄、爲致軍忠、今廿

四日馳參御方、以此旨可有御披露候、恐々謹言、

建武三年三月廿四日

進上 御奉行所

承了在御判

一五 津守(平林)氏親着到狀案

○碩田叢史所収平林古文書
大日本史料六ノ三

豊後国毛井社一分地頭平林彦次郎氏親、致忠、今月廿四

日馳參御方、以此旨可有御披露候、恐々謹言、

建武三年三月廿四日

進上 御奉行所

承了在御判

一六 津守(平林)行本着到狀案

○碩田叢史所収平林古文書
大日本史料六ノ三

豊後国毛井社地頭平林太郎入道行本、爲致軍忠、今月廿

四日馳參御方、以此旨可有御披露候、恐々謹言、

建武 □□□□□□□□□□ 〔三年三月廿四日力〕

進上 御奉行所

沙弥行本 〔津守平林親澄〕

一七 大神(郡甲)惟世着到狀

○郡甲文書
大分県史料九

豊後国都甲庄地頭四郎惟世、今月十六日付御教書、爲抽

軍忠、玖珠城罷向候畢、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年三月廿七日

進上 御奉行所

承了、 花押

一八 戸次頼尊軍忠狀案

○鎮西古文書編年録所収戸次家古文書
南北朝遺文九州編五四三號

目安

大友戸次左近大夫頼尊軍忠事、預御一見狀、欲浴恩賞

施弓箭面目子細事、

一去年十二月十二日、於野山最前參御方致軍忠事、

一同十三日、於伊豆国府致散々合戦、令太刀打抽軍忠畢、

分取頭三、若党手負十四人、

一正月二日、近江国馳向伊岐須城浜手、懸先致忠畢、分

頭取三、若党手負八人、

一同八日、追落八幡凶徒、同九日、十日、於大渡橋抽軍

忠畢、

一同十六日、法勝寺南門合戦、及散々太刀打、

一同廿日、於室津致打出合戦 □□□□ 於御供下向鎮西、同

三月二日、抽筑前国多々良浜軍忠畢、親類若党手負・

討死百余人、分取頭五十四、

以前条々如此、云海道、云京都合戦、抽所々軍忠、迄于鎮西御供仕、於博多給御教書、罷向玖珠城抽戦功之子細、皆以存知候上者、給御一見状、且預御注進、浴恩賞、為施弓箭面目、仍言上如件、

建武三年三月 日

承候畢、御判

一九 足利直義軍勢催促状案

○大友文書
大分県史料二六

球珠城凶徒等誅伐事、相催一族、属今川四郎入道手、可致軍忠之状、如件、

建武三年四月十三日

左馬頭（足利直義）御判

狭間大炊四郎入道殿

二〇 足利直義軍勢催促状写

○早稲田大学蔵後藤文書
南北朝遺文九州編五七六号

球珠城凶徒等誅伐事、相催一族、属今川四郎入道手、可致軍忠之状、如件、

建武三年四月十三日

左馬頭（足利直義）（花押影）

○宛所ヲ欠ク。恐ラク植田氏宛ナラン。

豊後国御家人綾垣孫八政明、預御教書、去月廿四日為致軍忠、馳参球珠城候、以此之旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年四月十五日

清原政明（綾垣）（裏花押）

進上 御奉行所

「承了、（花押）」
（全山四郎入道力）

二二 津守（平林）行本軍忠状案

○頼田叢史所収平林家古文書
大日本史料六ノ三

豊後国毛井社地頭平林右衛門太郎入道行円跡之輩等、以去月廿一日馳参球珠城、同廿四日以来度々合戦仁所致軍忠也、仍將軍家御教書令拝領之間、弥忠勤欲仰其賞、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年卯月十九日

沙弥行本（津守、平林頼忠）

二三 大神（都甲）惟元着到状

○都甲文書
大分県史料九

著到、
豊後国御家人都甲彦四郎惟元、為抽軍忠、今月□日能向玖珠城候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年卯月廿五日

大神惟元（都甲）上（裏花押）

進上 御奉行所

「承了、（花押）」
（一色頼行）

二四 深堀明意軍忠状

○深堀文書
大日本史料六ノ三

肥前国深堀孫太郎入道明意謹言上、

欲早依合戦軍忠浴恩賞、備弓箭将来龜鏡間事、

右明意、去月十七日預御教書、属大將軍右馬助入道殿御手、最前押寄玖珠城南大手致先懸、明意入道親類瀬山左衛門次郎（右股）射疵、遠類志波原彦次郎被疵畢、是等次第大將軍疵勘文、去月廿八日被注進畢、同戸次（頼時）豊前太郎、同與三、江浦六郎次郎入道知見畢、然早浴恩賞、備弓箭譜代龜鏡、

弥為抽軍忠、言上如件、

建武三年四月 日

肥前国深堀三郎五郎時廣謹言上、

欲早依合戦軍忠浴恩賞、備弓箭将来龜鏡間事、

右時廣、去月十七日預御教書、属大將軍右馬助入道殿御手、最前押寄玖珠城南大手、致先懸合戦、時廣自身被疵左股畢、若党馬次郎被疵（右足）打疵、是等次第大將軍疵勘文、去月廿八日被注進畢、同戸次（頼時）豊前太郎、同四郎入道并帆足清六左衛門入道見知畢、然早浴恩賞、備弓箭譜代龜鏡、

弥為抽軍忠、言上如件、

建武三年四月 日

深堀時廣軍忠状

○深堀文書
大日本史料六ノ三

二二 清原（綾垣）政明着到状

○尊経閣蔵野上文書
大日本史料六ノ三

二六 植田寂圓軍忠状

○伊東東文書
大分県史料二三

三一 植田寂圓軍忠狀

○早稲田大学蔵後藤文書
南北朝遺文九州編七〇四号

豊後国植田庄一分御家人寂圓子息孫兵衛尉能綱、自去三月四廿^{〔自〕}罷向于球珠城候、同廿七日合戦之時、於搦手方致軍忠之刻、若党右馬五郎被射貫額候、中間小藤次被射貫頭候畢、又今月五日合戦^{〔七夜〕}、於大手能綱自小髭頤被射貫、被射止左玉懸骨下候畢、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年六月八日 沙弥寂圓(裏花押)
進上 御奉行所

〔承了、(花押)〕

二七 植田寂圓軍忠狀

○伊東東文書
大分県史料一三

自正月九日府中警固仕候之処、去六月十四日球珠城凶徒等、分手乱入高国府之由、風聞候之間、馳向路次宮瀬候之刻、凶徒等隔河付渚下候之間、追上船岡、自未尅計終日合戦、敵三人射臥候畢、一人掃部助入道・一人伊香又次郎・一人不知名字、然間子息四郎被射折弓候、又若党侍従房金安、被射貫腰候、如此依抽軍忠候、追落候畢、夜陰事候之間、引方不存知候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年六月 日 沙弥寂圓
進上 御奉行所

〔承了、大神重能(花押)〕

二八 大神(都甲) 惟世軍忠狀

○都甲文書
大分県史料九

豊後国都甲庄地頭四郎惟世、馳向当城、致軍忠候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年七月十六日 大神惟世上
進上 御奉行所

〔承了、

藤原宗能(花押)〕

○藤原宗能ハ豊後守護代ナリ(山口隼正『南北朝九州守護の研究』一六九頁)。

二九 大神(都甲) 惟元軍忠狀

○都甲文書
大分県史料九

□□国御家人都甲彦四郎惟元、□□向玖珠^{〔城〕}。致軍忠候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年七月十六日 大神惟元
進上 御奉行所

〔承了、

藤原宗能(花押)〕

三〇 源(戸次) 朝直書下

○柞原八幡宮文書
大分県史料九

豊後国玖珠城落人等、所々蜂起之間、將軍家御祈禱事、任先例仰供僧等、可被致精誠候、仍執達如件、

□□三年七月廿七日 源(花押)
賀来社宮主御房

三一 植田寂圓軍忠狀

○早稲田大学蔵後藤文書
南北朝遺文九州編七〇四号

豊後国球珠郡高消寺凶徒等内、敷戸孫次郎入道普練、賀来弁阿闍梨、同舍弟孫五郎以下輩、忍出当城、楯籠同国靈山寺、相語当山衆徒等、今月廿五日、押寄植田大輔房有快之館、焼払数十字在家、令打取同庄秋弘大進房父子等、擬令乱入府中高国府之間、翌日^{〔廿六辰時〕}、田吹凶書左衛門入道子息九郎宗綱、属搦手大将古庄宮内入道門阿之手、自当山妙見之尾、至同水上山之下、為惡所之間、為步行、致先懸、片時之間、令責落彼凶賊等、令焼払城郭候之条、大手大將軍筑前次郎殿、当国守護代以下、地頭御家人等、各所被見知也、然則預巨細御注進、為浴恩賞、言上如件、

建武三年七月廿八日 沙弥寂圓
進上 御奉行所

〔承了、(花押)〕

三二 掃部助入道等三名連署軍忠狀

○早稲田大学蔵後藤文書
南北朝遺文九州編七〇五号

去自三月廿四日罷向于球珠城候、同廿七日合□□□□
若党城内藤次被射□□□□□□□□忠節於路次備^{〔後藤文書〕}
□□眼、正田四郎利貞、同十郎利岡為証明学語、一代評判於二代不可統、仍為後日□□□□於国那羅原下□□□□□□子細下、

建武参年七月廿九日 □□□孫二(花押)

兄弟三人 掃部助入道(花押)
次□□光永(花押)

○文意通ゼザル所アリ。

渡状 藤次

於法勝寺致合戦之条、古庄孫四郎・同六郎見知訖、加之、預御教書、令発向球・珠城、抽軍忠之間、大将所有御註進也、然早預御一見状、為浴恩賞、言上如件、

建武三年九月 日

承了、沙弥(花押影)

○諸家文書纂所収野上文書
大日本史料六ノ三

三三 野上道圓軍忠状

彼敵人足利左衛門督高氏、同直義以下凶徒誅伐事、自最前集御堂、楯籠豊後国球珠郡高勝寺僧都、去三月廿四日以後連々合戦、今度致軍忠候之条、御見知之上者、不可有御不審候歟、以此旨可有御上洛候、恐惶謹言、

延元々々年八月十五日

沙弥道圓

承了、(花押)

御奉行所

三四 野上資頼代資氏軍忠状写

○諸家文書纂所収野上文書
南北朝遺文九州編七五七号

豊後国御家人野上彦太郎清原資頼代平三資氏謹言上、

欲早任海道・京都所々合戦忠、預御一見状浴恩賞事、

右、去年十二月十二日属于左近将監貞載手、於伊豆国

佐野山參御方、致合戦之条、戸次豊前太郎被見知訖、次

同十三日、伊豆国府合戦之時抽軍忠訖、次今年正月二日

近江国伊幾須之域合戦次第、狭間四郎入道・小田原四郎

左衛門入道以下令見知訖、次同十日淀大渡橋合戦之時、

資頼射火箭、其後乘烧落柱押渡敵陣、致軍忠之条、須賀

五郎・村畝治部房・小薦太郎左衛門尉見知訖、次同十一

日唐橋烏丸合戦之時、資頼打組太田判官一族益戸七郎左

衛門尉令分取、即被実檢之上、守護被註進訖、次同十六

三五 清原(野上)資頼軍忠状

○尊経閣藏野上文書
大日本史料六ノ三

豊後国球珠城凶徒誅伐事、野上彦太郎資頼、自去三月廿四日、迄同十月十三日抽軍忠候畢、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年十月十四 日

清原資頼

進上 御奉行所

承了、(花押)

三六 深堀時廣軍忠状

○深堀文書
大日本史料六ノ三

肥前国高木村一分地頭深堀三郎五郎時廣申軍忠事、

今年三月下給 將軍家御教書、令発向玖珠城、於三月廿

七日、就抽合戦之忠節、時廣被脱骨畢、此等子細、御勘

文為分明哉、然早下給御判、備弓箭面目、向後弥抽軍忠、

以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年十一月十日

承了、(花押)

三七 清原重通軍忠状

○豊前福本新三郎文書
南北朝遺文九州編七八六号

三郎等見知畢、凡八箇月之間、連々合戦、每度抽忠節、自身被疵之条、殊功之至、不可勝計、然早給御判、欲備後証、以此之旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年十一月廿日

清原重通

進上 御奉行所

承了、(花押)

三八 野仲道棟軍忠状

○野中文書
大分県史料八

野仲三郎太郎道棟

目安、

豊前国御家人野仲三郎太郎道棟申軍忠事、

一去四月十九日、於豊後国玖珠城最初合戦之時、道棟惣

領相共属于大手、於日田肥前次郎陣屋前、励軍忠之条、

豊前国延入六郎・同国垂水次郎同時合戦之間、令見知

訖、

一同六月五日、同所合戦之時、道棟進先陣捨一命、抽軍

忠之条、豊前国跡田弥三郎・同国竹井弥四郎等令見知

畢、

一同八月廿九日、城中凶徒等、攻下搦手陣屋及散々

合戦之間、道棟亦懸先追返彼賊徒等之条、安心院五郎・

諫山弥三天等同時合戦畢、

一同九月十二日、夜自搦手被寄城中之間、道棟亦惣領

攻登、励愚忠之刻、子息九郎道春被疵被射之条、

豊前国安心院五郎・同国田中三郎五郎入道見知訖、

一同十月十二日之夜、被攻落当城之賊徒等之間、道棟又

最前攻入城中、終軍功之条、同所合戦之傍輩皆以見知畢、

大友近江次郎・同兵庫助入道以下凶徒等、楯籠当城之間、可追討彼等之旨、忝被下將軍家御教書之間、発向当城、同十月十二日迄没落之期、不相漏数箇度之合戦、道春被疵之条、証人等分明之上者、預于御注〇為浴恩賞、目安言上、如件、

建武三年十一月 日

〔承了、(花押)〕〔仁木義長卜認〕

三九 屋形諸利軍忠状

○屋形文書
南北朝遺文九州編七九六号

豊前国御家人屋形三郎入道崇智後家尼心妙代子息又五郎諸利、馳向豊後国玖珠城、度々致軍忠事、四月以来迄于凶徒等没落期、致堀・鹿垣・矢倉以下警固、度々合戦之時、抽軍忠之条、野仲郷司并津布佐五郎次郎等为同所合戦之間、令見知訖、然早浴恩賞、弥為成向後弓箭之勇、言上如件、

建武三年十一月 日

〔承了、(花押)〕

〔屋形三郎入道崇智後家尼心妙代五郎諸利所進〕

四〇 藤原(近地)景能軍忠状

○志賀文書
熊本県史料中世二

〔近地孫二郎景能豊後国玖珠城合戦軍忠条々、
建武三年三月廿七日合戦之時、舍弟朝廣討

死訖、同九月十四日合戦之時、自身被疵^{左足頭}、其外数ケ度遂^{合戦}、捨身命抽軍忠候之条、明白也、迄于十月十二日城没落期、致警固上、菊掃部助^{武敏}発起之間、大将肥後御向之時、御共申令在津候、以此〇〇〇〇可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年十一月廿八日

進上 御奉行所

〔承了、(花押)〕

四一 大神(都甲)惟世軍忠状

○都甲文書
大分県史料九

依玖珠城凶徒誅伐事、豊後国都甲庄地頭四郎惟世、今年三月十六日賜 將軍家御教書、自宰府致御共、自御合戦之最初、迄于凶徒没落之期、抽軍忠畢、就中六月九日合戦、舍弟又四郎惟種被疵^{左腎懸}、七月十一日若党首六入道被射頭之条、御勘文炳焉也、然早下賜御判、為備後証、謹言上如件、

建武三年十一月 日

〔承了、(花押)〕

四二 清原(野上)顕直軍忠状

○尊経閣藏野上文書
大日本史料六ノ三

豊後国御家人野上次郎三郎顕直軍忠事、去三月十三日、下賜將軍家御教書、自太宰府、大将御共仕、同廿四日、相向球城、迄于十月十二日夜^{凶徒没落期}、八ヶ月之間、致昼夜不退之警固、連々數十ケ度合戦之時、每度抽軍忠畢、

仍六月五日顕直被疵訖、其上令夜廻之時、生捕日田檜原兵衛次郎下人^{城内入兵糧米之所}、次十月十二日夜、城没落之時、魚返宰相房令生捕畢、彼宰相房者、小田三郎顕成一族也、為福人之間、城内兵糧支、併為此仁哉、生捕之条、大功何事如之、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年十二月廿日

進上 御奉行所

〔承了、(花押)〕

四三 深堀時廣軍忠状案

○深堀文書
佐賀県史料集成四

〔前国〇深堀三郎五郎時廣〇謹言上、
欲早依合戦軍忠、浴恩賞、備弓箭将来龜鏡間事、
時廣、去〇月十七日預御教書、属大将军右馬助〇道殿御手、最前押寄玖珠城南大手、致先懸〇戰、時廣自身被疵^{左股畢}、若党馬次郎被疵^{打疵}、是等次第、大将军^{射疵}勘文〇去月廿八日被注進〇、同戸次豊前太郎・同四郎入道并帆足清六左衛門〇、入道見知畢、〇然早浴恩賞、備弓箭譜代亀〇弥為抽忠勤、言上如件、〇次第捧目安之処、紛失之間、重所令言上也、

建武三年四月 日

四四 志賀頼房軍忠状

○志賀文書
熊本県史料中世二

御一見状
〔鳴津兵部允為凶徒、馳參洞院
問、去建武二年十二月廿一

日、行合美濃^{〔一〕}口御方軍勢等、各擬令退治之刻、生虜兵部^{〔二〕}若克刑部左衛門尉景定畢、則自惣領御方被召渡公方畢、

建武三年正月二日、於近江国伊岐代宮城、抽軍功、追落凶徒畢、

同八日、追落八幡凶徒、進大渡橋上、先陣軍勢踏落橋、

流于河之時、頼房旗差後藤太郎実氏同落入河畢、

同九日、追落橋上、先陣頼房被射貫左股之条、当手皆

存知之上、將軍家執事并嶋津四郎左衛門尉見知畢、

同十一日、惣領御名代近江左近將監、打組大田大夫判

官親光之時、於京都唐橋烏丸、頼房分取頸

入細河卿殿見參之上、一萬田孫太郎・詫磨彦太郎・豊

東彦六入道以下數輩見知畢、

同十六日、家人中条左衛門次郎貞幸、令分取之条、

朽細次郎・首藤三郎次郎見知畢、

同廿七日、於四条河原、頼房自身致太刀打合戰、被切

右頂上、家人若戸六太次郎政長被切右股之条、詫磨彦

太郎・朽細二郎見知畢、

同晦日、於四条河原、親類野津孫次郎能憲、被射貫右

腰之条、詫磨彦太郎・朽細次郎見知畢、

經丹波路、到兵庫嶋、二月十日・十一日撰津国打出・

豊嶋・上山合戰、勵忠功、致鎮西御下向御共畢、

將軍家御座大宰府之時、三月十一日、凶徒近江次郎

貞順・因幡兵庫助入道土寂已下、楯籠豊後国玖珠城、

擬打入府中之刻、守護代以下当家一族御扶持人等、大

略馳參宰府、國中無人之時、頼房^{〔三〕}同十一日馳越高

国府、依揚御旗、地頭御家人等有御方志之輩、属頼房

之間、令警固府中、着到已下就令注進于宰府、預御教

書畢、府中于今無為之条、奉為惣領、為当国、頼房忠

功為拔群哉、隨而發向玖珠城、属一色右馬助入道殿、

可追討凶徒之由、三月廿日賜御教書、馳向彼之城、八
夕月間抽昼夜攻戰、責落賊徒畢、至功之篇、委所帶
一色禪門一見狀也、

以前条々、軍忠如此、早且賜御一見狀、備末代武略之支証、
且預御注進、浴勳功之賞、欲開弓箭眉目矣、仍目安如件、

建武四年三月 日

〔承候畢、沙弥(花押)〕

四五 植田寂圓請文案

○深堀文書
佐賀県史料集成四

豊後国敷戸弥次郎入道跡地頭職事、今季五月廿六日御教
書、同七月廿八日到来、謹拜見仕候畢、抑任被仰下之旨、
茲彼所、欲沙汰付深堀孫太郎入道明意候処、如敷戸弥次
郎入道寿延申者、於寿延御^{〔四〕}愚息又次郎致京都合戰、下
給將軍家御教書、抽鎮西球珠城責軍忠之条、大將軍御一
見狀帶^{〔五〕}、依何事罪科、可被召放当村哉、明意不可掠申
之間、全不可去退之、所詮企參上、可明申云々、仍不及^{〔六〕}渡
候、此条偽申候者、日本国中仏神三宝御討可蒙罷候、
以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武四年八月三日

進上 御奉行所

〔沙弥寂圓 裏判〕

四六 賀来成阿請文案

○深堀文書
佐賀県史料集成四

〔深堀本〕
〔一〕太郎入道明意申、豊後国敷戸^{〔二〕}入道寿延跡地
頭職事、去年十二月廿四日御教書、今年三月廿二日到来、

謹拜見仕候訖、任被仰下之旨、今月廿四日、植田大輔房
〔三〕茲彼所、欲沙汰居明意候之処、如寿延子息又次郎申
者、為御方、云京都合戰、〔四〕鎮西玖珠城責、抽軍忠、將軍家
御教書并大將軍一見狀帶之、明意不可依申之子細、先度
御使入部之時、令申候訖、全不可去退云々、仍不及打渡候、
此条偽申候者、八幡大菩薩御討可蒙罷候、以此旨、可
有御披露候、恐惶謹言、

建武五年三月廿八日

〔賀来成阿 請文〕

四七 植田有快請文案

○深堀文書
佐賀県史料集成四

〔深堀本〕
郎入道明意申、豊後国敷戸^{〔一〕}郎入道寿延跡
地頭職事、去年^{〔二〕}十二月廿四日御教書、今年三月廿二
日到来、^{〔三〕}見仕候訖、任被仰下之旨、今月廿四日、
賀来孫五郎入道相共茲彼所、欲沙汰居明意候之処、如寿
延子息又次郎申者、為^{〔四〕}云京都合戰、云鎮西玖珠城責、
抽將軍家御教書并大將軍御一見狀^{〔五〕}之、明意不可依掠申
之間、全不可去退云々、仍不及打渡候、若此条偽申候者、
八幡大菩薩御討可蒙罷候、以此旨、可有御披露候、恐
惶謹言、

建武五年三月廿八日

〔植田有快 請文〕

四八 志賀頼房軍忠状案

○大友家文書
大分県史料三一

志賀藏人太郎頼房謹言上、
欲早依海道・京都・鎮西御共、豊後国玖珠城、筑後・

肥後・日向凶徒退治已下所々合戰、就自身兩度手負、親類若党郎從數輩討死・手負・分捕・生虜等功勳、預御吹拳、言上于京都、申達不足分愁訴、備末代弓箭眉目、頼房恩賞地豊後国山香庄内船尾參町校少事、副進

一通 御下文 建武三年四月七日

一通 惣領御方御一見狀海道・京都已下 戰功事

右、頼房依有御方之志、去建武二年十二月馳參開東之刻、

同廿一日於美濃国春木宿、行合凶徒洞院左衛門督家于時 仙道大將手、嶋津兵部充、御方軍勢等各擬令退治之時、生

虜若党刑部左衛門尉、參海道宮宿以來屬惣領御手、負落

近江国伊岐代城、於大渡橋上并京都四條河原、兩度頼房

自身被疵、（次郎入道）捕・生虜及數々度、家子若党已下討死手

負之條、亦以數輩也、隨而洛中所々合戰、自身乍被疵、

雖為一箇度不相漏抽戰功、致丹波路并鎮西御下向之

御共、給御教書、發向豊後国球珠城、追落賊徒、肥

後・築後・日向已下合戰勸忠節、至功既拔群之條、御教

書并諸大將一見狀・注進狀等明白也、而建武三年四月、

以船尾為恩賞被送下御下文於玖珠城之條、面目之至先以

雖畏存、彼地僅參町、所出亦式拾余貫文、尪弱之至還而

似失弓箭之名望、頼房雖不肖身、為大友庶子一流之家督、

率親類家僕等、叶每度御大事之上、如承及者、以自身手

負鎮西御共、殊被賞翫歟、頼房云分限、云軍忠、強不相

劣于傍輩哉、爰勸見諸人之抽賞、当一家一族等之中、分限

至忠雖不覃于頼房、蒙莫太之恩祿、始而立身興家之類

多頭在之、將又日田・佐伯・合志・河尻・松浦已下九州

國（人カ）等、各預過分褒賞開眉畢、何況頼房為大將軍（御格也）護、

一族一方棟梁也、争可被超越于傍人哉、而浴參町恩沢之

條、殆末代瑕瑾也、此等子細不違于具註、且預京都御吹拳、

且被相副御雜掌、尤被加撫育御扶持、可申達恩賞不足之

條、殆末代瑕瑾也、此等子細不違于具註、且預京都御吹拳、

愁訴哉、就中今為讎敵追討、有發向于肥州歟、頼房亦最前馳向可助戰功之士者、理訴争無御憐愍哉、尤達微望欲成武略之勇矣、仍粗言上如件、

康永元年九月 日

四九 八坂道圓請文案

○永弘文書 大分県史料三

女代郷輔申、宇佐神領豊後国田（樂庄内重安、担任）小

手則・永正・末次名等事、去（御下）知御施行者取、

去年十二月四日（副申狀 具書）如此、就請文其沙汰、爰豊前

藏人（次郎入道）跡、倉成修理亮・長野馬次郎・神主定（基）

敍用云々、太不可然、重莅彼所、打渡下地、（於申）

輩者、為糺明可參洛之旨、相觸之（更）可被注中云々、

仍任被仰下之旨、都甲（更）郎入道相共、以今月十九日、欲

打渡下地於（氏）女代候之處、長野馬次郎・神主并秀基・

修理亮等、応御下知去退候之間、打渡氏女（代）候畢、

豊前藏人次郎入道跡左近藏人・掃（部前御旨 同景之）藏人・次郎藏人入道

等者、構城郭、不入立御（使カ）候之間、（示）及打渡候、次彼輩

等參上候之段、（觸）候之候、不及是非之散狀候、若此條

偽申（候）者、

大菩薩御討於、可罷蒙之候、以此旨、可有（御カ）披露候哉、

恐惶謹言、

貞和四年二月廿三日

沙弥道圓 請文案 襄判

五〇 深江種重軍忠状写

○筑前深江文書 南北朝遺文九州編 二六二〇号

筑前国深江大藏允種重申軍忠事、

右、去年豊後御發向之時、御共以來、於所々御陣、致宿

直警固候畢、殊鞍懸・高牟礼・高崎等御退治、別抽忠節

之條、御見知上者、預御證判、為備後代龜鏡、粗言上如件、

正平四年八月 日

「承了、（花押影）」

五一 成恒種定軍忠状

○成恒文書 增補訂正編年大友史料七

豊前国御家人成恒左衛門三郎種定申軍忠事、

一 去年十二月廿三日、大將御下著以來、最前馳參御方、

致宿直警固候畢、

一同廿九日、属大將野依彈正忠手、馳向友枝致忠勤畢、

一 今年正月八日、属大將飯治兵庫助入道手、馳向永副、

令被却城郭、追散御敵畢、

一 自宇佐郡赤尾所々凶徒等打出之間、今月十九日、属宇

都宮山田三郎手、同郡馳向猿渡、致合戰、御敵追散候畢、

一同廿一日、所々凶徒等打出下毛郡、燒扨高瀬以下之間

馳向酒手隈、御敵追散畢、以此旨可有御披露候、恐惶

謹言

觀応二年正月 日

進上 御奉行所 「承了（花押）」

五二 土井種世軍忠状

○成恒文書 增補訂正編年大友史料七

筑前国土井兵衛五郎種世申軍忠事

一 去年十二月廿三日大将御下著以来、最前馳^{〔下野〕}、致宿直警固候畢、

一 同廿九日、属大将野依彈正忠手、馳向友枝、致忠勤畢、

一 今年正月八日、属大将飯沼兵庫助入道手馳向永副、令破却城郭、追散御敵畢、

一 自宇佐郡赤尾、所々凶徒等打出之間、今月十九日、属宇都宮山田三郎手、同郡馳向猿渡致合戰、御敵追散候畢、

一 同廿一日、所々凶徒等打出下毛郡、焼払高瀬以下之間、馳向酒手隈、御敵追散畢、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

觀応二年正月 日
進上 御奉行所 「承了〔花押〕」

五三 河依（久恒）範房軍忠状案

○久恒文書
増補訂正編年大友史料七

一 豊前国河依小太郎範房申軍忠事、

一 去年十二月廿三日、大将御下著当国以来、致宿直警固訖、

一 今年正月八日、属飯沼兵庫介入道手、馳向長副、焼城郭、追放御敵畢、

一 同二十一日、积源水凶徒、打出下毛郡、焼払高瀬之間、馳向阪手隈、追散御敵、令破却両城、是等次第、野依彈正忠貞輔、田口三郎同所合戰之間^{〔所方〕}見知也、然^{〔思〕}賜御判、備後代證粗言上如件

觀応二年正月 日

判

五四 一色道猷書状

○入江文書
大分県史料一〇

去廿九日合戰、不慮式之間、無力引退日田候了、於今者任京都御意、自李部^{〔大友氏卷〕}も御状候て、山方合休候て、一兩日中^{〔宇都宮公衆力〕}可罷出候、佐伯勢已昨日打付候了、又因幡守・草野・佐志・高来勢・志摩郡者共、彼是千余騎同道候て、是まて打越候、令遅々候者、此輩等令疲勞候間、谷々可打出候、其陣事無心本、能々御談合候て、要害宜候ハ人所二、可有御引揚候、恐々謹言、

十月二日
田原六郎藏人殿

〔一色權氏〕

道猷〔花押〕

五五 都甲惟元軍忠状

○都甲文書
増補訂正編年大友史料七

都甲彦四郎惟元申為直冬誅伐御発向之間、最前馳參、至于豊前国糸口原合戰、抽忠節候畢、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

正平六年十二月廿六日

進上 御奉行所

〔承了

源〔花押〕

五六 都甲惟元軍忠状

○都甲文書
大分県史料九

都甲彦四郎惟元申、為直冬誅伐御発向之間、去年九月十

日、馳參高田以来、於所々御陣致忠節畢、就中同年十一月廿五日、大神筑前次郎・土岐藏人大郎以下御敵、打出豊前国糸口原之間、為前懸之随一、抽軍忠畢、加之、迄于同国安心院・津布佐・深見以下凶徒没落之期、抽忠節候畢、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

正平七年正月二日

進上 御奉行所

〔承了

源〔花押〕

五七 大友氏泰書下写

○諸家文書集所収野上文書
南北朝遺文九州編三三八〇号

豊後国球珠郡野上村半分事、預置利根孫三郎頼貞之処、

□□□□左衛門尉・同孫六・隼人佐等構城郭、对守護使致狼籍云々、事实者大招罪科歟、所證、不日可去退之旨、重相触之、若猶不承引者、種田大輔房相共破却当城、打渡下地於頼貞、載起請之詞、可注申之状、如件、

正平七年三月廿五日

式部丞〔大友氏卷〕
〔花押影〕

守護代

五八 河依（久恒）範房軍忠状案

○久恒文書
増補訂正編年大友史料七

一 豊前国河依小太郎範房申軍忠事

一 安雲七郎、尻高次郎四郎、安先孫三郎以下御敵、構上毛郡屋形村於城郭、楯籠之間、去月十日、依有御発向、御供仕、致散々合戰、凶徒等城郭、令被却訖、

御供仕、致散々合戰、凶徒等城郭、令被却訖、

一今月廿三日、大隈小隈、中村河原合戰之時、散々致合

戰之段、御前上、同所合戰仕林七郎太郎、臼木清十郎、

令見知候畢、然早御判、為後代鏡、恐々言上如件、

觀心三年三月 日

(五條良氏)

五九 於保胤宗軍忠狀

肥前多久文書
南北朝遺文九州編三八四二號

「一見了、(五條良氏)」

肥前国於保弥五郎胤宗申軍忠事、

右、為朝敵誅伐、去八月廿七日御出小城之城仁、同十月

二日御発向豊州日田城・同国府中之時、令致忠節候了、

即豊前国宇佐并城并於所々、今致宿直警固於、迄于同

博多津、令抽忠勤候了、然早下賜御判、為後代龜鏡、粗

恐々言上如件、

正平十年十一月 日

進上 御奉行所

六〇 橋薩摩公世軍忠狀

東大史料編纂所所藏橋中村文書
南北朝遺文九州編三八四二號

「一見了、(五條良氏)」

橋薩摩東福寺四郎次郎公世申軍忠事、

右、為 朝敵御退治、御発向肥前国小城郡之間、最前馳

參、其後致用意、日田御陣令參着候訖、仍迄于豊後・豊

前・博多、属于御手、致忠勤候、以此旨、可有御披露候、

恐惶謹言、

正平十年十一月 日

六一 木屋行実軍忠狀

筑後木屋文書
南北朝遺文九州編三八四七號

「一見了」

(花押)

筑後国木屋彈正左衛門尉行実申軍忠事、

右、去八月十八日、為对治肥前国凶徒、御発向之間、自

最前令御共、同九月一日、小城々攻合戦抽軍忠訖、為御

对治豊後国凶徒、同十月二日、御発向日田之間、令御共、

球珠・由布・狭間・国府・大神以下於所々御陣、致宿直、

豊前国宇佐・城井、至筑前国殖木・博多、令御共候訖、

然早下賜御判、為備龜鏡、言上如件、

正平十年十二月 日

六二 田原直貞恩賞宛行狀

松成文書
西国東郡香々地町見目

(田原直貞 正基)

於香地城衆数月致忠節之間、当庄内土貢拾貫文下地、為

恩賞可知行之狀、如件、

文和五年三月 日

六三 惠良惟澄申状案

阿蘇家文書上
大日本古文書

阿蘇筑後守宇治惟澄謹言上、

欲早被経御沙汰任嚴重 綸旨 令旨預御遵行、筑前国

下座郡・豊後国大佐井郷・同国日田庄・肥前国曾祢崎

庄・肥後国守富庄以下条々子細事、

副進

三通 綸旨案

二通 令旨案

一 筑前国下座郡・豊後国大佐井郷事、

右、両所者、前大宮司惟時、以去元弘二年、可支配一

族之由、忝賜 綸旨之間、下座郡三百余町者、令配分

親類十余人訖、大佐井郷者、為小所之間、所充行子息

九郎惟成也、是則元弘之最初致軍忠輩也、而去正平八

年、惟時為飯盛城退治、令在津之時、配分之一族等、

如元知行無相違之處、惟時他界以後、土田豊前權守惟

基伺悲歎之際、令掠領者也、但惟澄并光永(左近)將監惟

富知行分者除之間、任 綸旨配分知行之条(不可成)搆虚說而

惣政所分以下一族知行之田園、惟基管領之条、敢不知

其意、凡(此配分之内)惟基者父子共三人被支配之間、於本知行

之分者、非無其謂、至惣領并一族知行之村々者、惟基

争可成競望乎、而此三四ヶ年之間、混乱知行之条、併

無道之甚故也、惟基依掠中、若有被仰下之旨者、任

綸旨欲蒙御成敗、且其子細、自一族等之中、鳥子彦

六入道禪道令參之間、可言上巨細歎焉、次大佐井郷事、

為 綸旨一通之内、惟成知行訖、其身適討死之上者、

御沙汰不可有予儀者哉矣、

一 豊後国日田庄地頭職事、

右、庄園者、去建武三年、山門 臨幸之刻、惟時依

勅定、忝奉懷内侍所、東坂本彼岸所(仁)奉入之間、勸

賞仁被行、下賜 綸旨畢、而去年十月(仁)日田出羽守

永敏称參御方之由、令上洛云々、幼稚之子息雖令降參、

於所領者、任傍例可有。○沙汰敷、永敏縱雖令自身參上、降參人之半分安堵者定法也、何況永敏者、始中終之御敵也、其身者乍令上洛、為不離所領、以子息降參之儀、爭可有一円安堵之望哉、尤任嚴重之。綸旨、欲蒙御成敗焉、

肥後国守富庄地頭職事、

右、当庄者、去興国二年六月十八日、惟澄賜 令旨訖、如明文者、支配当手之軍勢、令成勇、弥抽軍忠、於自身之恩賞者、施面目之樣、別可有其沙汰云々、而当国既属靜謐之間、尤可預御遵行者哉、爰当知行○河尻三河入道廣覺參御方訖、子息七郎令出仕敷、但当庄者、前代相模国司譜代之所領也、而廣覺以逆徒之恩補、知行之間、闕所之条勿論也、凡 朝敵補任之庄園、寺社奉寄之所々、皆以被改替畢、所謂天満宮奉寄之肥前国曾称崎庄被闕所訖、高良山寄進之地肥後国古保里庄同前、宇土壹岐守拜領之安国寺本名号 佐野寺料所同国高樋保号久被没収畢、此外逆徒之補任棄破之条、傍例有限、所詮、惟澄者、依軍忠忝賜 令旨畢、廣覺者朝敵之恩補也、更難被对揚之条、宜仰上裁、然早預御遵○欲令支配于軍勢等矣、

肥前国曾称崎庄地頭職事、

右、地頭職者、惟澄為勲功賞、被下 綸旨者也、其子細言上事旧訖、適為闕所之上者、令拜領之者、為当參祇候之要路、愚息弥太郎惟里欲令言上奉公之名字焉、豊後国玖珠庄地頭職當時闕所事、

右、闕所者、舍弟弥三郎惟賢給 令旨訖、案文備進上、而去年御对治之時、当庄地頭等大略參御方云々、其中青野村者、闕所也、任 令旨被経御○者、弥可令致忠節者哉矣、

以前、条々、大概言上若斯、凡惟澄去元弘以来多年之

軍忠、世以無其隱、人皆所知也、且云御感、云恩賞、綸旨 令旨數通雖令拜領、未預一所之遵行之条、不便之次第也、而今条々之訴訟、若任 綸旨 令旨、被経御沙汰者、此時定開眉目敷、然早蒙嚴密之御成敗、殊致合戰之忠勤、仍粗言上、如件、

正平十一年六月 日

六四 大友氏時書下

○都甲文書 增補訂正編年大友史料七

北浦辺凶徒等事、交名注文一通遣之、付縁者、令隱居所々之由、有其聞、早隨見合、誅伐之、可被注申子細、且不謂男女并所縁、於凶賊党類等者、不可有見聞隱之旨、可被進起請文也、仍執達如件、

正平十一年十一月十九日 刑部大輔大友氏時 (花押)

都甲千代王殿

六五 大友家文書録綱文

○大友家文書録 大分県史料三一

○氏時率兵於高崎城、遣戸次○頼時丹後守於肥前催国兵、而至筑後塞菊池帰路、又遣吉弘丹後守○氏輔正賢於豊前、宇都宮氏属之、而略國中、阿蘇大宮司亦密応氏時、約曰懷良親王若發兵於筑後、則可襲其後、由是氏時兵威日振、懷良召島津氏撃戸次於筑後、且召阿蘇大宮司、然不至、又命少貳撃氏時、頼尚伴諾而不果、懷良後醍醐皇子也、自二十年前菊池奉之、号西征將軍、為惣都督且朝臣等及新田氏族其余豪士居多集而在肥後、

(中略)

六六 木屋行実軍忠状

○筑後木屋文書 南北朝遺文九州編四二二二號

筑後国木屋彈正左衛門行実申、軍忠事、

右、去三月廿日、為御对治大友刑部大輔氏時以下凶徒、御発向豊後国之間、自最前属御手、於所御陣、致宿直、同四月十二日、御向同国竹崎城之時、於麓近御陣、日夜抽警固之忠、同五月十二日、御帰国之時、令御共候訖、然早下賜御判、為備龜鏡、言上如件、

正平十四年五月 日

六七 草野永幸軍忠状

○九州大学文学部所蔵草野文書 南北朝遺文九州編四一六號

筑後国草野孫次郎永幸申軍忠事

右、去三月廿日為对治大友刑部大輔氏時以下凶徒、豊後国御発向之時、令具奉、於所々御陣、致宿直警固、同四月十三日御向高崎城之間、致合戰、同五月十二日至于御帰国之時、抽忠節之条、無其隱者也、然者早賜御証判、為備向後之龜鏡、謹言上如件、

正平十四年六月 日

六八 藤原(志賀) 氏房軍忠狀

○志賀文書
熊本県史料中世二

志賀弥太郎氏房軍忠事、

一 去年十二月筑後宮狭間襲來之時、依為親父藏人太郎頼房當病、氏房自最前馳參赤松御陣處、宮勢退散之間、迄于玖珠八町辻、致忠節訖、

一 今年三月筑後宮、并菊池武光以下凶徒、當国打入之刻、頼房城郭寄來之間、既十余々日夜致合戰之処、彼逆徒引退、高崎城罷向之間、塞所々通路、廻方使、抽忠勤訖、

一 御敵高崎陣引歸之時、於當国九重山、致散々合戰、若党中尾兵衛三郎氏平切疵、中間藤次被射疵、去六月廿七日肥後御苑向之間、自最初致御共、三船城攻之時、若党中尾小三郎頼平被射、并進平五盛見被射、同隈庄、并甲佐御陣所々致忠節之旨、且預御注進、且賜御証判、欲備後証候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

延文四年十月廿日
藤原氏房上裏花押
進上 御奉行所
「承了、
〔花押〕」

六九 大友氏泰注進狀案

○志賀文書
熊本県史料中世二

一 大友武部丞注進狀案、泰顯・宗雄本領事」

一 因幡左衛門藏人泰顯申本知行地事、

如被仰下者、泰顯知行分可注申之云々、如下給泰顯代師豐申狀者、亡父兵庫助入道士寂跡事、被召惣領雜掌

可有尋御沙汰云々、此条士寂跡所領者、豊後国入田郷半分・肥後国隈牟田庄地頭方半分・筑前国香椎社領隅郷等也、而彼所々、出羽左近藏人入道正全拜領也、隨而建武三年於豊後国球珠城士寂他界訖矣、

一出羽次郎宗雄申本知行地事、
豊後国入田郷半分・同国球珠郡大隈村者、宗雄親父出羽次郎季貞相伝之處、先年他界訖、彼跡同正全宛給之歟矣、

七〇 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三一

○三月少貳頼尚、阿蘇大宮司内応於氏時、而相謀擊菊池、武光未知之、○自率七千余騎、先到筑後、戸次頼時自去年不戰而退豊後、武光欲進向豊後、而促少貳來会、頼尚斬其使而応氏時、乃率大軍渡筑後河、陳高良山、欲遮武光、後阿蘇氏亦起兵、屯小国莊構九壘、武光○驚而還兵進到小国、攻屠九壘歸菊池
■ 攻氏高崎城、不利而還兵、頼房追撃于九重山、頼房若党中尾兵衛三郎氏平創九所、中間藤次創三所、武光赴小国、田原正曇亦会氏時、有戰功、武光到小国、

七一 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三一

一 負病來高崎城守之、使其子弥太郎氏房、往援州大野莊鳥屋城、○九月少貳冬資頼尚・宗像氏・松浦氏子・應氏時、催悉來聚於豊後、總号二万余騎、菊池武光奉懷良親王、率四万騎到筑後、分兵為三道、入豊後・筑前、

氏經與氏時議而分二道拒之、氏經與氏時及少貳・松浦・宗像合兵一万余騎、為其一道到筑前陣長者原、氏經子松王丸、氏時子宮松丸督三千余騎、向其一道、氏經・氏時等與武光・武勝武光弟等戰於長者原、初勝後敗、而氏經・氏時及諸將引兵、悉退豊後、氏時狹氏經守高崎城、冬資入岡城、宗像・松浦拋臼杵城、武光奉壞良居宰府、自至豊後、陣府内、分軍攻高崎・岡・臼杵
主客相持累月、○頃月島屋城守兵志賀氏光肥後通路、

七二 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三一

頃間氏經赴兵庫聚兵、然無來從者、僅以二百余騎、解纜而西、氏時招氏經於府内館、而議擊菊池

七三 斯波氏經書狀案

○阿蘇家文書下
大日本古文書

連々雖可進使者候、先度如申候、道路難儀之間、無案内令懈怠、心中更非等閑候、其辺事一向憑存候、當城攻寄候者、隨進退可有御計候、兼又料所事、自是雖可進候、御望在所不存知之間、不進候、注給候者、可書進候、且京都可被申子細候者、可承存候、身之一大事情、可注進候、定不可有子細候、此間御辛苦、返々察申候、恐々謹言、
八月廿七日
左京大夫氏經花押
謹上 阿蘇大宮司殿

七四 斯波氏經書状案

○阿蘇家文書下
大日本古文書

不審之処、悦(喜)了(了)、凶徒既打入府中候、未攻当城候、
若寄来候者、一向憑申候、次通路事、土左次郎被談合、
籌策候者、悦入候、恐々謹言、

九月九日

氏經花押

阿蘇太宮司殿

御返事

上包同

到来九月十日

七五 志賀頼房軍忠状

○志賀文書
熊本県史料中世二

志賀藏人頼房当病之間、雖不叶起居、自去年(貞治元年)八月
月參住高崎城、私候大将御陣、致日夜警固之上、差遣子
息弥太郎氏房於豊後国大野庄鳥屋城、打塞凶徒武光本
之通路、致不退合戰之間、連々軍忠雖不違注進、
貞治元年十一月十日合戰之時、

武光一族鬼塚左衛門次郎討取之上、氏房親類大窪孫三
郎・若党中尾兵衛三郎・左近太郎被疵畢、

同十一日

分捕額一 不知名字、若党進又五郎・窪助次郎、中間後藤
次・六郎次郎・彦五郎・源内、被疵訖、

同廿九日

若党泉右衛門太郎高濤討死、若党古見孫三郎・中間六
郎次郎・源八・七郎次郎、被疵畢、

同二年潤正月廿五日

若党進平五盛見討死、若党後藤太実房・中尾兵衛三郎
氏平、被疵畢、

以前条々、大概如斯、此外不可勝計、合戰未落居、劇務
之砌、日数相隔者、依可有公私不審、先粗所令注進也、
早預御証判、為備後規、言上如件、

貞治二年卯月 日

「承了、刑部大輔(花押)」

七六 島津師久訴陳状案

○山田聖栄日記
増補訂正編年大友史料七

一師久訴陳申状、
豊後合戰并薩州同乱事、度々注進言上仕候之処、依路次
往復難儀、不令參着候条、恐歎不少候、抑為豊州御合力、
去々年九月廿六日、懸テ肥後路、令発向候之処、於中途
当国凶徒和泉下司諸太郎、兵衛尉政保、同一族牛屎近江
將監高元、同旗隅州馬越藤四郎行家、同一族肥州芦北七
浦賊徒等、依差塞通路候、对彼輩致合戰候処、及親類若
党并洪谷一族数十人討死手負候云々、其間子細、管領御
方言上仕候畢、定御注進候哉、雖然重而可令発向候之処、
地頭御家人等、更三不随催促、国々凶徒、已余リテ過半
蜂起之間、難閣候上、对政保并一族等之域、致合戰以後、
従去々年于今在陣防戰間、御合力之事、不遂其節候之条、
且者可足御高察候哉、且者分国難儀之段、管領之御使長
刑部少輔見知候畢、次舍弟氏久、於隅州、自去々年迄于今、
向合敵陣、致合戰候、巨細之段、注進仕候哉、次豊州合
戰之事、大内介弘世就渡海、菊池肥後守武光退散之間、
御方大慶此堺候之処、無幾程弘世依帰国鎮西弥及難儀、
管領已周防国府御開之間、則進飛脚候畢、随而御上洛之
由、預御返事候、驚存候、急速九州退治被経御沙汰、被
差下討手候者、所仰候、次雖無勢候、兄弟相共踏两国、

連日致合戰候之条、被下廉直御使、預御檢知候者、可然候、
次分国軍勢等、可応師久催促旨、被成下御教書者、可廻
凶徒退治御籌策候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、
貞治二年五月二日 左衛門尉師久

七七 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三一

頃月足利氏經無軍利、出高崎城帰京一日、去年壬寅九月菊池
利出高崎城帰京、未詳戰事、月日今據義詮書、則今年六
月氏經猶在豊後而其後帰京乎、故押為頃月之事、載于此

七八 征西將軍宮懷良親王令旨案

○征西大將軍宮諸
大宰府太宰府天満宮史料二二

豊後入田・小川退治事、所々城追落之次第、高名之至、
殊所感恩食也、弥可被抽忠節候也、令旨如此、悉之以状、
正平十八年九月九日 大藏卿 判

阿蘇大宮司館

入田・小川、豊後の何郡なるやいまた考へず、此前氏經
より惟むらへの状、入田え帰り(七)あれハ、入田・小川の
者共、其頃ハ宮方(八)して、阿蘇の所領などになりてあり
しを、惟村引みて將軍方に誘入れたるなるへし、それ故
惟澄ミつから発向して、所々の城とも追落したりと見え
たり、惟村か所々構要害といへるも、入田・小川のあた
りに城郭を構へたるなるへし、大藏卿ハ、次の(九)九年十
月の令旨の上包二、資世とあれとも、世系さたかならず、

七九 斯波氏經書下

○佐田文書
増補訂正編年大友史料八

謹言、

卯月八日

都甲彦四郎入道殿

頼直(花押)

豊前国平田宮林合戦之時、致軍忠之由、尤以神妙、弥可
抽戦功、仍執達如件、

貞治三年正月十日

修理大夫(花押)

宇都宮大膳亮殿

八〇 直尚書状

○都甲文書
大分県史料九

於当城、忠節異于他候之条、感悦存候、且其子細、可注
進申候、恐々謹言、

三月十八日

直尚(花押)

都甲彦四郎入道殿

八一 大友氏時感状

○都甲文書
大分県史料九

於紀四郎之城、被致忠節之条、感悦無極候、恐々謹言、

卯月五日

氏時(花押)

都甲千代王殿

八二 頼直書状

○都甲文書
大分県史料九

於紀四郎城、被致忠節之条、尤神妙候、可令注進候、恐々

近地次郎藏人入道沙弥玄心謹申、

八三 近地玄心目安案

○志賀文書
熊本県史料中世二

目安、

右子細者、子息藏人二郎宗房、去貞治元年十月十日鳥屋
城合戦之時、依打死仕候、度々雖申入候、未及恩賞之御
沙汰之候条、歎存候、然而、適近地名内地頭方半分、一
万田左衛門太郎宣元女子乃津岩屋七郎次郎入道妻女所当
知行仕候也、然而、乍令彼所領知行、此間之合戦、惣領
志賀殿付手不致合戦上者、云由緒、申藏人二郎打死、彼
近地名半分七郎二郎入道妻女於知行分者、宛給藏人次郎
打死恩賞、弥為致軍陳之忠勤、恐々目安言上、如件、

貞治二年十月日

八四 藤原(田原)氏能讓状

○碩田叢史田原文書
増補訂正編年大友史料八

たうしやうおとむれ^{御妻也}二^{女姓}おいて、うちよしうちしにをいた
すといふとも、によしよくわひにん候間、ゆつりをし
た、めおく物也、もしなんしの身^{男子}候ハ、氏能ちきよ
うの所々、ほんりやうしんをん、一所もの二さす、ちき
やうすへき也、のちのために、ゆつり状、くたんのことし、
おうあん二年七月十二日 藤原氏能(花押)

八五 近地玄心讓状

○志賀文書
熊本県史料中世二

賀村内近地名内地頭職事、
玄心重代相伝所領也、但子息藏人二郎、於鳥屋城令打死
之間、息女愛鶴女嫡子依為、孫子鬼二郎丸仁、相副次第
証文、所讓與也、於御公事以下者、守惣領宛配之旨、可
勤仕也、仍讓状如件、

應安三年庚七月廿五日

沙弥玄心(花押)

八六 田原氏系図氏能譜

田原氏系図氏能譜
増補訂正編年大友史料八

田原氏能の譜 應安四年六月廿六日、相属于今川治部
少輔義範殿之御備、自備後国尾路津、令乗船、同七月二
日夜、取上于豊後国高崎城之処、菊池肥後守武光之若党
平賀新左衛門尉、構于要害於氏能之分領国東郷之間、同
廿三日夜、差遣於手勢、追落彼城、平賀彦次郎以下凶徒
等三人討捕之訖、礼部有御見知、同年十二月晦日、下賜
將軍御感之御教書、細川相模守頼之、被伝之矣、

八七 今川義範書状案

○阿蘇家文書下
大日本古文書

鎮西対治事、時分可然候之間、先立罷着高崎城候、就其候其辺人〱御籌策候、早速馳参候之様、御計沙汰候者、悦入候、一向馮存候、自入道方進状候、定其趣令申候歟、入道近日、自長門関可罷越候、同候者、其内参候様御計候者、殊喜入候、恐々謹言、

七月四日

阿蘇大宮司殿

義範 花押

八八 今川義範書状案

○阿蘇家文書下
大日本古文書

去月廿八日御状、今月三日到来、悦承候了、抑菊池二郎、去月廿日、罷越当国候、雖然、城近未指寄候、用心事可得其意候、

一渡海事、中務少輔先立赤間関下着候、調舟候之由、音信候也、随而入道罷着防州候之由、雖其聞候、猶々、可被急渡海之由、今日以早舟申遣候、不可有幾程候歟、然者、其以前御籌策候、被成一功候者、喜入候、当城之体、如御使見候、無殊事候、定可申候歟、度々御音信、喜入候、恐々謹言、

八月三日

阿蘇大宮司殿

義範 花押

○真玉氏系譜
南北朝遺文九州編四九〇二号

八九 室町將軍家御教書案

○真玉氏系譜
南北朝遺文九州編四九〇二号

鎮西大將下向之後、被参入于已高崎城、殊木付城堅固出丸、用意兵船等之事、今川了俊・大友親世注進之趣、達台

聽之処、御感不淺之状、依仰執達如件、
應安四年十月三日
木付大炊助殿
武藏守 判

九〇 近地玄心讓状

○志賀文書
熊本県史料中世二

讓与、

豊後国大野庄志賀村内近地名地頭職事、玄心重代相伝所領也、但子息藏人二郎、於鳥屋城令打死之間、息女愛鶴女嫡子依為、孫子鬼二郎丸仁、相副次第証文、限永代、所讓与也、於御公事以下者、守物領宛配之旨、可勤仕也、仍讓状如件、

建徳二季 亥霜月十日

沙弥玄心 (花押)

九一 今川義範軍勢催促状案

○日向土持文書
南北朝遺文九州編四九二二号

武光以下凶徒寄来当城之間、致合戦最中也、早馳越佐伯・蒲江辺、可被致忠節之状、如件、

應安四年十一月十四日

治部少輔 判

土持八郎左衛門入道殿

○薩藩日記雜録「三モ同内容ノ文書アリ。」

九二 室町將軍家御教書案

○高田氏文書
西国東郡誌

於豊後国高崎城、致忠節由、大友左馬助親世所注進申也、尤神妙、向後弥可抽戦功之状、依仰如件、
應安四年十二月晦日
高田美作守殿
武藏守 判

九三 室町將軍家御教書写

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料八

於豊後国高崎城、致忠節由、大友左馬助親世所注進申也、尤神妙、向後弥可抽戦功之状、依仰執達如件、
應安四年十二月晦日
田原下野権守殿
相模守 (花押影)

九四 室町將軍家御教書

○早稲田大学所藏後藤文書
荻野研究室収集文書下

於豊後国高崎城、致忠節之由、大友左馬助親世所注進申也、尤神妙、向後弥可抽戦功之状、依仰執達如件、
應安五年正月十三日
相模守 (花押)

九五 貞直書状

○入江文書
大分県史料一〇

旧冬十一月十六日御札、正月十六日京著、委細拜見仕候了、抑高崎御要害事、無相違御踏候之由承候、返々目出相存候、殊ニ於京都其披露候之間、身一人悦と相存候、

隨而度々御合戦^二、無別御事候之由承候、返々目出悦入存候、ふと罷下候て、雖不甲斐^一候、面々今度之御大事にて候之間、御用にも可立申候所存、朝夕念願仕候へとも、私ならざる身にて候間、無力事候、貞直も去年勢州罷下候て、不思義^二無別事候、去冬極月廿五日上洛仕候、又凶徒正月十七日打出候て、及難義^一候間、又近明日之間可罷下候、我等辛苦も可有御察候、勢州事属靜謐候者、雖何時候、乞暇候て、可罷下候、国事者一向憑入候、又京都御用者、可蒙仰候、将又京都之式、無別義候間、不申候、今者諸方御敵等対治之様候間、公私目出候、尚々国事者、一向奉憑候、被懸御意候者、恐悦候、事々期後信候、恐々謹言、

正月廿日

貞直 (花押)

田浦殿 返事

九六 吉弘一曇書状

○永弘文書
大分県史料三

一日預御札候之間、則進御返事候畢、抑田染重安以下名々事、於下地者、任先規令知行、至御神事者、無退転可致沙汰之旨、度々申候了、而致放火狼籍、及刀傷打擲候之由、承候、驚人候、適今明高崎^{大分}へ、以事書、条々申談子細候、左近藏入入道殿事、可有尋御沙汰之間、可申進進候、松尾彦九郎事、直可相尋候、次^二内野尾名事、就此御状承候、同相尋之^一候て可申候、神人嗾訴之段、被宥仰候之条、就公私悦入候、每事期後信之時候、恐々謹言、

九月十四日

一曇 (花押)

九七 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三一

氏自海来築豊後山香郷花^{マカサ}、豊前路、親世襲攻之、且屢至^二之、城^一、彈正少弼令田原氏能援親世、^{カシラ} 帰会花^{カシラ}、親世諸兵大攻、花嶽城拔之時、^{カシラ} 十三日氏能^{カシラ}

九八 今川了俊感状写

○入江文書
大分県史料一〇

自最前、於豊前被致御忠候、結句豊後花嵩合戦御高名、目出候、殊更不日^二馳歸豊前、又御在陣候、重々事候、とても其国被入功候上者、相構高畑事、口々御沙汰候者、可目出候、恐々謹言、

九月廿二日

了俊 (花押影)

田原下野守殿

此御感状虫喰申二付、書写置者也、

九九 豊後国花岳合戦手負注文

○入江文書
大分県史料九

一御感可有候歟、
花岳合戦氏能手物共手負注文

木村六郎五郎 左ヒサ

帯刀中務 左アシ

加礼河刑部房 左ウテ

菅嶋六郎四郎 ウチキス

竈門彦次郎 左ウテ、同方カタ

同彦三郎 カシラ

枝元小次郎 チノシタ

市丸弥次郎 右アシ

倉地弥三郎 カシラ

成吉民部丞 右ヒサ

辻間孫太郎 ウチモ、

松尾七郎 ヒタリノカタ

秋吉三郎五郎 チノシタ

同三郎次郎 ハラ

小垣原佐衛門次郎 モトクヒ

加礼河弥五郎 カシラウチキス

以上十六人

一見候了、

尤神妙也、

了俊 (花押)

仰出候、

○応安七年 (一三七四) ナリ。

一〇〇 田原氏能軍忠状

○入江文書
大分県史料一〇

田原下野権守氏能軍忠事
依宇都宮常陸入道謀叛、霜台御発向之間、急速可馳参之旨、依仰下、不廻時日、令参陣、自去一月廿三日、於豊前御陣、令堪忍、連日野臥合戦之時、親類若兎每度被批畢、爰去八月廿八日夜、豊後国凶徒、忍上同国北浦辺花岳、構城廊、塞豊後・豊前两国通路之間、事延引者、依可存

天下之御大事、自惣領大友方、就度々之注進、可馳向彼城之由、以霜台御意、不日罷向彼在所、去九月六日曉、押寄当城花岳、散々致合戰、親類若党數十人、雖被疵、同日对治仕、不移時剋、令城井焯陣、致宿直之処、同廿五日、没落高畑城之間、致霜台御共、馳參当御陣八町嶋、所々御勢仕以下、致宿直之段、顯然之上者、預于京都委細御注進、申賜御感御教書、為備後代龜鏡、粗言上如上件、

応安七年十月 日

「承了、(今山了)」
「花押」

一〇一 田原氏能軍忠状

○入江文書
大分県史料一〇

田原下野權守氏能申所々軍忠事

一去応安四年六月廿六日、致治部少輔殿御共、自備後国尾路津令乘船、同七月二日夜、最前取上豊後国高崎城之処、菊池武光之若党平賀新左衛門尉、構要害於氏能分領国東郷之間、同廿三日夜、差遣手物等、追落彼城、平賀彦次郎以下凶徒三人討捕之条、禮部御見知之上者、不可有御不審者哉、同八月六日、伊倉宮并菊池武光以下凶徒等、寄来当城之間、踏一方役所中尾、迄于翌年正月二日、百余度合戰、每度親類若党以下數輩被疵、勵日夜軍忠、至于今、残置親類手物等於当城、抽随分至功之次第、大将御見知之上者、不能巨細言上者也、

一同三日武光以下凶徒退散高崎陣、打上太宰府之間、同三月廿六日、馳參筑前国高宮御陣、同四月八日宰府御進發之時、令御共於佐野御陣、致忠節畢、

一同廿二日、為肥前国横大路敵城向要害、中賀野左近將監殿并惣領大友手輩相共、打腰同国綾部村、取誘向城、

同廿八日帰參佐野御陣、至于同八月十二日宰府凶徒没落之期、於御手勵忠功、自当御陣御移城山之時、致御共、其後為手分、属右衛門佐殿御手、於日隈御陣、兩年令堪忍、致忠節畢、

一肥前国高来郡凶徒蜂起之間、山名少輔次郎殿為大将、被差遣御勢之時、依被仰下之旨、於分領同郡山田庄内、取誘山田・野井両城、差置親類木付左近將監以下手物數輩、度々凶徒寄来之時、每度抽戰功、諸方御勢仕之時、無懈怠致忠節、禮部御発向之後者、属彼御手、抽至忠之条、山名少輔次郎殿見知畢、

一同六年二月十四日夜、菊池次郎武政・同肥前守武安以下凶徒、馳越筑後河大豆津瀬、打寄肥前国本折城、及合戰之間、為後攻自高上御陣、右衛門佐殿御発向綾部村之時、雖被仰下、諸軍勢等悉依令辞退、任被仰出之旨、致金吾御共、其後於野老隈御陣、抽忠節之刻、彼城既依及難儀、為兵粮助成、御手人々并物領大友手輩相共、差遣親類若党等、廻種々計略、致粮米以下合力、勵至忠訖、

一菊池赤星筑前入道以下凶徒等、楯籠同国田手寺之間、同六月十日夜、筋一揆・松一揆人々并豊後勢相共、被致夜討之時、以手物等令合力、抽戰忠、若党三人被疵之条、御手人々見知畢、

一肥前国千栗凶徒退散之後、於同国宮津御陣致忠勤之処、為豊後国大野敵城退治、惣領大友親世差向一族若党等、及合戰之間、氏能可馳越之由、親世就令申、同九月八日、馳越当国、於大野城数日抽戰忠、於直入以下所々、廻計策、致忠節之次第、惣領名代見知畢、

一豊後国球珠郡小田太和守以下輩謀叛之間、同十一月十三日、大友親世名代相共、馳向同郡高勝寺敵城、同十七日致散々合戰、追籠凶徒等於城内之時、親類若党數

十人被疵、手者一人令討死訖、其後宇都宮如法寺若狭介氏信、并惣領大友手輩相共、取構同郡内古後城踏之間、以氏能親類手物等令合力、連日致野伏合戰、迄于今、於郡内抽忠節之次第、惣領注進之上者、不能巨細言上者也、

一同七年正月廿三日、城井常陸前司入道依謀叛、彈正少弼殿御発向之間、不廻時日馳參城井御陣、致夙夜忠勤、諸方御勢仕并連日野伏合戰以下、每度勵戰忠、親類若党數輩被疵之次第、大将霜台度々預御注進者也、同八月廿七日、凶徒取上豊後国山香郷花岳、依及難儀、同九月三日馳越彼境、同六日攻上当城、致數剋合戰、親類以下五十余人被疵、追落彼城、同十三日帰參城井御陣、迄于高畑城没落之期、致忠節之条、霜台御見知畢、

一同十月一日、致霜台御共、馳參筑後国八町嶋御陣、於河鱈渡瀬口要害以下、致日夜警固、同十一月十日夜、為御先勢、治部少輔殿御渡筑後河安度瀬之時、属彼御手、打入石垣城、同十二日追落同国皆尾山凶徒、同十五日御手人々相共、打寄黒木北河内、同十六日至于黒木城衆降參之期、勵忠節訖、

一同廿五日、惣領大友親世名代參河大藏少輔義匡并周防因幡守・大村讚岐入道相共、為御先勢、依打越肥後国小島村、翌日彼敵城令没落之間、同十二月七日、打寄同国目野陣、追扨千田・山本以下所々凶徒等、同十五日、金吾・禮部御著同国若原之間、則馳參彼御陣、迄于今令在陣、諸方御勢仕以下、勵至忠畢、

以前、軍忠之次第、且預京都御注進、且賜御証判、為備後代龜鏡、粗言上如上件、

応安八年二月 日

「承了、(今山了)」
「花押」

一〇二 大友氏繼感狀

○都甲文書
大分県史料九

去月十六日、豊前国高家城合戦之時、致忠節々、尤神妙也、弥可抽戦功之状、依仰執達如件、

永和二年三月廿一日

武蔵守 (花押)

都甲三郎四郎殿

一〇三 今川了俊感状

○都甲文書
大分県史料九

於豊前国高家要害、被疵々、尤以神妙也、向後弥可抽軍功之状、如件、

永和二年三月五日

沙弥 (花押)

都甲三郎四郎殿

一〇四 室町將軍家御教書

○都甲文書
大分県史料九

去月十六日、豊前国高家城合戦之時、致忠節々、尤神妙也、弥可抽戦功之状、依仰執達如件、

永和二年三月廿一日

武蔵守 (花押)

都甲三郎四郎殿

一〇五 室町將軍家御教書

○早稲田大学所蔵後藤文書
萩野研究室収集文書下

去月十六日、豊前国高家城合戦之時、致忠節々、尤神妙也、弥可抽戦功之状、依仰執達如件、

永和二年三月廿一日

武蔵守 (花押)

「後藤五郎入道殿」

一〇六 今川了俊感状

○都甲文書
大分県史料九

於豊後国朽網城責、致忠節々、尤以神妙、弥可抽戦功之状、如件、

永徳二年七月十日

沙弥 (花押)

都甲新左衛門尉殿

一〇七 五條頼治軍忠申状案

○五條文書
熊本県史料中世四

頼時畏言上、

抑当国、大略雖属凶徒、頼治踏矢部、津江両山、抽

忠節候、当山者肥後・筑後・豊、三ヶ国之堺、九州無双之要害候、仍度々大變凶徒、入足之地候、就中今年九月凶徒引退、已後、当国守護人大友修理大夫親世親類大友次郎親氏・守護代如法若狭守氏信等、率筑

後、豊後兩國之勢、自方々可攻当山之由依其間候、致用意候之処、去十月七日大手、自筑後向打上牧口、取陣候畢、

同八日、搦手、自津江日田勢打入津江大野候之間、差副頼治手者等於津江輩、致防戦之間、不日追払候畢、同九日、

筑後向之敵立牧口之陣、寄泉山、地下輩、

等相支、致防戦之最中、黒木四郎、筑後入道、以下当国御方輩等同心令合力、及散々合戦、御方打勝候畢、凶徒数百

人被疵、数十人討取候畢、凶徒黒木城、敵城、近所引退、赤坂取陣候、同十一日夜、自山中内通敵陣之輩候、引大勢

於山中肝要之在所候之処、定善一族兼、依上野伏候、不及合戦引退候畢、同十一日、自生葉向日田以下凶徒、打

入調山北河内候之間、頼治手定善一族以下馳向、終日致合戦、追払候之刻、凶徒多被討被疵候畢、頼治調方々手者、

馳向赤坂陣、欲致合戦候之処、同十二日曉、凶徒引退候畢、山中如野伏以厄弱之少勢、諸方合戦、每度勝利、併、聖

運候哉、於今度之節者、初頼、將軍宮御手之外、他手不相交候、如此之子細、以次可有御披露候哉、頼治誠恐謹

言

言

言

言

言

言

言

言

言

言

言

言

言

言

言

言

言

言

言

言

言

言

一〇九 今川了俊書状

○田原達三郎文書
大分県史料一〇

其城事、度々承候間、随分いそぎ、一勢つかはし候へく候。豊前路よりの合力の事ハ、大内家人等、国の事をうたかひて候て、これよりの勢つかはし候ハ、やかて事を左右ニよせて、大友方をも合力し候へきやうニきこへ候ほと、さやうニなり候てハ中へ後までのわつらひたるへく候ほと、このやうを、まつ大内方ニ申つかわし候て、心やすく思候ハ、其後の勢仕の事ハ、豊前目よりも子細候ましく候間、その左右を待入て候也、玖珠路の事ハ、今も煩あるましく候間、すてニハや、二郎殿三郎殿も、若狭殿一所ニ御こゑ候也、陸奥守も、明日六日筑後にまかりこゑ候間、あなたよりの合力勢仕ハ、子細候ましく候、一それの事、地下のこやおとすれ候て、つうろなんきのよし、うけ給候、たとひつうる候ハすとも、その城の事、この月うちハ、かり、御こらへ候ほとどの兵糧もし候ハ、それまで御こらへ候へく候、もし又、そのほとどの兵糧もあるましく候ハ、中へ城をすて、こなたニ御こゑ候歟、しからすハ、ひめ嶋まで御うつり候へく候、とても豊後の事ハ、たとひその城をすてられて候とも、かたくしす申候へとの御教書の下にて候間、事を大ニ仕候て、しす申候へく候間、そこつに御心し候て、面々の御身をまたくせられ候て、豊前路よりの勢仕の時を、御まち候へく候、もし兵糧候て、今月中ハかり御こらへあるへく候ハ、とてもそれまで合力を御まちつけ候へく候、相構へく心ミしかく、御さた候ましく候、たとひその城候ハすとも、我らも

御教書と、上意のをもむきのま、に、合力事、さたし付申へく候上ハ、城すてられて候ニハ、よるるましく候、日本国大小の諸神八幡大菩薩天満自在天神も、御討候へ、面々の御あんとの事ハ、かたくさたし付申へく候、今のま、にてハとても大友方の事、その身も国の事も、すくるへく候上ハ、いかに御かんに候へく候、そのために、ハやかさねへく京にも申入、大内方にも申遣て候間、豊前路の勢仕事、子細あらしと存候、一城中の人々御知行分あんとの事、承候、めいへくニ進候へハ、みちのほどもわつらひにて候間、まつ一紙ニ御あんとを申へく候、追てめんへく御名字にて進候へく候、なニさまニも、御所御奉公の名字を御かけ候事をハ、始中終公方としても、御扶持候へきよし、かたしけなく仰下され候ハ、仰事も御心やすく候へく候、恐々謹言、

三月四日

了俊(花押)

衛比須城

御返事

一一〇 大内隆弘奉書案

○伊藤喜左衛門文書
萩藩閩録四

去八月十九日、豊州表郡佐伯松原之城落去之砌、跡退之振、久利方注進被聞召、神妙之由、御上意之趣、如件、

応永式年九月三日

隆弘(判)

伊藤次郎左衛門とのへ

○意味通ゼザル所アリ。

一一一 大友親世書状

○狭間文書
大分県史料二六

くすのひきち事、けいやく仕へきよし申候、もしほんりやうハしく事ニよて、人とかく申事も候ハ、引取申候、又たかさき事、かき事、した、め候て、進すへ候、大方てうしゆをめんし、御より候て、しるしうけ給候へく候、尚くハしうけ給候へく候、又くすの御ちきやうふんに、如法寺こ、の物ともあしよわそのほか、此うち物とも、もしハえんへくにより候て、かくれい候事、いかニもあるへく候、さやうの事をハ、よくへくおほせつけ候て、一ミち御さたにあつかり候ハ、返々悦入候、恐々謹言、

七月十二日

親世(花押)

はさま殿

ちか世

一一二 渋川満頼書状

○佐田文書
増補訂正編年大友史料九

宇都宮佐田薩摩守事、於当手忠節之仁候、分領并要害等事、自然之時者、被致合力候者喜入候、恐々謹言、

八月五日

満頼(花押)

宇佐郡人々中

一一三 頼宗知行宛行状案

○三田尻裁判文書
萩藩閩録四

別府城立花働之時、尽粉骨髓義忠賞無比類候、依是長須百貫之地宛行畢、全可令知行狀如件

應永拾三月廿二日

賴宗ノ判

疋田又四郎殿

一一五 滿濟准后日記

○増補訂正編年大友史料一〇

六郷離山ノ衆徒等一同謹上、
右、今度離山之趣、非別子細、譬者当寺務代住職以來、
对衆分、往古旧代無其先蹤以非例、致苛責被充行不慮之
課役、御百姓一分之公役、令勤仕候事所以者何、今度御
屋作並以下、為上意之趣、上者令致随分奔走勤仕申之処、
御侍造作以下之費及六十余貫之条、六郷平均段錢催促ノ
事、滿山之傷此^{（疑脱カ）}事、仍付彼寺務代、雖捧一同之訴狀、
未達上聞、結句重而御屋作御催促、是又雜用可為同前、
段錢又同前也、然者衆徒悉以貧道無力之至、家計以難応
微分、依之、或先規旧例之法会神役等令陵夷、或元来不
退之勤行修学令廢怠事、是偏寺務代ノ苛政所致也、爰殊
以衆徒等、懷愁鬱空送年月事、当山所々坊領并有限役田
以下、更無其罪科令押妨、他郷他所地下人等、倒失理由
細之本主事、当寺務代之所為、以ノ外無道也、如此之間、
住山無其益之条、令離山候者也、且為上覽、且為無私曲、
条退轉ノ堂社坊領ノ員数条々、注進明鏡也、忝奉仰上意
御賢察之旨者歟、然任先例、速蒙上裁、者、滿山衆徒等
開多幸之眉、弥可致御祈禱之精誠祈狀之旨、如件、
應永十九年巳十一月十五日 滿山大法師等各言上

佐田因幡守殿

一一七 看聞御記

○統群書類從補遺四

(永享三年) 六月八日晴(中略)、明日九日、九州下向兩
長老無為和尚・騰西堂并奉行兩人^{飯尾肥前守}、大内雜掌可
參門跡由、可令下知給、内々上意趣以経祐法眼申遣赤松
播磨守方了、自畠山方以遊佐河内守条々申旨^{（疑脱カ）}在之、一昨
日仰条々申了、山名金吾禪門来、九州へ重上使兩長老被
下遣事、内々被仰談旨等在之、其子細今春上使下向事、
尤可被仰談処、大内・大友和睦事、一日毛早速可被仰遣
由、自探題方^{（疑脱カ）}申入、大内又同前之間、不及是非被下遣了、
今度又同前儀、雖然重上使下向事、於大内、無益不可被
下由頻歎申入、子細御尋処、今度筑前国立花城以下大友
知行所々要害悉以追落了、然者定此等要害返賜後、可和
睦仕由可申入歟、其時者御沙汰様、又於身第一難儀也、
平^{（疑脱カ）}可有御略旨申入也、於此一段者、重可為御成敗歟、
以前而上使未^{（疑脱カ）}參洛間、旁大内・大友兩人心、又早々
可和睦旨被仰下也、可為何様哉云々、山名申入様、重上
使下向事、上意尤珍重存、早々可被下遣条、尚々可然御
沙汰云々、畠山意見又同前、(以下略)

廿五日、晴、(中略) 抑聞、此間大内注進、大友肥後國
落下隱居、仍大内・河野等大勢、彼國へ発向、城共数々
所燒落、而大友以謀奥へ引退、大内・河野等大勢難所へ
引入、自後取卷テ責戰之間、大内失利引退、河野勢若干
被討、河野も討死云々、大友又勝軍之由、飛脚到来云々、
(以下略)

一一八 飯尾為種・飯尾貞連署奉書

○吉川家文書
増補訂正編年大友史料一〇

於立石城、被致忠節之旨、大内修理大夫注進到来、尤神妙、
弥可被抽戰功之由、所被仰下也、仍執達如件、
永享七年十月廿七日
大和守(花押)
肥前守(花押)

吉川駿河守殿

一一六 大内持世書狀

○佐田文書
増補訂正編年大友史料一〇

日差^{（疑脱カ）}辺へ可被打越之由兩度申候了、定右田參河守、飯田
越中守可申談候、今度一途御奔走候者尤可然候、其境事
一向憑存候、委細重宗方より可申候、恐々謹言、
十一月廿五日 持世(花押)

一一九 大友親綱書狀案

○大友家文書錄
大分県史料三一

御身上事申候処、懇示給候、本望候哉、仍斎藤美濃守所
まで承候間、田北佐渡守跡、并敷戸事不可有子細候、日
差事、追而可申談候、尚々落居不可有幾程候歟、同〇者、

早速現形候者、悦入候、委細美濃守可申候間、省略候、恐々謹言、

十二月七日

親綱 在判

田北治部少輔殿

豊後国敵城東神野事、被追落之旨、大内修理大夫注進到來、尤以神妙、弥可被抽戰功由、所被仰下也、仍執達如件、

永享八年五月四日

右京大夫 (花押)

毛利少輔次郎殿

一二〇 大内持世書状案

○大友家文書録 大分県史料三一

上使 臨首座より被仰子細候、目出候、此間念願満足候、
歎悦過御察候、於向後者、弥不可有等閑候、随而就路次事、
王子城衆方への状、認進之候、可得其意之由、自是も申
付候、御出之時、愚状可被遣候、猶々路次事者、不可有
相違候、早々以面可申承候、恐々謹言、

三月九日

持世 在判

田北治部少輔殿

一二二 大友親重知行預ケ状

○若林文書 大分県史料三五

朽網郷内朽網宮内少輔跡拾貫分事、為姫嶽堪忍忠賞、預
置候、可被知行候、恐々謹言、

五月三日

親重 (花押)

若林弾正忠殿

一二三 室町將軍家御教書

○毛利家文書四 大日本古文書

一二三 室町將軍家御教書写

○小早川家文書二 大日本古文書

豊後国敵城東神野事、被追落之旨、大内修理大夫注進到
来、尤以神妙、弥可被抽戰功由、所被仰下也、仍執達如件、

永享八年五月四日

右京大夫 (花押影)

竹原太郎四郎殿

一二四 大友親綱書状案

○大友家文書録 大分県史料三一

其方時儀、委細示給、悦喜仕候、就其、日差事斎藤治部
所○代所立、去月初比社彼地事、可有知行通令申候処、
斎藤加賀所より、遅其段申候歟、日差事、佐田・鹿越
之中間と申、いかにも、可然候する仁を被遣候、即地下
をもしかくと、沙汰候する事肝要候、又姫岳之事、兵
糧一束に留候由、其間候、落居不可有幾程候、御手洗・
薬師寺者共五六人、此四五日以前、罹出候によりて、敵
方之事おもひやられ候、恐々謹言、

閏五月十四日

親綱 在判

田北治部少輔殿

一二五 弘忠書状

○田北一六文書 大分県史料三五

其後、可啓案内候処、便宜不輒候て、無其儀候、一切
非等閑儀候、御同心候者、本望候、兼又姫岳事、近々
可落居候之間、目出候、

一先度当城へ敵さしよせ候時、御高名共承及候間、犬橋
方に物語候之処、事外ほうひ申候、我々までも祝著仕候、
一因幡・伯耆・出雲の御勢、廿四・五日比は、可下著候
間、いかにも、代をかたく御持候て、勝利を本二御沙
汰あるへく候、其に御料候事に候間、万御心安存候、
一当陣事、無指不審候間、不申候、
一波祢・河本、符中へまかりつき候間、可心安候、每
事期後信候、恐々謹言、

壬五月廿一日

弘忠 (花押)

田北殿 進之候、

○「大友家文書録」ニモ収録ス。(一)内八同書ニヨリ注ス。

一二六 大友家文書録綱文

○大友家文書録 大分県史料三一

六月九日親綱攻○姫嶽城、十一日城陥時、有○軍士着到、

一二七 姫岳着到人名

○大友家文書録 大分県史料三一

永享八六月九日

〔但大将分人持衆〕

袋新左衛門尉

袋左馬介

笠良木美濃守

下部助五郎

田口甲斐入道
山根六郎右衛門尉〔附脱〕

丹生九郎
木田村馬守

小原彦二郎

甬〔通〕太郎

葛木越後守

二宮若狭介

林三郎

豐饒彈正忠

江弥二郎

小原下野守

神山石見守

朽網伊豆守

田北將監

長賀〔一字〕○大学介〔附脱〕

田原右馬介

田口弥二郎

五部兵部丞

原尻左馬介

河原右馬亮

大和新右衛門〔附脱〕

衛藤大膳亮

田北佐渡守

有田勢三

右田七郎

廣川兵部丞

御手洗大膳亮

廣川新左衛門〔附脱〕

上津荒木図書介〔通〕

龍章土佐守

深栖三郎

都甲三郎

御手洗大膳亮

吉弘七郎

重吉太郎

朽網備後守

藤井長門守

藥師寺四郎三郎

今村次郎四郎

大塚出雲守

御手洗駿河入道

上尾孫三郎

立石民部丞

都甲加賀守

倉成六郎次郎

森下次郎左衛門〔附脱〕

志村三河守

渡部伊勢守

植田大炊介

倉成瀧若〔代〕

賀來次郎

田原備後守

木付右京亮

関肥前入道

神崎撰津守

賀嶋雅樂助

紀帶刀

原尻大和守

佐藤勘解由丞

天江三河守

富來八郎二郎

永松將監

吉弘孫三郎

大塚兵部丞

御手洗但馬守

上野三郎

上野藏人佐

吉弘丹後守

松岡山城守

首藤筑前入道

大和近江守

田原下総守

大津留二郎

津守筑前守

若林丹後守

伊美大和守

伊美六郎二郎

丹生彈正忠

生石宮内少輔

石垣三郎五郎

高山飛彈守

市川伯耆守

御手洗主殿丞

生石右京亮

吉岡上総守〔代〕

關石見守

中村三郎

御手洗伊豆守

大塚長門守

石垣紀伊守〔全〕

松武民部丞

幸野筑後守

立石主計丞〔全〕

都甲四郎次郎

船田但馬守

賀來六郎五郎

牧治部丞

竈門松徳丸〔代〕

怒留湯民部少輔

松武山城守

敷戸孫二郎

岩屋彦次郎

能一〔小〕次郎

御館弥七

木付大炊介〔通〕

原彈正忠

針八郎右衛門〔附脱〕

福田長門守

丹生大炊入道

田口主計丞〔全〕

宮野撰津守

高山九郎

榎木尾張守

井門民部丞

植田兵部丞

寒田八郎三郎

宇野十郎

佐保愛増〔代〕

蒲木主計允

南家新右衛門入道

小佐井土佐跡〔代〕

首藤伊豆守

岡新左衛門〔附脱〕

長小野丹後守

蒲木又五郎

若林彈正忠

關千代法師〔代〕

野田百房〔代〕

本庄千寿丸〔代〕

龜山將監入道

堀淡路守

立石龜徳丸〔代〕

俣見弥三郎

本庄宮鶴丸〔代〕

手負上野新左衛門〔附脱〕

上尾伊豆守

惠良大和守

正田淡路守

御手洗兵庫助

ひろたけ城衆

貴十右衛門〔附脱〕

利根民部丞

都甲治部丞

御手洗三郎

小串佐渡守

平井上野守

熊谷河内守

松本因幡守

下崎山城守

衛藤孫次郎

武宮大膳亮

荒卷越後守

津久見太郎

利根新右衛門〔附脱〕

臼杵又三郎

御手洗兵部丞

市川上総介

敷戸弥三郎

宇薄雅樂助

岐部山城守

富來毘沙松丸

高崎若狭介

高崎十郎右衛門〔附脱〕

藥師寺新五郎

賀嶋新右衛門尉

吉岡大和守

伊美孫二郎〔通〕

植田伯耆守

俣見肥前守

山田長門守

林鶴一代 伊賀上遠江守

葉師寺紀伊介 賀嶋越中守

葉師寺下野介 宇薄又二郎

伊賀上大和守

木付讚岐守 林美濃守

小田美作守 大津留一房丸

戸次高載 戸次孫二郎

死去人数 葉師寺石見守

本庄新右衛門（附脱） 久土智次郎

石田主計丞

高九郎三郎

（永享八年） 六月九日

一牧紙衆 板井彈正入道 たなへ宮僧代

津久見二郎代ちうけん一人

〔落居は十一日、是は九日着到也、中軍両所の人数は、

不付之〕

○（一）内ハ『増補訂正編年大友史料』一〇所収ニヨル。

一二九 室町將軍家御教書

○小早川家文書一 大日本古文書

姫岳事、攻落之由、大内修理大夫注進到来訖、弥可被抽

戦功之由、所被仰下也、仍執達如件、

永享八年七月五日 右京大夫（補用持之）（花押）

小早川又太郎殿

一三〇 足利義教御内書写

○小早川家文書二 大日本古文書

姫岳事、攻落之由、大内修理大夫注進到来、尤神妙、弥

可抽戦功也、

「永享八年」七月五日

竹原太郎四郎殿

（足利義教）（花押影）

姫岳事攻落之旨、大内修理大夫注進到来訖、弥可被抽戦

功之由、所被仰下也、仍執達如件、

永享八年七月五日 右京大夫（補用持之）（花押）

平賀尾張守殿

○『秋藩閩閩録』三二、案文ヲ収ム。

一三二 細川持之感状写

○小早川家文書一 大日本古文書

姫岳落去之次第、御注進之趣、則令披露候、殊粉骨之至、

尤以神妙之由、被仰出候、仍被下御内書候、御面目之至候、

自大内方、可注進候也、恐々謹言、

七月八日

竹原太郎四郎殿

（細川持之）（花押影）

一三四 大友親重感状

○長野虎八文書 増補訂正編年大友史料一〇

去廿三日、於安心院合戦之時、粉骨之由承喜入候、弥被

致忠節候者可然候、以面可賀申候、恐々謹言、

八月廿八日

長野宮内少輔殿

（大友親重）（花押）

一二八 看聞御記

○増補訂正編年大友史料一〇

永享八年六月廿五日、晴、住心院參、先日御祈參勲畏申、

抑聞、去十一日豊後国大友城責落、有返謀焼払云々、大

友五郎（亂整）・大内故新介子息被誅之由注進云々、公方御悦

喜、人々參賀、南御方被參、春日御共參、御太刀進、付

三条如例（以下略）、

一三一 室町將軍家御教書

○毛利家文書四 大日本古文書

姫岳之事、大内修理大夫注進到来訖、弥可被抽戦功之由、

所被仰下也、仍執達如件、

永享八年七月五日

毛利少輔次郎殿

右京大夫（補用持之）（花押）

一三三 室町將軍家御教書

○平賀家文書 大日本古文書

一三五 看聞御記

○統群書類從補遺四

〔永享九年正月〕
〔龜岳〕
廿三日、晴、九州落居之由注進、面々御劔進之由、三条

被告、仍御太刀進目出之由申、南御方御礼被參、源宰相三
条へ參尋、九州敵陣没落不知行之間、大内陣をはつして帰、
落居之由注進申云々、年始天下泰平殊珍重也、(以下略)

一三六 菊池為邦書状

○五条文書
熊本県史料中世四

度々注進令悦喜候、仍肥前〔前地為邦〕為安、津江向為用心出陣候、
不審時ハ、可被申談候、此刻一入被抽御忠節者、肝要候、
恐々謹言、
〔寛正六年〕
二月三日
為邦〔前地〕(花押)

五條殿

一三七 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三一

○頃間鎮西探題洪河教直叛義政、属大内政弘、筑前・筑
後・肥前・肥後・豊前州士多党之、於是政親率朽網左馬
頭〔守〕

繁成・片山氏・富来氏等〔秀房〕斷千騎、到豊前国、屯龍王、州
士城井右衛門佐・長野志岐守等〔行徳〕瓮中津陣糸原口、政親先
鋒撃破之、城井戦死、政親又遣其族立花兵部大輔、将筑
後国兵向教直白牛城、教直不及防〔能〕而逃、而赴肥後、菊池
十郎重朝〔為邦〕迎之、謀再拏、而懼政親武備、不得果、既
而教直依政親請降義政、宥政親執啓而許之、〔立花兵部大輔、左近將監〕

貞載後、而筑前州士
也、但未詳其名

一三八 大内家奉行人連署奉書案

○永弘文書
増補訂正編年大友史料一

〔彌重〕
「御奉書案文」

貴方事より最前令渡海被疵忠節候処、去年豊前中渡之時、
宇佐郡於鳥越合戦之時、太刀打高名之至候、殊被蒙庇候
条、誠神妙之至候、
御屋形様御下向之時、一段可申沙汰候、不可有如在無沙
汰旨弥可被致忠節候、恐々謹言、
〔文〕
三月十七日
永弘〔式部〕丞殿
弘護 在判

三月十七日

永弘〔式部〕丞殿

一三九 杉重隆書状写

○矢治道夫文書
増補訂正編年大友史料一

貴方事、自最前令渡海、被致忠節候所、今年豊前中渡之時、
宇佐郡鳥越合戦之時、太刀打高名之至〔二〕候、殊〔二〕被蒙疵
候条、誠〔二〕神妙之到〔二〕候、御屋形様御下向之時、一段可
申沙汰候、不〔可〕有如在無沙汰候、弥可被致忠節候、恐々
謹言、
〔文〕
三月十七日
重隆〔花押影〕
罷下候
矢治四郎左衛門尉殿

文明三

三月十七日

罷下候

矢治四郎左衛門尉殿

一四〇 志賀親家申状

○志賀文書
熊本県史料中世二

まんしゆ寺〔万〕より申され候条々、拜見
一なおりのかう〔直入〕両〔職〕しよくの事、
しゆつし〔定安〕おうあ〔松本合戦〕まつもとかつせんおんしやう
として給おき候、就中まつもとふ丸の事、同七年〔定安〕へと
ら年より〔永和〕ゑいわ四ねんむま〔志賀〕とし
の間ハ、けたいなくりや〔申候〕としてめしつか
候了、雖然、かうりやくくわん年〔申候〕つちのとのとし、
きむれの城をめされ候以後、けんたんしよくおハ、右
つ〔志賀〕そうろふ日向守氏房〔志賀〕わたくし
あつけおき候、それより両やく人として、
同前に人そくをめしつか候、
一おうゑい六年〔申候〕つちのとの大内義弘〔申候〕とき、ま
んしゆ寺より、りんかんそと申〔申候〕そう、きやう都ひきや
くとしてのほりて候、則御使をつけ候てくたり候、そ
のきよかん〔二〕、いつれ〔二〕ても候へ、庄主をのそ〔二〕候ハ、
寺家に被仰付可給由、上る候ける間、まつもと名をの
そ〔二〕申候程〔二〕、そのま、に庄主を給候、そのしふん直
入郷内寺家三ヶ所之事、一もん御めんと申うけ候之間、
甲候たんハ、すてに当郷御代くわんしよくの事、
三十ヶ年〔二〕およひさをいなく候、いつれのさい所ハめ
しはなされ候とゆう共、当郷りやうしよくの事、一所
けんめいの地にて候よし、あわの守なけき申候といゑ
とも、上聞〔二〕たつせす候、つかる田原筑前守むほんに
つゐて、彼内者山下又九郎・ミしろ〔三代〕のすわうと申物、
あそ〔志賀〕ミ野あくたう仁等をあいかたらい候て、し
ち名之内しやはたの城をとり、けんきやう仕候〔二〕、
いくほとなくちくせん〔志賀〕の守はつらく候、さ候間、寺り
やうさか田のむら地下人等、城しゆに同意仕候、以外
之子細〔二〕候、彼地下仁等、何もめしとりまいらせへき
よし、被仰出候といゑとも、あわの守申候段ハ、まつ

もと名の事、りんかんそ^二寺家せいはいの事、おほせつけられ候う^三ゑわ、かれら^二被仰付候する事、かんようたるへく候よしを、申あけられ候ほとに、そのとききこしめしわけられ候て、せんく^二のこことく上意をうけ候あひた、さか田の地下仁のこらすからめとり、ちうしんを申候の間、いづれおもさたをいたすへきよし、被仰出候之間、まんしゆ寺より一同^二なげき申候といゑとも、御せうみんなく、候^二よて、おのこてをうしなる、度々あわの守を一^二たのむよし申候之間、そのとき申こいゆるしおかれ候、いまにかれらかしそんある事に候、

一多いきよう十二年羽州上様御代より、又両しよくあいとも、せんきのことく成敗仕候、そのとき松本庄主けんようつうくわん時代より、りやうしよくふんとして、二人つ、めしつかる候ところに、嘉吉二年^三みつのへ年、親綱・羽州さま御両殿、小国よりくた^二ミ山の城^三御うち出候、当国の事いづれもてき地の事にて候、ことに入田・一万田御てきの事^二候之間、いつかたよりも人そくまいらす候ほとに、まつもと名のふ丸を、羽州さまへ^二民部大輔^三か所よりまいらせ候、それよりゆのいんた、かい河の御陣、くすつのむれの城らつきよ以後までも、めしつかい候しよう、つうくわん庄主之時、れんく^二高田上^三さまへわひ事申候間、民部大夫か所へ返給候間、いづれともめしつかふへきよし民部大夫申候^三、庄主しきり^二わひ事申候間、一人の事おハ返て候、自然重陣時者、二人とも^二めしつかふへきよし、さいさん申さため候了、同さか田の村・たけ田三分^二の事、これまたせんく^二のこことく、せつく^二したかい候て、いまにめしつかる候了、

一かい物の事、りやうやくふんとして、前々よりあきない

につけかわせ候へとも、御両殿御買物候之間、これさゑきよく^二ねんより、一度のふんハ申つけす候、一まつもと・さかた・たけ田三ヶ所^二、代くわんをさためおき候よし申され候、これ又くほう事候とき、さいそくのために、内者^二申付候、寺家りやうをまん所りやうふんとして、おんふに不仕候、直入郷内いづれもせんく^二あいかわり候て、不申付候、雖然、上意をうけ候するま、可致成敗候、以此旨御取合、預御披露候ハ、可目出候、恐惶謹言、

三月廿七日
親家(花押)

本庄伊賀守殿
久保大炊助殿
文明七年^三の申上候、

一四一 少貳政資書状案

○馬廻御判物帳
長崎県史料編一

去年十二月十八日、至佐賀郡進発候、已後所々合戦教ヶ度得勝利、敵数輩討捕候、本望候、然者神崎・三根郡・基肆・養父・上座郡、五六郡打明候、豊後日向申合、日田堺大山一陣取付候条、綾部敵城落居不可有幾程候、方々時節可然候、此時早々其方衆渡海候者、豊筑可達本望候、各被成憑入候外、無他候、恐々謹言、

宗中務少輔殿

一四二 田原氏歴代勳功次第注文

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二二

田原先祖大友中務大輔泰廣以来三代將軍^七至、忠節之趣、重書披見之分、少々注之、東寺合戦、打出浜合戦、西坂本合戦、西堂々口合戦、南都合戦、唐橋合戦、室町合戦、二条河原合戦、先懸云々、吉田発向、先懸之時、大田判官大夫親光一族二郎左衛門尉於分捕、宮方時、雄渡牟礼城、同高崎城、天、菊池武光^三対治対

明応四年乙卯八月
泰廣、以左近藏人卒、蓋、自家、追称其祖号而已

一四三 大友親治書状写

○田北一六文書
大分県史料二五

就鹿越城衆、年来辛勞之段、悦喜申候、然者就出陣、近々先陣可預馳走之由、承候といへ共、弥城番堅固之儀、憑入候、何様以面、可申承候、恐々謹言、

八月十一日
親治(花押影)

一四四 大友親治感状写

○田北一六文書
大分県史料二五

就鹿越^二辛勞之段、悦喜申候、然者就出陣、近々先陣可預馳走之由、承候といへ共、弥城番堅固之儀、憑入候、自是直、以賀状可申候、先以能々可被申聞事、肝要候、旁々辛勞之段、以賀使可申候、恐々謹言、

十一月十七日

田北

親治(花押影)

一四五 大友親治太刀等寄進狀案

○宮師文書
大分県史料九

奉寄進鉞之事(花押)

右、任先例、至小城并誘□出候之条、不可勝計□、益仰
祈念、然者太刀一腰・馬一疋、令敬進候、依□狀如
件、

明応七年戊辰八月十五日

備前守親治

賀来社
宮師

一四六 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三一

是宗心奔于防州、豊後土党之者也、

○七日親治使佐伯惟勝將兵攻拔門松城、郡土野上大和
守・帆足安芸守・岐部□太郎・野上新左衛門○馬場彦
四郎・古後與一等有

興敗走而帰国也、此時野上大和守・森伊勢□□足
安芸守等、被疵有功、親治作書屢勞之、

一四七 大友親治感狀

○波津久文書
大分県史料一三

去七日門松城合戦、雖為無足、以清田右馬頭一味之辻、
碎手被疵候、高名無比類候、弥被励粉骨候者、肝要候、
辛勞之通以面可賀申候、恐々謹言、

八月十三日

波津久新九郎殿

親治(花押)

一四八 大友親治書狀

○奥岳文書
大分県史料一三

去番於高山辛勞之儀、于今無忘却候、自然之時者、弥被
副意候者、可悦入候、何様以面可申候、恐々謹言、

十月十九日

工藤弾正忠殿

親治(花押)

一四九 大友親治感狀

○佐土原文書
大分県史料一三

去十六、佐田古城攻之時、辛勞感悦候、弥々憑入候、必
以面可賀申候、恐々謹言、

十一月十八日

佐土原兵庫助殿

親治(花押)

一五〇 大内義興感狀案

○末武与五郎文書
萩藩閩閩録二

法泉寺殿御上洛之路次、於撰津国河辺郡難波水堂、応仁
元年八月十日合戦之時、舍兄大夫三郎弘春討死畢、同御
在京留守文明三年正月一日、於長門国阿武郡地福郷合戦
之時、親父左衛門大夫氏久・舍兄孫三郎延忠・同弥五郎
幸氏兩三人、於一所討死畢、就中為日田郡・玖珠郡敵討
治差遣処、去年十一月七日、於玖珠青内山合戦之時、太
刀討高名、殊数ヶ所被疵太刀疵刀疵、郎從金田三郎五郎落
合加防戦之力、扶身命云々、家人僕従等同被疵之条、神
妙旁以勲功感悦無極之条、如件、

明応八年正月廿五日

末武左衛門大夫殿

判

一五一 大内高弘書狀案

○村上左衛門文書
萩藩閩閩録三

今度与風至佐賀関金連寺着津候之間令申候、仍先狀如令
申候、爰元弓矢之儀近々事候、各至豊前国出張候、大友
備前守同發足一兩日申候、然者此度被相談、警固事可預
馳走候、併憑存候之趣、委曲金連寺令申候、恐々謹言、

三月廿四日

村上備中守殿

高弘判

一五二 大友親治書狀案

○大友家文書録
大分県史料三一

門松敵討治候者、則時致彼手仕度存候、我等事者、無
余儀相存候、雖然被調衆儀、急度承、浦辺衆動

〔佐伯惟勝昨日世〕着府候、其〔 〕之可申談候、其外諸勢、

時者、〔 〕一々可被申定候、五日以前可申越之由、

浦辺衆〔 〕大聖院渡海、大内立山口候、一定候、船衆姫

嶋を根〔 〕持候て、浦辺を專に可動之由、注進候、其面我

等可〔 〕子細候共、於普代侍者、抛万事、可忠節折節候之

〔 〕忠節候条、於家不可有忌却候、此由、先〔 〕被

申聞候、自是態以使、別而可賀申候、恐々謹言、

八月一日〔明治八年〕 野上大和守殿〔有義〕

○〔一〕内ハ『増補訂正編年大友史料』二三所収ニヨリ註ス。

一五二 三田井長武書状

○奥岳文書
増補訂正編年大友史料一四

未細々不申通候、然者親にて候者、者斐大和守依調法、

一味候、外聞実儀無曲候、雖然、当家之事者、代々豊州

一味申談候間、其旨存、我等か事馳分、当国を憑存候、

仍其方之事、於嶽口御座候事候間、自然不審之者、罷通

候する事、頼存候、殊先年親にて候者、少給地一所遣候哉、

其後違変候由承候、其趣定而年行共可申候、猶々其方之

時宜、被副御心候由、可為祝著候、恐々謹言、

十二月廿五日 長武〔花押〕〔三田井大徳〕

工藤弾正忠殿 同主殿 助殿進之候、

一五四 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三一

頃年——三月二十三日州守江沖合戦、幸野右京亮有功、

四月大津留兵庫助攻田原親房雄度牟礼城、有戦功、七月

二十四日豊前国仲津沓緒崎合戦、葛木藤右衛門尉力戦、

被創、十一月十六日州佐田古城合戦、田北六郎〔未詳親幸〕

○得野上清〔カ〕首、幸野右京亮亦從因幡守〔我軍將、蓋、有戦〕

功、共有親治感書〔幸野・大津留・葛木・田北共親治家臣、蓋未詳其年及軍事〕

○聚録候 再考耳、

一五五 大友親治感状

○大津留連文書
大分県史料二五

今度就用原二郎親房成敗、至雄度牟礼城攻口、被碎手候、

粉骨無比類候、殊無足馳走、追而一段可賀申候、恐々謹言、

卯月四日 大津留兵庫助殿 親治〔花押〕〔天友〕

○「大友家文書録」〔大分県史料三一〕二七取ム。

一五六 大友親治知行預ケ状案

○富来文書
大分県史料一〇

就両家執逢之儀、近年軍忠不及申候、殊田原次郎謀叛之

刻、楯籠雄度牟礼城、被抽忠節之条、輒遂成敗候、感悦候、

仍為賀賞、来浦六拾町分之事、預置候、可有知行候、恐々

謹言、 六月八日 富来彦三郎殿 親治在判〔天友〕

一五七 大内義興感状案

○浦田書文書
萩藩閩閩録一

去月廿三日於豊前国小高岳城籠、凶徒大友勢、同少式勢

当日悉追討合戦之時、太刀討被鎧疵〔頸〕并郎從手嶋隼人佐

被鎧疵〔口肩〕、林太郎左衛門尉鎧疵〔脇〕、僕從二人鎧疵之由

杉小次郎興宣注進之旨、尤神妙感悦之至也、弥可抽戦功

之状如件、 文龜元年八月十三日 大内義興判

乃美備前守殿

一五八 大内義興下文案

○末武与五郎文書
萩藩閩閩録二

義興判

下 末武左衛門大夫長安、

可令早領。長門国阿武郡椿郷内賀川津五石〔野田孫右衛門豊〕

前国上毛郡酒丸拾五石地〔森下右衛門次等事〕

右以人、所充行也者、早守先例、可令領知状如件、爰件

地事、去明応七年十一月七日、於豊後国玖珠郡青内山合

戦之時、味方無利而、右田右馬助弘量〔于時当陣〕討死之刻、

一所進出、太刀始数箇所被疵、已身命危急之処、即徒僕

從等落合扶佐之、万死一生之勳功、不可勝計之故、所

令忠賞之状、如斯矣、 文龜式年五月廿三日

一五九 中尾道厚書状

○古庄文書
増補訂正編年大友史料一七

藍原三町分、妙見尾御城事、前々不被勤之由承候、先真
分申談候、然者以後不可相違、恐々謹言、
文龜式年八月十日

中尾源兵衛尉
道厚(花押)

古庄右馬殿

一六〇 佐田泰景軍忠状

○佐田文書
熊本県史料中世二

「一見了(大内義興)(花押)」

軍忠

佐田次郎泰景

一 去明忠七年十月十二日、豊後勢至佐田庄令乱入之間、
執構菩提寺、彈正忠俊景一所捕籠之處、同五日敵寄陣
於追上、則当所^{菩提寺}相懸之条、碎手討捕頭^二進上之、
敵毎日雖手仕、從二日至八日支置大勢、待申御合力畢、
九日晚^晚加飯田但馬守宅所、翌日^十於彼構一來口、終日
矢師仕、被官等數輩被疵、粉骨之次第、重清人数存知^矣、
同十三日御人体著郡以後、飯田山^(宇佐郡)・佐田山所々御陣等
泰景馳走之段、御前勢御面々衆存知上者、不及注申歟、
一 明忠八年七月廿五日、令渡每、於所々馳走刻、至下毛
郡寒田、被官人討捕頭一、弘固陣所送進之、同十月上旬、
宇佐郡院内衆同心仕、致誘妙見尾^(宇佐郡)、致在城之處、豊後
一 国勢令出張之、劔山^仁陣取、城内計策状遣之間、被
書状飛脚共重清・武道^江則令注進畢、然而敵之猛勢寄
陣於茂峯、從方々雖責上、味方稠防戰之条、引退詰口、
於本陣^{劔山}為当城手当、戸次・田原衆・木付・大神以
下者共残置、諸勢者西郡打通、国中手仕以後、又当城

詰寄之間、安心院・飯田申合、一旦遠慮之儀、以仲山
左馬允具言上畢、

一 依彼思案豊後罷越事、誠無念至也、然者非野心緩怠之
段、自豊後以雜掌言上仕、挾婦參之大望於心中、偏輕
身命、明忠九年正月七日夜、豊後勢家旅宿忍於陵山野
江河、十日夜半、菩提寺罷著迄、書夜不受食物、同十
八日、漸著関之中間、一身辛勞、宜有 御高察耶、

一文龜元年正月五日当群衆渡海之儀、任御奉書之旨申調、
十三日各乘船、為名代同名左衛門大夫^仁相副人数、到
中津河著岸之、廿九日、妙見尾伐取時、我世者質來神
兵衛尉太刀討、群衆所被存知也、

一 右之渡海御前勢無人数之通注進之時、重而神代紀伊守
方被相催之条、奉景事、正月廿九日中津河罷渡、船衆
申合、二月九日至城井城涯分馳走焉、

一 同年七月廿三日馬岳合戰時者、依為重清一所、後陣笠
松在陣仕相動畢、然而中陣可馳向之由蒙仰之間、不移
時日罷越之處、著郡以前敵敗北之、乍去於所々数人討
留畢、

右条々、粉骨之次代、達 上聞、御感御書參通并御奉書
数通頂戴仕畢、同以此一卷^仁申請御証判、備後胤龜鏡、
弥為抽忠勤、粗注進如件、

永正式年七月 日

進上 御奉行所

○裏二花押アリ。

一六一 大友義長感状

○領田義史野上文書
増補訂正編年大友史料一四

就筑後国对治之義、為無足、從最前、於津江日夜辛勞、

悦喜候、必追而、一段可賀申候、恐々謹言、
十月廿二日
野上新左衛門尉殿
義長(花押)

一六一 建是書状案

○水弘文書
大分県史料五

一 猶々愚意之趣、誠可為御繁多候、以御用捨、言上奉頼
候、委曲重置可申入候、

就御主殿^上葺之儀、預御札候、具令拜見候、拘申候神領、
御代々御免許之証文、治景^{備後}へ披見申候て、任長方返書、
以知人衆、遂 上聞候、就夫、於 八幡宮神前、御立願
之儀、御免許以御分別、被仰付之由、被成 御書候之条、
度々御奉書之請文^二、役所為雖令申候、不被成御分別之
由、候之間、以參古庄治重、三間御庁勤役之節、御免被申、
殿勤被作候、任請取状、鳥目五十疋、長方へ渡進候之處、
被指返候、可有如何候哉由、可申上様^三、折節示預候、
御立願御定香、年内十二月十三日、以吉日良辰勤初候、
神領御免許者、自余之衆^二雖相似難候、今一往被遂 御
上聞、如今書 御主殿作、御城誘可勤申之由、頻被 仰
出候者、神慮雖難測候、不可有無沙汰候、拘申候御神領
十二町四十貫分候、御上葺被明置之由、承候間、申事候、
為御存知候、猶自是可申述候条、省略候、恐々、
五月廿五日 建是

首藤二郎左衛門尉殿

竹田津六郎左衛門尉殿まゐる 御報

一六三 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三二

〔永正十四年〕
〔行補野通〕
殘党出於州玖珠郡、於是親安遣小原〔四郎左衛門尉右〕門尉右並討之、野上長資・中村兵部少輔〔軍事時、長資遣其男孫太郎於府内、○彰義志、〕夜戦党一於高勝寺、中嶋清通被創○二十一日戰於松〔木村退之中村〕於

一六四 大友親安感状

○中村文書
大分県史料二五

去廿六、於玖珠郡松木遂合戦、勝利之次第、各被碎手故候、殊内者一人、被疵之由候、忠節之至候、必取静一段可嘉申候、恐々謹言、
〔永正十四年〕
二月廿八日
親安〔花押〕
中村兵部少輔殿

一六五 大友親安感状

○首藤文書
大分県史料一三三

去廿六、於玖珠郡松木合戦、勝利之次第、併碎手被疵候故候、軍忠無比類候、必取静一段可賀申候、恐々謹言、
〔永正十四年〕
二月廿八日
親安〔花押〕
首藤清右衛門尉殿

一六六 大友親安感状案

○福岡藩仰古秘笈惠良盛村家伝
福岡県史料四二五

去廿六、玖珠郡於松木遂合戦、勝利の次第、被抽粉骨〔被候カ〕感悦之至候、取静一段賀申候、恐々謹言、
〔永正十四年〕
二月廿八日
親安 判
惠良藤右衛門丞殿
○写シ厳密ナラザル所アリ。

一六七 大友親安感状

○能一文書
増補訂正編年大友史料一四

去廿六、於玖珠郡松木殘党懸合、遂合戦被疵、同郎等一人手負、分捕高名無比類候、此時敗北之凶徒、永代対治覚悟憑入候、猶軍忠追而一段可賀申候、恐々謹言、
〔永正十四年〕
二月廿九日
親安〔花押〕
能一七郎殿

一六八 大友親安感状

○碩田叢史野上文書
増補訂正編年大友史料一四

去廿六、於松木表合戦被碎手、敵六人打捕候、誠忠儀無比類候、弥敗北之者、可被遂退治覚悟憑入候、必追而可賀申候、恐々謹言、
〔永正十四年〕
二月廿九日
親安〔花押〕
野上対馬守殿

一六九 大友親安感状

○財津永延蔵野上文書
西園武士団関係史料集八

去廿六、於松木表合戦、被碎手、敵六人打捕候、誠忠儀無比類候、弥敗北之者、可被遂退治覚悟、憑入候、必追而可賀申候、恐々謹言、
〔永正十四年〕
二月廿九日
親安〔花押〕
野上対馬守殿
○「碩田叢史所収野上文書」ニモ写ヲ収ム。

一七〇 大友親安感状案

○後藤弥兵衛文書
増補訂正編年大友史料一四

去廿六、於玖珠郡松木、殘党掛合、遂合戦分捕、同郎等一人手負候、誠高名無比類候、此時敗北之凶徒、永代対治覚悟憑入候、猶軍忠追而一段可賀申候、恐々謹言、
〔永正十四年〕
二月廿九日
親安 在判
後藤新兵衛尉殿

一七一 大友親安感状案

○大友家文書録
大分県史料三四

去廿六、於玖珠郡松木、殘党掛合、遂合戦分捕、同郎等一人手負候、誠高名無比類候、此時敗北之凶徒、永代対治覚悟、憑入候、猶軍忠、追而一段可賀申候、恐々謹言、
〔永正十四年〕
二月廿九日
親安 御在判
後藤新兵衛尉殿

一七二 野上長資書狀案

○大友家文書錄
大分県史料三一

去^{廿六}、於珍珠郡松木殘党^(マ)部少輔^(マ) 此外
無足親類共雖多々候、先以無余^(マ)衆、以着到申
上候、彼者共御扶持候様、^(野上)頼候、^(野上)長資 在判

小原殿^(石連)

参

○日付ヲ欠ク。『増補訂正編年大友史料』一四二ヨリ補フ。

一七五 大友親安感状案

○大友家文書錄
大分県史料三二

去^{十六}夜、於高勝寺^(高勝寺)、被官者共被疵、^(野上)日 親安 在判
野上左馬助殿^(親資)

一七六 大友義長感状写

○右田文書
熊本県史料中世四

從今度最前、小原四郎左衛門尉^(親忠)以同陣、辛勞之段承候、
就中去月^{廿六}於松木表合戦、被疵粉骨之至感悦候、必追
而一段可賀申候、仍為疵養性、帰宅候歟、可然候、何様
以面可申候、恐々謹言、
三月二日^(永正十四年)

右田左京亮殿

義長^(天友)
(花押影)

一七八 大友親敦感状写

○右田文書
熊本県史料中世四

於今度高崎城攻口、被疵辛勞之段、無比類候、弥々忠節
頼存候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、
十二月廿九日^(永正十五年)
右田左京亮殿
親敦^(天友)
[義鑑之事]
(花押影)

一七九 大友親敦感状

○首藤文書
大分県史料一三

於今度高崎攻口、毎日防戦辛勞肝心候、弥戦功頼入候、
必軍忠追而一段可賀候、恐々謹言、
正月十九日^(永正十六年)
首藤清右衛門尉殿
親敦^(天友)
(花押)

一七三 大友親安感状

○佐田文書
増補訂正編年大友史料一四

今度至堺目現形之殘党、遂退治候刻、敗北之凶徒、於大
副村^(宇佐郡)數十人被討捕頸注文到来候、喜悦之至候、弥被添御
心、國中隱住之牢人、堅固可預成敗之事憑存候、委細猶
年寄共可申候、恐々謹言、
二月廿九日^(永正十四年)

佐田大膳亮殿^(家世)

親安^(天友)
(花押)

一七七 大友親安感状写

○右田文書
熊本県史料中世四

就殘党対治、小原四郎左衛門尉^(親忠)指遣候処、自最前以同陣
辛勞之段承候、就中去月^{廿六}於松木表合戦、被疵粉骨之
至誠感悦候、必追而一段可賀申候、仍為疵養性^(マ)帰宅候歟、
可然候、何様以面可申候、恐々謹言、
三月二日^(永正十四年)

右田右京亮殿

親安^(天友)
[義鑑之事]
(花押影)

一七四 大友親安書狀案

○大友家文書錄
増補訂正編年大友史料一四

至堺目殘党等可現形之由、預註進候、^(マ)誠令悦
喜候、確雖不可有指儀候、自身以^(出張可加)退治候、一段
可被添心事、祝着候、併憑、

○後欠ナリ

一八〇 大友親敦感状

○中村文書
大分県史料二五

今度高崎城於攻口、中間一人被疵、忠儀無比類候、必追
而一段可賀申候、恐々謹言、
正月廿五日^(永正十六年)
中村兵部少輔殿
親敦^(天友)
(花押)

一八一 大友親敦感状写

○河野正文書
大分県文化財調査報告書三七

去^{〔大分都〕}廿六於高崎攻、御被官数人被疵条、忠儀肝心候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、

正月廿七日

親敦 (花押影)

渡辺紀伊守殿

○渡辺敏喜代文書『大分県文化財調査報告書』三七二モ同文ノ文書アリ。

一八二 大友親敦感状写

○右田文書
熊本県史料中世四

去^{〔大分都〕}廿六於高崎城攻口、被官被疵之条、忠儀感悦候、必追而可賀申候、恐々謹言、

正月廿八日

親敦 (花押影)

右田三川守殿

一八三 大友親敦書状

○佐田文書
熊本県史料中世一

就今度高崎之儀、為御合力、神代武綱同前之御馳走、祝著候、此等之趣為可申、田北勘解由允進之候、恐々謹言、

二月六日

親敦 (花押)

佐田因幡守殿

一八四 招然書状

○永弘文書
増補訂正編年大友史料一五

今度弓矢如此被成候、乍案中候哉、親満身退不使申計候哉、拙者事在城以來毎々請上意候子細候へ共、此砌ま

て在城候処、彼身退永代御赦免有間敷由候条、上意與申、順次之儀候間、帰参仕候、以先目出度候、多年御芳志之辻、向後不可有忘脚候、縦間之儀候共、細々得御意可申承事、可為本望候、仍足弱事、以先、堺目まで召

越度候、爰元未不如意候間、迎馬不遣候儘、被仰付送給候者、可畏入候、定留守より可令申候、可得御意候、恐惶謹言、

二月六日

招然 (花押)

番長大夫殿

御宿所

一八五 大友親敦感状

○財津永延藏野上文書
西国武士団関係史料集八

今度於高崎攻口、毎日手仕、辛勞之至候、殊無足軍忠感心候、必追而、一段賀可申候、恐々謹言、

二月七日

親敦 (花押)

野上対馬守殿

○『碩田叢史所取野上文書』ニモ写ヲ収ム。朽網親満ノ叛ニ係ル。

一八六 大友親敦感状

○薬師寺文書
大分県史料二二

就今度高崎城楯籠朽網以下之凶徒成敗、遂在陣、日々防戦、軍勞感悦候、何様追而可賀申候、恐々謹言、

二月廿八日

親敦 (花押)

薬師寺中務少輔殿

二月廿九日うとのてかいニ、めてのひさをいさせ候、

一八七 大友親敦感状

○若林文書
大分県史料三五

就今度高崎城楯籠朽網以下凶徒成敗、遂在陣、日々防戦被疵之条、粉骨無比類候、何様追而賀可申候、恐々謹言、

二月廿八日

親敦 (花押)

若林大炊助殿

一八八 宇佐宮作事方条々御法度掟書案

○小山田文書
増補訂正編年大友史料一五

大永二年三月御作事方御法度書 廿三番

就宇佐宮御作事方、条々御法度事

- 一去応、永年中 国清寺殿様御再興の時の支証をもて可被守之、其以前の旧記不可有叙用事、
- 一諸祝物等国並錢を以、員数にをひてハ先儀のこと可下行事、
- 一惣奉行人木屋并遣方奉行人不断在宮事、
- 一諸職人出入朝夕、一時之遲速を拾錢あて減少せしめ、可下行事、
- 一大々工事、右剋限以前至木屋日参せしめ、奉行人相共番匠方可裁判事、
- 一番匠衆或下手或年寄等、不堪の仁にをひてハ、半作料たるべき事、
- 一惣大工材木注文寸尺等、每度相違之条、云社納云木作手間、御公損なきに非ず、至以後ハ、その用木参差せしめハ、大工可弁事、
- 一内封四郷封戸、向野、普請夫定役在之、この外社官衆領

事、先年妙見尾御城誘おほせ付らる、時、彼儀御免^二をひて、社用夫事可致馳走之由、雖被申、いまに社用をも無沙汰候、於已後者、郡使裁判に任て、可被遂其節、若猶其実なきにをひて、別段之儀を可被仰付事、

一 木屋定夫四人封戸、向野高家、幸嶋并竹くき、かく繩、茶立、同茶の具等事、当職名代を以、可被遂其節、此条依無沙汰、当日作事懈怠せしめ、当職自分之可為了簡事、

一 宇佐郡中武領就社用之入夫以下、在々所々無沙汰^二をひて、一段可被仰付、殊院内衆御在京御留守以來、御 神用延夫難洪之段、無其謂、既障子岡御城所勤の所を、近年、社用に被付之上、向後社用夫堅可申付也、若猶難洪にをひて、如元御城誘可被仰付事、

一 漆工事、道具以下相調、本職相談せしめ、可有其沙汰事、一 絵師并障子以下細工人等、奉行人申談、可有調法事、一 当 社御材木事、不謂寺社人給御免之地、任先例採用有へし、難洪在所にをひて、就注進一段被仰付へし、但社用と号、自用の事あらは、奉行人各越度たるへき事、

一 日々記事、奉行兩人充被定下番帳の旨に任て、注進可注進也、材木採用之時者、非番衆至杣山可奉行事、

以上
右御法度、条々堅固致相定訖、守此旨、云社家云武家、可專造營之功、若於違背之仁者、就注進一途可被成御下知之由、所仰如件、

大永二年三月 日 左衛門尉

一八九 大友親敦感状

○田北一六文書
大分県史料二五

至鹿越登城之由、承候、尤肝要候、此時以堅固之儀、忠節併憑存候、事々、必以而賀可申候、恐々謹言、
十一月十二日 親敦(大友) (花押)
鹿越城衆各中

○別二写一通アリ。

一九〇 大友親敦感状

○田北一六文書
大分県史料二五

就今度落人現形、至鹿越在城、忠儀之至候、必追而賀可申候、恐々謹言、
正月廿一日 親敦(大友) (花押)
田北左京進殿

一九一 大友親敦感状

○佐土原文書
大分県史料一三

去月廿七、於瀬田尾攻口被摧手、自身・同小者、被疵之由候、忠儀感悦候、弥軍忠肝要候、必追而可賀申候、恐々謹言、
七月六日 親敦(大友) (花押)
佐土原右京亮殿

一九二 大友親敦感状

○文化庁蔵若林文書
大分県史料三五

去月廿七於瀬田尾攻口、被碎手、小者被疵之由候、忠儀感悦候、弥軍忠肝要候、心追而可賀申候、恐々謹言、
七月六日 親敦(大友) (花押)
若林掃部助殿

一九三 大友親敦感状

○財津孝之文書
熊本市清水町打越

去月廿七、於瀬田尾攻口、被碎手、数ヶ所被疵之由候、感悦候、心追而賀申候、恐々謹言、
七月七日 親敦(大友) (花押)
野上中務丞殿

一九四 大友義鑿感状

○久保文書
大分県史料一三

佐伯惟治成敗之刻、於彼城攻口、被疵忠節感悦候、心追而一段、可賀申候、恐々謹言、
十一月十三日 義鑿(大友) (花押)
久保中務丞殿

一九五 大友義鑿書状

○工藤文書
大分県史料二一

佐伯惟治(處)敗之刻、早速到(處)城切所、被詰寄之由候、軍旁令察候、弥各申合、粉骨肝要候、猶平井和泉守可申候、恐々謹言、

(天永七年十一月十六日) 義鹽 (花押)

山香郷諸給人中

一九六 大友家文書録綱文

○大友家文書録 大分県史料三二

(天永七年十一月二十五日) 義鑑家臣○薩摩守佐伯惟治、伏修魔法、行跡狂戾而謀叛、義鑑命○近江守白兵攻惟治、梅牟礼城在豊後国海邊郡佐伯、惟治戰士新名氏・浜子氏、殺惟治、鶴丸自尽於佐伯堅田、於主紀伊守佐伯惟常嗣彼旧領、方義長時、佐惟信、惟信勝弟曰、惟常、義長以惟勝為惟信嗣、授惟常、惟勝死、其子惟治嗣而至于此、惟常乃惟治死而後、家上其靈魂造宮、日所六社、佐伯所々十社各義鑑授鑿字於家臣志賀九郎○日名志賀

一九七 大友家文書録綱文

○大友家文書録 大分県史料三二

日田家督有六郎親將者、親綱之玄孫、而家族也、氏郡中困窮、郡士訴之義鑑、義鑑命猶之謀郡士重訴、義鑑怒命諸士殺平嶋、親將避于豊前国草木庄、於此義本伯耆守鑑次・財津長門守鑑永・羽野遠、越前守鑑智・石松肥前守廉正・高瀬山城、且加世戸口大隅守永益・佐藤山城、以置郡中、国人称之日田八人、此事不佞年、鑑授老臣、將避于豊前日宝珠山氏預其、其書乎併舒備再考、士佐藤冰信家故及于此乎、

一九八 大友義長条々事書写

○大友家文書 大分県史料二六

条々

- 一 寺社造営無油断可被申付事
- 一 親不可有疎儀事
- 一 祖父・祖母被添心可有奉公、殊當時御知行御領地等、御在世之間不可有相違事
- 一 可被守公儀之拵之事
- 一 兄弟可孚事
- 一 一年寄衆常在宅不可然、至式日者、無懈怠可有相談事付、以四以前出頭、七以後可有帰宿事
- 一 寄有之聞次、以一人披露之時者、可相似負最偏頗、覚悟之儀可被申事
- 一 從昔傍輩近付法度之事、是又用心之氣仕歟之事
- 一 一姓親類与力曲衷也、於理非分別之沙汰者、一姓他姓之合力不可入事
- 一 奉公之淺深、忠節之遠近、不可有忘却事
- 一 若輩之樂事、不可有許容事
- 一 内訴之儀、縱雖為理運之子細、不可有許容事
- 一 隱謀野心之外者、常式之儀、不可没収所帶之事
- 一 以哀憐諸人可召仕事
- 一 進物之類、無油断可被求事
- 一 諸郷庄以目付・耳聞、可知時宜事
- 一 当国者一人二人充、至筑後可有在国事
- 一 他国の方、当国滞留之時者、不依大小、不可疎意事
- 一 朔・十五日对面之事、若近郷之者出仕、於無沙汰者、可被注交名事
- 一 諸芸者騒得事、捨不叶、是不可然事
- 一 弓馬之道者不及申、文学・歌道・蹴鞠以下閣之、專狩鷹野甚以無益之事也、以狩被知名事可稀事也、但狩之趣、鷹之拵、何可有相伝儀者肝要之事
- 一 召仕者諸事教訓肝要也、引立入目押出可召仕事
- 一 向後誓談可停止之事
- 一 諸人重縁不可成續事
- 一 於当家無先例役者、不可定事
- 一 至他家申遣子細、為内儀不可有沙汰事
- 一 諸沙汰雜務等、雖為老中、一人之披露不可然、殊以内儀落着不可有之事
- 一 加判衆申次可相加時者、能々以思惟申出、年寄申於同心者、可為落着之処、自然為見処申拵仁雖有之、不可及許容事
- 一 諸侍緩急之時、然々以糺明可加下知之処、万一為一人之儀雖有申旨、曾不可有同心事
- 一 不儀頭然之族、退国之上者、永不可有赦免、況以内々申通儀、聊不可有之事
- 一 自筆状卒爾不可認之、其余右筆之外不可用之事
- 一 為無忠節奉公、於京都大訴可停止事
- 一 他家客人参会者可然也、傍輩中参会停止之事
- 一 一年寄中之外、不可有奉書儀事
- 一 一女中万出仕可停止事
- 一 止所々城誘、家居結構不可然事
- 一 雜談可嗜之事
- 一 聊爾不可夜行事
- 一 為隱居公儀拵不可然事
- 一 右旨趣、聊不可有相違者也、

享祿第三 十二月六日

一九九 大友家文書録綱文

○大友家文書録
增補訂正編年大友史料一六

天文元七月、以享祿五年、改元、年壬辰八月、先是、豊前州〔正敷表〕鑑、
応大内義隆、〔宇佐郡〕擡州妙見岳城、豊後玖珠郡士惠良四郎左衛
門尉盛種等、党之在其城

二〇〇 杉興重奉書

○佐田文書
增補訂正編年大友史料一六

去五日注進状、同九日〔午時〕到来、具令披見候、仍豊後衆
与令防戦、〔佐田重重〕同名隱岐守僕從三人討死、其外手負注文、粉
骨之次第、被成、御心得候、且者、軍忠状可被遣候へ共、
爰元余御繁多候間、重而御感之通可被仰出候、朝景事則
〔御見新敷〕登城之由候、尤可然候、尚々城之儀無由断馳走肝要之由
可申旨被仰出候、恐々謹言、

十月九日

〔杉興重〕
興重(花押)

佐田大膳亮殿

二〇一 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三二

○一月、義鑑使斎藤兵部少輔長実等諸士、向豊前路、陳
白桃〔未詳其所〕、按敵兵来襲、豊前土宝珠山主〔志〕助〔彦山守〕防戦、
而創被官一人○十四日我兵困見岳城、木付左馬助氏貞、
植田宮内丞惟満〔初名和親宣〕、上野
兵部少輔〔泉守〕親宣、上野
神兵衛尉、〔太郎〕徳九四郎三郎等負創平井親〔實推満〕、
神九郎等被官負創、中嶋内蔵助清〔實推満〕、

森新左衛門尉祐貞、野上藤七・丹〔平兵衛尉〕其余数輩有戦功、
攻守踰歳義鑑〔作感書〕、勞其軍功書、山下長就等寄〔書〕植田惟実書〔宝授〕
珠山・丹生氏
書在于明年

二〇二 大内義隆軍勢催促状

○佐田文書
增補訂正編年大友史料一六

近日無音之条、染筆候、妙見岳事万事可懸意之条肝要候、
自然於敵襲来者、頓令発向可被励戦功候、猶貫越中守可
申候、謹言

十一月一日

〔大内〕
義隆(花押)

宇佐郡面々中

二〇三 大友義鑿感状

○三代文書
大分県史料一〇

先月晦日、於豊前国妙見岳攻口、終日防戦、殊被数ヶ
所由候、忠儀感悦候、必追而一段、可賀申候、恐々謹言、
十一月二日

〔大友〕
義鑿(花押)

三代九郎殿

二〇四 大友義鑿感状

○大友家文書録
增補訂正編年大友史料一六

先月晦日於豊前国妙見岳攻口、終日防戦粉骨、殊被疵之
由候、忠儀無比類候、何様追而一段可賀申候、恐々謹言、
十一月二日

〔大友〕
義鑿(花押)

田尻右衛門尉殿

二〇五 大友義鑿感状

○曾根崎文書
增補訂正編年大友史料一六

先月晦日於豊前国妙見岳攻口、終日防戦粉骨、殊被疵之
由候、忠儀感悦候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、
十一月三日

〔大友〕
義鑿(花押)

曾根崎助三郎殿

二〇六 吉岡長増奉書案

○永弘文書
增補訂正編年大友史料一六

就御陳夫之儀示預候之趣、具令披露候之処、御社領分
事、任前々旨被成、御宥免之由被仰出候条、珍重候、然
者御国家倍可被励御安全之御丹誠事、肝要候、猶期来喜
省略候、恐々謹言、
十一月八日

〔高崎左衛門大夫〕
長増

宇佐宮
田染擬大宮司殿

二〇七 弥富代山副信次軍忠状案

○弥富文書
增補訂正編年大友史料一六

去十四日至豊前国宇佐郡妙見岳御城、大友勢取懸防戦之
時、被疵人数注文、
僕從左衛門五郎〔左足〕 同太郎五郎〔矢疵〕
十一月十三日 弥富代山副五郎左衛門信次 判

村上三郎右衛門尉殿

同一河内宮内丞

神三分捕之

杉因幡入□殿

二〇八 佐田朝景感状

○佐田文書
增補訂正編年大友史料一六

於当城攻口、矢疵三ヶ所健存知候、度々高名忠節之至、無比類候、弥可抽忠懃之状、如件、

天文元年十一月十四日 朝景(花押)

二〇九 佐田朝景合戦頸注文

○佐田文書
增補訂正編年大友史料一六

「一見了(大内義隆)(花押)」

去十四日、至豊前国宇佐郡妙見岳御城、大友勢取懸防戦之時、太刀討分捕、并被疵人数注文

頸一吉岡彦三郎(佐田) 同名平五郎分捕之

同一吉岡九郎(佐田) 同名外記進分捕之

同一岐部木工允 賀来善三郎分捕之

同一名字不知 同 人分捕之

同一吉岡善左衛門 賀来右衛門尉分捕之

同一名字不知 同 人分捕之

同一吉弘 永松神六分捕之

同一名字不知 七郎衛門分捕之

同一吉弘宮内丞 清衛門分捕之

同一名字不知 藤八分捕之

同一名字不知 藤右衛門分捕之

同一矢野与三左衛門尉 源兵衛分捕之

同一岐部右京進 孫左衛門分捕之

同名右馬充(佐田) 矢疵二ヶ所 頸右ノ股

同名外記進(佐田) 矢疵右ノ肘

賀来民部丞(佐田) 矢疵右ノ足

永松主殿允(佐田) 矢疵二ヶ所 右ノ脛

賀来亮次郎(佐田) 矢疵二ヶ所 左ノ股右ノ肘

賀来次郎三郎(佐田) 矢疵二ヶ所 左ノ膝右ノ肘

永松神六(佐田) 矢疵 右ノ脛

賀来藤六(佐田) 矢疵二ヶ所 左ノ日同脛

高並八郎左衛門尉(佐田) 矢疵 左ノ足

七郎兵衛(佐田) 矢疵 右ノ目ノ上

神(佐田) 三 矢疵 左ノ手

源兵衛(佐田) 矢疵二ヶ所 右肘左太指

藤(佐田) 八 矢疵 右ノ膝 太刀疵右ノ手

木(佐田) 三 矢疵 左ノ足

太郎衛門(佐田) 矢疵二ヶ所 右ノ膝同脛

又七郎(佐田) 矢疵 左ノ脛

又三郎(佐田) 矢疵 左ノ股

賀来良助(佐田) 矢疵 左ノ膝

賀来善三郎(佐田) 矢疵 三ヶ所 左ノ耳内肘右脛

永松主殿允(佐田) 下人

善九郎(佐田) 矢疵 左ノ足

賀来又三郎(佐田) 下人

彦三郎(佐田) 矢疵 右ノ膝

孫左衛門下人

新六(佐田) 矢疵 左ノ肘

口ノ坪

太郎三郎(佐田) 矢疵 腕

已上
十一月十四日

朝景(花押)

二一〇 佐田右馬允合戦疵注文

○佐田文書
增補訂正編年大友史料一六

「軍忠状 佐田右馬充」

「一見了 御判」

去十四日至豊前国宇佐郡妙見岳御城大友勢取懸防戦之時、太刀討分捕并被疵人数注文

同名右馬允(佐田) 矢疵二ヶ所 額右脛

十一月十五日 朝景

杉因幡守殿

右注文備 上覽之、御袖判有之、守 御感之旨弥可励分捕之状、如件、

十二月六日 朝景(花押)

朝景(花押)

二一一 大友義鑿感状

○首藤文書
大分県史料一三

去九於豊後国妙見岳攻口、防戦粉骨、殊被疵之由、忠儀寔無比類候、必追而可賀申候、恐々謹言、

十一月十五日 義鑿(花押)

首藤右京亮殿

二一二 大友義鑿感状

○平林某文書
大分県史料二五

今度豊前国尙向之刻、於妙見岳攻口、親父太郎兵衛尉碎手、被遂防戦、刺討死候、忠儀寔無比類候、何様追而、一段可賀申候、恐々謹言、

十一月十八日

義鑿 (花押)

平林宮若殿

御音問委細令披閱候、仍於妙見岳攻口、親父宮内丞方被立御用候、忠節寔無比類候、此等之謂御方可被成御感候、旨趣猶態可令申候、

十一月十八日

略候、恐々謹言、

田新五郎殿

二二三 大友義鑿感状案

久保文書 増補訂正編年大友史料一六

二二六 大友家加判衆連署奉書

植田文書 大分県史料一五

今度豊前国尙向之刻、於妙見岳攻口、親父左衛門尉碎手、被遂防戦、刺討死候、忠儀寔無比類候、何様追而、一段可賀申候、恐々謹言、

十一月十八日

義鑿 書判

久保隣女

二二四 大友義鑑感状案

大友家文書録 大分県史料三二

於豊前国妙見岳攻口、防戦粉骨、殊被官数人被

十一月十八日

義鑑 在判

平井兵部少輔殿

「大友家文書録」(「大分県史料」三二)二七收ム。

植田新五郎殿

御報

二二七 陶道麒書状

佐田文書 増補訂正編年大友史料一六

可申談候、恐々謹言、

十一月十九日

道麒 (花押)

佐田大膳亮殿

進之状

二二八 大友義鑑感状案

大友家文書録 大分県史料三二

前十四、豊前国於妙見岳攻口、親父宮内丞討死、儀無

十一月廿日

義鑑 在判

植田新五郎殿

二二九 大友義鑿感状

久保文書 大分県史料三二

前十四、豊前国於妙見岳攻口、防戦粉骨、殊被官数人被

十一月廿日

義鑿 (花押)

久保中務丞殿

二三〇 大友義鑿感状案

大友家文書録 増補訂正編年大友史料一六

前十四、豊前国於妙見岳攻口、防戦粉骨、被疵之由、誠

十一月廿日

義鑿 在判

二二五 入田親廉書状案

大友家文書録 大分県史料三二

内欠字ハ、増補訂正編年大友史料一六ニヨリ傍注ス。「義鑑」ハ「義鑿」ノ誤写ナラン。

去十四日、於攻口御動之趣、具承候、殊被討捕頸注文注給候、慰之事候、御忠節此事候、対山田興成御状令披見候、連々不可有御等閑候、御飛脚御座所至小郡被進候、十五日御進発之砌、御勝利別而目出候、各可差寄候条、弥

衛藤左衛門尉殿

二二二 大友義鑒感狀案

○大友家文書錄
增補訂正編年大友史料一六

前十四、豊前国於妙見岳攻口、防戦粉骨、被疵之由、忠儀感悦候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、

十一月廿一日

義鑒 在判

大津留次郎太郎殿

二二一 大友義鑒感狀案

○大友家文書錄
增補訂正編年大友史料一六

前十四、豊前国於妙見岳攻口、防戦粉骨、被疵之由、忠儀感悦候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、

十一月廿一日

義鑒 在判

上野神兵衛尉殿

二二三 大友義鑒感狀

○江藤文書
增補訂正編年大友史料一六

前十四、豊前国於妙見岳攻口、防戦粉骨、被疵之由、忠儀感悦候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、

十一月廿一日

義鑒 (花押)

田吹與三郎殿

二二四 大内義隆感狀案

○宇都宮文書
增補訂正編年大友史料一六

去十四日、至当城敵取懸、終日防戦、侍数多討捕頸、到来、一見候、從城内、各切懸、粉骨誠無比類者也、

天文元年十一月廿一日

義隆 判

深見屯岐守殿

斎藤駿河守殿

妙見岳城衆中

二二五 杉興重書狀

○佐田文書
增補訂正編年大友史料一六

去十四日、至当城切岸、敵責登候之処、被遂防戦、剩御人数多々分捕之次第、銘々注文御注進状、至厚狭到来、則令披露候、御発足御首途刻、御気色不斜候、御高名誠無比類候、昨日、至防府御著宿候、日出候、弥御城之儀可為堅固候、珍重候、御感之趣猶对同名因幡入道被仰出候間、不及申候、御吉事猶重々可申承候、恐々謹言、

十一月廿二日

興重 (花押)

御報

佐田大膳亮殿

御報

十一月廿二日

興重 (花押)

御報

佐田大膳亮殿

御報

二二六 大友義鑒感狀案

○大友家文書錄
增補訂正編年大友史料一六

前十四日、於豊前国妙見岳攻口、粉骨、殊被官数、疵之由、忠儀感悦候、何様追而一段可賀申候、恐々謹言、

十一月廿二日

義鑒 在判

賀来神九郎殿

二二七 大友義鑒感狀

○大友家文書錄
增補訂正編年大友史料一六

前十四日、於豊前国妙見岳之攻口、遂防戦粉骨、殊被疵之由、忠儀寔感悦候、弥可被励忠貞事肝要候、必追而可賀申候、恐々謹言、

十一月廿二日

義鑒 (花押)

徳丸四郎三郎殿

二二八 大友義鑒感狀

○大友家文書錄
增補訂正編年大友史料一六

前十四、豊前国於妙見岳攻口、防戦粉骨、殊被官兩人被疵之由、忠儀感悦候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、

十一月廿五日

義鑒 (花押)

中村彈正忠殿

二二九 大友義鑒感狀案

○大友家文書錄
增補訂正編年大友史料一六

前十四日、於豊前国妙見岳攻口、為無足、防戦粉骨、殊被疵之由、忠儀寔感悦候、追而一段可賀申候、恐々謹言、

十一月廿六日
久保又太郎殿

義鑒(大友) 在判

十二月廿六日
富来民部少輔殿

義鑒(大友) (花押)

賀申候、恐々謹言、
二月六日

義鑒(大友) (花押)

長野主水助殿

一三三〇 大友義鑒感状

○種田文書
増補訂正編年大友史料一六

前廿五日、於豊前国畷田之村手仕之刻、被官被疵之由、忠儀寔感悦候、弥可被励忠貞事(種)要候、必追而可賀申候、恐々謹言、
十二月三日

義鑒(大友) (花押)

○宛名ヲ欠ク、『増補訂正編年大友史料』一六デハ、種田氏卜比定ス。

一三三一 大友義鑒感状案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料一六

就今度豊前国発向、至白桃陣所、敵取懸候(親務骨力)殊被官二人、被疵之由、忠儀感悦候、何様(追前一段力)可賀之条、恐々謹言、
正月十三日

義鑒(大友) 在判

宝珠山主税助殿

一三三六 田原親董感状案

○片山文書
増補訂正編年大友史料一六

於今度山鹿表、各雖対場候、僅從相共々之故、小者被矢疵之由云々、軍忠太稜候、益々勤勞此節(親董)候、恐々謹言、
二月七日

親董(田原)

片山仁兵衛殿

一三三一 大友よし鑒感状

○三浦文書
増補訂正編年大友史料一六

今度、豊前国発向に付、自最前以出陣所々手仕重勞、殊去十月四日、佐田大膳亮(朝臣)要害とりくすし候刻、被疵よし、忠儀感悦候、かならず追而一段可賀也、穴賢、
十二月十一日

よし鑒(大友) (花押)

○宛名ヲ欠ク。

一三四 大友義鑒感状

○平井文書
増補訂正編年大友史料一六

就今度豊前国発向之儀、至白桃陣所敵取懸之刻、別(而)粉骨、殊被疵之由、忠儀感悦候、何様追而一段可賀申候、恐々謹言、
正月十三日

義鑒(大友) (花押)

平井平左衛門尉殿

一三七 大友義鑒書状

○田北憲明文書
増補訂正編年大友史料一六

至鹿越城、牢人楯籠候之処、則時出張之条、彼殘党等敗北候、先以肝要候、今度別而馳走之段、祝着候、恐々謹言、
三月廿九日

義鑒(大友) (花押)

田北次郎三郎殿

一三二二 大友義鑒書状

○富来文書
増補訂正編年大友史料一六

至姫島興(神)、敵舟少々押渡候哉、無心許候之間、為可承、定林院進之候、於事実者、木付紀伊守(親実)申談、可励忠貞事、肝要候、巨細猶年寄共可申候、恐々謹言、

一三二五 大友義鑒感状

○長野虎八文書
増補訂正編年大友史料一六

前(三)日、於山香口敵現形之刻、則時懸合、被追崩之由候、忠儀感悦候、弥申談可被励忠貞事肝要候、必取鎮一段可

一三三八 大友義鑒感状案

○大友家文書録
大分県史料三四

至今度鹿越、牢人現形之刻、不日馳走之条、彼悪党則時之敗北、先以肝要候、何様追而可申候、恐々謹言、
卯月二日

義鑒(大友) 判

久保彦兵衛殿

二三九 大友義鑿感狀

○能一文書
增補訂正編年大友史料一六

至今度鹿越、牢人現形之刻、以吉岡左衛門大夫同陣、不日馳走之条、彼悪党即時敗北、先以肝要候、必追而賀可申候、恐々謹言、

卯月二日
義鑿(花押)

能一縫殿助殿

二四二 大友義鑑感狀案

○大友家文書録
大分県史料三二

至今度鹿越、牢人現形之刻、以吉岡左衛門大夫同陣、不日馳走之条、彼悪党即時敗北、先以肝要候、必追而賀可申候、恐々謹言、

卯月二日
義鑑(在判)

徳丸右衛門尉殿

○「義鑑」ハ「義鑿」ノ誤リカ。

卯月二日
義鑿(花押)

葉師寺右馬允殿

二四五 大友義鑿感狀

○葉師寺文書
大分県史料二二

至今度鹿越、牢人現形之刻、以津久見左馬助同陣、無足之軍勞感悦候、何様追而、賀可申候、恐々謹言、

卯月二日
義鑿(花押)

葉師寺與一殿

二四〇 大友義鑿感狀

○中村文書
大分県史料二五

至今度鹿越、牢人現形之刻、以吉岡左衛門大夫同陣、不日馳走之条、彼悪党即時敗北、先以肝要候、必追而、賀可申候、恐々謹言、

卯月二日
義鑿(花押)

中村藤十郎殿

二四三 大友義鑑感狀案

○碩田叢史所収田口文書
增補訂正編年大友史料一六

至今度鹿越、牢人現形之刻、以田口掃部助同陣、不日馳走之条、彼悪党、即時敗北候、先以肝要候、必追而、賀可申候、恐々謹言、

卯月二日
義鑑(在判)

勾右馬允殿

○「義鑑」ハ「義鑿」ノ誤リカ。

二四六 大友義鑿感狀

○荒木文書
增補訂正編年大友史料一六

至今度鹿越、牢人現形之刻、以山下和泉守同陣、不日馳走之条、彼悪党敗北、先以肝要候、何様追而、賀可申候、恐々謹言、

卯月二日
義鑿(花押)

荒木右衛門尉殿

二四一 大友義鑿感狀

○平林某文書
大分県史料二五

至今度鹿越、牢人現形之刻、以吉岡左衛門大夫同陣、不日馳走之条、彼悪党即時敗北、先以肝要候、必追而賀可申候、恐々謹言、

卯月二日
義鑿(花押)

平林太郎兵衛尉殿

二四四 大友義鑿感狀

○葉師寺文書
大分県史料二二

至今度鹿越、牢人現形之刻、以津久見左馬助同陣、不日馳走之条、彼悪党敗北、先以肝要候、何様追而、賀可申候、恐々謹言、

二四七 大友義鑿感狀

○波津久文書
大分県史料二三

至今度鹿越城、牢人現形之刻、以清田兵庫頭同陣、不日馳走之条、彼悪党即時敗北、先以肝要候、何様追而賀可申候、恐々謹言、

卯月二日
義鑿(花押)

波津久弥三郎殿

二四八 大友義鑒感状

○佐土原文書
大分県史料一三

至今度鹿越城牢人現形之刻、以清田兵庫頭同陣、不日馳走之条、彼悪党等即時敗北、先以肝要候、何様追而賀可申候、恐々謹言、

卯月二日

義鑒 (花押)

佐土原満足殿

二四九 大友義鑒感状案

○右田文書
熊本県史料中世四

今度至鹿越、楯籠候牢人敗北之刻、粉骨之次第感悦候、必追而、可賀申候、恐々謹言、

卯月二日

義鑒 在判

右田三河守殿

二五〇 大友義鑒感状写

○右田文書
熊本県史料中世四

今度至鹿越、楯籠候牢人敗北之刻、粉骨之段感悦候、必追而、可賀申候、恐々謹言、

四月十三日

義鑒 (花押影)

右田次郎殿

二五一 大友義鑑感状

○平井文書
大分県史料一三

為角牟礼勤番、長々在城、無足之辛勞不及申候、當時至堺目、敵毎日相駱候之条、一入堅固之才覚憑存候、何様追而、一段可賀申候、恐々謹言、

卯月十六日

義鑑 (花押)

平井左衛門尉殿

二五二 杉興重書状

○今仁文書
増補訂正編年大友史料一六

去年大友勢出張之時、為妙見岳在城之功、受領之事、御吹拳候、尤面目之至候、恐々謹言、

七月十三日

三河守興重 (花押)

謹上 今仁伊豆守殿

二五三 大友家加判衆裏封条々事書

○上田節藏々野上文書
大分県史料一三

古後領地二付浮免分

条々 十一廿八

一同陣衆至小国出張之事、

一角牟礼御城之事、

一面目調之事、

一豊前立柄之事、

裏花押

裏花押

一連判衆之事、

以上

裏花押

二五四 大友義鑑感状案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料一六

就角牟礼城番、夜白辛勞、不及申候、殊城誘等之事、別而馳走之由候、案中候、弥油断才覚、憑入候、必追而、一段可賀申候、恐々謹言、

十二月一日

義鑑 在判

森吉岐守殿

二五五 大友義鑑感状

○平井文書
大分県史料一三

就角牟礼城番、夜白辛勞不及申候、殊城誘奉行等之事、別而馳走之由候、案中候、弥無油断、才覚頼入候、必追而、一段可賀申候、恐々謹言、

十二月八日

義鑑 (花押)

平井左衛門尉殿

二五六 大友義鑑感状案

○大友家文書録
大分県史料三四

就角牟礼城番、夜白辛勞不及申、誘等之事、別而馳走之由候、案中候、弥油断才覚憑入候、必追而、一

段可賀申候、恐々謹言、

十二月八日

森吉岐守殿

義鑑 判

佐田因幡守殿

興國 (花押)
興重 (花押)

二月卅日
藥師寺右京允殿

義鑑 (花押)

二五七 田北親興書狀

○田北憲明文書補遺
大分県史料二六

好便之条用一書候、今程在府候哉、雖無申迄候、無油断
祇候專一族、仍去^{廿日}溝野と申在所御手仕候、口々より
出合敵取合矢軍候、親^{田北}員人衆岐部・野上・森・帆足之衆
大手負に候、併一人も無越度候、目出度候、くりは之敵
つけ登候、森・帆足衆おつくし申候、敵二人森衆にて
討捕候、御大利千秋万歳候、我等か事、さき衆^二く^一れ
候間、一段心懸、可抽忠儀覚悟に候、無油断候、猶重々
可申候間、閣筆候、恐々謹言、

親興 (花押)

城後次郎殿

二五八 大内家奉行人連署奉書

○佐田文書
増補訂正編年大友史料一六

去廿日、至朝景宅所、敵取懸候之処、終日防戦、殊被得
勝利、討捕頸十四送進上之通、以杉^{秀通}因幡入道吹挙之状、
遂披露候、為敵猛勢之処、以小勢被得勝利之条、粉骨無
比類被思召候、從昨日^{廿二}宮御参籠候、此砌目出注進
御太慶候、必重而可被成御感候者、得其心能々可申之旨
候、恐々謹言、

二月廿三日

武助 (花押)

二五九 大友義鑑感状

○古後文書
大分県史料一三

去廿日、豊前国溝野河内手仕之刻、別而粉骨之次第、忠
儀感悦候、殊親父藤右衛門尉、至角牟礼在城之由候、重々
軍勞無極候、必取鎮、一段可賀申候、恐々謹言、

二月廿九日

義鑑 (花押)

古後清次郎殿

二六〇 大友義鑑感状

○長野虎八文書
増補訂正編年大友史料一六

前廿日、於佐田口手仕之刻、粉骨之由、誠感悦候、弥忠
儀憑入候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、

二月卅日

義鑑 (花押)

長野又兵衛尉殿

二六一 大友義鑑感状

○藥師寺隆氏文書
増補訂正編年大友史料一六

前廿日、於佐田口、手仕之刻、津久見左馬助以同陣、粉
骨之由誠感悦候、弥忠儀憑入候、必追而一段可賀申候、
恐々謹言、

二六二 大友義鑑感状

○曾根崎文書
増補訂正編年大友史料一六

前廿日、於佐田口手仕之刻、津久見左馬助以同陣、為無
足粉骨之由感悦候、弥忠儀憑入候、必追而一段可賀申候、
恐々謹言、

二月卅日

義鑑 (花押)

曾根崎助三郎殿

二六三 大友義鑑感状

○城内忠一郎文書
増補訂正編年大友史料一六

前廿日、於佐田口手仕之刻、粉骨之由、誠感悦候、弥忠
儀憑入候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、

二月卅日

義鑑 (花押)

廣瀬藤九郎殿

二六四 田原親董感状案

○片山文書
大分県史料一〇

就今度高田夜懸、一段辛勞無比類候、其債として本意之
砌、安岐郷之内^二而も、式拾五貫分、可賀扶助候、以此旨、
弥忠儀干要^二候、恐々謹言、

三月十七日

親董

片山仁兵衛殿まいる

二六五 大友義鑑感状

○能一文書
増補訂正編年大友史料一六

今度以吉岡左衛門大夫同陣、於玖珠郡、長々在陣之脇、至筑後不図出張、旁以軍勞感悦無極候、以其辻、筑後之事、過半属案中之由候、弥忠儀頼入候、必追而、一段可賀申候、恐々謹言、

三月廿日

義鑑(大友)
(花押)

能一縫殿助殿

二六六 大友義鑑感状

○中村文書
大分県史料一五

今度以吉岡左衛門大夫同陣、於玖珠郡長々在陣之脇、至筑後不図出張、旁以軍勞感悦候、以其辻筑後之事、過半属案中之由候、弥忠儀憑入候、必追而、一段可賀之候、恐々謹言、

三月廿日

義鑑(大友)
(花押)

中村弾正忠殿

二六七 大友義鑑感状

○平林文書
大分県史料一五

今度名代以吉岡左衛門大夫同陣、於玖珠郡長々在陣之脇、至筑後不図出張、旁以軍勞感悦候、弥忠儀憑入候、必取鎮、

一段可賀申候、恐々謹言、

三月廿日

義鑑(大友)
(花押)

平林宮若殿

二六八 大友義鑑感状

○徳丸文書
大分県史料九

今度以吉岡左衛門大夫同陣、於玖珠郡長々在陣之脇、不図至筑後出張、旁以軍勞感悦無極候、以其辻筑後之事、過半属案中之由候、弥忠儀憑入候、必追而、一段可賀申候、恐々謹言、

三月廿日

義鑑(大友)
(花押)

徳丸右衛門尉殿

二六九 大友義鑑感状

○徳丸文書
大分県史料九

今度以吉岡左衛門大夫同陣、為無足、於玖珠郡長々在陣之脇、至筑後不図出張、旁以軍勞感悦候、以其辻筑後之事、過半属案中之由候、弥忠儀頼入候、必追而、一段可賀之候、恐々謹言、

三月廿日

義鑑(大友)
(花押)

徳丸新三郎殿

二七〇 大友よし鑑感状

○松尾文書
増補訂正編年大友史料一六

去六日、於豊後国山香郷合戦之時討捕頭七、被送進之通、

前廿日、於佐田口手仕之刻、粉骨之由感人候、忠儀頼入候、必取鎮一段可賀申候、恐々謹言、

三月卅日

よし鑑(大友)
(花押)

三月卅日

松尾彦右衛門尉殿

○二六〇号ヲ参照。

二七一 大友義鑑感状

○古後文書
増補訂正編年大友史料一六

前六、至豊前国取入、所々発向之刻、別而辛勞之由、忠儀誠感悦候、弥忠儀憑入候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、

卯月八日

義鑑(大友)
(花押)

古後清次郎殿

二七二 大友義鑑感状

○野原文書
増補訂正編年大友史料一六

去六、山香郷合戦之刻、別而碎手、被疵之由、忠儀無比類之条、必追而可賀之候、恐々謹言、

卯月十日

義鑑(大友)
(花押)

野原对馬守殿

二七三 相良武任奉書

○佐田文書
増補訂正編年大友史料一六

以杉七郎注進狀遂披露畢、御感狀事軍忠狀到来之時可被成下之由候、恐々謹言、
(實)
(相良)
四月十日
佐田因幡守殿

武任 (花押)

二七四 大友義鑑感狀案

○諸田文書
增補訂正編年大友史料一六

去六、至山香郷敵取懸候之刻、終日遂防戦□□□見守討死、無是非候、然者、在氏直一所、粉骨□□□之由候、

忠貞誠感悦候、必至鑑直一段可賀申候、恐々謹言、
(實)
四月十一日

義鑑 (花押)

諸田主殿助殿

二七五 大内義隆感狀

○宇佐郡地頭職伝記所収中山文書
增補訂正編年大友史料一六

去六日、於豊後国山香郷大牟礼山、合戦之時、敵二人討捕之由、猶七郎重信注進、并軍忠狀、同頭到来了、弥可勳功之状、如件、

天文三年四月十七日

大内義隆 (花押)

○宛名ヲ欠ク。中山太郎左衛門尉殿宛力。

二七六 大友義鑑感狀

○植木義勝文書
增補訂正編年大友史料一六

去六、於山香郷大群野、敵取懸之刻、味方仕□慮外之趣、

既及難儀申候処、父甚右衛門尺粉骨相働、敵數輩討捕、戰死之由、忠貞寔無比類候、仍遺跡有相違間敷候、必追而一段可賀之趣、尚田原常陸介可申候、恐々謹言、
(實)
因三至四月廿日

義鑑 (花押)

植木次郎殿

○本文書検討ノ余地アリ。

二七七 大友義鑑感狀

○渡辺文書
大分県史料三五

去六、至山香口、敵取懸候之刻、味方仕立慮外之故、既及難儀之処、以堅固之地体、鹿越城無異儀、被遂勤番候、忠貞寔無比類候、弥無油断才覚、憑入候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、
(實)
四月廿日

義鑑 (花押)

渡辺左京亮殿

二七八 大友義鑑感狀

○渡辺文書
大分県史料三五

去六、至山香口、敵取懸之刻、味方仕立慮外之故、既及難儀之処、以堅固之地体、鹿越城被遂勤番候、忠貞寔無比類候、弥無油断才覚、憑入候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、
(實)
四月廿日

義鑑 (花押)

渡辺遠江守殿

二七九 大友義鑑感狀

○長野信吾氏文書
增補訂正編年大友史料一六

去六、至山香郷、敵取懸候刻、別而被碎手之由候、忠儀誠無比類候、弥忠貞憑存候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、
(實)
四月廿一日

義鑑 (花押)

長野七郎殿

二八〇 大友義鑑感狀

○長野信吾氏文書
增補訂正編年大友史料一六

去六、至山香郷、敵取懸之刻、別而被碎手之由候、忠儀誠無比類候、弥忠貞憑存候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、
(實)
四月廿一日

義鑑 (花押)

長野主水助殿

二八一 大友義鑑感狀

○長野信吾氏文書
增補訂正編年大友史料一六

去六、至山香郷、敵取懸候之刻、別而被碎手之由候、忠儀寔無比類候、弥忠貞憑存候、必取鎮一段可賀申候、恐々謹言、
(實)
四月廿一日

義鑑 (花押)

長野次郎殿

二八二 大友義鑑感状

○長野信吾氏文書
増補訂正編年大友史料一六

去六、至山香郷、敵取懸候之刻、別而被碎手之由、忠儀
寔無比類候、弥忠貞憑存候、必追而一段可賀申候、恐々
謹言、

四月廿一日 義鑑 (花押)

長野又兵衛尉殿

二八五 大友よし鑑感状

○小屋文書
増補訂正編年大友史料一六

去六、至山香郷、敵取懸候之刻、遂合戦、別而粉骨之由、
忠儀寔感悦候、弥忠貞かんように候、必取鎮一段可賀之
也、

四月廿一日 よし鑑 (花押)

小野尾二郎兵衛とのへ

二八八 大友義鑑感状

○葉師寺肇氏文書
増補訂正編年大友史料一六

於今度山香郷、以津久見左馬助同陣、長々在陣軍勞、殊
去六、敵取懸候之刻、別而粉骨之由、忠儀感悦候、必追
而一段可賀申候、恐々謹言、

四月廿一日 義鑑 (花押)

葉師寺右馬助殿

二八三 大友義鑑感状

○長野信吾氏文書
増補訂正編年大友史料一六

去六、至山香郷、敵取懸候之刻、別而被碎手之由、忠儀
寔無比類候、弥忠貞憑存候、必追而一段可賀申候、恐々
謹言、

四月廿一日 義鑑 (花押)

長野兵庫助殿

二八六 大友義鑑感状

○宇野文書
増補訂正編年大友史料一六

去六、至山香^{藏、敵取懸候カ}郷、敵取懸候之刻、別而被碎手之由候、忠儀
寔無比類候、弥忠貞憑存候、必追而一段可賀申候、恐々
謹言、

四月廿一日 義鑑 (花押)

宇野宮内丞殿

二八九 大友よし鑑感状写

○到津文書
増補訂正編年大友史料一八

去六、至山香口敵取懸候刻、遂合戦、へつして粉骨、殊
小者二人被疵之由、忠儀誠感悦候、弥忠貞かんように候、
必追而一段可賀之也、

四月廿一日 よし鑑 (花押影)

大河内右京とのへ

二八四 大友よし鑑感状

○小屋文書
増補訂正編年大友史料一六

去六、至山香郷、敵取懸候之刻、遂合戦、へつして粉骨、
殊小者一人被疵之由、忠儀感悦候、弥可抽忠節事かんよ
うに候、必追而一段可賀之也、

四月廿一日 よし鑑 (花押)

小野尾二郎左衛門とのへ

二八七 大友義鑑感状

○工藤文書
増補訂正編年大友史料一六

去六、至山香郷、敵取懸候之刻、別而被碎手候之由、忠儀
誠無比類候、弥忠貞憑存候、必追而一段可賀申候、恐々
謹言、

四月廿一日 義鑑 (花押)

廣瀬藤九郎殿

二九〇 粟屋重吉・庄田重満連署奉書案

○大神和好氏系図
増補訂正編年大友史料一六

去月十八日、至豊後高田御働之時、任仁保刑部丞殿仰相
働、殊に人数等分過馳走之通令披露候、神妙之至御感悦
之由候、弥可抽忠節之旨候、恐々謹言、

六月三日 粟屋治部丞重吉 在判
庄田助左衛門尉重満 在判

加来新左衛門尉殿

二九一 仁保隆綱書狀案

○大神和好氏系図
増補訂正編年大友史料一六

去月十八日、至豊後高田表働候時、人数等多く被召連、馳走之段則興重江遂注進候之条、年寄衆以奉書神妙之通被申候、弥々無油断御忠節專一に候、恐々謹言、

六月十二日

仁保刑部丞隆綱

加来左衛門尉殿

二九二 大内義隆感状

○佐田文書
熊本県史料中世二

去四月六日、於豊後国大牟礼山合戦之時、分捕太刀討被疵人数事、杉七郎注進、同軍忠状到来、披見了、忠節之次第、尤感悦之至也、弥可励戦功之状、如件、

天文三年六月十四日

(花押)

佐田因幡守殿

二九三 杉重信書状

○佐田文書
熊本県史料中世二

於大牟礼山合戦之時、朝景軍忠状、并御感状之事、調進候、尤目出候、恐々謹言、

七月十九日

重信(花押)

佐田因幡守殿

二九四 大友義鑑書状

○志手文書
大分県史料一

鹿越城誘之事、去年以来申付候処、于今延引、太曲事候、為奉行衆中、稠以催促、急度可被相調事肝要候、聊不可有緩之儀候、恐々謹言、

七月廿八日

義鑑(花押)

木付右衛門大夫殿

帶刀右京亮殿

長野清左衛門尉殿

田原和泉守殿

吉弘長門守殿

都甲伊豆守殿

林佐渡守殿

廣瀬美濃守殿

大神弥七郎殿

田原次郎左衛門尉殿

○「城内文書」ニモアリ。

二九五 大友義鑑書状

○梅本忠臣蔵長野文書
大分県史料一三

角牟礼新堀之事、各被存寄、別而馳走之由、令悦喜候、弥可被添心事、頼入候、猶田北大和守可申候、恐々謹言、

義鑑(花押)

八月五日

古後中務少輔殿

田籠縫殿助殿

魚返與三左衛門尉殿

原田右衛門尉殿

魚返新三郎殿

惠良伯耆守殿

中嶋左京亮殿

長野伯耆守殿

二九六 大内義隆袖判下文案

○大友家文書録
大分県史料三二

下 惠良四郎左衛門尉盛種

袖判

可令早領知豊前国上毛郡薬師寺村内志町段參拾五代地先知行

右件地事、去天文元年大友勢圍妙見岳之時、

城郭、数十ケ日防戦、去年二月十六日至後国里屋働之時、太刀討分捕被疵、同郎従分補疵之条、為其賞所宛

行者也、早守先例、可全状如件、

天文四年八月十三日

二九七 貫道敦書状

○萩原蔵根家蔵文書
増補訂正編年大友史料一七

態令申候、仍就今度御弓箭、各雖為無足、出陣在城両条之間、於被遂其節者、追而必可被成御扶助候、此時於無馳走仁者、已後如何体之愁訴等候共、不可有御許容之由、堅申届可致注進之通、对某御奉書案文封裏進之候、何茂

御馳走肝要候、恐々謹言、

九月三日

天文九

道敦(花押)

萩原土佐守殿 御宿所

二九八 大内家奉行人連署書狀

○萩原文書
增補訂正編年大友史料一八

元重次郎右衛門尉殿

重矩 (花押)

森五郎兵衛尉殿
野上大和守殿

就麻生表雜說儀、隨貫備後守道敦催、不日登城之由、右田下野守注進、慥被知及候、每事無油断、弥馳走可為肝要之旨候、恐々謹言、

二月十一日

隆仲 (花押)

萩原孫三郎殿

重矩 (花押)

二九九 右田興実奉書

○萩原文書
增補訂正編年大友史料一八

廣崎掃部丞殿

興実 (花押)

今仁藤右衛門尉殿

隆仲 (花押)
重矩 (花押)

就御城檢見下向之儀、普請者事申候之処、以人数馳走儀祝著之至候、何様從是申候、巨細自麻生可被申候、恐々謹言、

壬七月十七日

三〇一 右田興実書狀

○廣崎文書
增補訂正編年大友史料一八

御陣中御城番雖所勤候、依御開陣、無足衆之事、被遣御暇候之処、今度麻生方就雜說之儀、聞懸登城之趣、遂注進候、別而被懸心之段、神妙之通、以奉書被仰出候、可有馳走之由候、恐々謹言、

三月廿七日

興実 (花押)

萩原兵部丞事、至当御城被差籠候、每事可被申談之由候、恐々謹言、

三月廿一日

宗長 (花押)
興種 (花押)

右田下野守殿

三〇二 大内家奉行人連署奉書

○河谷文書
增補訂正編年大友史料一八

三〇三 大友義鑑書狀写

○真修寺文書
大分県史料一三

妙見岳登城之儀、任貫備後守道敦申旨、今度御陣中在城之通、道敦注進慥被 知召候、先以令下城、自然於有雜說等者、則時馳籠、可抽忠節之由被 仰出候、弥馳走肝要候、恐々謹言、

十二月廿二日

隆仲 (花押)

長々在城辛勞、不及申候、然者替衆差遣之候、早々帰国肝要、旁以面可申候、恐々謹言、

四月十七日

義鑑 (花押影)

三〇四 大内家奉行人連署奉書

○今仁文書
增補訂正編年大友史料一八

尚賢事、妙見岳令在城、可遂馳走之由、对右田下野守興実、申状遂披露、被成御心得候、每事任興実裁判、可被遂其節之旨候、恐々謹言、

卯月十九日

隆仲 (花押)
重矩 (花押)

三〇五 大内家奉行人連署奉書

○萩原文書
增補訂正編年大友史料一八

道昌事、雖為無足、数年、豊前妙見岳御城番遂其節候、殊普請以下別而抽馳走候、雖然於于今者、及窮困之条、可被成御扶助之由言上之通、遂披露、慥被 知食候、便宜地等聞立、追而可有言上之由候、被得其意、弥馳走肝要候、恐々謹言、

四月廿四日

隆景 (花押)
重矩 (花押)

萩原兵部丞殿

三〇六 萩原道昌条々事書

○萩原殿根家藏文書
增補訂正編年大友史料一八

条々

一我々事、宇佐郡敷田庄之内、神代志岐守安綱分領下作職、親候者以来相拘、諸濟物無未進遂収納候之處、如何体子細候之哉、去秋当毛一円被押置、田島七町余悉被取、至下地以下被取放候、不致無沙汰候、如此之儀不及是非候之条、種々雖説言仕候、無承伏候之間、右旨趣致言上、為可奉請 御下知、參上仕候事、

一至雲州被成 御進免之条、御留守中事、妙見岳御城番仕、御開陣之時、似合愁訴等可申上通、被對貫備後守、以御奉書之上、堅被申催候之条、存其旨、從去天文八年、至同十二年、無油断遂御城番、普請等所勤仕候、殊就度々風雨、御城及大破候時者、別而分過之馳走仕、御奉書數通給置候、如此辛勞、何分二も自然領分に非分之儀、被申懸候する時、為可奉請御下知、以自勘忍數年在城仕儀候、雖然、号私作毛被押取候間、於于今者迷惑相極之条、安綱二被成御尋、下作職事、如前々安堵仕候様、預御披露候者可忝候事、

一去年十一月十四日、其牛はなれ候て、安綱用作に入り候、作物少分損候とて、牛を被取候間、相当入立を持遣、彼牛之儀所望候へ共、色々被申延、不被帰候之間、兩度以書状申届、返書有之、如此非道儀雖被申懸、勘忍仕候事、

右旨趣具為可申上、道昌儀遂參上候、以御分別、可然様預御披露候者、可忝候、恐惶謹言、

五月十二日

道昌 (花押)

杉伯者守殿 人々御中

三〇七 某書状写

○永弘文書 增補訂正編年大友史料二〇

弘中下野 [守カ] 波多野對馬守 [] 杉三河守被仰候、

就妙見岳御城誘不勤之儀、御奉書令拜見候、某拘分、上毛郡之内、料田為參町式反由候て、老町不勤由被仰候、某者參町相拘候、式段分不相拘候、參町令存知候、被入候式町式反分此間所勤候由申候、七反者杉伯州御被官幸多、申仁相拘候、七反之内四反河成之由申候、參反可所勤由申候、他郡之儀候間、然と不存知候条、明々可被成御尋候、於此方聊非無沙汰候、此由可得御意候、恐々謹言、 八月五日

三〇八 大友家加判衆連署書状案

○永弘文書 大分県史料五

田染少宮司方拘御神領之事、諸点役御免除之通、被仰出候之處、御城誘人足催促之由、少宮司方被申候、不可然候、可被止催促候、恐々謹言、 九月七日

大親 照
豊饒 親 富
本庄 右 述

松田山城守殿

三〇九 大内家奉行人連署奉書

○河谷本治家藏文書 增補訂正編年大友史料一八

妙見岳芝矢倉三間事、去七月大雨之時少々崩損之處、以人夫五十一人、芝以御城納築繕之由、貫備後守注進、遂披露候、神妙之通被仰出候、弥馳走肝要候、恐々謹言、 九月廿一日

元重次郎右衛門尉殿 隆伸 (花押) 重矩 (花押)

三一〇 大友義鑑感状写

○真修寺文書 大分県史料二三

雖長々在城辛勞、加新衆候、申談弥堅固、勤番憑入候、猶田北大和守可申候、恐々謹言、 九月廿二日 義鑑 (花押影) 長野伯耆守殿

三一一 親榮・山下長就連署書状写

○真修寺文書 大分県史料二三

長々御在城辛勞之儀、細々雖可申入候、且者遠方、且者公私依繁多、乍存罷過候、聊非心疎候、御城内弥堅固之由、可目出候、替衆之儀被仰出候、其方近日可有登城候哉、御大慶与存候、猶野上掃部助方、可被申候間、省略候、恐々謹言、 十月十九日

長就 (花押影) 親榮 (花押影)

森殿 野上殿 御宿所

三二二 大友義鑑書狀写

○狭間七五三男文書
大分県史料二六

夜白無油断在城之由候、案中候、乍御辛勞、此節之事者、
片時茂無緩様、弥可被添心事、憑存候、猶吉岡左衛門大
夫可申候、恐々謹言、

十月廿五日

義鑑(大友)
義鑑(花押影)

狭間右衛門大夫殿

今仁藤右衛門尉殿

重矩形判

三二五 大友義鑑書狀

○岐部文書
大分県史料一〇

門之材木、早速運送祝着候、猶雄城若狭守、可申候、恐々
謹言、

十二月廿五日

義鑑(大友)
義鑑(花押)

波多備後守殿

三二六 某書狀案

○永弘文書
増補訂正編年大友史料二〇

妙見岳御城誘之事、不謂寺社免許地可被仰付由、至当社
領預御心得候、前日以来如令申候、当宮領御免
除之事、近年非相始御事茂

殊度々府遣候、令祝着之儘、彼使可申候、恐々謹言、

二月十九日

道中(花押)

宗安 忠左衛門尉とのへ

三二八 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三二

三月、入田丹後守親誠作親誠、字九其謀叛、掇州梅牟礼城、義
鎮命戸次左衛門大夫鑑連・齋藤兵部少輔鎮実及託摩兵部
少輔鑑秀・厚大藏丞鎮忠等、討之、親誠父子不及戰、
逃赴肥後国阿蘇山、以阿蘇惟豊為其外戚也、惟豊大怒其
謀逆而逃來、殺之、送首于府内、梟之、是後其族入田信
濃守者伏誅、志賀親守・志賀常陸介鑑綱等有軍功、
其日○信濃守按親誠子、○十五日、義鎮因齋藤長実遺領及上
野神兵衛尉惟次遺領○繼嗣事、作書、命之其子齋藤鎮実・
上野宮千代・久保市松、
三月入田丹後守親誠謀叛、掇州梅牟礼城、義鎮命諸兵
攻之、親誠及其子某不及戰而自殺、

三二四 大内家奉行人連署奉書案

○宇都宮文書収載今仁文書
増補訂正編年大友史料一八

就去秋風雨、妙見岳御城誘令大破之間、被差下佐田次郎
隆景、当御城衆并郡内諸給人以臨時之儀、可被勤之由、
被相触之処、雖為無足、屏老問分材木御城納之由、右田
下野守興実、並隆景注進之趣、遂披露訖、頓被相調次第御
感之至候、弥御城方之儀馳走可為肝要旨候、恐々謹言、

十二月四日

隆仲判

三二七 道中書狀

○後藤敏宏文書
大分県史料一〇

此使之儀、子細被申候間、帰遣候、此方用所落之候間、
山城等事、数々用可申付候、此後可申拵候、
両度預一通、祝着之至候、仍鶴田給之儀、被申候、爰許、
雖油断候す候、事濟々と御座候之条、令延引候、必通秀
申談、可遂披露候、鶴田給分うき地之事、きん重と申談
佐任度之由候、存分次第候、於其方、董秀可申合候、

三二九 大内家奉行人連署書狀

○惠良文書
増補訂正編年大友史料一九

妙見岳・万代兩御城置物并御城衆等、被所見、銘々以目
録注文言上令披露、被成御心得候、置物朽損分等之事、
重而可被仰出之由候、次仲問弥左衛門尉事者、至爰元參
上候、可被得其心之旨候、恐々謹言、

卯月二日

重矩(花押)
隆仲(花押)

惠良右馬允殿

三二〇 大内家奉行人連署書状案

○萩原文書
増補訂正編年大友史料一九

当御城衆内萩原兵部丞矩昌事、数年以無足、御城番馳走之段、去年、遂披露以当御城米内五石、被成御扶助之処、御城督相替之由にて、未召行候之由、矩昌注進到来、令披露候之処、右五石事、对御米奉行人、被申渡、有勘渡、執請取状、可被備後勘之旨候、恐々謹言、

六月一日

鑑栄 在判
鑑種 同
重矩 同

杉因幡守殿

○裏二花押アリ。

三二一 大友義鎮書状

○首藤文書
大分県史料一三

以戸次々郎左衛門尉一所、至梅牟礼、然与在城之由、祝著候、此節別而於被励劳功者、必追而一段賀可申候、恐々謹言、

七月廿一日

首藤右衛門尉殿

義鎮 (花押)

三二二 大内家奉行人連署書状

○佐田文書
増補訂正編年大友史料二〇

就今度爰許念劇之儀、以雜掌言上之趣、遂披露候、(佐田)隆居事、可有参上雖覚悟候、境目仁並地下一揆等、猥趣候之条、為可被相靜無参上之由、被成御心得候、仍以手日記言上

条々達上聞、何(大内義興)茂对雜掌相含候、右手日記之内、隆居屋敷事、凌雲寺殿請御下知、取誘以来、度々披運候儀、無其隱候、近年諸構無手付候条、隆居分領、段錢御城誘於

被成御閣者、一構申付、至于時致馳走度之由、愁訴之次第、是又遂披露、被成御心得候、然者当郡内隆居給地田数、对雜掌永松宮内丞、被成御尋候之処、玖町式段四拾五代

並革弁分七段敷之由、捧押書申之条、段錢御城誘共以、從当年(弘治)秋被成御免候、被得其心、隆居居屋敷取誘、自然之時者、可被抽忠節事肝要旨候、若右押書前田数違

目於在之者、不可然候、堅固之儀專一候、恐々謹言、
卯月十三日

隆言 (花押)
興滋 (花押)
興種 (花押)
長清 (花押)
隆世 (花押)

佐田彈正忠殿

三二三 宇佐郡三拾六人衆着到状案

○香下文書
増補訂正編年大友史料二〇

大友氏幕下

弘治二歲秋

大友宗麟公豊前国籠王山城御在陣中宇佐郡三拾六人衆著到

安心院五郎
松本主膳

- 深見 壹岐守
- 斎藤 駿河守
- 原口 次郎
- 飯田 主計正
- 高並 主膳助
- 津房 次郎
- 佐田 彈正
- 副但 馬守
- 矢部 伊勢守
- 大園 監物
- 廣崎 对馬守
- 渡邊 和泉守
- 上田 因幡守
- 是恒 備前守
- 吉田 弥六左衛門
- 都留 右近
- 橋津 次郎左衛門
- 直加 江六郎
- 相良 主水
- 麻生 撰津守
- 木内 帶刀左衛門
- 元重 安芸守
- 赤尾 式部少輔
- 佐野 源右衛門
- 萩原 四郎兵衛
- 時枝 平太夫
- 櫛野 彈正
- 荒木 三河守
- 紀井 三郎兵衛
- 津々見 源五良

照山雅樂之助
中島伊予守
賀來次郎

三二四 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三二

是年、佐伯惟教有恨義鎮之事、率男惟真等氏族家人、去
梅牟礼城在州海部、郡佐伯、赴伊予国、

三二五 大友義鎮書状写

○屋形文書
増補訂正編年大友史料二〇

今度現形之悪党近日中豊前迄相絡之段、其聞候之条、一
勢差遣、可加誅伐之覚悟候、諸勢著陳之間、其国各被申談、
無油断才覚肝要候、猶年寄共可申候、恐々謹言、

二月廿九日
義鎮（花押影）

屋方掃部助殿

三二六 大友家加判衆連署書状

○佐田文書
増補訂正編年大友史料二〇

野伸十郎以現形、豊田对馬守令生害、万代城乘執之段、
御注進之趣則令披露候、時宜無御心元被存、至防州急度
被進飛脚候、彼依御返事、諸堺目之儀、堅可加下知之由候、
御両家御一体之儀候条、爰許聊不被存緩候、可御心安候

様体節々承、可得其意候、恐々謹言、
二月廿九日
鑑統（花押）
鑑生（花押）

佐田彈正忠殿

御報

三二七 大友家加判衆連署奉書

○佐田文書
熊本県史料中世二

就殿中火事、早速言上之趣、則令披露候、被添心候之次第、
御祝著之段、以御書被仰出候、尤珍重候、然者山田、
中八屋以下之者共、至城井宅所取懸之由候之条、彼悪党
等一途之儀、可被成御下知之由候、杉因幡守・城井左馬
助、其外一意之衆被申談、山田已下之悪人、可被討果事
肝要之由、能々相心得可申旨候、被得其意、聊不可有御
油断候、恐々謹言、
五月廿五日
治景（花押）
親守（花押）

佐田彈正忠殿

三二八 田北鑑栄・山下鑑心連署書状

○佐田文書
熊本県史料中世二

就殿中火事、飛脚御進上之段、令披露候之処、被添御心、
早々御申候、乍案中御祝著之由候、火事々外毛頭無異儀
候、可御心安候、殊御内作之事、以奉行被仰付候、為御
存知候、将又其表敵同意之衆、雖無指事候、隆居以才覚、
可被討果之由、被仰出候、委細従年寄中可被申入候、

次兩人爰元不退堪悪仕候、每事相応之儀、不可有疎略候、
御同前所仰候、猶期来音之時候、恐々謹言、
五月廿五日
鑑心（花押）
鑑栄（花押）

佐田彈正忠殿

御報

三二九 大友家加判衆連署奉書案

○佐田文書
増補訂正編年大友史料二〇

去朝日、至妙見岳、無異儀登城之由、注進之趣、則令披
露候、無緩次第、御祝著之段、以御書被仰出候、尤珍
重候、殊杉因幡守、佐田、安心院、橋津、其外宇佐郡衆中、
別而馳走之由候、至彼衆中、急度以使僧可被仰遣之由
候、弥被申談於國中敵心之族候者、可被討果事肝要之由
候、能々可申旨候、被得其意、聊不可有御油断之儀候、恐々
謹言、
六月六日
治景（花押）
親守（花押）

木付三郎右衛門尉

田原民部太輔殿

三三〇 大友家加判衆連署奉書

○佐田文書
増補訂正編年大友史料二〇

当郡衆之事、前下毛郡堺目迄著陣候哉、別而可被

抽軍忠之由言上之趣、令披露候、御祝著之旨、以御書委細被仰遣候条、尤珍重候、被得其意、弥被申合、此節御忠儀簡要候、恐々謹言、

六月廿日

親守(花押)
治景(花押)

佐田彈正忠殿
矢部宮内丞殿
副兵部丞殿
惠良美濃守殿
橋津掃部助殿
安心院中務太輔殿

三三二 大友義鎮書狀

○佐田文書
增補訂正編年大友史料二〇

前十八、於廣津治部太輔宅所、山田、仲八屋已下之者共取懸候之刻、遂防戰、敵数多討捕之由、早速注進到来候、感悅無極候、殊從兼日、至廣津宅所、隆居人数被差籠候哉、今度鑑初分捕高名之由候、連々堅固之御才覚故候、祝著候、弥其表之儀、田原常陸介被申談、彼悪党等、急度可討果事頼存候、委細猶志賀安房守、雄城若狭守、可申候、恐々謹言、

六月廿一日
義鎮(花押)
佐田彈正忠殿

三三一 大友家加判衆連署奉書

○佐田文書
增補訂正編年大友史料二〇

前十八、至廣津治部太輔宅所、山田、仲八屋已下之族取懸候刻、当郡衆被申進、即時懸付、敵数多被討捕之由注進之趣、則令披露候、乍案中、御感深重之段、委細以御書被仰遣候、珍重候、弥其表之儀被申合、可被励忠貞事肝要之由候、猶期来信候、恐々謹言、

六月廿一日
佐田彈正忠殿

親守(花押)
治景(花押)

三三三 大友義鎮書狀

○田原文書
增補訂正編年大友史料二〇

前十八、至廣津治部太輔宅所、山田安云守取懸防戰之刻、杉因幡守、佐田彈正忠野中兵庫頭、福島安芸守、親宏被官、以加勢碎手、分捕高名之由、以著到承候、御忠貞感悅無極候、弥彼衆中被申談、山田、仲八屋已下之悪党等、不拔足様、急度可被討果事、頼存候、猶志賀安房守、雄城若狭守可申候、恐々謹言、

六月廿二日
義鎮(花押)
田原常陸介殿

三三四 大友家加判衆連署奉書

○佐田文書
增補訂正編年大友史料二〇

去十八、至廣津宅所、山田以下悪逆人申談、取懸候刻、為始隆居、宇佐郡衆、殊杉因幡守、安心院、野仲、其外

御味方衆被懸付、則時被打崩候旨注進、得其意候、御勝利之段珍重候、殊隆居家中賀来中務丞鑑初仕、分捕被疵候由承候、高名之至候、同永松民部承是又分捕粉骨誠忠儀肝心候、定而從、御座所可被成御感候、田原親宏著陣之由候条、於于今者、其国悉可属御案中候、然者以衆評十手裏江被差寄候者、当陣衆申談、両国永々御治世之可為首尾候、重々示給、自是茂可令申候、今度從最前隆居忠貞之御覚悟無比類候、殊息次郎方被遂出頭候歟、尤目出度候、随、御下知可有堪忍之旨承候、旁以御忠心不申及候、別而被成御褒美候、各取合不可有疎略候、猶期後音不能重言候、恐々謹言、

六月廿四日
鑑統(花押)
長增(花押)
鑑生(花押)
佐田彈正忠殿
御報

三三五 大友家加判衆連署奉書

○佐田文書
增補訂正編年大友史料二〇

去廿、至山田宅所同要害、諸勢被取懸候之処、不能一戰落行候之由注進之趣、令披露候、隆居事、別而馳走、御祝著之段、相心得可申之由候、殊仲八屋可被打崩議定候哉、彼悪党不拔足之様、各被申談、忠儀肝要之由被仰出候、可被得其意候、恐々謹言、

六月廿四日
治景(花押)
親守(花押)
佐田彈正忠殿

三三六 大友義鎮感狀

○田原達三郎文書
大分県史料一〇

今度山田安芸守悪行、前代未聞之条、親（田原）宏急度以出張、彼一類可被打果之由、申候之処、不移時日、被逐出陣、前（廿一）山田城被切崩、自身粉骨之条、親類被官、或者分捕虜、或者被疵、又戦死之人数、名々以着到承候、感悅無極候、殊親宏被勸調略、故山田一子万千代、被打取候、一段高名之儀、無比類候、弥無油断御才覚、頼存候、此節御辛勞之儀、必近日、以使節可申候、恐々謹言、

七月七日

田原常陸介殿

義鎮（花押）

三三七 大友家加判衆連署奉書

○田原達三郎文書
大分県史料一〇

去月（廿一）、至山田安芸守要害、被取懸、則時彼一類悉被打果候、御感深重候之処、同今月（四日）、馬岳城之事、被切崩、彼城督頸進上之条、忠儀之次第、無比類之段、先々以御書、被仰付候、就中親宏も、自身被碎手之段、且達上聞候、旁以今度大忠之儀、永々不可有御忘却之趣、近日以、上使、可被仰遣之条、相心得可申旨候、恐々謹言、

七月九日

治景（花押）
親守（花押）

田原常陸介殿

三三八 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三一

○七月（十一日）、筑前国士秋月（太郎）○長門守文種（中務少輔）○滅、初文種聞元就弑義長、而振兵威、叛義鎮、通志於元就、掘古所城、筑紫左馬頭惟門（下野守）○党之、筑前・肥前・豊前（州土多党之、三州）○騷乱、義鎮遣諸將攻古所城（備之）○文種戰敗而自殺、乃是日也、文種子種実時九歳逃赴防州、是役豊後成將、○問注所加賀守鑑豊（有戰功、義鎮賞祿之、吉弘中務少輔）○戰死、志津利與三兵衛尉等、文種子種実猶幼、從士扶之逃、而到周防国遇元就、筑紫自燒城而逃去、降服（改名長藤）氏乞降、其余逆徒或伏誅、或乞降、至漸冬三州平服、義鎮兵勢振（於九州、或説曰、今年五月、義鎮聞豊前国士通志元就、率軍到豊前、陣於龍王、十月分兵、攻平国中諸城、按撫當時義鎮授部下感書教通、則未見其自出馬、且為其秋月之叛、筑・豊・肥三州乱、義鎮命諸將先滅秋月、并討不順之者、無幾程而三州平矣、須與本説符合、或説唯曰、豊前一州之役無無疑、故未能筆記）○

三三九 大友義鎮感狀写

○渡辺左近文書
日出町誌史料編図版

今度豊前国出張刻、遂供奉、至去六月廿日、山田安芸守隆朝要害、抽軍勲、同七月四日於馬岳城攻口、粉骨之次第、顯然候、就中郎徒新五郎、被疵、別而忠貞之至候、弥可被勸戰功事、肝要候、恐々謹言、

七月廿三日

義鎮（花押影）

渡辺左京亮殿

三四〇 田原親宏感狀

○森文書
大分県史料三五

今度豊前国発向之砌、遂供奉、去六月廿日、至山田安芸守隆朝宅所要害、軍勲抽之、同七月四日、於馬岳城攻口、最前馳登、令矢入、抽粉骨、既被矢疵（右膝）、馳走云、忠節云、誠感悅至極候、必追而可賀与之状、如件、

弘治參年七月廿三日

親宏（花押）

森木工助殿

三四一 田原親宏感狀案

○片山文書
大分県史料一〇

今度豊前国出張之刻、從最前辛勞候、殊六月廿日、至山田安芸守隆朝要害軍勲、同七月四日、於馬岡城攻口、粉骨之趣、誠神妙候、弥忠儀干要候、追而可頭志候、恐々謹言、

七月廿三日

親宏

片山市允殿まいる

三四二 某手日記

○永弘文書
大分県史料六

吉弘左近殿其外南郡衆、何も珍珠郡へ御立候、
一同廿一日癸酉、大友殿御座ス入ウスキ燒失候、女中方斗残也、上様無相違候、
一同十八日庚午、令官方と益永内、山香島地所務論有、

令官内新右衛門幽死候、女一人、又六手負候、山香親子失候、

一同 城井八屋・山田衆取かけ、放火候て引候処、城井付候八屋防戦仕候、中八屋衆^二山田衆之頸十三、城井打取、玖珠へ遣候、八屋衆七十人斗手負候、

一六月一日 武蔵田原民部大輔、至妙見登城、昨日此日木付登城候、杉因幡殿下城、田原衆木付二手斗也、
一十二日甲^三、当郡衆陣立也、

一同十八日庚子、山田至廣津二取懸候、防戦杉因幡守衆・宇佐郡衆・野中衆、当時打留頸六十七、明至十九日二以上百人打死、手負二百斗也、都合三百斗損候、山田ハ其マ、打負引帰候、

一同日、為山田・仲八屋・如法寺中間退治、田原常陸介○来繩郷立、河向花蔵寺付物数手計也、其外富来・真玉・都甲・北浦辺衆三手計也、

一同十九日辛丑、花蔵寺立ツイ地付、
一廿日壬寅、上毛郡悉ク放火候、
一同廿一日癸卯、辰剋、山田城落居候、彼一類衆行方不知成也、爰アハレナル事有、山田安芸守隆朝子満千代丸、正年十一歳成を、秣刑部生害候て、頸を至親宏^二現形候、仍安芸守隆朝行方不知落行候、上毛郡内者山田山二入候者、頸八百余諸軍取也、女数人方々トラレ候、上毛郡四分一男女失候、

一仲八屋備前守英信、同六月廿七日己酉、至親宏現形也、
一同七月三日甲寅、至中津郡陣替也、同四月乙卯、馬岳落居也、城トクヨシカイ、同ミナキ甲斐守、其外秋月衆百計打取候、又田原方同衆松木・甲斐・萱島ナト云々、打死也、

三四三 田原親宏感状

○萱嶋文書
大分県史料一〇

今度豊前国発向之刻、從最前令供奉、去六月廿日、山田安芸守隆朝要害落去之砌、同七月四日馬岳斬崩之折節、別而粉骨神妙之至候、追而不可有忘脚候、猶以、弥戦功可為勿論之状、如件、

弘治三年八月三日

親宏(花押)

萱嶋源右衛門尉殿

三四四 田原親宏感状

○後藤敏宏文書
大分県史料一〇

今度豊前国発向之刻、任筋目申付儀、無異儀令馳走候、去六月廿日、山田安芸守最前要害、潤七月三日於馬岳辛旁、誠神妙候、必追而可賀申候之条、弥忠節肝要候、恐々謹言、

八月十三日

親宏(花押)

鶴田神五郎殿

○弘治三年二「潤七月」ナシ。検討ヲ要ス。

三四五 秋吉昌綱書状

○永弘文書
大分県史料四

就白杵御主殿、今度永政新之衛門尉、すかむ田^二付候て、いろく無沙汰申ニよて、下地を御あらためられ候、無念儀候、然者我ら、両度わひ事をいたし候間、新左衛門二一筆を仕候ハ、無子細候之由、承候間、御意のま、一筆させ進入候、以後無沙汰之時者、我らとして、重而

いろく申ましく候、如何様、以面^三可申承候、恐々謹言、
三月二日

昌綱(花押)

秋吉駿

田染殿 御宿所

三四六 首藤鑑秀・竹田津鑑和連署書状

○永弘文書
大分県史料六

猶々、自面^二可申遣之由、被^三為御存知候、

急度令啓候、仍至田染庄^二被仰付候御主殿上尊、山香郷役所分者、相調候之処、御馳走之分、明置置不申候之条、

以外御腹立候、縦雖為御免許之在所、上御代々如此御主殿作、又者御城誘之時、早々御馳走候事、不珍之由、度々

以 御口能、被 仰出候之処、于今御無馳走、如何候哉、
重々可遂 上聞候 為御存知候、恐々謹言、

五月十六日

鑑和(花押)

鑑秀(花押)

田染少宮司殿 御宿所

三四七 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

義統者、從四位下左衛門督義鎮入道宗麟嫡男、母家臣奈多太宮司鑑基之女也、幼名長壽丸、及加首服、虎五郎、賜大樹義輝諱字、曰名義統、叙從五位下、任左兵衛督、又任侍從、受父之讓、為第二十一代家督、管^三後、豊^三。

筑後・筑前・肥後・肥前、併日向生國・伊予□□□□、關白秀吉□國、賜豊後一國、且得其姓氏及諱字□□□稱豊臣、改吉統稱羽柴豊、文祿年中退□□□宗廟□日中庵、治國十五年、

永祿元年以弘治四年改元戊午閏六月十八日、誕生於豊後府內上原館、

六年癸亥、宗麟移居於白杵丹生島新城、長壽丸留任於上原館、

元龜年中、長壽丸嗜蹴鞠、飛鳥井雅教作書、以免葛□。
○葛橋・鴨香共蹴鞠之用、蓋此書不記年、按蹴鞠非山角之遊、今為十歲以後事、暫載于此耳。

三四八 宇佐宮一社中連署申狀案

○到津文書
增補訂正編年大友史料一〇

〔備前書〕豊州御代、妙見岳御城誘之儀、至当社領被仰付之時、御一社中以御詮儀被対田原親賢□内者案文、永祿式八月七日、

妙見岳御城誘之事、不謂寺社免許之地、可被仰付之由、預御催候、前日以來如令申候、當宮領諸点役御免除之事、近年非相始儀候、当社之御事忝茂神宮皇后異國御治世之刻、從御懐胎之内、依示御誕生之期、御速二異賊被成征伐、御歸朝之後、於筑前國宇美宮玉体御出生、一天万乘主人皇拾六代統宝祚給、御治世四拾一年也、崩御之後、經式百六拾七年、欽明天皇御宇、金光二年卯二月十日卯於當國当庄菱形池辺竹葉上、現護國靈驗之妙体給、切私小倉山今上宮是也、造神殿奉祝鎮玉菩薩尊体、被寄所々神領、或定宝味神服料免、或宛行神事弘役田、為万免不輸之地、俗官僧侶數輩之氏人等令知行也、年中月次不退祭祀、長日連夜之勤行于今無怠慢、偏奉為天下泰平、國家安定、

所抽精誠懇丹也、然者神宮皇皇后以定弓惠箭治日域、其威力神通、依授統大菩薩給、尤弓箭守護神異于他宗廟也、

因茲天下武門無不被謁仰当社、仍為全神領、第四拾六代孝謙天皇御宇天平勝宝七年乙二月十五日御託宣、其後宇多天皇御宇寬平元戊年官符等在之、任此○靈託官符之七巨、京都謙倉諸家崇敬之儀、令超過奈社候、然也、今度於当社領御城誘事、被仰付候条、往代以來諸役御免除之由、雖申理候、不預御信用候哉、乍恐難測神慮存候、以前從諸家一往雖被申詰候、右子細依令演說、諸役預御免許、聊無牢籠之儀候、殊御当家之御事、源家与申、別而可被成御敬神事、尤御武運長久國家可為御大平基候、此等之次第親賢被成御人魂、神領無其煩之樣、御披露併可為御神忠之專要候、猶從各被申入候間、不能重言候、○恐々謹言、

八月七日

田原民部太輔殿

御陣所

一社中連署 案書

三四九 田原親宏知行宛行狀写

○宮永氏影写文書
大分県史料一〇

去廿二、至西郷、遠江守隆依要害執懸之處、息孫太郎最前切迄討死候、不便之至感悅之余、不知所謝候、仍本領事、溝部藤兵衛尉当知行分之外、一円宛行候、全領掌干要之狀、如件、

八月廿四日

溝部九郎兵尉殿

親宏書判

三五〇 大友義鎮書狀案

○大友家文書録
增補訂正編年大友史料一〇

去廿二、至西郷遠江守要害、被取懸候之刻、親宏人数、或分捕高名、或被疵戰死之趣、著到銘々加被見、以袖判申候、及度々粉骨之次第、御太忠誠無比類候、以其止過半其國属案中候、祝著候、然者門司、花尾、高春岳未落去之由候条、親賢被申談、殘党不拔足之樣、可被打果事、頼存候、殊筑前目之儀、方々、得勝利候之条、其表弥被差急肝要候、猶志賀安房守・白杵四郎左衛門尉可申候、恐々謹言、

八月廿六日

田原常陸介殿

義鎮書判

三五二 田原親賢知行預ケ狀

○長野末夫文書
大分県史料一一

就在城、節々登城候、御辛勞之儀候、為其賞、於筑城郡、規矩郡之間六町呼付有紙事、預進之候、不可有知行相違候、恐々謹言、

十月十一日

長野七郎殿

親賢(花押)

進之候、

三五二 大友義鎮書狀

○佐田文書
增補訂正編年大友史料一一

永祿四

前廿六、下毛郡仲尾郷、同至築地村、悪党乱入候之処、

即時被懸付、遂防戦、分捕虜以注文承候、粉骨之次第感

悦候、殊去晦日乘陣之由候、被添心候之趣、乍案中祝著候、

爰元勢衆、急度可出張之段申付候条、着陣之間、各被申進、

弥每事堅固之才覚肝要候、猶年寄共可申候、恐々謹言、

三月一日 義鎮(花押)

佐田彈正忠殿

三五三 吉岡長増書状

○佐田文書
増補訂正編年大友史料二二

前廿六、至仲尾郷同築地村、悪党乱入之処、則被懸付、

被討果之段、注進之趣、具令披露候、御感深重之通、

以御書被仰遣候、珍重候、殊去晦日、重々有乘陣、堅

固之才覚、無油断之由承候之辻、銘々達上聞候条、

御祝著不斜候、方角衆被相遣、弥可被励御忠儀事肝要候、

爰元勢衆出張之儀、堅被仰付候之条、諸勢於著陣者、悪

党御退治不可有程候、可御心安候、兼又、時枝兵部少輔、

内尾治部丞、秣備前守、賀来和泉守、福嶋安芸守、別而

馳走之次第、就中分捕虜同被疵衆中、以著到承候之条、

具備上覽候、必追而一段可被賀之由、先以隆居迄可

申旨候、為御存知候、猶期来喜省略候、恐々謹言、

三月二日 長増(花押)

佐田彈正忠殿

御報

三五四 吉岡長増書状

○到津文書
増補訂正編年大友史料二二

○至永祿四九ノ廿四日就到津殿之儀、吉岡殿返事案文」

如仰今度於当所寄陳候刻、到津方宅所江驚固等差遣、堅

可申付候処、聊令油断候折節、雜兵以下不慮之狼籍、

内之朦氣可有御推察候、併諸軍之著合洩制止候事、賢察

之前候、然処三公憲進退之事、慮外之儀共候哉、無是非

事候、公澄・公憲被奉対、公儀毛頭不存無沙汰之通承候

条、上意之所、定而不可有御別儀候、惣別御弓箭之砌者、

可被仰御神慮事、勝軍之第一候間、為社中者、御祈念

御一可之御覚悟可為肝要候、被背社法可被混武威事、

太不然之間、若方々能々被仰諫、倍御屋形様御武運御長

久御國家御靜謐之御懇祈、可目出候、御神慮以崇敬社家

御安堵之事、必可被成御下知之条、可心安候、猶期来

喜候、恐々謹言、

九月廿二日

宮成殿 御報一社返事前候、

長増(書)判在

三五五 田原親宏書状

○永弘文書
増補訂正編年大友史料二二

今度諸軍勢狼籍深重之儀、制止仕合候、就中到

津村之事、雜兵已下取破候之故、公澄退去無余儀候、此

条二老国之衆無存知子細候之間、公澄早速還任之儀勿論

之由、各被申渡候、然処公憲宿所破却之由候条、定被背

上意候哉と、爰元批判半候之由、非御下知之通、其

聞候条、御案中察存候、且者為御國家、且者為当陣勝軍、

当社崇敬之心底無緩疎候、縦自何方被申事候共、可然之

様被仰達、一社無異儀御才覚尤可目出候、謹言、

九月廿六日

親宏判

物檢校
祝天法方殿 御報

三五六 大友義鎮書状

○佐田文書
熊本県史料中世二

今度在陳中各軍旁之次第、具承知候、然者、其国牢人

当郡堺目迄乱入之由、無是非候、必以発足、一行無余儀

候之条、案中不可有程候、妙見岳勤番之儀、至田原民部

太輔堅申付候之間、定而不可有緩候、殊由布・玖珠・山

香之共者、其表可差擲之段、度々加下知候之条、每事

被申談、其境堅固之以覚悟、弥可被励忠儀事肝要候、猶

年寄共可申候、恐々謹言、

十一月十四日

義鎮(花押)

安心院中務太輔殿

飯田但馬守殿

時枝兵部少輔殿

佐田彈正忠殿

其外宇佐郡衆中

三五七 大友義鎮書状

○佐田文書
熊本県史料中世二

就各帰陳、当郡衆之事、日田郡迄長増同心之由示給候、

何茂貞心之覚悟案中候、於于今者可為帰郡与令校量、從

爰許茂以状申候、殊妙見岳勤番之事、不可有緩之段、

至田原民部太輔、兼日申遣候、就中由布・玖珠・山香之

者共、其堺可差擲之由加下知候、別而被申談、此節可被

勵忠儀事專一候、委細先書申候、為存知候、恐々謹言、
十一月十五日
義鎮(天友) (花押)

佐田彈正 忠殿(隆盛)

飯田但馬 守殿(隆高)

矢部宮内少輔殿(隆高)

深見中務少輔殿(隆盛)

惠良美濃 守殿(隆盛)

時枝兵部少輔殿(隆盛)

安心院中務少輔殿(隆生)

佐田彈正 忠殿(隆盛)
安心院中務大輔殿(興生)
其外郡衆 中

三六〇 田原親宏書狀

○佐田文書
增補訂正編年大友史料二二

各至下毛郡出張之儀申談候、親宏事、明日十四、彼表江
可令着陣候、郡衆被仰談、急度御乘陣肝要候、諸事可被
申談候、定從二老可被申候、令啓候、恐々謹言、
八月十三日
親宏(前思) (花押)

佐田彈正 忠殿(隆盛)

飯田但馬 守殿(隆高)

橋津掃部 助殿(隆盛)

惠良美濃 守殿(隆盛)

時枝兵部少輔殿(隆盛)

安心院中務少輔殿(隆生)

各中

御宿所

八月十六日

鑑理(宗忠) 在判
鑑連(宗忠) 同
親宏(前思) 同

安心院中務大輔殿(興生)

時枝兵部少輔殿(隆盛)

惠良美濃 守殿(隆盛)

副越中 守殿(隆盛)

飯田但馬 守殿(隆高)

橋津掃部 助殿(隆盛)

佐田彈正 忠殿(隆盛)

各中

三六一 大友宗麟書狀

○佐田文書
增補訂正編年大友史料二二

就所勞氣、為養生、下城之由、尤無余儀候、然者為名代
息鎮綱被差籠、人数等別而馳走之由、肝要候、弥城内衆
被申談、無油断勤番頼入候、猶吉岡越前入道可申候、恐々
謹言、
八月廿三日
宗麟(天友) (花押)

佐田彈正 忠殿(隆盛)

三六二 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三二

八年乙丑六月二十二日、田原常陸介親宏奉宗麟命、攻豊
前州士長野筑後守里城(臼牙)、我兵被創所謂原主計允・伊

三五九 大友家加判衆連署奉署

○佐田文書
增補訂正編年大友史料二二

是年、宗麟相攸海部郡曰杵丹生島、新築城、自上原館移徒
焉、初当家世々構館於府内居之、築城於高崎山為不虞之
守、至義鎮治國、遷館於上原、而今及此矣、使嫡男長壽
丸居上原館、或曰、是行為明
年甲子之事

毎々之在陣辛勞、雖無尽期候、至豊前表諸勢被差出候之
条、別而馳走可為御悦喜之由、被 仰出候、被得其意、
聊不可有緩之儀候、恐々謹言、
「到永祿五」八月九日

「到永祿五」八月九日

宗欲(音同) (花押)
鑑速(音同) (花押)
鑑理(音同) (花押)
鑑連(音同) (花押)

三六一 大友家加判衆連署書狀案

○佐田文書
熊本県史料中世二

「到永祿五」出陣之儀連署案」

今度郡衆出陣之儀、上意之旨、從玖珠表以連署申候、諸
勢於下毛郡遂在陣候、各遲陳如何候哉、明日十七著陣肝
要候、国中之儀候之条、此節可被励軍勲事、無余儀候、
兼日被仰出候首尾、不可有緩候、恐々謹言、

藤六郎兵衛尉・岐部三郎・岐部孫六已上親宏被・新三郎蓋長門守僕・弥九郎津崎善兵衛尉・三郎次郎元永石馬允・富來與從矢創・三左衛門菅島新四・與三郎富來與三左衛門僕從矢創・甚九郎森刑部丞僕從長門守以下・溝部與四郎手火・高橋與三石創・溝部石創・親宏被官・親宏被官・宗麟加証書及袖判、
○大友宗麟
大分県史料一〇

三六四 大友宗麟合戦手負注文一見状

○大友宗麟
大分県史料一〇

永祿八年六月廿二日、於長野筑後守里城、田原常陸介被官、被疵著到、加披見畢、
原主計允
伊藤六郎兵衛尉
岐部助三郎
岐部孫六
新三郎 矢疵
弥九郎 石疵
三郎次郎 石疵
高來與 三左衛門 石疵
與三郎 矢疵
甚九郎 石疵
溝部與 四郎 手火 矢疵
高橋與 三 石疵
已上

大友宗麟
袖判

永祿八年八月十三日、於長野筑後守要害攻口、右田駿河守良從被疵、勵粉骨、著到令披見訖、
鄉内威丞 矢疵

三六六 大友宗麟感状

○工藤隆弘文書
大分県史料一

就長野筑後守成敗、從最前在陳軍旁、殊前十三、於彼要害攻口、被碎手之条、被官被疵之由、忠儀之次第感入候、何樣別而、可賀之候、恐々謹言、
八月廿日
宗麟 (花押)
廣瀬九郎殿

三六七 大友家加判衆連署書状

○田北憲明文書
大分県史料一三

表陣之事、長野助太郎遂參陳、三ヶ城令破却之通、注進到來之条、先以肝要被思召之由候、然者堺目靜謐之儀、至鑑基而・親賢而・親統而・宗虎、被 仰遣候之間、彼衆中入魂次第、被寄陳專要之段、以 御書、被 仰出候、為御存知候、恐々謹言、
九月十九日
宗欽 (花押)
鑑速 (花押)
鑑理 (花押)
鑑連 (花押)

三六五 大友宗麟合戦手負注文一見状案

○大友家文書録
大分県史料三一

田北勘解由入道殿

志賀兵庫助殿
 田北弥十郎殿
 田原常陸介殿

三六八 大友宗麟感状

○佐田文書
増補訂正編年大友史料三二

就今度麻生撰津守誅伐之儀、田原近江守以同陣、從最前別而馳走之由、感悅候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、
三月廿四日
宗麟 (花押)
佐田彈正忠殿

三六九 大友宗麟感状

○成恒文書
増補訂正編年大友史料三二

就今度麻生撰津守誅伐之儀、田原近江守以同陣、為無足、從最前、別而馳走之由、感人候、必追而一段可賀之候、恐々謹言、
三月廿四日
宗麟 (花押)
成恒越中守殿

三七〇 某手日記

○到津文書
大分県史料二四

永祿十年豊後衆奈多・田原親宏、至高田來繩郷在陳也、
一同三月廿三日公里八死去候、
一十二月廿六日夜、宮成公建・心乗坊公円・円通寺瑞

真・江島之刑部公綱・宮内卿其外時枝兵部丞降令○一類令自放火乘舟候処、依風波公建ハ江嶋逗留候、則自高田、社奉行帰宮サセラレ候、題目ハ宮成領十方自鑑基家来悉被押取候、又風間ハ、公里後家ニ鑑基有同心度之儀、被申候ヨリ、後家ハ八屋へ被行候、公建ハ光隆寺越年候、

一同十二年正月廿三日夜、又公建ハ如田河郡領地被行候、領内悉自社奉行入部候、

一浦邊鑑基（豊多）・親宏（田原）・親賢（田原）・木付（田原）・大神（田原）○至下毛郡在陳候、

一五月三日、長野筑後守江量忍入生害候、是ハ到津被官者仕候由候、又自毛利家、三岡等覺寺通路ニ宮尾城取候、爰筑後守ハ被打候へ共、同名兵部左京彼三岡を持、等覺寺をも同名三河持コタへ、至豊州進上候、同六月廿日、自豊州宮尾セメ被落候、中国衆五十余被打留候、其後ツイキノ郡別府宿陣候、又都郡大坂山ヲ、杉因幡守西郷兩人而取誘候、是又セメ被落、杉領も西郷毛向參候、又各ハ至別府帰陣候、豊州之御勝利目出候処ニ、

一九月三日至貫越打廻候、又安芸衆去八月十六日ヨリ渡海仕候て、又宮尾取長野城、三岡取悉候、同三日酉時セメ候、同四日ニ小三岡ハ落候、同五日大三岡落、同夜等覺寺落居候、長野兵部左京ハ被打候、其外城内男女数千人生害候、敵モ多損候風間候、三河守ハ豊州へ參候、又至三岡当方七人ヨリ、人数四十三人遣候、同親宏被官斎藤刑部下人二人、以上彼三人計陣著候、四人死候、

三七二 刀衆先代帳

○彦山勝田坊文書
彦山編年史料古代中世篇

一永祿十一年戊辰正月十一日
於腰原二俣岳（筑摩）陣取、日田衆・玖須衆也、彦山衆何も山領之衆取懸候而、則落城也、豊後州之陣、吉木浦彼陣ニ俣落城候故、懸而帰陣也、

三七二 田原親宏感状

○菅嶋文書
大分県史料一〇

今度至西・大野・宮山、芸州衆数輩楯籠之条、去五月廿日取懸之処、軍勳抽之、剩一城落去之刻、夜中馳登最前、心懸之次第、感悦之至候、同於杉・西郷両城、累日防戦之段、令承知候、必追而可令賀与候、弥忠貞干要候、恐々謹言、

一永祿十一年
六月廿八日

菅嶋美濃守殿

親宏（花押）

三七三 安東鎮景書状

○安東文書
大分県史料一〇

三月一日 御書同十六參着、跪以頂戴仕候、如被 仰下候、去年以来至筑前表、御三老御在陣、然者郡衆之事、属鑑速御手、相応馳走不存緩候、殊石叟・森越前守・古後因幡守・堤次郎兵衛尉申談、福井・宝珠山・両河内之儀、任御下知悉令発向、於其上二城取付、于今勤番辛勞仕候、弥郡衆申談、可遂馳走之由、被 仰下候、衆中存其旨候、此面御行之砌、郡衆老若中催、可令馳走覚悟候、此之由、宜預御披露候、恐惶謹言、

一永祿十二年
三月十七日

安東宮内少輔
鎮景（花押）

戸次伯耆守殿
白杵越中守殿
吉弘左近大夫殿

三七四 刀衆先代帳

○彦山勝田坊文書
彦山編年史料古代中世篇

一永祿十二年己巳三月十八日、座主連忠、至豊州敵被召候、以此故於佐田岳、豊後衆・日田衆被取懸候也、座主、種善御在陣、彦山衆何も出陣也、津野殿・乙石殿其一族悉誅戮也、

三七五 大友宗麟感状

○利光文書
大分県史料一三

去五月十八長尾於切岸、被碎手候故、被疵之由、粉骨之次第感入候、弥可励馳走事肝要候、必追而一段可賀之候、恐々謹言、

一永祿十二年
七月十三日

大友宗麟（花押）

板井民部少輔殿

三七六 大友宗麟書状案

○大友家文書
増補訂正編年大友史料三二

先書如申候、急度出張之覚悟候、然者任先例、至松木、

宿誘被申付專一候、乍御辛勞、各為奉行、無緩可被相調事、
肝要候、猶吉弘新介入道可申候、恐々謹言、

永禄十一年
九月廿二日

宗麟 在判

森越前守殿
平井若狭守殿

小田紀伊守殿

惠良肥前入道殿

野上大和守殿

三七七 某覚書

○到津文書
増補訂正編年大友史料三二

永禄十二年記己巳歳

一 正月一日乙巳、雨フル、為鑑基取沙汰、有籠会執行、
神事奉行糸永越中守、專使立石山城守也、此度初參神
宮祝大夫比砂童丸、小山田増市丸・恵良子、又辛嶋并
參也、

一 十三日心経会、十六日執行、珍敷取沙汰にて候、

一 豊後ウスキ浦にて、正月六日舟損、人卅六人死、奈多
者也、

一 正月廿六日、大友殿様自○珠至日田御陣易、筑前カマ
ノ郡馬見城落候、

一 同三月十五日、至小倉津御動候、親賢内竹下源七、田
北方倅者三人届候、同日至別府帰陣候、

一 同十七日ヨリ黒川殿、佐田岡前候、柏杵鑑澄承候、

一 吉弘殿・戸次殿備前へ被向候、和与成候、

一 五月十六日ヨリ立花城へ、モリ衆、小早川・吉川其
外数万取□渡対陣候、

同十八日・廿一日・廿六日敵陣へ切カ、ラレ候へ共、
人多被打不成候、

一 壬五月三日、立花城豊後衆明ノカレ候、田北民部・同
名刑部・鶴□掃部・柏杵新士亮・立花弥七郎□取
崩直候、其外至夫丸雜具等、悉鹿嶋へ送候、

一 同月廿一日、上毛郡内手仕放火候、同廿二日至中津河
警固舟百ソウ計、くつ河、小今井、中津河、カキせ東
浜迄焼候、同田原近江守親賢宇佐郡至彼津、舟卜対陣
候へ共、舟無相違□出候、田原方ミレン候由十方申
候、時枝内槐木刑部ヲ廣津打取候、

一 七月七日、□念仏成就候、

一 同月十五日、奈多鑑基死去正年四十五歳、来八月六日
七日兩日送在、又同八月八日江嶋公善病死、正年七十
四歳、又田河郡岩石城豊後ヨリメシテ平定城也、

一 十月十一日大内輝弘渡海、正年五十一歳、同十五日
筑前表毛利陣衆引候、松山アケノキ候、

三七八 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三二

是年、佐伯惟教自予州来豊後、望請復仕、宗麟赦之、
是年、佐伯惟教自予州来豊後、望請復仕、宗麟赦之、
是年、佐伯惟教自予州来豊後、望請復仕、宗麟赦之、
是年、佐伯惟教自予州来豊後、望請復仕、宗麟赦之、

三七九 大友宗麟知行預ケ状

○入田文書
宮崎県史料編中世一

筑前国鞍手郡之内若宮庄三百五拾町分之事、預進之候、
有知行、笠木城被取誘、無緩勤番肝要候、為御存知候、恐々

謹言、
七月十六日
入田丹後入道殿
宗麟 (花押)

三八〇 大友宗麟感状

○竹田津文書
大分県史料一〇

至賀良山、被遂在城、夜日辛勞之段、察入候、弥無緩覚悟、
肝要候、殊前ニ於当城、敵取懸候之刻、別而被励軍忠粉
骨之次第、其聞候、感悦候、其表一廉、可顯其志候、猶
吉弘左近大夫可申候、恐々謹言、

九月十日
竹田津刑部少輔殿

宗麟 (花押)

三八一 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三二

是年、宗麟使戸次鑑連、免家令職、准故立花氏遺跡、改
其氏、号立花、自州藤北城移居筑前立花城、又使佐伯惟
教遷授其旧領、自烏帽子岳城、移母牟礼城、以列
家令、

三八二 大友宗麟書状写

○河内文書
大分県史料二五

賀来中務少輔・谷川三郎兵衛尉事、急度可出張候段、申
付候、両三人事、乍辛勞、至鹿越有登城、無油断勤番肝

要候、大神弥七郎事茂差加候之条、每事可申談事、專一候、猶吉弘左近大夫可申候、恐々謹言、

藥師寺主水助殿

御

三月十二日

宗麟大友 (花押影)

渡邊六郎殿

新邊新五郎殿

河内加賀守殿

三八五 大友宗麟書狀案

○大友家文書錄
大分県史料三二

土圀廻屏之儀、至諸郷庄申付候、仍安岐郷之内、其方領地分諸点役免許之段、雖令存知候、此度之事者為所望、直馳走肝要候、猶奉行中可申候、恐々謹言、

十月廿四日

宗麟大友 (花押)

若林彈正忠殿

三八三 大友宗麟書狀

○渡辺左近文書
日出町誌史料編図版

土井廻屏之儀、至諸郷申付候、仍種田庄之内、 領地諸点役免許之段、雖令存知候、此度之事者、為所望、直馳走、可為悦喜候、猶奉行中可申候、恐々謹言、

九月廿三日

宗麟大友 在判

朽網左京亮殿

三八八 大友宗麟書狀案

○大友家文書錄
大分県史料三二

土井廻屏之儀、至諸郷庄申付候、仍往隈郷之内、 方領地免許之段、雖令存知候、此度之事、 直馳走、可為悦喜候、猶奉行中可申候、恐々謹言、

十一月十一日

宗麟大友 在判

衛藤八郎殿

三八六 野仲鎮兼書狀案

○内尾文書
増補訂正編年大友史料二六

賀来中務少輔・谷川三郎兵衛尉事、急度可出張之候、申付候、両三人事、乍辛勞、至鹿越有登城、無油断勤番、肝要候、大神弥七郎事茂、差加候之条、每事可申談事、專一候、猶吉弘左近大夫可申候、恐々謹言、

三月十二日

宗麟大友 (花押)

渡邊遠江守殿

渡邊左京亮殿

渡邊对馬守殿

今度最前以来、至長岩被取退、別而忠儀之次第、無比類候、然者此節被申上之趣、 慥承知候、至親賢一廉申達候条、定而不可有余儀候、向後之儀、各々安堵候様、可為才覚候間、聊不及御氣仕候、巨細之趣、 中尾孫次郎申合候、恐々謹言、

三八九 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

三八四 鑑述・鎮忠連署書狀

○藥師寺文書
大分県史料二二

尚々其^(元カ)御留守御番、一入之御辛勞、自是申斗候、預御状畏入存候、此表無程相調、尤日出候、宗天御事、依 上意、爰元被成御城番候、普請之色々、尽辛勞候事、可有御察候、每事以上可申承候、恐々謹言、

九月廿四日

鎮忠大友 (花押)

内尾勘助殿

伊藤五次郎殿

三九〇 大友義統書狀

○田北文書
熊本県史料中世四

六月四日

鎮忠 (花押)

鑑述 (花押)

三八七 大友宗麟書狀

○若林文書
大分県史料三五

土圀廻屏之儀、至諸郷庄申付候、仍直入郷之内、其方領地分之事、諸点役免許之段、雖令存知候、此度之事、馳走肝要候、猶奉行中可申候、恐々謹言、

十二月二日

義統大友 (花押)

田北大炊助殿

○田北梅三郎文書（大分県史料）一三三 二写アリ。

三九一 戸次道雪讓与立花城置物員数書

○立花家文書
増補訂正編年大友史料一三三

依無男子至間千代女讓与員数事、

一立花東西松尾白岳御城督御城領等、（下略）

（中略）

一打刀一振国俊丸貫

右、永祿十二年二月、至肥前国被向御人数砌、筑紫衆後卷節、従日田郡 御陣所、御先急致出張、為 御感、宗麟様御手次令拝領之訖、仍号重代、同翌日於筑後、御口能之御加書致頂戴事、

（中略）

一長刀 壹枝長光

右、愚老一代、於在々所々令隨身之、就中吉川・小早川頭入防長兩備芸石雲伯、其外数ヶ国之諸勢引率、至当御城付詰陣、為後卷 宗麟様日田郡迄依被成 御進發、御分國中諸勢不残有出張、敵味方及三十箇国諸勢出合、鼓之内対陣、于時永祿十二年五月十八日、敵陣長尾切懸、自身碎手極高名、同親類寄揆被官、或分捕被疵、或歴々令戦死砌、別而御口能之御加書致頂戴、面目名譽倅家之可為重書者也、同軍忠状袖御判有之、因茲彼一枝号重代、

（中略）

右此状之外、太刀刀物具等、金銀根其外至家財、聊不可成綺者也、但矢櫃十荷、何も三百入鉄根也、御城置物加之訖、

天正三年五月廿八日

戸次伯耆守入道

（關千世子）
きんちよ女

道雪

三九二 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

諸軍發上原館、向日州、有授於甲斐

三九三 大友義統書状案

○日向伊東文書
日向古文書集成

就国中之儀、田原近江入道・朽綱三河入道召寄、以相談申旨候、被得其意、今程当城堅固之格護、可為祝着候、既到佐伯紀伊入道差添人数、睨在陣之上者、弥諸方相調、初秋之時分令出勢、可厲案中事指掌候、仍腹卷一領掛糸毛、進候、顯寸志計候、於様体者、委細年寄共可申候、恐々謹言、
天正六年
四月廿四日
義統

米良四郎右衛門殿

三九四 大友よし統感状

○小野尾文書
大分県史料一一

今度從最前在陣、感入候、然者雄城弥十郎、玉算之表登城之儀申付候、重々辛勞ながら、同陣專一候、かならず追而、可賀之候、かしく、

天正六年
五月七日

よし統（花押）

をの尾彈正忠とのへ

三九五 大友義統感状案

○尾玉文書
大分県史料一一

長々在城、別而辛勞候察入候、爰計出勢之催、聊非油断候之条、其間之事各申合、弥堅固之覚悟、肝要候、仍樽二つ并着遣候、猶野上市右衛門尉可申候、恐々謹言、
天正六年
七月三日
義統 御判

山香郷西分衆中

日表日智登城

三九六 田原紹忍書状

○長谷雄文書
大分県史料一〇

今度最前已来與然籠城、寔無比類候、弥可被抽忠貞事、憑入候、於静謐者、一廉可令扶助候、聊不可有相違候、尚年寄共可申候、恐々謹言、
天正六年
十二月廿四日
紹忍（花押）
永松越中守殿

三九七 田原紹忍書状

○田原文書
増補訂正編年大友史料一四

今度最前以来睨在城、寔御憑敷候、相互之外実候条、倍御馳走專一候、於静謐者、拾町可預進之候、聊不可有相

違之儀候、恐々謹言、

十二月廿四日

紹忍 (花押)

七郎殿 御宿所

三九八 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三二

七年乙卯正月十一日、宗麟讓家督於嫡男五郎義統、自致
仕、○然移居丹羽城國務軍事大悉預聞、其後宗麟改名宗滴、是後宗滴
者乃載于此譜、其或若与義統混行者、乃載于義統譜中、為令見安也。

○今仁恕子氏文書
増補訂正編年大友史料二四

三九九 田原紹忍書状

○今仁恕子氏文書
増補訂正編年大友史料二四

今度最前以来、与然籠城寔無比類候、倍忠儀肝要候、於
静謐候、何様一廉可令扶助候、聊不可有相違候、恐々謹言、

正月廿九日

紹忍 (花押)

今仁掃部助殿

四〇〇 安東某覚書

○安東文書
増補訂正編年大友史料二四

後代之覚形見也、生年廿五、丸山民部少輔、

天正七年從正月、田原親貫御代鞍懸之城、御内之如
法寺式部少輔之御子親武、睨有在城、郷中之人御憐愍不
斜、然勉明八年二月十八日、於鹿越勢刻、家中引割、同
十九日、如国東・詫磨・萱嶋被打人、其刻比所悉有破却、

御先祖始之家、我等与七代目、焼捨、此門親並就宿所、
荒物一ツ不執、敢出波多、如要害罷退、小屋懸送日、明
九年正月晦日、彼居屋敷如野原罷成、所々十枚敷之借屋
作、寔ニ無親乱以来之身苦辛勞如須弥山、漸回向仕、相
続門踏明居者也、從夫以来親家御代五年、又家乱、一毛
号御公領、其後古庄一閑彼百貫御知行貳年、其後古庄右
馬助殿御存知、如此代替多、氣仕不浅、難尺筆も、然者、
為境目搦、防加山取誘、麓之山捨、御屋敷切披、家作等、
尽気根事無限者也、

四〇一 大友義統書状

○吉弘鎮整文書
増補訂正編年大友史料二四

先日手火矢進之候之処、自愛之由承候、祝着候、然者屋
山要害誘之儀、無御油断趣、示給候、專一候、雖無申迄候、
每事無緩覚悟、簡要候、殊方々為加下知、出張之内意候、
時分柄之儀、重而可令入魂候、委細猶浦上左京入道可申
候、恐々謹言、

二月三日

義統 (花押)

吉弘太郎殿

四〇二 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

二月四日、自府内堺町出火、高崎城罹災、

二月四日、自府内堺町出火、高崎城罹災、

○府内ノ出火ニヨル、高崎城罹災ニハ疑問多シ。

四〇三 田原紹忍書状

○長谷雄文書
大分県史料一〇

弓うつほ之事、雖累年詫言候、歴々之儀候之条、不令分
別候、然勉、今度籠城無二之覚悟感入候、為其賞令有免候、
為存知候、恐々謹言、

二月十一日

紹忍 (花押)

永松越中守殿

四〇四 大友義統書状

○大江文書
大分県史料一〇

就鞍懸要害之儀、承候之趣、得其意候、任指南彼城番之事、
堅固可申付候、委細重々々以使節、可申候、

二月廿三日

義統 (花押)

田原常陸入道殿

四〇五 大友義統感状

○羽野文書
大分県史料一三

今度秋月、并豊筑之者共、惡逆之企不及是非候、然者毛利
兵部少輔以同城、別而軍旁之由、感入候、弥馳走簡要候、
必取鎮可賀之候、恐々謹言、

三月廿二日

義統 (花押)

羽野勘七郎殿

四〇六 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

文同右月日

惠良帶刀兵衛尉殿

義統 在判

義統 在判

四一三 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

(天正七年八月)

日、秋月兵到大肥庄在日、阿南養乘力戰、負

浦上彈正忠長宗鉄子、登材木岳城、附中

授書於統之、又作書、賞阿南養乘戰

○『増補訂正編年大友史料』二四所収ト校合、傍注ス。

義統使田原紹忍、附上野左介鎮久・惠良帶刀兵衛尉・香
志田統信・一久保鎮量・波多源内允等諸士、守豊前国
龍王・妙見城、以備不慮、有授於上野・惠良・香志田・
波多義統書、

四〇七 大友義統感状案

○大友家文書録
大分県史料三三

田原近江入道事、至明見岳差籠候之處、以在城、普請以下、
別而辛勞之由感入候、弥馳走可令悦喜趣、猶紹忍可申候、
恐々謹言、

三月廿七日

波多源内允殿

義統 在判

四一〇 大友義統感状案

○大友家文書録
大分県史料三三

文同右月日同○明見作妙見、在城作在陣、
可令悦喜趣作肝要之趣、

香志田彈正忠殿

義統 在判

彈正忠登城之儀、申付候處、
心懸之次第、感悦候、
必以時分、可顯其志候、猶
八月十八日
中島主殿助殿

義統 在判

四一一 大友義統書状

○香下要氏文書
増補訂正編年大友史料二五

田原近江入道事、至妙見岳差籠候之處、以在城普請以
下、別而辛勞之由感入候、弥馳走肝要之趣、猶紹忍申候、
恐々謹言、

三月廿七日

香志田兵部丞殿

義統(花押)

四一二 大友義統感状

○向文書
大分県史料九

於今度日州高城表、父中務尉敵三人討捕、先年祖父河内
入道、於玖珠郡松木碎手戦死、旁以忠儀無比類次第、感
入候、必追而、一稜可加之候、跡目之事、任讓之旨、領
掌不可有相違候、恐々謹言、

九月十九日

向清藏殿

義統(花押)

四〇八 大友義統感状案

○大友家文書録
大分県史料三三

同文月日同○明
見作妙見、

上野左介殿

義統 在判

四〇九 大友義統感状案

○大友家文書録
大分県史料三三

四一六 大友義統感狀

○成恒文書
增補訂正編年大友史料一四

前廿一、於下毛郡表、惡党相鬪候之刻、別而粉骨之由、

其聞候、感入候、殊駭以在城、折々軍勞心懸之次第、必

取鎮、可賀之候、猶田原新九郎親家可申候、恐々謹言、

十月廿六日
（貞應）（天正七）
義統（花押）

成恒越中守殿

十一月十一日
（天正七年）
義統（花押）

五條殿

四一九 大友家文書錄綱文

○大友家文書錄
增補訂正編年大友史料二四

頃間、田原親貫、叛義統、応秋月、龍造寺、拳烽所々、

自在豊後、国東郷浦辺、別構鞍懸罌、以假隆信、種実、

援兵、屢遣其家士津崎善兵衛入道於秋月、秋月亦使上野

四郎兵衛、江利内藏助柙浦部、共約其期、親貫叛也、曾與同族田原紹忍不

好、義統、已命其和議、（天正七年上旬）○田原親貫、令其族如法寺藤五郎親

武、守鞍懸塞、以寄書、

四二〇 大友義統感狀案

○大友家文書錄
增補訂正編年大友史料二四

其方事、至妙見岳、耽遂在城、別而、忠儀之心懸、不淺

之由、銘々、令承知、感入候、弥紹忍被任下知、可預馳

走事、可為悦喜候、何様、其境静謐之刻、一稜、可顯其

志候、為存知候、恐々謹言、

十二月十六日
義統（在判）

飯田但馬入道殿

以同心、別而辛勞之段、感入候、弥可被勵馳走事、肝要候、

必追而一段可賀之候、恐々謹言、
十二月十七日
（天正七年）
義統（花押）

岐部隼人佐殿

四二二 田原親貫書狀

○大友家文書錄
增補訂正編年大友史料二四

今度、鞍懸執付候儀、為忤家、前後各以執談、加下知候、

就夫別而親武才覚故、一城普請等成立候、大慶此事情、

於然者、彼要害之儀、可預置候間、妻子等以隨身茂、在

城肝要候、自然誰人申妨仁候共、為親貫不可許容候、必

静謐之刻者、可申談候、為御存知候、恐々謹言、

十二月廿三日
親貫（花押）

如法寺藤五郎殿

四二三 田原親家書狀

○賀來惟義氏文書
增補訂正編年大友史料一四

雖今度惡党現形候、其方事以順儀之覚悟、切寄取誘、堅

固被相支候、誠忠貞無比類之趣、別而御感之段、被成遣

御書候、尤珍重候、然者到妙見岳、不日御加勢衆被指立

候条、弥以親類中被申談、可被竭粉骨事肝要候、何様一

稜可被成御扶助之通、能々相心得可申旨候、為御存知候、

恐々謹言、

十二月廿七日
親家（花押）

賀來安芸守殿

四一八 大友義統書狀

○五條文書
熊本県史料中世四

今度黒木表行之儀申談候半、表陣之衆打入候、就夫蒲

池志摩守改心底之由候、無余儀存候、鑑廣於忠儀者、

不可有忘却候、然者其堺被及氣仕候哉、当山之儀者、從

前々無二之覚悟不振他事候之条、弥以可被励御粉骨事頼

存候、仍刀一腰進之候、委細成大寺申含候、恐々謹言、

四二一 大友義統感狀

○岐部文書
大分県史料一〇

至波多要害、岐部左近大夫在城之儀、申付候処、從最前

四二四 田原親家書狀

○成恒文書
增補訂正編年大友史料二四

今度其表敵現形候之刻、至賀来安芸守切寄被差籠、別而被尺粉骨之段承及候、寔御忠貞之次第、不及申候、爰元御出勢之儀、火急之御儀定候之条、其間之儀無緩様、同陣衆可被申談事專一候、殊御感深重之趣、追々以御書可被仰出之由、候間、弥被得其意、可被勵貞心事肝要候、何様一稜取合不可有余儀候、恐々謹言、
十二月廿七日
親家(花押)

成恒越中守殿

四二五 大友家文書錄綱文

○大友家文書錄
大分県史料三三

十二月、義統議討秋月種実、遺志賀安房入道道輝、田北大和入道紹哲、朽網三河入道宗歴、戸次伯耆守鎮連、一万田民部入道宗慶、於豊前中津、志賀道易等会之、兵士称一万余人、諸將移陣於高和、攻長野氏宝森寨、拔之、而陣猪臈、議攻香春城、種実発古所山城、到豊前仙津、乘甚雨、夜襲猪臈陣之不意、大撃之、豊軍死傷若干、敗逃而入中津城、於是義統欲明春進発日田郡、以討秋月勃興、義統、授書于飯田但馬入道麟清、勞其在妙見城、

四二六 大友義統感狀

○渡辺文書
增補訂正編年大友史料二五

前八、平田打廻之刻、遂合戦、勝利之由候、就中其方手之者分捕高名之由、忠儀無比類候、必取鎮、追而可賀之候、弥可抽馳走事肝要候、猶大神中務少輔、小田原左京亮可申候、恐々謹言、
正月十一日
義統(花押)

渡辺石見守殿

四二七 大友義統感狀案

○大友家文書錄
增補訂正編年大友史料二四

前八、平田表、打廻之刻、悪党浮合、防戦之砌、鎮郷被碎手、依被励粉骨、打捕頸、以注文承候、年甫之首途、祝着不斜候、殊被疵之由、感悦無極候、連々、忠意之覚悟、案中存候、必取鎮、可顯其志候之趣、猶宗像権右衛門尉可申候、恐々謹言、
正月十一日
小田原左京亮殿
義統 在判

四二八 大友義統書狀

○永永文書
增補訂正編年大友史料二四

田原近江入道被申談、睨以登城、貞心之覚悟深重之由、紹忍預入魂候、乍案中感悦候、加勢之儀急度相催候間、弥紹忍遂熟談、此節別而可抽忠貞事專一候、必取鎮、可賀之候趣、猶田原親九郎可申候、恐々謹言、
正月十六日
義統(花押)

永永右京亮殿

四二九 大友義統書狀案

○大友家文書錄
增補訂正編年大友史料二五

田原近江入道被申談、睨以登城、貞心之覚悟深重之由、紹忍預入魂候、乍案中感悦候、加勢之儀急度相催候間、弥紹忍遂熟談、此節別而可抽忠貞事專一候、必取鎮可賀之趣、猶田原親九郎可申候、恐々謹言、
正月十六日
飯田但馬入道殿
義統 在判

四三〇 大友義統書狀

○成恒文書
增補訂正編年大友史料二四

田原近江入道被申談、睨以登城、貞心之覚悟深重之由、紹忍預入魂候、乍案中感悦候、加勢之儀急度相催候間、弥紹忍遂熟談、此節別而可抽忠貞事專一候、必取鎮、可賀之趣、猶田原親九郎可申候、恐々謹言、
正月十六日
成恒次郎殿
義統(花押)

四三一 大友義統書狀

○田原龍威文書
增補訂正編年大友史料二五

田原近江入道被申談、睨以登城、貞心之覚悟深重之由、紹忍預入魂候、乍案中感悦候、加勢之儀急度相催候之間、

弥紹忍遂熟談、此節別而可抽忠貞事專一候、必取鎮可賀
之之趣、猶田原新九郎可申候、恐々謹言、

正月十六日

義統(花押)

田原七郎殿

四三二 大友義統感狀

○香下要文書
増補訂正編年大友史料二五

田原近江入道(前)、妙見岳在城之儀申付之処、從最前以同城、
別而辛勞之由悦喜候、每事紹忍被得指南、弥可勵馳走事

肝要候、猶田原新九郎可申候、恐々謹言、

正月二十日

義統(花押)

香志田兵部丞殿

四三三 大友義統書狀案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二四

到今度豊前表四日市切寄、為檢使、差遣候之処、長々遂
在陣、別而被励粉骨、被疵之段、連々之覚悟、令顯然候、
案中候、不始忠意感悦無極候、然者於豊筑間五拾町分坪
紙別之事、預置候、可有知行候、恐々謹言、

正月廿三日

義統 在判

小田原左京亮殿

四三四 大友義統書狀写

○城文書
大分県立歴史博物館

今度其塚無実所之処最前以来四日市切寄二差籠、数度之
防戦軍勞之段令承知候、殊為無足切之在陣感入候、然者
吉村掃部入道事逆意深重之間、於國中不立足候様可下知
候、仍彼跡目朔米田参町并月代壹町分之事、令扶持候可
有知行候、恐々謹言

五月廿三日

義統(花押影)

城出雲守殿

四三五 大友義統感狀

○渡邊文書
増補訂正編年大友史料二四

前朔、於平田表、宇佐郡橋津衆懸合、終日防戦、辛勞之
由候、殊僕從兩人被疵之段、感入候、必追而一段可賀之趣、

猶田原近江入道可申候、恐々謹言、

二月八日

義統(花押)

渡邊加賀守殿

四三六 大友義統感狀案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二四

前朔於平田表、宇佐郡橋津衆懸合、終日防戦、
殊僕從兩人、被疵之段、感入候、必追而一段可賀之趣、
猶田原近江入道可申候、恐々謹言、

二月八日

義統 在判

渡辺加賀守殿

四三七 大友義統感狀

○成恒文書
増補訂正編年大友史料二四

至賀来安芸守切寄、耽籠城、忠意之次第感入候、既近々
出勢之条、安芸守申談、可被励貞心事肝要候、於静謐者、
何様一稜可成其感之趣、猶田原近江入道可申、恐々謹言、

二月八日

義統(花押)

成恒越中守殿

四三八 田原紹忍感狀

○河谷文書
増補訂正編年大友史料二四

前十八、到当切寄、時枝之者共雖取懸候、別而被碎手、
敵兩人被射臥之由候、殊郎從源七郎被疵之趣、感入候、
何様一稜可顯其志事、不可有余儀候、恐々謹言、

二月廿日

紹忍(花押)

元重安芸守殿

四三九 大友義統書狀

○佐田文書
熊本県史料中世二

田原右馬頭惡逆之企、前代未聞之条、誅伐之加下知候処、
親貴家中之人、以順路之覚悟、顯忠意候、然者親貴事、
至鞍懸楯籠之由候之間、不拔足様、可討果才覚、無油断候、
此節郡衆中被申談、可被励忠貞事、從最前、入魂之可為
首尾候、猶重々可申候、恐々謹言、

二月廿一日

義統(花押)

佐田彈正忠殿

四四〇 大友田斎書狀

○佐田文書
熊本県史料中世二

兼日粗申候、内略之儀、令首尾、親貫家中、此方江申組
候者共、顯順路之心底候条、満足此事候、定而、至鞍懸
可桶籠候歟、於于今者、雖可為落去候、万一親貫・如法
寺以下、差堪候者、至佐野表被懸付、此節可被励忠儀事、
肝要候、然者宗龜一筋目為再興、家來之者申合、懇望之条、
家督之儀、至親家申与、一兩日中可為入部之条、其堺來被
申遂、每事堅固之才覚、專一候、遠方候処、早々敷預注進候、
御心懸之次第、案中候、猶重々自是可申候、恐々謹言、
二月廿二日
佐田彈正忠殿

四四一 大友義統書狀

○一万田文書
增補訂正編年大友史料二四

宇目村之内、其方領地十五貫分、諸点役之事永々令免許、
殊可為檢断不入候、併於屋作城誘等者、直可申付之条、
可遂其節事肝要候、為存知候、恐々謹言、
二月廿九日
義統(花押)

一万田市進殿

四四二 大友義統書狀

○吉弘文書
增補訂正編年大友史料二四

其表弥無事之由、珍重候、方角衆被申談、鞍懸之儀、急
度被挫肝要候、然者就浦部表、案中豊前之衆、多分門通

之子細候、随而小倉着之儀、近日到来共候哉、自然通用
之事、候者、從統運有内略、彼家中之者共、向後之得失、
以思慮此節励忠儀候之條、被申達專一候、為存知候、恐々
謹言、
二月廿九日
吉弘太郎殿

義統(花押)

四四三 田原親貫知行宛行狀

○後藤敏宏文書
大分県史料一〇

就今度鞍懸籠城、忠儀之次第、神妙候、仍五拾貫文分、
坪付之前、加袖判充行候、縱雖有先判、面々事、無足之届誠
感悦候之条、聊不可有相違候、以此旨、弥忠勤肝要候、恐々
謹言、
三月二日
親貫(花押)

如法寺右近允殿

四四四 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

田原親貫出浦部城、守鞍懸壘、親家人安岐郷、津崎備前
入道・津崎兵庫助等從之○三月、義統告鞍懸事於宇佐士
久保舍人佐鎮量、励其志、且命所陣辻間村之齋藤紀伊入
道々璣・田村統順・林左京亮・一萬田民部少輔統賢・上
野兵部少輔・実相寺・平井兵部少輔・野上彈正忠・齋藤
市正・白杵刑部少輔・上野隼人佐・白杵左近大夫・胡麻
津留左馬進・田尻太郎・鶴原八郎・田吹左馬助・上野掃

部助・宗像權右衛門入道・寒田藤紀兵衛尉、赴都甲、得
親家指南、以可向鞍懸表、共有書、

四四五 大友義統書狀案

○大友家文書録
大分県史料三三

於其堺、打廻等無油断、被逐馳走之由、感入候、鞍懸于
今相支候之条、弥方角衆申談、可励粉骨之事、簡要候、
猶古庄進允可申候、恐々謹言、
三月五日
久保舍人佐殿

義統(花押)

四四六 大友義統書狀

○鹿子木文書
熊本県史料中世一

近日其元立柄無到来之条、染筆候、堺目無替儀候哉、示
給度候、豊筑表、今程珍子細無之之由候間、專一候、随而、
田原右馬頭逆心顯然之条、爰可加誅伐、前廿一勢差立候処、
不待付人数退散、案中存候、然者、至鞍懸要害桶籠候之条、
不拔足様、堅加下知候、遠聞難有正儀之条、彼是為可申、
以西伯寺申候、其表之儀、弥各被申談、無油断御才覚簡
要候、委細志賀安房入道、可申候、恐々謹言、
三月五日
義統(花押)

鹿子木三河入道殿

四四七 志賀道輝書狀

○鹿子木文書
熊本県史料中世一

近日者、其表御到来依無之、以御書被仰出候、珍重候、然者、田原右馬頭（通稱）惡逆顯然之条、被加御誅伐候、結句、不待付御人数退散候、誠天道之差所、案中存候、親貫事、僅之以人数、要害（江）楯籠候之条、不拔足様、被成、御下知候之間、落去不可移時日候、猶西伯寺（江）被仰含候、恐々謹言、

三月十五日

鹿子木三河入道殿御宿所

道輝（花押）

四四八 大友田齋書狀

○田原達三郎文書
大分県史料一〇

如存知、古庄進（守）允事、義統近辺（江）雖令堪忍候、養父跡目依連続在宅候、鞍懸近方付而、夜白無油断之由候、弟大学习助事、耽爰許（江）召仕候条、旁以進允事、別而可被添御心事肝要候、可被得其意候、恐々謹言、

三月十六日

田原新九郎殿

田齋（朱印）

四四九 田原親家感狀

○安東文書
大分県史料一〇

去（日）鞍懸敵相絡之刻、懸合手火矢仕、粉骨之次第其聞候、神妙候、一城落去之砌、可成其感候、弥辛劳肝要候、恐々謹言、

三月十七日

安東宮内丞殿

親家（花押）

丸山外記允殿

四五〇 大友義統書狀案

○大友家文書録
大分県史料三三

於辻間村、在陣之由候、辛劳察存候、然者至鞍懸表、可被打出時分柄之儀、親家以内談、同日越山肝要候、弥無油断、熟談專一候、雖然、先以都甲境目迄、被差奇、可被申談候哉、殊以条々申旨候、被得其意、每事堅固之才覚、可為祝着候、猶寒田右京入道・田北治部少輔、可申候、恐々謹言、

三月十七日

齋藤紀伊入道殿

義統（在判）

- 林左京亮殿
- 一万田民部少輔殿
- 上野兵部少輔殿
- 実相寺
- 平井兵部少輔殿
- 野上彈正忠殿
- 齋藤市正殿
- 白杵刑部少輔殿
- 上野隼人佐殿
- 村左近大夫殿
- 留左馬進殿
- 田尻太郎殿
- 鶴ノ原八郎殿
- 田吹左馬助殿
- 上野掃部助殿
- 宗像權右衛門入道殿

寒田藤記兵衛尉殿

田村作進殿

右上包（田村作進殿）

義統（天友）

四五一 田原親家知行宛行狀

○萱嶋文書
大分県史料一〇

今般登城供奉之儀、一段神妙之至候、為忠賞、其方本領不足分之儀、令帰附候、弥守此旨、忠儀頼入候、恐々謹言、三月十九日

萱嶋美濃守殿

親家（花押）

四五二 大友義統感狀

○植田潤六文書
大分県史料一〇

今度其表乱念之刻、田原近江入道至妙見岳在城之処、從最前耽令籠城、励軍勞之由候、感人候、倍可抽馳走事、肝要候、恐々謹言、

三月廿三日

植田因幡守殿

義統（花押）

四五三 大友義統感狀

○糸水文書
増補訂正編年大友史料二五

今度其表乱念之刻、田原近江入道到妙見岳在城之処、從最前耽令籠城、励軍勞之由候、感人候、倍可抽馳走事簡要候、恐々謹言、

天正八年
二月廿三日

糸永右京亮殿

義統 (花押)

天正八年
三月廿三日

市丸長門入道殿

義統 (花押)

四五四 大友義統感狀

○成恒文書
増補訂正編年大友史料一五

今度賀来安芸守・福嶋左馬助申談、^(頼忠) 聡令籠城、^(頼忠) 勵軍忠之由候、^(頼忠) 感人候、^(頼忠) 既其堺属案中候之条、^(頼忠) 弥取鎮可加扶持候、^(頼忠) 猶田原近江入道可申候、^(頼忠) 恐々謹言、^(頼忠)
三月廿三日
成恒越中守殿

四五七 大友義統感狀案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二六

今度豊前目乱念之刻、^(頼忠) 田原近江入道至妙見岳在城候之処、^(頼忠) 従最前別而被勵軍勞候、^(頼忠) 既其境属案中候条、^(頼忠) 弥取鎮必可顯其志候、^(頼忠) 委細猶紹忍可申候、^(頼忠) 恐々謹言、^(頼忠)
三月廿三日
竹田津式部少輔殿

四五五 大友義統感狀

○田原儀助氏文書
増補訂正編年大友史料二六

今度豊前国乱念之刻、^(頼忠) 田原近江入道至妙見岳在城、^(頼忠) 別而被勵軍勞之由候、^(頼忠) 祝着候、^(頼忠) 既其境属案中候之候、^(頼忠) 弥取鎮、^(頼忠) 可顯其志候、^(頼忠) 委細紹忍可由候、^(頼忠) 恐々謹言、^(頼忠)
三月廿三日
田原七郎殿

四五八 大友義統感狀案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二六

今度豊前目乱念之刻、^(頼忠) 田原近江入道至妙見岳在城候之処、^(頼忠) 従最前令籠城、^(頼忠) 別而被勵軍勞之由候、^(頼忠) 祝^(頼忠) 其堺属案中候之条、^(頼忠) 弥取鎮可顯其志候、^(頼忠) 恐々謹言、^(頼忠)
三月廿三日
源七兵衛尉殿

四五六 大友義統感狀

○長谷雄權三郎氏文書
増補訂正編年大友史料二六

今度其表乱念之刻、^(頼忠) 田原近江入道至妙見岳在城候之処、^(頼忠) 従最前聡令籠城、^(頼忠) 勵軍勞之由候、^(頼忠) 感人候、^(頼忠) 倍可抽馳走事肝要候、^(頼忠) 恐々謹言、^(頼忠)

四五九 大友義統感狀案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二六

同文
義統 在判
大島但馬守殿
大島長左衛門尉殿

四六〇 大友義統感狀案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二六

同文
義統 在判

四六一 田原親家書狀

○安東文書
大分県史料一〇

従鞍懸雖計策候、^(頼忠) 寄合中最前以来、^(頼忠) 以無別心、^(頼忠) 首尾一通到来候、^(頼忠) 乍案中頼敷候、^(頼忠) 至御座所、^(頼忠) 則遂注進候之条、^(頼忠) 直可被成、^(頼忠) 御感候、^(頼忠) 乍勿論、^(頼忠) 於親家一廉可令賀候、^(頼忠) 弥馳走頼入候、^(頼忠) 恐々謹言、^(頼忠)
三月廿三日
安東宮内丞殿
親家 (花押)

四六一 田原親家書狀

○河野正二文書
大分県文化財調査報告書三七

従鞍懸雖計策候、^(頼忠) 寄合中最前以来、^(頼忠) 以無別心、^(頼忠) 首尾無同意之由、^(頼忠) 乍案中頼敷候、^(頼忠) 至御座所、^(頼忠) 則遂注進候之間、^(頼忠) 直可被、^(頼忠) 御感候、^(頼忠) 乍勿論、^(頼忠) 於親家一稜可令賀事、^(頼忠) 不可有余儀候、^(頼忠) 弥馳走頼入候、^(頼忠) 恐々謹言、^(頼忠)
三月廿三日
親家 (花押)

大島宮内丞殿

四六三 田原親家書狀

○内田文書
大分県史料一〇

從鞍懸雖計策候、寄合中最初以來、無別心、以首尾無同意之由、乍案中頼敷候、至御座所則遂注進候之条、直可被成 御感候、乍勿論、於親家一稜可令賀候之事、不可有余儀候之間、弥馳走頼入候、恐々謹言、

三月廿三日 親家(花押)

内田孫四郎殿
内田彈正忠殿

四六四 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

安岐浦部親貴党士、構罫於赤松村、親家命士卒討之、津崎兵庫□□□首級、親家作感牘、先是、親家登雄度牟礼城、指摩諸兵、田齊・義統授連署書於田村統順、使其同隊士赴木付、議軍事于木付新介、

四六五 大友田斎・大友義統連署書狀案

○大友家文書録
大分県史料三三

於其表在陣、辛勞察存候、殊者、安岐郷之者就手替、親家事至雄渡牟礼、登城之由、到來候之条、当陣衆之儀、木付迄差寄、木付新介被申談、右郷於差搦者、可為国東表

之加勢候、俄之籠城、氣仕候間、彼狀到来候者、即時陳易肝要候、被得其意、聊不可有御油断之儀候、恐々謹言、

三月廿四日

義統 在判
田斎 朱印

田村作進殿

四六六 大友田斎・大友義統連署書狀

○吉弘鎮整文書
増補訂正編年大友史料二五

就安岐郷之者手替、国東表無実所候歟、親家事、至雄渡牟礼登城之由候、寔無心元存候、惡党行、雖不可有差儀候、鞍懸表堅固被相搦、肝要候、爰許勢衆、急度可為着陣之条、其間之儀、雄渡牟礼、別而可被添御心事、可為祝着候、聊不可有油断之儀候、恐々謹言、

三月廿四日

義統(花押)
田斎(朱印)

吉弘太郎殿

四六七 田原親家感狀案

○大友家文書録
大分県史料三三

今度兩郷宗徒之諸士構未練、重々逆乱之体、不及是非候、就夫到赤松村、切取誘、惡党楯籠之条、可討果之通、加下知候之処、最前懸合、頸一分捕之次第、忠貞無比類候、何様一稜、可顯其志之間、弥可被励軍勞事、肝要候、恐々謹言、

三月廿四日

親家 在判

津崎兵庫助殿

四六八 田原親家感狀

○萱嶋文書
大分県史料一〇

今度兩郷宗徒之者共構未練、惡党等令同意、至赤松之村、切取誘楯籠之条、可討果之通、加下知候之処、則落去之刻、頸一分捕之次第、忠貞無比類候、何様一稜可顯其志之間、弥可被抽軍勞之事、可為祝着候、恐々謹言、

三月廿五日

親家(花押)

萱嶋兵庫助殿

四六九 田原紹忍感狀

○蠟瀬文書
増補訂正編年大友史料二五

昨日廿八日、西郡衆於其表相絡候刻、頸一分捕、粉骨之次第無比類候、必一段可賀之候、恐々謹言、

三月廿五日

紹忍(花押)

蠟瀬新五兵衛尉殿

四七〇 大友義統安堵狀案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二六

見岳、睭令籠城、貞心之覚悟感入候、仍来□□□大道寺寄進之地、社家分別紙、任□□□百、寺務簡要候、聊不可有相違候、猶親家、紹忍可申候、恐々謹言、

三月廿六日

義統 在判

波多玄内允殿

四七一 田原親家感状

○萱嶋兵吉文書
增補訂正編年大友史料二五

今度当郷宗徒之諸士構未練、安岐患、党令一致、錯乱之体不及是非候、然処其方事、從最前別而以真心之覚悟、於所々被励軍勞候次第、感悦無極候、因茲從公儀、被成下御書候之条、弥可被抽懇忠事、專一候、何様静謐之刻、無忘却、一稜可顯其志候、為御存知候、恐々謹言、

（天正八年）
閏三月四日 親家（花押）

萱嶋美濃入道殿

四七二 田原親家感状

○成恒文書
增補訂正編年大友史料二五

今度、自他国宗徒之者共、雖構未練候、從最前無變化、到賀来安芸守切寄差籠、軍勞之趣、無比類候、殊去月廿八、西日悪党現形之刻、於仲津河表、別而被碎手之通案中候、何様紹忍申談、一稜可顯其志候条、此節弥可被抽大忠事肝要候、恐々謹言、

（天正八年）
閏三月五日 親家（花押）

成恒越中守殿

四七三 大友田斎書状

○佐田文書
增補訂正編年大友史料二五

就国東表之儀、先日者早々敷示給候、被添心候次第、案中候、先書如申候、爰許出勢之儀、愚老以出府、義統申談候之条、来十日、十一日之間可為著陣候、連々承候首尾此節候条、別而可被励忠儀事肝要候、年寄中、南郡衆、馳走不可有余儀之由候条、被得其意、無油断心懸專一候、仍為音信猪股、送給候、懇志之趣祝著候、則賞翫此事候、猶重々可申候、恐々謹言、

（天正八年）
壬三月五日 田斎（朱印）

佐田彈正忠殿

四七四 田原紹忍書状

○瀧貞英文書
增補訂正編年大友史料二五

就今度郡内動乱、諸人覚悟雖無実所候、其方事依無別儀、最前已来惠良帶刀兵衛尉申談、動等之刻、馳走之由神妙候、然上者、早々屋敷可下居事肝要候、自然風說之儀候共、聊不可有氣遣候、仍中詰一折到来、祝着候、恐々謹言、

（天正八年）
閏三月十日 紹忍（花押）

衛藤弥三郎殿

四七五 大友義統書状

○田原達三郎文書
大分県史料一〇

帶刀安芸入道事、去年中至高田要害、睨在城、初春以来者、屋山岳江令登城、統運別而申談由候、然処孫宮德母、对宗雲不孝之由、不及是非候、宮徳幼稚之間、領地被官以下令裁判、陳旅之奉公不可有緩之段、宗雲江以状申候、心中之儀候間、每事可被添御心事、肝要候、為存知候、恐々

謹言、

（天正八年）
閏三月十三日

田原新九郎殿

義統（花押）

四七六 田原親家感状

○安東文書
大分県史料一〇

昨日十三、鞍懸表防戦之刻、被疵之由、軍忠状到来、披見感入候、今度最前以来之忠儀、非忘却候之間、必於向後可賀候、恐々謹言、

（天正八年）
閏三月十四日 親家（花押）

安東宮内允殿

四七七 田原紹忍感状

○安東文書
大分県史料一〇

其表動之様体、預注進候、先々鞍懸矢入勝利之趣、尤珍重候、殊宮内丞被疵之由、粉骨之次第、無比類候、然者到此方茂、名代遣候、是又被疵候、彼是忠意之至候、必一段可賀之候、恐々謹言、

（天正八年）
壬三月十四日 紹忍（花押）

安藤大膳亮殿

四七八 大友義統書状案

○大友家文書録
大分県史料三三

親家登城已来、別而馳走之由、其間候、乍案中悦入候、

殊安岐郷之者共、一雅意無止事之条、諸勢差遣、可討果之段、加下知候、雖○申迄候、当城倍以堅固□覺悟、至

親家、可勵軍忠事肝要候、必取静、可□□□□、恐々謹言、

○天保八年三月十六日

備前入道殿

義統 在判

四七九 大友義統書狀

○吉弘鎮繁氏文書
增補訂正編年大友史料二五

前十三 方角衆被申談、至鞍懸被取懸、小屋少々焼崩之由、其聞候、別而粉骨之段、感悅候、南郡衆之事、一昨日十四、中途迄出張之条、急度可為着陣候、弥家中之者共、被加諫、御馳走肝要候、恐々謹言、

○天保八年閏三月十六日

吉弘太郎殿

義統 (花押)

四八〇 大友義統書狀

○問注所文書
福岡県柳川市

其表立柄、以条々示給候、乍案中祝着候、今度於其国、被抽諸家懇忠候次第、誠無比類候、早速至境目雖可差寄候、田原右馬頭鞍懸之楯籠遂数日候事、自他之覚不可然候間、急速打崩、諸勢如其表可打出覚悟候、聊不可移時日候、然者蒲池民部少輔事、改先非累代之忠義、可連続之由候、存分雖有之、既宗雪戰死、為其感令許容候、下目之儀如此候間、弥統康・統景被申談候条、諸軍着陣今少之事候間、親類家中之人等被申進、別而可被励御粉骨事頼存候、將亦訴訟之儀、以口能承候趣、得其意候、此

節之忠意、争可有忘却候哉、何様分国中諸侍之聞、一稜可顯其志内意無別儀候、其上統康事者、不混余家事候間、

倍貞心之胸臆、可為喜悅候、仍銀子三十疋目進之候、先以寸志斗候、委細猶浦上左京入道可申候、恐々謹言、

○天保八年閏三月十九日

問注所刑部太輔殿

義統 (花押)

四八一 大友円齋書狀

○問注所文書
東大史料編纂所影写本

蒲池民部少輔依順路之覚悟、逆意之者至鎮並宅所、雖取懸候、無差儀之由候、案中候、然者出張可差急之通承候、度々如申候、雖非油断候、浦部表閉目未道行候之条、延引無是非候、彼表近日於一着者、其堺行不可有予儀候、次日田親永退出絶言語候、雖然如此之牢人已下之儀者、立入不及氣仕候条、不及申候、仍当城之儀、今度抽其国衆、被顯心底候故、堺目于今無異儀候、数度申候様、忠貞無比類存候、今少之儀候条、倍堅固之心懸專一候、次加力之事、至義統令入魂候、爰許方々之調繁多之条、先々聊顯志之由候、猶重々可申候、恐々謹言、

○天保八年壬三月廿日

問注所加兵衛尉殿

円齋 (朱印)

四八二 大友義統書狀

○津崎真澄文書
增補訂正編年大友史料二五

度々如申候、親家登城以來、別而馳走深重之由、其聞候、乍案中悦入候、殊安岐郷之者共、弥一雅意之企、無止事

之条、諸勢差遣、右之悪党可討果之段、加下知候、雖無申迄候、当城倍以堅固之覚悟、至親家可勵軍忠事、肝要候、

必取鎮、可成其感候、恐々謹言、

○天保八年閏三月廿六日

津崎大和入道殿

義統 (花押)

四八三 大友義統書狀

○佐田文書
熊本県史料中世二

先書如申候、宮成右衛門尉・益永民部少輔・時枝備後守・橋津佐渡入道中組、為手切所々狼藉之振舞、不及是非候、当郡衆中、可被励忠儀時節、不可過之候之条、各被申談、右之悪党可被討果事、專一候、殊田北大和入道成敗之儀、申付候処、不能一戰、如熊牟礼逃登候之間、即時取懸、可討捕事、指掌候、自然落行候者、可被抽忠貞事、簡要候、聊不可有緩之儀候、恐々謹言、

○天保八年卯月二日

佐田彈正忠殿

義統 (花押)

四八四 大友円齋書狀

○田原達三郎文書
大分県史料一〇

猶々紹鉄討果候者、以其競南郡衆之事、自彼表直二安岐表へ、可差寄之由、兼而議定候条、此節者、不可有緩候、此間諸軍其表へ遲陳之儀も、彼者さハリ故、不成立候、其子細者、親家として、存知有ましく候、紹鉄一人討果候者、諸方之覚、悉可相替候間、爰元才覚、聊非油断候、濃々之儀、治右入まで、追而書二申候、

可被得其意候矣、

一昨日^{朔書状}、昨日^{午刻}着府候、則返事雖可申候、用物
従白杵依召越、令遅々候、其元入用儀候哉、任承銀子参
貫目、調進之候、寔輒事^二候、不限彼儀、何篇用所等、

不被心置承、可得其意候、然者田北紹鉄成敗入組之趣、
此四五日前、帯刀宮内丞へ申含差返候之処、此書面^二無
其沙汰候、如何^二候哉、然者紹鉄事、熊牟礼と申山ほと
りへ、俄取あかり、か、ミ居候て、言語道断浅間敷体候、

平生之口^二はたと替たる由、只今も到来候、南郡衆之事、
一昨日^二狭間村^ラ打立、昨日重々差寄候由候間、今日日
中可落去候歟、宇佐郡其外悪心之族、紹鉄誅伐付而、色

立候哉、案中候、紹鉄可討果事者、指掌候之条、吉左右
不図可申遣候、其間之儀事、当城用所第一候之条、夜白
不可有油断之儀候、猶本弾正・立川主水申含候、恐々謹

言、
卯月三日^{天保八年} 田原新九郎殿^{親憲}
円斎^{天友}(朱印)

四八五 大友義統感状

○頃田叢史所取帆足文書
増補訂正編年大友史料二五

今度至浦部表、在城之儀申付候処、従最前馳走、殊度々
働之刻、別而軍旁之次第、感入候、弥可励粉骨事、肝要候、
必取鎮、一稜可賀之候、恐々謹言、
卯月九日^{天保八年} 義統^{天友}(花押)

帆足九郎殿

四八六 大友よし統感状写

○到津文書
増補訂正編年大友史料二五

今度田原右馬頭依逆心、其堺令錯乱候処、無別儀覚悟、
殊就鞍懸近方、夜白無油断よし、軍旁感入候、必追而一
段可賀之もの也、
卯月十日^{天保八年} よし統^{天友}(花押影)

大河内右京とのへ
「ふんこはやミノくん」

四八七 大友義統感状

○佐田秀穂文書
増補訂正編年大友史料二五

今度田原右馬頭^{親憲}逆心、其堺及錯乱候処、無別儀覚悟、殊
鞍懸近方付而、夜白無油断軍旁之由、感入候、必追而一
段可賀申候、恐々謹言、
卯月十日^{天保八年} 義統^{天友}(花押)

(後欠)

四八八 大友義統感状

○長野末夫文書
大分県史料一一

今度田原右馬頭^{親憲}以逆心、其堺令錯乱候処、無二之覚悟、
殊就鞍懸近方、夜白無油断、軍旁之次第感入候、弥可励
忠儀事、肝要候、必追而一段、可賀之候、恐々謹言、
卯月十日^{天保八年} 義統^{天友}(花押)

長野因幡守殿

四八九 大友義統感状

○長野康雄文書
大分県史料一一

今度依田原^{右馬頭}□□逆心、其堺令錯乱候処、無二之覚悟、
殊就鞍懸近方、夜白無油断、軍旁之次第、感入候、弥可
励忠儀事、肝要候、必追而可賀之候、恐々謹言、
卯月十日^{天保八年} 義統^{天友}(花押)

長野中務入道殿

四九〇 大友よし統感状

○小野尾文書
大分県史料一一

今度田原右馬頭^{親憲}依逆心、其堺錯乱候之処、無別儀覚悟、
殊就鞍懸近方、夜白無油断軍旁のよし、感入候、必追而
一段可賀もの也、かしく、
卯月十日^{天保八年} よし統^{天友}(花押)

小野尾次郎三郎とのへ

四九一 大友よし統感状

○豊田文書
大分県史料一一

今度田原右馬頭依逆心、その堺さくらん候処、無別儀覚
悟、ことに就鞍懸近方、夜白無油断軍旁の由、感入候、
必追而、一段可賀之もの也、かしく、
卯月十日^{天保八年} よし統^{天友}(花押)

長田鶴若とのへ

四九二 大友よし統感状

○児玉文書
大分県史料一

今度田原右馬頭依逆心、其堺錯乱之処、無別儀覚悟、殊就鞍懸近方、夜白ゆたなく軍勞のよし、感人候、必追而一段可賀之もの也、かしく、

卯月十日

よし統 (花押)

松ヶ尾新次郎とのへ

四九三 田原親家書状

○安東護文書
豊後高田市大字佐野字丸山

鞍懸要害于今相□候故、夜白無油断辛勞之趣、寔神妙候、弥切寄之□、堅固之格護肝要候、殊以目糸、言上之旨、被成承知候、必鞍懸落去之砌、可成一感候、猶託广佐渡入道可申候、恐々謹言、

卯月十五日

親家 (花押)

丸山外記 允殿

丸山三郎左衛門尉殿

各中

四九四 田原親貫書状案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料 五

当城之儀、耕雲、親武、以才覚、最前被執付、剩粮等如□被調置候故、今度家来雖錯乱候、聊無氣仕、令籠□候、無隻之忠儀異他候、殊芸州加勢之儀、到輝□、□景、今

度可差上之由申付候処、不覃口能、可有□□□□通大慶候、然者二字之儀申組候、弥一家□□□□末共二別而可被添御心事、頼存候、恐々謹言、

□□□□

在判

田原式部入道殿

四九五 大友家文書録綱文

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料 二五

義統遣諸兵、大攻田北紹鉄熊牟礼城、阿曾野合戦、□□而逃去、欲赴秋月、路経日田郡五馬莊井手口松原村、津久右衛門尉、力戦、善内兵衛尉戦死、久右衛門尉、自斬紹鉄、得其首、被刀創鑿創十一所、堤鎮方亦有戦功、其族堤源介・堤四郎右衛門尉・被官池邊新九郎、各被創、獲首級、族堤藤内兵衛尉、被官上野平右衛門尉、池邊式部丞・五本木弥兵衛尉・中間彦三郎・堤源介被官長嶋助太郎、各被疵、族堤新右衛門尉、堤勘介・堤甚左衛門尉小者新九郎戦没、其余養父右馬允負創、得首級、宝珠山源五兵衛尉斬紹鉄被官田北安芸入道、宝珠山與力二串新三郎被官、或被創、或戦死、紹鉄族十法寺紹座主以下、従兵数十輩、悉死而城陷、実是月十三日也、先是、義統慕故田北相模守鎮周忠死、使其族田北弥十郎統員、以為田北家之宗、且使田北神九郎鎮忠、與田北加賀入道、同下熊牟礼城、従統員、

四九六 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三

十二日、我兵屠佐井木豊、其豊嘗未詳、田染士勤備鞍懸、久保鎮量有戦功、義統授感贖於久保、

四九七 田原親家感状

○安東文書
大分県史料一〇

去十二、西来切寄討崩候之刻、分捕高名之段、感入候、何様静謐之砌、一稜可賀之之間、弥可励軍忠事、肝要候、恐々謹言、

五月十四日

親家 (花押)

堀木宮内丞殿

四九八 大友義統感状案

○大友家文書録
大分県史料三三

去十二、佐井木切寄打崩候之刻、田染給人中鞍懸為押勢、被励粉骨之由候、軍勞之段感人候、弥申談、可抽貞心事肝要候、必以時分、可賀之候、恐々謹言、

五月十四日

義統 (花押)

久保舍人允殿

四九九 大友義統書状

○香下要氏文書
増補訂正編年大友史料 二四

田原近江入道到妙見岳、在城之儀申候処、從最前同城、別而辛勞之由、令悦善候、毎年紹忍被得指南、弥可勵馳走事肝要候、猶田原新九郎可申候、恐々謹言、
(天正八年)

五月廿日

香志田兵部丞殿

義統 (花押)

五〇〇 田原親家恩賞預ケ状

○津崎文書
大分県史料一〇

今度親貴企逆意、海陸以行動、自他国、既当家及破滅之処、一味中申談後、来繩郷引割令帰陳、剩同日以猛勢、鹿越表江雖相働、到国東打入候之条、令敗北、属御勝利候、別而忠儀之至、不異他候、為其償、去月佐渡入道先給所々在之、不残段歩、并俣見役職之事、預遣之候、下地云、土貢云、守此旨、全知行肝要之状、如件、
(田原)

天正八年五月廿六日

津崎大和入道殿

親家 (花押)

五〇一 大友義統書状

○佐田文書
熊本県史料中世二

度々如申候、至鞍懸表、諸軍可差寄之段、加下知候、然者郡衆之事、可被申談、此節以乘陳、可被勵忠貞事、肝要候、自然未断之人於有之者、從衆中茂以交名承、可得其意候、委細猶田原近江入道可申候、恐々謹言、
(天正八年)

六月一日

佐田彈正忠殿

義統 (花押)

五〇二 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

六月 鞍懸攻戰、志津利治部少輔有戰功、二十一日、宇佐郡合戰、大津留民部少輔・怒留湯中務丞・厚右近丞有軍勞、義統授感牘於志津利・怒留湯・厚、
(天正八年)

五〇三 大友義統感状案

○大友家文書録
大分県史料三三

今度於鞍懸表合戰之刻、別而軍勞、就中以刀打、被勵粉骨之由候、感悦候、弥馳走可為喜悅候、必取鎮、一稜可賀之候、恐々謹言、
(天正八年)

六月十三日

志津利治部少輔殿

義統 在判

五〇四 田原紹忍書状

○河野常好文書
大分県史料二六

就鞍懸表行之儀、先日被抽粉骨之由、案中候、重々刃等之儀、於馳走者、一跡可請御懸專一候、猶用口上候、恐々謹言、
(天正八年)

六月廿二日

河野彈正忠殿

紹忍 (花押)

五〇五 大友義統合戰手負注文一見状

○佐田文書
増補訂正編年大友史料二五

節々鞍懸患党等懸合、被勵軍勞候趣、誠神妙之至候、静謐之刻、何様可賀之候、仍塩硝十斤・玉百五十、遣之候、猶託摩佐渡入道可申候、恐々謹言、

天正八年六月廿二日、於宇佐郡上田表防戰之刻、佐田彈正忠鎮綱親類家中之人、依勵粉骨被疵之衆着到銘々令披見訖、
(天正八年)

佐田宮内丞 矢疵

賀来次郎左衛門尉 手火矢疵

松木備中守 手火矢疵

仲間藤三郎 矢疵

賀来采女佐 矢疵

已上

五〇六 大友義統感状

○河野正文書
大分県文化財調査報告書三七

今度田原右馬頭、以逆心、鞍懸楯籠候処、其方事、從最前、古庄進允以同心、度々勵軍勞之由、感悦候、必取鎮、可賀之候、恐々謹言、
(天正八年)

六月廿四日

渡邊加賀守殿

義統 (花押)

○渡邊敏喜代文書 大分県文化財調査報告書 第三七二モ同文ニ文書アリ。

五〇七 田原親家感状

○安東文書
大分県史料一〇

〔天正八年〕
七月一日

〔前原〕
親家（花押）

荒木伝兵衛尉殿

恐々謹言、

安東宮内丞殿

〔前原〕
親家（花押）

〔天正八年〕
七月十八日

〔天正〕
義統（花押）

有安帶刀允殿

〔前原〕
親家（花押）

一萬田左吉入道殿

丸山外記允殿

〔前原〕
親家（花押）

五二〇 田原親家書狀

○田北憲明文書
大分県史料一三

五二三 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

其外郷内一揆中

五〇八 大友義統感狀

○問注所文書
増補訂正編年大友史料二五

雄渡牟礼籠城以來、別而御辛勞之統、雖非忘却候、于今一稜不顯志候事、本意之外候、必闕地次第、拾五貫足可令合力候、恐々謹言、
七月十日

〔前原〕
親家（花押）

〔天正八年七月〕
□□□□□□安岐皇親貴党所擬也、津崎兵庫助□□□□□□之、
〔天正〕
田斎亦感田村統順軍功、授書、

就日田郡表之儀早速示給候、祝着候、昨日如到来者、鷹尾事打崩放火之由候、先以簡要候、弥堅固加下知候之条、案中不可有程候、然者、今度於当城籠被逐防戦、被得勝利之由候、不始忠意令感悦無極候、殊保坂藤兵衛尉戦死之由候、不便之儀候、別而可被賀

櫛木源内允殿

五一一 大友義統書狀写

○碩田叢史所収清田文章
大分県立図書館蔵

五一四 田原親家感狀案

○大友家文書録
大分県史料三三

之候、急度下目行之儀可相催之間、倍可被抽馳走事、可為喜悦候、猶朽網三河入道可申候、恐々謹言、
七月六日

昨日十四至安岐切寄、被取懸、終日被逐防戦、依被碎手、家中之人等被疵、粉骨之由候、寔忠意之覚悟、貞心感悦無極候、弥被申談、以詰陳可被取崩誠意之由候、案中候、雖無申迄候、手堅有熟談、可為御高名事肝要候、猶浦上長門入道可申候、恐々謹言、
七月十五日

□十九、於切寄構口、頸一分捕之次第、忠意□□□候、何様靜謐之刻、一稜可賀之候条、弥可被励□□事、可為祝着候、恐々謹言、
〔天正八年〕
七月十九日

〔天正八年〕
七月六日

〔天正〕
義統（花押）

問注所刑部少輔殿

〔前原〕
津崎兵庫助殿

〔前原〕
親家 在判

五〇九 大友田斎書狀

○荒木たけ文書
増補訂正編年大友史料二五

清田新五右衛門尉殿

五一五 大友田斎感狀

○大友家文書録
大分県史料三三

度々如申候、親家入郷以來、于今別而馳走之由、從親家切々依入魂、令承知、乍案中感悦候、然者、諸軍至安岐郷切寄、取懸候之条、各申合、弥励軍忠、親家於作外聞者、愚老満足不可過之候、委細猶、岐部大膳入道江申含候、恐々謹言、
七月十日

五二一 大友義統感狀

○一万田文書
大分県史料九

〔天正八年〕
七月十日

前十四、至安岐切寄、取懸防戦之刻、其方依碎手、被疵之由候、忠貞之次第感悦候、必取鎮可賀申候、為存知候、

於其表長々在陳、殊近日者、至安岐切寄、諸勢依詰寄、夜白軍勞之由承候、心懸之次第、感悦候、就中從最前馳走之条、別而御辛勞察存候、弥可被励忠意事、可為祝著候、猶重々可申候、恐々謹言、
〔天正八年〕
七月廿日

〔天正〕
田斎（朱印）

〔天正八年〕
七月廿日

〔天正〕
田斎（朱印）

田村作進殿

五二六 大友義統書狀

○問注所文書
增補訂正編年大分史料二五

○義統、使厚彈正忠、名統英十四日安岐畷合戰、一萬田左吉入道力戰、被創○十五日、親貫當又出萬○津崎兵庫助擊之、從士被創、親家兩回作感牘、義統亦○授書厚氏一萬田氏○大津留氏授大津留書雖在二、十二日聚類載于此

前廿、至当城、秋月以下之惡克取懸候之刻、被遂防戰、

惡逆之族、數多被討果頸到來、勝利之次第感悅無難力□□□候、

統虎・統景粉骨無比類候、弥可被励忠貞事、頼存候、殊

浦部表為閉目、朝見村江奇陳道途、旁以吉左右示給、祝

着深重候、猶志賀安房入道可申候、恐々謹言、

七月廿四日

義統 (花押)

問注所刑部太輔殿

五二七 大友義統感狀

○一萬田文書
大分県史料九

前十四、於安岐郷切寄一戰之刻、依碎手被疵之由、粉骨

之次第感入候、弥可励馳走事、簡要候、必取鎮、一段可

賀申候、恐々謹言、

八月三日

義統 (花押)

一萬田左吉入道殿

五二八 大友家文書録綱文

○史料編纂所影写本
大分県史料三三

八月五日、親貫党兵出塁、襲親家陣、津崎兵庫助力戰○
十三日、鞍懸攻戦絹懸口攻戦、大津留大膳亮被創、有功

五二九 田原親家感狀写

○頃田叢史津崎文書
大分県史料一〇

去五、切寄惡党取出候刻、寄之衆被申談、最前懸合、別而

被竭軍旁之趣、案中候、其表之儀、近々可属勝利之上者、

何様銘々、可成其感候之間、弥可被励忠儀事、肝要候、恐々

謹言、

八月七日

親家 (花押影)

津崎善兵衛尉殿

五三〇 田原親家感狀案

○大友家文書録
大分県史料三三

去五、切寄惡党取出候処、最前懸合、別而被竭粉骨之通、

寔心懸之次第案中候、弥此節可被励忠貞事、可為祝著候、

何様静謐之刻、一稜可顯其志候、恐々謹言、

八月七日

親家 在判

津崎兵庫助殿

五三一 大友田斎書狀案

○予陽河野盛衰記
愛媛県史資料編古代・中世

至武吉、以飛脚申候之条、染筆候、今度其許上国之刻、

始中終如申候、浦部表為閉目、一勢差遣候、就中安岐切

寄之儀、海上之通路、於不相留者、差堪儀茂可有之条、

從其表往反之船、堅可被加制止事、連々、武吉可為入魂

之首尾之由申候キ、然ニ、三日以前、粮船安岐之湊江、

雖可推入催候、此方警固依取出、其儘推退候条、日出津越

付送相究候之処、至右切寄通用ノ証扱等、顕然候、因茲、

船頭舟子以下、則一途可申付之段、自義統陣所、雖申越候、

武吉家中之人、上乘之由、其間候之間、先以差延候、乍

勿論、至上下之船、上乘之儀者、更不珍候条、不及口能候、

當時取詰候於敵城、粮運送之船江、為武吉家来、馳走無

是非存候、雖然不能一屆、可討果事、累年武吉愚老申談

候統、相違之様候条、至義統者、強而令助言、以早船申候、

武吉内存之旨、急度承、可得其意候、聊不可有油断之儀候、

恐々謹言、

八月十三日

田斎 判

五三二 田原親家感狀案

○大友家文書録
大分県史料三三

昨日十五、切寄惡党取出候之処、最前懸合、別□□□□、

殊郎從被疵之趣、忠儀無比類候、何様静□□□□□□□□、

顯其志候、恐々謹言、

八月十六日

親家 在判

助殿

五二二 大友義統合戰頸手負注文一見狀

(大友義統)
(花押)

○文化庁蔵若林文書
大分県史料三五

天正八年八月廿日従上表、兵船立下、於安岐切寄表懸合

防戦、依被碎手、退散之刻、向地室富口迄付送、諸警固

船歸津之砌、同廿二若林中務少輔敵船一艘切取、鎮興自

身分捕高名、其外親類被官討捕頸着到、銘々加披見訖、

頸一野田部右衛門 若林中務少輔 討之

頸一小田原丹後 若林 因幡守 討之

頸一 若林九郎兵衛尉 討之

頸一 幸野 勘介 討之

頸一 丸尾新五兵衛尉 討之

頸一 合澤 市介 討之

被疵衆

首藤源介

三郎右衛門

五郎兵衛

太郎左衛門

已上、

五二四 田原親家感狀

○菅嶋文書
大分県史料一〇

前十五、切寄悪徒等取出候之処、別而碎手則追籠、誠以

軍忠之次第、感人候、何様静謐之刻、一稜可賀之候、恐々

謹言、

八月廿日

萱嶋新五兵衛尉殿

五二五 秋月種実書狀

○秋原充文書
増補訂正編年大友史料二五

急度令啓候、仍去十二、田染表迄親家出陣之由候、雖不可

有差儀候、其表無油断事令覚候、日田口之儀、要害歴々

取誘、無緩兼日申付候間、縦於彼口少人数雖被差置候、

心安候間、一味中申談、於其境可取出事、聊不可有緩候、

殊更龍造寺方、今程手前心安候間、是又相心之儀、不可

有余儀候、尚敵表之体、被聞合可預御左右候、恐々謹言、

八月廿日

萩原山城入道殿御宿所

五二六 大友義統書狀

○渡辺文書
増補訂正編年大友史料二五

今度、最前以来、寄合中切寄取誘、折々分捕高名之段、

感入候、然者訴詔之儀得其意候、一稜可申付之趣、猶田

原近江入道可申候、謹言、

八月廿一日

四日市渡邊寄合中

五二七 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

八月廿日

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

五二八 大友家文書録綱文

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二五

浦、援田原親貫、若林鎮興、逆擊之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

浦、授田原親貫、若林鎮興、逆襲之、遂安岐壘下、

五三一 田原親貫恩賞宛行狀案

○大友家文書錄
大分県史料三三

就今度不慮之成立、至鞍懸、令登城、芸筑以加勢、遂本
意候段、紹閑依連々堅慮之覚悟、彼一城被執付置候故、
此節一家再興之儀、無比類候、恰云、恰云、御辛勞之統、
何様生中不可有忘却候、為加恩、俵田五拾貫分事、令裁
許候、全可有領知候、柳不可有相違之狀、如件、

天正八年八月廿三日

親貫 在判

田原式部入道殿

五三二 大友義統感狀

○賀來八太郎文書
増補訂正編年大友史料二五

賀來安芸守・福嶋佐渡守書狀具加披見候、然者、野中兵
庫頭至兩切寄違乱深重之段、折々注進到来之条、鎮兼江
度々雖申遣候、無其実之由候間、重々差遣檢使可申理覚
悟候、可被得其意候、諸郷行之儀、近々可加下知候之条、
其間之儀堅固之以地体、弥可勵馳走粉骨事專要之由、能々
可被申聞候、近年佐渡守・安芸守忠貞之次第、争可有御
忘却候哉之条、寄々御入魂簡要候、委細用口上候之趣、
猶浦上長門入道可申候、恐々謹言、

八月廿八日

義統 (花押)

田原近江入道殿

五三三 田原親貫感狀

○長野文書
増補訂正編年大友史料二五

去廿三日、於安心院合戦之時、粉骨候由、悦喜候、弥被
拔忠筋候、太可然候、一段可賀申候、恐々謹言、

八月廿八日

親貫 (花押)

長野宮内少輔殿

五三四 大友義統感狀

○成恒文書
増補訂正編年大友史料二五

今度、西表之悪党令現形候之処、其方事、切寄取誘、別
而抽軍忠之段、田原近江入道注進到来候、藏入候、雖無
申迄候、弥可勵粉骨事、可為喜悅候、必取鎮、一稜可申
與候趣、猶紹忍可申候、恐々謹言、

八月卅日

義統 (花押)

成恒越中守殿

五三五 大友義統感狀

○川谷文書
増補訂正編年大友史料二五

今度、西表之悪党令現形、其方至切寄取懸防戦之刻、每
度得勝利之由、田原近江入道注進到来候、従最前忠貞之
覚悟、今以無變化候之事、向後永々不可有忘却候、殊掃
部助左介戦死之由、忠儀無比類候、併不使之儀候、必取鎮、
至彼跡目、一稜可申與候、仍手火矢一挺并玉葉進之候、
弥可抽粉骨事可為喜悅候、委細猶紹忍可申候、恐々謹言、

八月卅日

義統 (花押)

元重安芸守殿

五三六 大友田斎書狀

○惠良文書
大分県史料八

義統陣所為見舞、此一兩日以前、令越山候処、早々示給候、
祝着候、於其表長々在陣、御辛勞雖察存候、今少之儀候条、
別而堅固之才覚、不及申候、鞍懸之儀、近々絹還江、可
詰寄之由、加下知候間、落去不可有程候、愚老事茂、今
程者、以滞在每事、義統可令熟談覚悟候条、節々預入魂、
可得其意候、猶重々可申候、恐々謹言、

九月三日

田斎 (朱印)

一萬田三河入道殿

五三七 鎮方書狀

○河野常好文書
大分県史料二六

今度鞍懸可取崩之由、各心懸之段、銘々遂言上候之処、
至鎮方忝 御書致頂戴候、然者、今夜之一行於相調者、
其方拘尾藤名之事、為被官給、可令扶持候、涯分可抽忠
貞事、肝要候、恐々謹言、

九月五日

鎮方 (花押)

河野彈正忠殿

五三八 大友義統感狀

○田原庸平文書
増補訂正編年大友史料二五

追々預注進候、殊於四日市切寄、悪党取懸候処、得勝利、
悪逆之族数十人討捕之由到来、感悦無極候、先書如申候、
今度渡辺寄合中懇忠之次第、至于今令首尾候事、誠無比

類候、為忠賞遣判形候、從紹忍能々相心得可被申聞候、

隨而、所々切寄倍堅固之御才覺肝要候、明日以白杵左近

大夫可申之条、先以閣筆候、恐々謹言、

九月五日

義統(花押)

田原入道近江殿

五三九 大友義統知行預ヶ状

○渡辺文書
増補訂正編年大友史料二五

(前文欠)

猛勢懸合、則切崩、數十人討捕、高名之次第、無比類候、

然者、為其實、至寄合中、百町分之事、預遣候、知行之所、

委曲田原近江入道可申候、恐々謹言、

九月五日

義統(花押)

四日市切寄

渡邊寄合中

五四〇 大友義統知行預ヶ状

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二五

合則切崩、數十人討捕、高名之次第、
其賞、至寄合中、百町分之事、預遣候、
田原近江入道可申候、恐々謹言、

九月五日

義統(花押)

四日市切寄渡邊寄合中

九月五日

義統(花押)

四日市切寄渡邊寄合中

五四一 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三三

義統命親家、屢攻鞍懸・安岐塞壘、七日、鞍懸攻

尾放火、十三日、安岐畷高槽口合戦田村統順自戦被創○

僕從孫三郎亦負創○千部口合戦○厚統英○得首級、義

統授感贖於田村統順○古庄氏、亦得田斎感書其書月日等
後年破断矣

五四二 田原親家感状

○安東文書
大分県史料一〇

昨日、豊前表悪徒等、為鞍懸加勢、取出之候処、早々

懸合、別而被竭粉骨、不移時剋被追崩之通、軍忠無比類候、

何様静謐之砌、一稜可成其感候、恐々謹言、

九月七日

親家(花押)

安東宮内丞殿

五四三 大友田斎書状

○佐田文書
増補訂正編年大友史料二五

对葛西宗釜一通之趣、具令披見候、昨日八日、城井、長

野以下之悪党、赤尾三河入道宅所江取懸、村中令放火、

於切寄雖詰寄候、以堅固之格護、敵数多仕付、分捕高名

之段、案中存候、鎮綱好之由候条、弥励順路之忠儀候之様、

入魂肝要候、殊野仲事無心元様申散候哉、不及是非候、

遠聞無実所候条、替事候者、重々承、可得其意候、当郡

中之儀、於于今者、紹忍・鎮綱被申合、才覺可入砌候之間、

別而懇忠之御心懸專一候、愚老事、先月已来爰元江滞在

候、節々不示給候、如何候之由相存候、但不可有重暇之段、

令校量候旨、猶重畳可申候、恐々謹言、

九月九日

田斎(朱印)

佐田彈正忠殿

五四四 大友田斎書状

○佐田文書
増補訂正編年大友史料二五

主殿助罷越、其表立柄申候趣、具令承知候、当郡事、弥

無実所之由候、不及是非候、雖然麟珠・鎮綱江申合、其

堺堅固被差揚候者、敵行不可有差儀候、至秋月堺目、從

日田郡一動申付候間、西目之悪党、敗北可為必定候、連々

申談候首尾此節候歟、愚老事、爰元江滞留之条、每事預

入魂、義統以熟談、可加下知候、於委細者、主殿助申合候、

為御存知候、恐々謹言、

九月十日

田斎(朱印)

佐田彈正忠殿

佐田薩摩入道殿

五四五 大友義統感状

○長泉寺文書
増補訂正編年大友史料二五

前十三、於安岐切寄高槽口防戦、依碎手、被官赤嶺、三允

被疵之由、粉骨之次第感入候、必取鎮、可賀之候、恐々

謹言、

九月十五日

義統(花押)

但馬隼人佐殿

五四六 大友義統感狀案

○大友家文書錄
大分県史料三三

前十三、於安岐切寄高槽口防戰、依被碎手、自身被疵之由、粉骨之次第、忠儀無比類候、殊僕從孫三郎負手之由、旁以感悅無極候、弥可預御馳走事、肝要候、必取鎮、可賀申候、恐々謹言、

九月十五日

義統 在判

田村作進殿

五四七 大友義統感狀案

○中島文書
増補訂正編年大友史料三五

今度最前已來、至高家切寄差籠、以順義之覚悟粉骨之由、誠感入候、弥可勵貞心事專一候、必取鎮、一稜可賀之候趣、

猶田原近江入道可申候、恐々謹言、

九月十五日

義統

中島伊予守殿

五四八 大友義統感狀案

○大友家文書錄
大分県史料三三

為無足長々在陣、殊前十五、於高田表千部口、合戰之刻、別而粉骨之由、感悅候、弥可勵忠貞事、肝要候、必追而可賀之候、恐々謹言、

九月十八日

義統 在判

都甲三河入道殿

五四九 四日市切寄衆中給地坪付案

○大友家文書錄
大分県史料三三

大友義統
袖判

坪付

宇佐郡之内

一所四十町

宮成跡

同郡之内

一所拾五町

益永跡

同郡之内

一所貳町五反

辛嶋跡

已上、

天正八年九月廿日

四日市切寄衆中

五五〇 大友義統感狀

○渡辺文書
増補訂正編年大友史料二五

去年以來於当切寄、別而抽粉骨、于今無變化事、連々之心懸令顯然候、感入候、然者其表再破之様、其間候之奈、大神中務少輔・林嘉右衛門尉差籠候、倍可勵馳走事、可為喜悅候、必取鎮、一段可賀之趣、猶田原近江入道可申候、恐々謹言、

九月廿日

義統 (花押)

渡邊 石見 守殿

渡邊 加賀 守殿

渡邊三郎右衛門尉殿

渡邊 兵庫 助殿

渡邊市左衛門尉殿

渡邊 壱岐 守殿

五五一 大友義統感狀

○吉村韓太文書
増補訂正編年大友史料二五

今度於平田村新城取誘、抽馳走之由、寔感入候、弥可勵粉骨事、可為喜悅候、必取鎮一段可賀之候、猶大神中務少輔・林嘉右衛門尉可申候、恐々謹言、

九月廿日

義統 (花押)

吉村但馬守殿

五五二 大友義統書狀案

○大友家文書錄
増補訂正編年大友史料二六

河底取誘、人数被差籠之由、無油断趣、祝著候、弥堅固之覚悟、肝要候、聊不可有緩之義候、猶重々可申候、恐々謹言、

九月廿二日

義統 在判

太田右京亮殿

五五三 大友義統書狀

○宇野文書
大分県史料一一

於鞍懸表、自最前遂在陣、軍勞之段、感入候、殊至絹懸陣付之儀、本庄中務少輔江申付候、乍辛勞、以同心可被遂其節事、肝要候、猶鎮述可申候、恐々謹言、

九月廿二日

義統 (花押)

宇野宮内丞殿

五五四 大友義統感状

○宇野文書
大分県史料二一

今度、最前以来軍勞之由候、就中此節、本庄中務少輔以同心辛勞之段、令承知候、然者、前^廿至鞍懸、通用之悪党以夜待討果、分捕高名、忠儀無比類候、必取鎮、一稜可賀之趣、猶鎮述可申候、恐々謹言、

九月廿二日

義統 (花押)

宇野宮内丞殿

五五五 安岐表御警固日記

○狭間田文書
直入郡久住町白丹狭間田高義藏

阿起表御警固日記之事
本船
一天正八年七月從七日、同十六日迄、米壹石三升、ちんの銀子七拾式匁、一日^二廿四人の覺^{筋力}□、かて・ちん請取申候、

一七月十七日より、同廿六日迄、一日^二廿四人之覺悟、かて斗米壹石三斗、請取申候、ちんハ請取不申候、ちんの銀子七十式匁、御未進、

一七月從廿七日、九月二日迄、一日^二人数廿四人、ちん・かて我等取かへ申候、米三石七斗一升□、但和市四升米之さん用、銀子百八十五匁五分、ちんの銀子式百五十九匁二分敷、

此前合銀子五百拾六匁七分敷、
升まい舟日記

一九月六日より、同十五日迄、人数一日^二、十八人之覺悟にて候、かて・ちん十日の分、請取申候、

五五六 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

十月、義統授書于問注所統景、贈糧料、且論高位岳城事、
（天正八年）
高位岳、未審其國
及將、暫候、再考、

○天正九年十月ト思ハルルモ『大分県史料三三』ノ比定ニ準ジココニ収ム。

五五七 大友義統知行預ケ状

○成恒文書
増補訂正編年大友史料二五

今度、西郡悪党現形之刻、以順儀之覺悟、至賀来安芸守切寄差籠、毎日防戦粉骨之由、感入候、然者下毛郡之内拾町分、加扶持候、可有知行之趣、猶田原近江入道可申候、恐々謹言、
十月二日
義統 (花押)

成恒越中守殿

五五八 大友円齋書状

○問注所文書
東大史料編纂所影写本

浦部表勝利之趣、其聞候哉、早々敷示給候、祝着候、安岐切寄之事、昨日寢令一着候、以此競鞍懸落去、不可有程候条、諸堺目可任存分事、指掌候、至中豊前茂、前三一行申付、敵領数多打崩候、然者宝満・立花申談旨候、殊

從其方茂、節々入魂之条、愚老事、急度日田郡迄可発足

覺悟候、於于今者、当城可被逐本意事、無疑候条、珍重候、何様於其表可申談候、仍加力之儀付而、先日從怒留湯主殿入道并日田群衆茂、申旨候間、得其意之由申候処、只今被申越候、彼使加存知、鞍懸表為可加下知、彼方角迄越山候、落去次第、白杵へ可帰庄候、必其刻日田迄可申遣之趣、猶葛西周防入道可申候、恐々謹言、

十月七日

田原親家 (朱印)

問注所刑部少輔殿

五五九 田原親家書状

○田代文書
大分県史料一〇

今度当切寄衆之事、逆意不穩便候之条、一途之御下知、雖深重候、改先非懇望主之間、尖令分別候、弥於抽忠儀者、一稜可扶助候、恐々謹言、
十月七日
親家 (花押)

田代出雲守殿

五六〇 田原親家書状案

○片山文書
大分県史料一〇

今度当切寄衆中之儀、逆意雖前代未聞之儀候、改先悲可馳走之由、对二若鑿望候間、尖令分別候、弥碎手、於抽忠儀者、一稜可加扶助候、倍守此旨、可被励勲功事、干要候、恐々謹言、
十月七日

親家

片山越後守殿

五六一 田原親家書狀案

○片山文書
大分県史料一〇

今度当切寄衆中、逆意之企、不穩便之案、一進之御下知、雖深重候、改先非懇望之間、被成御赦免候、然者向後、別而於勵新忠者、一稜可扶助事、不可有余儀候、恐々謹言、

十月七日

片山内記兵衛殿まいる

親家

五六二 大友義統書狀

○河原氏藏問注所文書
淺野陽吉問注所家文書

就浦部表之儀示給候、被添心候次第、祝着候、然者安岐切寄之儀、種々令愁訴候之案、在陣之年寄、同南北之固々衆、頻被申候間、先以赦免候、因茲親家事、今日ハ至鞍懸表出張候条、彼要害落去不可有程候条、吉左右追々可申遣候、此表如此得勝利候間、下目之出勢之儀、不可移時日候、仍休庵至日田郡、近々被成御發足候条、其堺可属案中事、指掌候、必自是可申談候、恐々謹言、

十月八日

問注所刑部大輔殿

五六三 大友円斎書狀

○佐田文書
熊本県史料中世二

就安岐表一著示給候、被添心候之次第祝著候、雖然鞍懸于今依相支、田原親家以出張、可打崩之由申付候条、様

体為可聞合、愚老事、爰元迄令越山候、堺目之儀、弥每事、堅固之御格護肝要候、殊今度、野仲未練之振舞、不及是非候条、先以鎮兼領中、一動之儀候、玖珠郡、加下知候処、

当郡衆前三、同前有馳走、一兩所取崩、勝利之由候、毎々馳走之趣感悦候、今程者、此方角江可滞在之条、切々可申談候、仍狸一送給候、喜悦候、猶重々可申候、恐々謹言、

十月八日

佐田彈正忠殿

五六四 大友義統書狀

○柚留木文書
熊本県史料中世三

妙見岳承申候条、所々任存分候、南郡衆之事者、其国、為出勢掃陣之儀申候、是又為存知候、將亦休庵御事、近々日田郡、^{足之段}申談候、從兩筑到来之儀候間、定而可得勝利之案、可御心安候、爰許陳明候而、下目之行可差急内意無別儀候、休庵同前雖可申候、辻間表、^江雇申候間、無其儀候、隨而從薩州兵船數艘以差岸計略半之由候、無心元存候、雖然宗運、紹貞忠貞不振于他候条、曾而以不及氣仕候、時宜細碎示給、可得其意候、近日者打絶令無音候、非疎意候、於足下惡逆乃族、恣之振舞絶言語候之間、於無誅伐者、自他之覺口惜存、抛万事、依歎息推移候、併御心底恥入候、於吉事者、重々可申之条、閣筆候、恐々謹言、

十月九日

甲斐掃部入道殿

甲斐民部入道殿

○阿蘇家文書下二モ同文ノ文書アリ

五六五 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

頃間、親家陷鞍懸城、党兵戰没、親貫逃城至于善光寺村。○時枝氏殺親貫、鑿從卒七人、^{或説、是年三月義統自率兵、攻鞍懸城、親貫自}從兵浦部宮内少輔、萱嶋美作守、松城一佐、森越中守等戰死、凡斬獲四千余人、親貫有幼子、家僕匿之、帶家伝旧書、器物逃于秋月、依頼種實、又曰、是年八月義統使宗像掃部助鎮統、大津留河内守鎮益率○兵討親貫、十日、攻鞍懸、城兵三百拒之、二十二日、親貫自尽、而城陷、^{今據旧書、考則兩説皆非也、親貫凶也、在頃間決也○田原系、少曰親貫凶後、田原正流斷絶、從土安松氏、木原氏持田原家伝旧書數通、太刀二振、來於豊前足立山下、如法寺流田原、○秋月種實假援兵於親貫路、親武通害感其旧書等、子孫僅存}聞浦部已陷、將還兵、宗像掃部助鎮統、大津留河内守、嘗承義統命、防禦秋月、於是至金杭擊之、殺○○長、伊藤外記、坂田市祐、而秋月兵敗走○○○党降、初柴田筑前入道禮能教之、勸乞和、以○○田久三共同族登安岐壘、而及于此、義統與田○○書於久三、且義統感田染惠立鞍懸軍勞、

五六六 大友円斎・大友義統連署感狀案

○大友家文書録
大分県史料三三

親父筑前入道依調略、其方○○城之儀、寔親子同前之忠貞○○無事申調候上者、可為暫時之儀候、○○事、親類同心之仁申進、耽在城肝要候、○○馳走永、不可有忘却候之条、何様追而可頭○○候、恐々謹言、

十月十日

義統 在判
田之扇 朱印

柴田久三殿

五六七 大友田齋書狀

○佐田文書
熊本県史料中世二

就鞍懸落去、早々示給候、祝著候、此方悦可有推察候、
雖然親貫討洩候事、不及是非候、落所等於有之者、別而
可被励忠儀事、肝要候、每事為可加下知、于今在村候、
委細口上申候、恐々謹言、

十月十一日

佐田彈正忠殿

田齋 (朱印)

五六八 大友義統書狀

○佐田文書
熊本県史料中世二

前九鞍懸落去候、先以祝著候、雖然、親貫不討留候事、
不及是非候、定而落所可有之之条、弥可加下知覚悟不淺
候、然者、田原近江入道被申談、此節被励馳走、親貫可
討果才覚、頼存候、委細猶、小田原左近亮申合候、恐々
謹言、

十月十一日

佐田彈正忠殿

義統 (花押)

五六九 大友義統感狀

○渡辺文書
増補訂正編年大友史料二五

今度、四日市切寄為奉行差遣候処、以在城辛勞感悦候、
然者、渡邊寄合中之儀、就中紹忍家中之人、軍勞粉骨之

段誠感入候、弥被申遣、此節別而馳走專一之由可被申聞
候、必取鎮、至紹忍可申談候、可得其意候、恐々謹言、

十月十一日

小田原左京亮殿

義統 (花押)

五七〇 大友義統感狀案

○児玉鑑採集文書
増補訂正編年大友史料二五

庄下代
上田権内所持
去月十五、於来繩郷大利口、豊前日々悪党懸合、一戦遂
高名、父右衛門戦死、忠儀無比類候、必取鎮、一稜可賀
与候、

十月十二日

上田松若殿

義統書判

五七一 大友義統感狀案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二五

今度、從最前、高橋主膳入道任申旨、軍勞、就中至岩屋
要害勤番之由候、如比大篇之刻、貞心之覚悟偏对国家、
忠節之条、感入候、何様取鎮紹運申談、可加扶持候間、
弥馳走、肝要候、恐々謹言、

十月十二日

屋山三介殿

義統在判

五七二 大友家加判衆連署奉書案

○大友家文書録
大分県史料三三

数度如被仰出候、田原右馬頭依惡逆、誅伐之儀、堅被加
御下知候之故、鞍懸・安岐両城、令落去候之条、於于
今者、彼堺無残所、被属 御案裏、千秋万歳候、然者其
表之儀、無油断、以御才覚一行之調儀、可為此節之由候、
委細以実相坊豪意法師、被遂御入魂之趣、猶右寺可有演
説条、不能一二候、恐々謹言、

十月十四日

阿蘇殿 御宿所

道輝 在判
宗歴 在判

五七三 大友義統書狀

○鹿子木文書
熊本県史料中世一

急度染筆候、数度如申候、田原右馬頭依惡逆、加誅伐之
下知頃、鞍懸・安岐両城令落去、於于今者、彼堺無残所
属案裏、本望候、然者其表之儀、親為被申談、一行之御
調儀、可為此節候之趣、猶志賀安房入道・朽網三河入道、
可申候、恐々謹言、

十月十四日

鹿子木三河入道殿

義統 (花押)

五七四 大友義統感狀案

○大友家文書録
大分県史料三三

去月七、到鞍懸取懸候之刻、方角之衆申談、別而励馳走

之由候、感入候、何様取鎮、一段可賀之候、恐々謹言、
(天正八年)
十月十四日 義統 在判

田染惠立

五七五 野仲鎮兼知行預ケ状

○内尾文書
増補訂正編年大友史料二五

今日十五、至田口表、築地両切寄之者共、相給候之處、
最前懸合、分捕高名之次第、寔無比類候、然若一町別坪付
在預進之候、全有知行、弥可被勵戰功状、如件、
(天正八年)
十月十五日 鎮兼 (花押)

内尾藤太郎殿

五七六 田原親家感状

○安東文書
大分県史料一〇

去春堺目乱入之砌、寄合之者共、以順路之覚悟、致馳走
之段、麟專依申儲存知候、殊鞍懸堅固之刻、折々懇忠之
次第、間及候、神妙候、追而可成其感之通、詫摩佐渡入
道可申候、恐々謹言、
(天正八年)
十月廿一日 親家 (花押)

案藤宮内允殿

五七七 田原親家感状

○安東護文書
豊後高田市大字佐野字丸山

去春堺目乱入之砌、寄合之者共、以順路之覚悟、致馳走

之段、麟專依申、儲存知候、殊鞍懸堅固之刻、折々懇忠
之次第、間及候、神妙候、追而可成其感之通、詫摩佐渡
入道可申候、恐々謹言、
(天正八年)
十月廿一日 親家 (花押)

丸山外記進とのへ

五七八 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

頃間、田原親家御浦辺、而帰豊後、使津崎兵庫助守尾長
居作井屋、使飯田麟清守築地村屋、
○義統授書于飯田麟清、

五七九 大友義統書状案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二五

至築地村切寄、以名代勤番之由、辛勞感悦候、弥可被勵
馳走事肝要候、田原新九郎可申候、恐々謹言、
(天正八年)
十月廿六日 義統 在判
飯田但馬入道殿

五八〇 高橋紹運書状

○五条文書
増補訂正編年大友史料二五

追而、雖左少之至候、為中途計略、樽一隻進覽候、
殊生鮭一疋、令進入候、於爰元者、珍物候、御賞玩
可目出候、

態用飛脚候、早晚御報被成、心外之至候、
一肥後表并御近方之立柄、銘々示預度由、如風聞者、近々
日田郡迄、御着陣之由候、誠不勝万勢候、於事実者、
堺目之様体、無御腹藏被成御申、又被請御下知、弥御
馳走此時候、申茂疎候、

一鞍懸并阿岐郷切寄落去之由承、尤目出存候、貴国中も
駈御静謐候之条、此□者、御□難有御油断存候間、三ヶ
年之粉骨、不属無極二才覚不存候、
一豊前表過半、時洩可然申調候、於御着郡者、何様其
手廻、可為顯然候、

一御息統康、当時津内へはやり申候甲、御望之由候哉、
忍富へ心懸之由承候間、乍聊爾差進申候、雖難相御氣
象候と、調置候条、進覽候、ためしにては、無御座候間、
斟酌深重候へ共、方角之はやり物に候之間、如此候、
さて、在国以来、相互不通相過、無念千萬二候、此
節御国家之御重宝、殊御内意之趣、富加入折々物談承、
御憑敷存候、何様互二無御隔心申談度候、於御同意者、
可為満足候、

一豊州へ被遂言上、約取合之方大心之段、卒度伝承候、
就夫道雪致内談、兩人覚悟之趣、以前紙申入候、若輩
種々推参之申事、却而御入慮難計候、向後、無二二可
申談内存之条、如此候、万賀、恐々謹言、
(天正八年)
十月廿七日 紹運 (花押)

鎮定公 参人々御中

五八一 大友義統感状

○成恒文書
増補訂正編年大友史料二五

賀来安芸守同前、長々軍旁忠意之次第、無比類候、殊重々

西目之悪党浮出之刻、合戦碎手之故、其方郎從善五郎被疵之由、忠儀感人候、必追而可賀之趣、猶田原近江入道可申候、恐々謹言、

義統(天正八)
十月廿七日

成恒越中守殿

義統(花押)

いづれもしやけちなとを、か、へ候かたも候へハ、にあわせにしやまいを、我等あきらめ可申、とかくに近日、くらかけの城に可罷越候間、其時宜可申承候、次つ、ら給候、悦喜申事候、恐々謹言、

十一月三日

田染弥五郎殿御返報

親家(花押)

五八一 大友義統感状

○市丸文書
大分県史料一〇

今度從最前、睨以在城軍旁、殊折々、粉骨深重之由、感入候、雖無申迄候、弥紹忍任指南、可勵馳走事、肝要候、必可賀之趣、猶小田原左京亮、可申候、恐々謹言、

義統(天正八)
十一月一日

市丸長門入道殿

義統(花押)

二十六日、小田原左京亮攻神門壘、被創、有功、甲斐長門入道及田代士奈須右近將監・福永四郎三郎等亦為小田原授兵神門在肥後乎○義統賞厚統英較懸軍功、命領中免役事、有書、

五八五 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

五八三 大友義統感状

○田原卯七氏文書
増補訂正編年大友史料一四

為無足、今度從最前睨以在城、折々軍旁之次第、感悦候、弥田原近江入道被得指南、一廉勵馳走事簡要候、於忠實者、必可賀之趣、委細猶紹忍可申候、恐々謹言、

義統(天正八)
十一月一日

田原左馬助殿

義統(花押)

○今度較懸表、在陣辛勞、殊千部口合戦之刻、分捕高名忠儀、無比類候、仍当院貞恒名之内、若宮免之事、万雜諸点役令免許候、弥可被勵馳走事、肝要候、恐々謹言、

義統(天正八)
十一月廿六日

厚彈正忠殿

義統(在判)

五八八 大友円斎書状

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料一五

円斎、勞小田原左京亮○神門戰旁、使甲斐・奈須等○勸其陷墨事、有授小田原感贖、

去(十一月)廿六、到神門取懸、被遂防戦、構等雖打崩候、依無統衆不落去之由候、不及是非候、殊自身碎手、被疵候事、別而心懸忠儀之次第感悦候、次其方被官之者、負手之着到、加披見候、旁粉骨不及申候、然者今(義)甲斐長門入道馳走深重之段、令承知感心候、田代衆奈須右近將監、福永四郎三郎以下、軍得(旁由)其意、銘々以感状申候、則付遣、弥被申進、急度事行候様、調儀專一候、此度被励申談、何様一稜、可賀之候、猶重々、可

五八九 田原紹忍感状

○元重実文書
増補訂正編年大友史料一五

今朝於其表、時枝切寄之悪党等懸出候哉、即冠被懸合、粉骨之趣無比類候、然者僕從被疵之由、忠貞之至感悦候、何様向後一稜可賀之候、弥無油断心懸干要候、恐々謹言、

紹忍(天正八)
十二月二日

元重兵部丞殿

紹忍(花押)

五八四 吉弘親家書状

○永弘文書
大分県史料六

五八七 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

五九〇 大友義統感狀

○渡辺文書
増補訂正編年大友史料二五

前四至尾長の切奇糧差籠候之砌、宇佐郡之悪党、罷出通路差留候歟、雖然、各以粉骨敵陣切崩、糧輒通用之由候、軍旁之次第感入候、必追而、銘々可賀之候、恐々謹言、
十二月九日
義統(花押)

渡邊 石見 守殿

渡邊市左衛門尉殿

渡邊三郎右衛門尉殿

渡邊 兵部 丞殿

渡邊 縫殿 助殿

渡邊 耆岐 守殿

其 外 切 寄 衆 中

五九一 大友義統感狀案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二五

○(今度)至尾長居切寄、糧差籠候之刻、宇佐郡之悪(愛打)出、通路差留候歟、雖然敵陣切崩、糧輒通用之由候、其方粉骨、殊竹田津弥右衛門尉戰死之段、旁以忠儀無比類候、必追而、銘々可賀之候、恐々謹言、
十二月九日
義統(大友) 在判

竹田津式部少輔殿

五九二 田原親貫感狀

○草野文書
大分県史料一三

今度鞍懸執付候之儀、為悴家、前後各以熟談、加下知候、就夫、別而親武才覚故、一城普請等成立候、大慶此事候、於然者、彼要害之儀、可預ヶ置候間、妻子等以隨身茂、在城肝要候、自然誰人申妨仁候共、為親貫、不可及許容候、必静謐之刻者、可申談候、為御存知候、恐々謹言、
十二月廿三日
親貫(花押)
如法寺藤五郎殿

五九三 田原親貫感狀案

○片山文書
大分県史料一〇

今度武蔵要害、并福寿院切奇落去之刻、於攻口碎手、頸老被討取候、誠懃悦候、必追而可顯其志候、弥可勵忠儀事、頼入候、恐々謹言、
天正八年
十二月廿七日
親貫(田原)

片山越後守殿まいる

○田原親貫八天正八年七月頃亡了。本文書ノ年月二ハ誤写アルカ。

五九四 田原親貫書狀案

○大友家文書録
大分県史料三三

当城之儀、耕雲、親武以才覚、最前被執付、剩粮等如取調置候故、今度家来雖錯乱候、聊無氣遣、令籠元候、無隻之忠儀、異他候、殊芸州加勢之儀、到輝元景、今度可差上之由、申付候処、不覃口能、可有元末共、大慶候、然者、二字之儀申組候、弥一家元末共、別而可被添御心事、頼存候、恐元、
親貫(田原) 在判

○(田原)左近大夫殿
田原式部入道殿

五九五 大友田齋書狀

○大友家文書録
大分県史料三三

去十一夜、其方被官之者、鞍懸山伏之尾へ忍入、小屋少々焼崩由、粉骨之次第、感悦候、併進之尤心懸故候条、弥被申諫、馳走肝要候、於委細者、從義統可被加下知候条、不及詳候、恐々謹言、
月日及宛所破、蓋古庄氏也、
○差出書ラ欠ク。本文ニヨリ円盾ト推定ス。

五九六 林新九郎(田原親家)進退条々覚

○大友文書
大分県史料二六

○(新包紙ウハ書)
「一四」林新九郎進退之事」
林新九郎進退之事」
一 林新九郎進退之事
一 妙見城督之事
一 所々郡職并与力之事
一 新九郎向後每時義統下知之外、或好、或号鼻負用捨、一 雅意之儀、不可有之事、
一 右条、紹忍於得心、以 神載可承事
以上

五九七 大友義統感狀案

○大友家文書錄
大分県史料三三

□鞍懸表出陣之儀、申付候処、遂其節、于今長々□辛
勞之儀候、殊前^{廿一}、大津留民部少輔被申□宇佐郡働
之刻、別而軍勞之由、感入候、弥可励□□肝要候、恐々
謹言、

天正九年

日

務丞殿

義統 在判

五九八 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

是○冬、嶋津義久遣兵、略日向、州士屬豊後者與之戰挑、
又義久築城於日向・肥後境花山、居兵、以備甲斐宗連、
九年辛巳正月、○勞飯田麟清・波多源七兵衛^尉○上野鎮久
在妙見城、且催其授兵、作書、諭之、

六〇〇 田原親家知行預ヶ状

○溝部文書
別府大学文学部日本史教室蔵

連々以無足之上、辛勞之儀候之間、溝部平四郎先給分、
雖申付候、切寄任順並、口能申聞候之処、速上表之段、
神妙候之条、則安岐郷内松木清兵衛尉先給草場名七貫分、
并須賀之允三貫分之事、不殘段歩預遣候、云下地、土貢
与云、全有知行、弥可被励奉公之状、如件、

天正九年二月五日

親家

溝部孫左衛門尉殿

六〇一 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

二月^{天正九年} 田原親家寄書於飯田内記允、此時内記允在惣勤
砦、以勸登妙見城、

五九九 大友義統感狀

○長野末夫文書
大分県史料一一

至龍ヶ鼻三ヶ年之在城、為不涯辛勞之儀、一段令感悦候、
何様以時分、別而可賀之候趣、猶田北十郎可申候、恐々
謹言、

正月廿三日

義統 (花押)

長野因幡守殿

猶重々可申候、恐々謹言、

天正九年
二月八日

親家 在判

飯田内記允殿 御宿所 上包 田新

六〇二 大友義統書状

○長野末夫文書
大分県史料一一

龍ヶ鼻城番之儀、至都甲山城入道申付候、被申談、勤番
肝要候、聊不可有油断之儀候、猶田北十郎可申候、恐々
謹言、

卯月三日

義統 (花押)

長野勘七郎殿

六〇四 田原紹忍感狀

○成恒文書
増補訂正編年大友史料二五

去七日、至統直切寄、鎮兼衆成行候刻、懸合、終日遂防戦、
被得勝利段、尤珍重候、殊手火矢高名之次第承及候、乍
案中、粉骨無比類候、何様於向後不可有忘却、倍御心懸
憑存候、恐々謹言、

卯月九日

紹忍 (花押)

成恒次郎殿

六〇五 大友義統感狀

○成恒文書
増補訂正編年大友史料二五

今度、從最前、賀來安雲守、福嶋佐渡守申談、聡令籠城、

折々軍勞粉骨之次第、今以馳走無油斷之由候、感入候、必取鎮、追而可賀之候、恐々謹言、

卯月廿九日 (實事) 義統 (花押) (大友)
成恒越中守殿

六〇六 大友義統感狀

○彌瀨文書
增補訂正編年大友史料二五

今度從最前、賀來安芸守、福島佐渡守申談、聆令籠城、折々軍勞粉骨之次第、今以馳走無油斷之由候、感入候、必取鎮、追而可賀之候、恐々謹言、

卯月廿九日 (實事) 義統 (花押) (大友)

彌瀨次郎殿

六〇七 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

○五月、義統賞上野鎮久妙見岳軍勞、免其領地諸役、以授書、田原紹忍亦寄書、諭之、

六〇八 大友義統書狀案

○大友家文書録
大分県史料三三

其方事、以田原近江入道同心、至妙見岳長々在城、辛勞感入候、仍為其賞、田染庄之内知行分之事、万雜諸点役令免許、殊永々可為檢斷不入候、此方用所之砌者、直可申付候、為存知候、恐々謹言、

五月一日 (實事) 義統 在判

上野左介殿

六〇九 田原親家知行宛行狀

○岩藤文書
速見郡日出町大字大神

於雄渡牟礼、任判形之旨、成安藤九郎跡、加扶助候、給分大添有之、全令領知、弥奉公肝要候、恐々謹言、

五月三日 親家 (花押)

六一〇 田原親家知行宛行狀写

○宮永氏影写文書
大分県史料一〇

於雄渡牟礼、任判形之旨、成安藤九郎跡、加扶助候、給分大添有之、全令領知、弥奉公肝要候、恐々謹言、

五月三日 親家 書判

溝部右近允殿

六一一 大友義統感狀

○糸永文書
增補訂正編年大友史料二五

到妙見岳睨在番、為無足辛勞之儀、感入候、弥可励馳走事、肝要候、必追而可賀之之趣、猶田原近江入道可申候、恐々謹言、

五月五日 義統 (花押)

糸永右京亮殿

六一二 田原紹忍感狀

○渡辺文書
增補訂正編年大友史料二五

昨日於葛原表、高森之者共懸合、被疵粉骨之次第、誠感悅無極候、弥以寄合中被申談、可被拙忠節事、肝要候、何様一跡賀可申候、恐々謹言、

五月廿八日 紹忍 (花押)

渡邊市左衛門尉殿

六一三 田原親盛感狀案

○広崎嘉十郎文書
增補訂正編年大友史料二五

時枝表凶徒等、節々現形之由候間、寄々之衆、被相諫別而被勵軍勞肝要之段令申候キ、然処徳弘村中之仁、無緩馳走之通感悅候、何様一稜可賀之趣、先々從鎮道御心得專一候、恐々謹言、

六月八日 親盛

中山左近助殿 御宿所

六一四 田原紹忍感狀

○渡辺文書
增補訂正編年大友史料二五

今朝於小菊表、時枝悪党伏兵相催候処、各懸合、令防戦、其方僕從源七分捕之趣、高名無比類候、何様回後可賀申之旨、彼者申含候、恐々謹言、

七月六日

渡邊三郎右衛門尉殿

紹忍(花押)

六一五 田原紹忍感状

○渡辺文書
増補訂正編年大友史料二五

今朝於小菊表、時枝(宇佐郡)悪党伏兵相催候処、各懸合令防戦、其方僕従善四郎分捕之趣、高名無比類候、何様向後可賀申之旨、彼者江申合候、恐々謹言、

七月六日

紹忍(花押)

渡邊市左衛門尉殿

六一六 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

九月、浦上彈正忠下材木岡城、帰豊後、其父長門入道九月、浦上彈正忠下材木岡城、帰豊後、其父長門入道宗鉄寄書于中嶋統之、謝彈正忠在城事、

六一七 浦上宗鉄書状案

○大友家文書録
大分県史料三三

猶々、彈正忠帰陣之砌、宗切老へ遂參上、別而御懇志之次第、外聞と申、忝存候、此由能々、御心得可被成候、乍憚、御袋様へも奉憑候、將又御料人、さそ御成人候ハんと、申居計候、内々申事も、無沙汰申候由にて候、万々又々申入、可得御意候、以上、

預御懇礼候、令披閱候、殊今度彈正忠、至材木岡令登城候之処、貴所以御在城、別而被添御心之由、誠御頼敷過分至極候、彼御志、生中^二難致忘却候、先日茂、濃々達上聞候処、被成 御書候、珍重候、倍向後無御隔意、可申談候条、御同前所仰候、自是申後無面目候、非拜顔者、難申述候間、先以閣禿筆候、恐々謹言、

九月十一日 宗鉄 在判

統之 參 御返人々御中

六一八 大友田斎書状

○問注所文書
東大史料編纂所影写本

去廿二、至田籠端橋星野中務以結構、悪党取出候之処、統景行故、為始星野神五郎、数輩討捕、軍忠状加披見候、毎々粉骨忠儀之次第、感悅無極候、然者、至津江信濃守宅所、阿蘇小国^(阿蘇郡)之者共取懸、親信籠城之条、為加勢、一昨日小国表悉令放火候条、北里下城事、質入差出、依佗言深重、召置候、於于今者、彼方角無残所屬下知候、珍重候、仍前日日田越山之覚悟候処、右動付而差延候、急度出勢之催、聊非油断候間、当城以堅固之才覚、倍可被励馳走事、肝要候、將又就訴訟之儀、毎々口能之趣、令承知候、於様体者義統可申遣候条、不及書載候、為此方茂、何様不可有疎意候、恐々謹言、

九月廿五日

田斎(朱印)

問注所刑部少輔殿

六一九 大友義統感状

○成恒文書
増補訂正編年大友史料二五

度々如申候、於賀来安芸守切寄逐籠城、折々軍旁之次第、感入候、弥可被抽忠意事、此節候、何様取鎮、一稜可賀之候、恐々謹言、

十月五日

義統(花押)

成恒越中守殿

六二〇 大友義統感状

○蠣瀬文書
増補訂正編年大友史料二五

度々如申候、於賀来安芸守切寄逐籠城、折々軍旁之次第、感入候、弥可被抽忠意事、此節候、何様取鎮、一稜可賀之候、恐々謹言、

十月五日

義統(花押)

蠣瀬次郎殿

六二一 田原紹忍書状

○広崎文書
増補訂正編年大友史料二五

就里郷再乱之儀、到中山左近助切寄罷登、普請以下別而馳走之由、令祝着候、弥此節於励辛勞者、必静謐之刻、可顯其志候、恐々謹言、

拾月九日

紹忍(花押)

廣崎中務丞殿

廣崎兵庫入道殿

六二二 大友府蘭書狀

○問注所文書
東大史料編纂所影写本

前八於小椎尾河内、惡党少々現形候之処、（問注所）統景堅固才寬故、即時被追崩之由候、殊右河内江町野紀伊介以在村、遂防戰粉骨之刻、手負戰死之者有之由候、忠儀無比類候、毎々無御油断被抽馳走事、祝着深重候、先書如申候、至石井（目録）要害、人数差置候之条、節々被遂相談肝要候、就中大肥表之儀、是又堅加下知候、雖無申迄候、其境之儀、被聞合、不云夜白示給可得其意候、為存知候、恐々謹言、
（天正九年）
十月十日

府蘭（朱印）

問注所刑部太輔殿

六二三 大友義統書狀案

○大友家文書錄
增補訂正編年大友史料 一六

豊前西郡之惡党、至下毛表令現形、所々狼籍不穩便之由、從方々注進到來候、就夫野仲兵庫頭加勢之儀申候条、追々可差立覚悟候、然者各事辛勞雖無尽期候、支度等以心懸、一左右次第、不日可被打出事、肝要候、先々為檢使、帆足右衛門大夫・森左馬助、急度差遣候条、自然之時者可被添心事可為祝著候、旁不可有油断之趣、猶齋藤紀伊入道（通譯）可申候、恐々謹言、
（天正九年）
十一月十四日

義統（在判）

岐部山城入道殿

小田式部少輔殿

平井河内入道殿

惠良左近大夫殿

魚返伊豆入道殿

太田 宮 熊殿

惠良 孫三 郎殿

松木相右衛門尉殿

古後 主計 允殿

野上治部少輔殿

其 外 郡 衆 中

六二四 宇佐宮社僧大師供記裏書

○水戸彰考館文庫藏
東京大学史料編纂所影写本

去年天正九十一月十九日、大友殿義鎮法名宗麟御二男田原親家為大将、同近江入道（目録）紹忍・吉弘太郎統運以下豊後御一勢、当郡院内里郷諸侍安心院中務入道麟生・佐田彈正忠鎮綱、其外諸軍七千余、至宮中取懸、親家陣者向ノ尾、吉弘同所、浦部・府中衆皆親家同陣、紹忍陣者山口、安心院ハ篠原、佐田ハ猪倉、橋津ハ北面高森ヲ相拘、荒寄ニ当山悉焼失畢、因茲大師供令怠慢、今年大樂寺上心乗坊、時ノ住門祐ノ於仮屋執行、
当家衆之事、
大宮司宮成公基ハ大樂寺ノ上ノ要害取誘楯籠、宮中神人・御供所・厨家・宮掌・御伏人・花摘、其外宮外之水守以下迄差籠之、宮佐古一山・同所惣檢校益永統世ハ部瑞泉寺ノ上要害取誘、令官以下部村中心心ハ差籠之、
祝大夫官貫ハ本宅ニ楯籠之、（以下略）

六二五 大友家文書錄綱文

○大友家文書錄
大分県史料三三

（天正九年十一月）
二十日、宇佐郡合戦、田原親家家士津崎兵庫助有戦功、被官被創、

六二六 大友家文書錄綱文

○大友家文書錄
大分県史料三三

○（天正九年十一月十日）府蘭聞秋月・龍造寺党兵到于針目山、使我兵陣于彦山者分向之、命柴田礼能、守彦山高岩畷、○二十一日、麦生宗雲・星野鎮虎及小佐井三郎・徳丸賀右衛門尉等、擊肥・筑兵於針目山、殺数十人、是日大肥畷亦為秋月兵襲、久多良木隼人佐○擊之、此間久多良木氏與狭間刑部大輔・小佐井三郎・徳丸賀右衛門尉等、或守林木岡城、或守大肥畷、而有功、○二十三日、豊軍解彦山陣、舜有兵追之、田村統幸・森治部少輔・森宮内少輔・志津利勘解由允・財津久右衛門尉○等力戦、負創、○惠良備中入道亦○戰功
（及小田官麻生神介、山邊三郎、森左馬助）

六二七 大友府蘭感狀案

○大友家文書錄
大分県史料三三

○（天正九年）廿一、肥筑之惡党、至針目山、雖取出候、以堅行、数十人討果候、其以來者差行無之候処、○今如到来者、敵敗北必定之由、先以珍重候、然上者、急度一行可加下知覚悟候条、鎮虎被申談、馳走之心懸肝要候、猶吉左右重々可申候、恐々謹言、
（天正九年）
十一月廿五日

府蘭（朱印）

麦生民部入道殿

六二八 大友府蘭感狀案

○大友家文書錄
大分県史料三三

今度秋月・龍造寺以下之逆徒、申組、至針目岳、依現形、
彦表在陣衆之事、早速打入、彼悪党不拔足様討果、可発
鬱憤之由、申遣候之条、礼能事、彦高岩要害江登城之
儀、火急申候之處、聊無口能、被遂其節候事、連々忠意
令顯然、感悦無極候、別而心懸之段、至義統可令人魂之
条、取鎮必可賀之候、弥可被馳走事、可為祝著候、猶重々
可申候、恐々謹言、

十一月廿六日

柴田筑前入道殿

府蘭 在判

六二九 大友府蘭書狀

○問注所文書
増補訂正編年大友史料二六

為当城粮料、銀子壹貫五百目差遣候、親類家中之人等、
弥被申進、可被勵馳走事肝要候、殊両城差擲、就中長岩、
白石両城為覚悟、高位岳城誘、從昨日加下知候、方角之
儀候条、別而奔走專一候、将又下目到来之趣、銘々預入
魂候、被添心候次第、案中候、倍被開合示給、可得其意候、
猶重々可申候、恐々謹言、

十二月七日

問注所刑部大輔殿

府蘭 (朱印)

○大友家文書錄(大分県史料)三三ニモホボ同文ノ案文ヲ収ムガ、年ヲ
(天正八年)十月七日トシ、差出ヲ義統ニ作ル。

六三〇 大友義統感狀案

○大友家文書錄
増補訂正編年大友史料二五

為無足去年以來、至妙見岳折々在城、殊動等之刻、別而
被抽粉骨之由、誠感悦候、弥田原近江入道被申談、可顯
馳走事肝要候、必取鎮、一稜可顯其志候、猶紹忍可申候、
恐々謹言、

十二月十二日

飯田内記允殿

義統 在判

六三一 大友府蘭書狀

○財津永延藏野上文書
西国武士團關係史料八

就今度出張之儀、乍老足供之段、申付候處、從最前辛勞
感悦候、殊至針目岳敵現形之刻、睨以堪忍、心懸之次第、
不及申候、仍法名之事、玄采遣之候、為存知候、恐々謹言、

十二月十三日

野上美濃入道殿

府蘭 (朱印)

六三二 大友義統知行預ケ狀

○成恒文書
増補訂正編年大友史料二六

其表乱念已来、田原近江入道以同心、忠意之覚悟感悦候、
殊至築地切寄令籠城、軍勞之次第不及申候、弥馳走肝要
候、仍上毛郡之内成恒名拾町分之事、預遣之候、可有知
行候、雖然、向後入組共候而、差合儀於有之者、其刻可
相理之趣、猶紹忍可申候、恐々謹言、

十二月十三日

成恒越中守殿

義統 (花押)

六三三 田原紹忍書狀

○今仁惣子氏文書
増補訂正編年大友史料二六

養父山城守一跡山下保之内田所職之事、為娘蓬萊女名代、
其方裁判肝要候、殊籠城之忠意候之条、山城守以約諾壳
渡地之事、令分別候、然上者、惣名同前進止專一候、猶
苜苜越前入道可申候、恐々謹言、

十二月十五日

今仁忍可

紹忍 (花押)

六三四 大友家文書錄綱文

○大友家文書錄
大分県史料三三

義統、聞秋月党兵出于豊前、漸略下毛郡、命宇佐郡士、
住為妙見岳授勢、因授書・劍於飯田麟清、

六三五 大友義統感狀

○飯田文書
増補訂正編年大友史料二五

如注進到来者、其表悪党現形、既下毛郡沖迄相各之由候、
不及是非候、然者妙見岳可及気仕之条、此節郡衆中、被
申談、別而可被励忠貞事、簡要候、彼城入敵案候者、外
聞無残所之間、加勢不可有油断儀候、仍刀一腰進之候、
誠願志計候、猶正田舍人入道可申、恐々謹言、

十二月十七日

飯田但馬入道殿

義統 (花押)

○「大友家文書録」(大分県史料「三三」)ニ写アリ。

六三六 田原紹忍感状

○伊東東氏文書
増補訂正編年大友史料二六

今度宇佐表在陣之刻、以中山内記兵衛尉同心、別而馳走殊候、粉骨之次第誠感心無極候、倍於抽忠意者、何様一稜可顯其志候、恐々謹言、

(天正九年)十二月十七日

紹忍(花押)

大藺大膳亮殿

六三七 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

義統、賞徳丸氏大肥・針目山等戦功、且恵良氏・森氏彦山軍勞、○授感状、

六三八 大友義統感状案

○大友家文書録
大分県史料三三

今度小佐井三郎以同心、為無足、從最前遂在陣、於大肥表材木岳長々在城、殊至針目山敵現形之刻、軍勞粉骨之次第感入候、必取鎮可賀之候、恐々謹言、

(天正九年)十二月十八日

義統(在判)

徳丸賀右衛門尉殿

六三九 大友義統諸点役免許状

○宇野文書
大分県史料一

近年於所々、別而軍勞之段、令承知感入候、仍為其賞、山香郷之内其方領地分、万雖諸点役令免許、同可為檢断不入候、但於屋作城誘者、如前々、相応之馳走、肝要候、猶本庄中務少輔可申候、恐々謹言、

(天正九年)十二月卅日

義統(花押)

宇野宮内少輔殿

六四〇 彦山焼打事情書上

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二六

彦山焼打に關する事情

大友御家與、彦山(前田山)三男三位様與申候ヲ、(彦山山主)舜有養子ニ被申請候、御入院無之内、休庵様(天友宗徳)違変被成、舜有江依之、舜有遺恨ニ被存、御縁與被申姫ヲ、(天正九年)縁辺被申候、自之秋(貞徳)御家御不和候ニ付、此儀(天正九年)正辛巳年八月、從豊州彦山破却可被成として、(江)後より彦山へ之道江先陣佐藤山城家(彦)郡住宅武士北方夫財津氏一家押寄候、(豊後)山座主舜有、上仏来與申從相隨、山籠被申候、(豊後)勢坊中ニ乱入、神社坊民屋迄焼滅、其時(本)本社迄令焼亡、殊御掛り申候、其時一山内より涙ヲ流悲歎、大將分兩人之由候得共、(江)假しれ不申候、彦山、豊州江和ヲ乞申、(江)質ヲ出可申由、被仰候所ニ、又秋月長門守殿、助勢ヲ被遣、日

田郡與筑前領分之境はりめと申所日田郡江、放火ヲ被申候、和談又破、豊後勢黑岩と申山ニ在陣候、令放火、秋月より彦山味方可申間、黑岩之陣所被引其後彦山之衆徒、山年指過、天正十五年九州御下向之刻、豊石與申城、御在陣申上、彦山之儀申候由、老僧共申伝候、書付無御座間、不申候、重而能々吟書書進上可申候、以上、

○年月日未詳。『大分県史料』所収ノ「大友家文書録」ニハ見エズ。後世ノモノナルモ、参考ノタメ掲ク。

六四一 大友義統感状案

○渡辺文書
増補訂正編年大友史料二六

至時枝表、一勢差遣候之砌、別而馳走之次知、感悦候、弥可被励忠意事簡要候、必追而之趣、田原近江入道可申候、恐々謹言、

(天正九年)日

義統(在判)

入道殿

六四二 戸次道雪書状案

○筑後将士軍談所収屋山文書
増補訂正編年大友史料二六

如仰今年之御慶重畳、猶又不可有際限候、抑為此等之儀、樽貳・鴨一番、被懸御意候、通路不輒候処、御志喜悦之至候、殊樽珍物候条、則致進上候、為御存知候、将又前日田行、針目城属御下知、千秋万歳候、然者御

出勢近々之儀候条、御静謐不可有程候、其境之儀統虎被仰談、毎事堅固之御才覚肝要候、細碎自紹運可被仰遣候条、書面不詳候、恐々謹言、

正月廿四日

屋山中務少輔殿

硯右

六四三 宇佐鎮常軍忠状案

○大友家文書録 増補訂正編年大友史料二六

加披見訖、在判

内尾三郎宇佐宿弥鎮常、謹言上、

欲早賜 御證判、備万代龜鏡軍忠之事

右、去年十月廿七日、於大根川防戰之刻、僕從善五郎、

被疵、同十一月五日、右於同所、防戰時、郎從後田善左

衛門尉、同神五郎、同勘六、同清次郎、僕從與三次郎、

討死之、同忠三郎、被疵、同十一月廿四日深見土佐入道

到宅所、敵取懸防戰之刻、矢高名、鎮常兩人、同名清四

郎老人、僕從源十郎老人、忠儀訖、

天正十年二月十日 鎮常 在判

田原近江入道殿

六四四 大友義統書状

○佐田文書 増補訂正編年大友史料二六

急度染筆候、仍西目之悪党、於下毛表、于今相湛之由候、如此浮出候事、幸之儀候之条、野仲兵庫頭申談、為可討果、玖珠郡由布院衆、不日差立候、定而可為著陣候、然

者各事、軍勞雖無尺期候、紹忍・親盛、被請指南、即刻被打出、一行可有馳走事、頼入候、於様体者、委細夏足民部少輔含口上候、恐々謹言、

卯月六日

飯田三右衛門尉殿

彌富对馬守殿

ト野次郎殿

矢部三郎殿

中山左近助殿

齋藤彌二郎殿

中山弾正入道殿

惠良勘解由允殿

副兵部少輔殿

佐田弾正忠殿

六四五 大友義統感状

○矢野厚男藏平井文書 杵築市大字符宿

為無足近年每陣之軍勞、殊去年彦表長々在陣、同高岩

城番馳走之次第、旁感人候、必取鎮、可賀之候、恐々謹言、

卯月十日

平井内藏助殿

六四六 宗勇書状

○岐部文書 大分県史料一〇

將又見之来候儘、雄竟卷一・干鯛五喉、進覽候、巨少不及申候、尚々其表御左右、幸便之時、示

給度候、

今年之御吉慶、於于今者、雖事旧候、尚更珍重々、此等之儀、早々可申入候之処、依遠路無音罷過候、心外之至候、然者、紹忍公江改めて致無沙汰候之条、捧愚札候、可預御取合候、老体も、去年令申候御契約之儀付而、登城申度存候へ共、貴殿おなかいの切寄、御滞在之由承候間、無其儀候、何比御番前可明申候哉、夏中ニそと参上申度候、御内々示給候て、可得其意候、未おなかいに於御逗留者、彼一通貴所御うら方より、御參進給候へと令申候、自然預御返書候者、能々する便にきこ娘所迄、被遣可有候、又者大慮小者、かうしたに隠住候をも、可被仰付候、菟角御分別過間敷候事

一其表御弓矢立柄、如何に御座候哉、蒙仰度候、早々被励御案判候様、無御油断御才覚、不及申候、爰元之儀、當時者無事三候、可御心安候、一竹六兵之事、忍公以御取合、被召出之由、年々十町分ヲモ、可有安堵と申候、先々目出度候、併御弓矢之習与は乍申、鎮永被立御用候、于今不及是非候、同鎮泰へハ為代地、旧野畑分拝領被申候、自然六兵於無婦參者、彼十町をも相加可被下之由、被仰出之通申候、此時者、定而忍公御思案之儀も、可有御座候哉、貴所別而大慮為被仰合之由、承及候間、今以無替目、何篇鎮永跡目之事、奉憑外無他候、必重々可申承候之条、省略候、恐々謹言、

四月廿二日

御陣所

六四七 大友家文書録綱文

○大友家文書録 増補訂正編年大友史料二六

〔宗正十年〕四月廿三日、二十四日、義統、使田原紹忍、出兵、戰於時枝、

紹忍從士渡邊石見守統忠、照山雅樂助、渡邊宅岐守、渡

邊新右衛門尉、渡邊三郎右衛門尉、各得首級、相良主水

助及忠右衛門〔櫛野彈正〕助七〔市丸、武部〕、蘆荻玄允、〔藤〕創、飯田

麟清、津崎兵庫助、亦有功。◎二十六日、時枝豊兵、進

〔到世卷〕、柴田禮能與力、被官、力戰、被創、或戰死、

六四八 大友義統合戰頸手負注文一見狀

○渡邊文書
增補訂正編年大友史料二六

〔大友義統〕
〔花押〕

天正十年卯月廿三日、同廿四日、於時枝表、田原近江入

道紹忍与力家中之人、或分捕高名、或被疵人数着到、銘々

加披見訖、

頸一 名字不知 渡邊 石見 守 討之

頸一同 照山 雅樂 助 討之

頸一同 渡邊 壹岐 守 討之

頸一同 渡邊 新右衛門 尉 討之

頸一同 渡邊 三郎右衛門 尉 討之

被疵衆

相良主水助 〔矢疵〕

忠右衛門 〔櫛野彈正〕

助 〔市丸、武部〕

蘆荻玄允 同

以上

六四九 大友府蘭書状案

○大友家文書錄
增補訂正編年大友史料二六

〔宗正〕度時枝表、一動之儀諸勢打出候之處、前〔廿五〕、到世

奈〔創力〕取懸候歟、其方與力、被官、或被疵、或戰死、忠儀

粉骨之次第著到銘々加披見候、連々之心懸令首尾、軍勞

之段乍案中感悅候、定〔宗正〕而義統別可賀之之条、不及口能候、

殊鎮兼倍無別儀馳走之由承候、禮能越山之砌、如申候、

世上如何体申妨候共、鎮兼心底於無變化者、憲法之用捨

何様不可有餘儀覚悟候、自今以後も、邪說等可有之時者、

何〔ケ〕度も示給、可申談之旨、能々入魂肝要候、猶重々可

申候、恐々謹言、

五月二日

柴田筑前入道殿

府蘭 在判

六五〇 田原親家感状写

○碩田叢史津崎文書
大分県史料一〇

去年十一月廿日、於宇佐表各励粉骨、忠貞之次第、無比

類候、殊今度時枝切寄廻、兩日相動、剩被官被疵碎手之趣、

究淵底候、乍案中、至兩陣心懸之段、感人候、必追而、

可顯其志候之間、倍馳走干要候、恐々謹言、

五月三日

津崎左近助殿

親家〔花押影〕

六五一 田原親家感状案

○片山文書
大分県史料一〇

去年十一月廿日於宇佐表、励粉骨、殊今度時枝切寄廻り、

兩日相勤、碎手之趣、究淵底候、連々以無足之上、至兩

陣心掛之段、神妙候、必追而、可顯其志候間、倍馳走肝

要〔二候〕、恐々謹言、

天正十 五月三日

片山源六兵衛殿

親家

六五二 田原親家感状

○森文書
大分県史料三五

去年十一月廿日、於宇佐表励粉骨、忠貞之次第、無比類候、

殊今度、時枝切寄廻、兩日相動、碎手之趣、究淵底候、

乍案中、到兩陣心懸之段、神妙候、必追而、可顯其志候

之間、倍馳走干要候、恐々謹言、

五月三日

森伊賀入道殿

親家〔花押〕

六五三 田原親家感状

○萱嶋文書
大分県史料一〇

去年十一月廿日、於宇佐表、各励粉骨、忠貞之次第、無

比類候、殊今度時枝切寄廻、兩日相動、碎手之趣、究淵

底候、乍案中、到兩陣心懸之段、感悅候、必追而、可顯

其志候之間、倍馳走肝要候、恐々謹言、

五月三日

萱嶋美濃守殿

親家〔花押〕

六五四 大友義統感状

○佐田文書
增補訂正編年大友史料二六

今度至時枝表一勢差遣候之処、鎮綱別而馳走故、家中之者共被疵之由、粉骨之次第感悅候、弥可被励忠意事、可為祝著候、必追而一段可賀申之趣、猶田原近江入道可申候、恐々謹言、

五月五日

義統(花押)

佐田彈正忠殿

六五五 田原親家恩賞宛行狀

○松原文書
大分県史料一〇

為海辺覚悟、両切寄取付候間、別而馳走、可為祝著候、然者於当郷中、三段地加扶助候、倍於粉骨之心懸者、弥可賀之候之趣、萱嶋美作守可申候、恐々謹言、

六月廿八日

親家(花押)

奈原紀右衛門殿

六五六 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

義統使玖珠郡士、発向于野仲氏領地、此時田原紹忍亦率宇佐郡士、向雀尾砦○久保統量放火、有功、義統作感贖於統量、

六五七 大友義統感狀案

○大友家文書録
大分県史料三三

前十九、野仲兵庫頭領内発向之儀、至玖珠郡衆中、申付候処、為彼手合、田原近江入道被申談、雀尾切寄籠迄差奇、小屋放火之由、軍旁粉骨之次第、感人候、弥不可有油斷之儀候、恐々謹言、

十月廿一日

義統 在判

久保舍人殿

六五八 大友義統書狀

○佐田文書
増補訂正編年大友史料二六

安心院中務入道切寄、于今相支之由、預注進候、被添心候之次第、祝著候、共表之儀、每事田原近江入道被申談、急度落去候之様、御才覚頼存候、其堺立柄、節々示給、可得其意候、委細猶志賀安房入道可申候、恐々謹言、

十月廿四日

義統(花押)

佐田彈正忠殿

六五九 大友義統書狀

○佐田文書
増補訂正編年大友史料二六

先書如申候、神樂要害于今依相支、相城被取付、鎮綱登城之由候、今度別而被励馳走候事、乍案中祝著候、弥各被申談、有才覚、彼城早速可落去調儀頼存候、委細猶雄城肥前入道、小田原左京亮可申候、恐々謹言、

十月廿五日

義統(花押)

佐田彈正忠殿

六六〇 大友府蘭書狀

○佐田文書
増補訂正編年大友史料二六

安心院中務入道要害神樂、于今依相支、田原紹忍被申談、前廿一、取詰、被逐在陣候由、預注進候、御心掛之次第、案中候、堺目覚候之条、早々落去候之様、此節別而可被励忠儀事肝要候、於様体者、義統切々可加下知之条、不及口能候、恐々謹言、

十月廿五日

府蘭(花押)

佐田彈正忠殿

六六一 田原紹忍感狀

○廣崎嘉十郎氏文書
増補訂正編年大友史料二六

神樂表動、自最前別而馳走之由候、感悅候、猶中山左近助可申候、恐々謹言、

天正十年十月廿六日

紹忍(花押)

廣崎兵庫入道殿

廣崎彈正忠殿

廣崎式部丞殿

其外衆中

六六二 田原紹忍書狀

○廣崎嘉十郎氏文書
増補訂正編年大友史料二六

到宇佐表、時枝家中之者共往返之由候之間、井手之口逆待之義申候之処、別而馳走之由令祝著候、弥無油斷可被相心懸事專一候、猶中山鎮道可被申候、恐々謹言、

〔義統〕(天正十年) 十一月廿七日 廣崎式部承殿 廣崎彈正忠殿 廣崎兵庫入道殿

〔田原〕(天正十年) 紹忍(花押)

六六二 大友義統感狀

○田原文書 增補訂正編年大友史料二六

從去々年至好士岳遂籠城、忠貞之覚悟、殊去冬以來於立花令在城、折々軍勞之由、旁以感入候、道雪、鑑實申談、弥可被励馳走事肝要候、必追一段可賀之候、恐々謹言、(天正十年) 十一月廿八日 義統(花押)

田原龜壽殿

六六四 大友義統感狀案

○大友家文書錄 增補訂正編年大友史料二六

於今度安心院表耽、在陣之由候、為無足馳走之段一入感候、弥可被励軍勞事肝要候、必其堺取鎮、一稜可賀之候、恐々謹言、

十一月廿八日

飯田權介殿

六六五 大友家文書錄綱文

○大友家文書錄 大分県史料三三

□于高位岳城兵堤鎮方等追撃□功、堤三右衛門尉

鎮方・内蔵助堤八□方呈軍忠狀于義統

六六六 大友家文書錄綱文

○大友家文書錄 大分県史料三三

義統、賞堤鎮方等高軍功、加袖判于其軍忠狀、且授感書于父子、

六六七 大友義統合戦手負着到一見狀案

○大友家文書錄 大分県史料三三

天正十年十二月一日、到高位岳敵行仕候之条、衆中懸合、遂防戦候刻、被疵着到、堤三右衛門尉手火矢疵、内蔵助手火矢疵、以上、

加被見畢

六六八 大友府蘭感狀案

○大友家文書錄 大分県史料三三

□財津讚岐入道所宿禰之儀、申付候刻、別而□走之由、令承知候、殊龍閑以同陣、軍勞之段、感入候、弥以申談、可被励忠貞事肝要候、恐々謹言、

十二月三日

赤尾兵庫助殿

六六九 田原親家感狀案

○大友家文書錄 增補訂正編年大友史料二五

今度尾長居切寄勤番之事、掃陣之刻、頓而申付候之処、預馳走之趣、神妙之至候、殊去六日、至切寄、悪党等取懸候之刻、城内各一段粉骨之故、敵即時引退之由候、忠勲之次第、大慶候、弥家中老若以一致、可被励懇志事、可為祝着候、恐々謹言、

十二月十三日

津崎兵庫助殿

六七〇 大友義統感狀案

○大友家文書錄 大分県史料三三

前朝、至高位岳要害、悪党行之砌、在城之衆被申談、生葉大野原迄付送、合戦之刻、息三右衛門尉被疵之由候、心懸忠儀之次第、乍案中感悦候、殊郎從負手之由、令承知候、旁以軍忠狀、加袖判進之候、委細猶重々可申候、恐々謹言、

十二月十六日

提安芸守殿

六七一 大友義統感狀案

○大友家文書錄 大分県史料三三

□至高位岳要害、悪党行之砌、生葉大野原迄、
之刻、其方依被碎手、被疵之由候、忠意之候、

雖無申迄候、弥可被抽馳走事

〔（天正十年十一月十六日乙）〕
〔（從三右衛門）〕
尉殿

〔（新候、必殿前可題）〕
志候、恐々謹言、
〔（天正十年）〕
正月十六日
長野源内允殿

義統（花押）

○〔（内傍注ハ『増補訂正編年大友史料』二六ヲ参考ス。〕

六七二 大友義統書狀

○河原氏藏問注所文書
淺野陽吉問註所家文書

前廿四、生葉表（依後生葉部）一行之儀、相催候処、統景別而馳走之由
候、乍案中祝着候、今度折々忠意之次第、寔御頼敷存候、
弥高位岳城衆以熟談、可被励粉骨事、簡要候、年内既無
余日候条、明春早々可加下知候間、每事無油断才覺專一、
猶重々可申候、恐々謹言、
十二月廿七日

義統（花押）

問注所刑部大輔殿

六七三 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三三

義統築日向境宇目
□□嶽城、星阿塞、遣柴田遠江入道紹安、属野□□、
其両所以備薩州、

六七四 大友義統感狀

○長野虎八氏文書
増補訂正編年大友史料二六

於今度安心院表、本庄中務少輔以同陣、別而軍勞之由、

六七五 大友義統感狀案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二六

於今度安心院表、本庄中務少輔以同陣、別而軍勞之由感
入候、弥可励馳走事肝要候、必追而一段可賀之候、恐々
謹言、
正月十六日
木付兵部少輔殿

義統（在判）

六七六 大友義統書狀

○佐田文書
増補訂正編年大友史料二六

〔（天正十一年癸未）〕
御書之写案
数度如申候、安心院要害、于今相支候事、方々聞、更不
可然候、就中、至城内粮已下差籠人在之由候、偏当陣
衆油断誠不及是非候、右閉目之儀、至田原近江入道、本
庄中務少輔申遣候条、彼衆被申談、諸口堅固差擲、急
度一着之調儀頼存候、委細猶賀来中務少輔、上野掃部助
中含候、恐々謹言、

天正十一年癸未
正月廿八日

義統（花押）

飯田但馬入道殿
矢部三郎殿

六七七 大友府蘭書狀

○佐田文書
増補訂正編年大友史料二六

去廿、神楽要害一著之由、示給候、彼調略旧冬已来、至
麟珠、鎮綱令入魂候之処、紹忍被申談、以才覚、安心院
十世松下城之段、堺目之覚最肝要候、今度御心懸、軍勞
之次第、定而義統可申達之条、不及口能候、弥每事被励
馳走專一候、猶重々可申候、恐々謹言、
天正十一年
閏正月廿四日
府蘭（朱印）

佐田彈正忠殿

六七八 田原紹忍書狀

○廣崎嘉十郎氏文書
増補訂正編年大友史料二六

為神楽一著之祝儀書狀、殊河瀬彦到来、祝著候、恐々謹言、
天正十一年
潤正月廿五日
廣崎兵庫入道殿

六七九 大友義統感狀

○佐田文書
増補訂正編年大友史料二六

安心院中務入道事、依不儀顯然、令誅伐候、雖然神楽要

害相支候之条、加下知候之处、不思軒以同陣、別而被励
辛勞、彼城属案中、祝著候、必追而一稜可成其感之趣、
猶紹忍可申候、恐々謹言、
(貞應)
二月廿一日
(天正十一年)

義統 (花押)

佐田彈正忠殿

六八〇 大友義統感状

○大分県立先哲史料館所蔵
文書

安心院中務入道事、依不儀顯然、令誅伐候、雖然神楽要
害相支候之条、加下知候之处、不思軒以同陣別而被励辛
勞、彼城属案中候、祝着候、必追而一稜可成其感之趣、
猶紹忍可申候、恐々謹言、
(貞應)
二月廿一日
(天正十一年)

義統 (花押)

中山彈正入道殿

六八一 土師種專書状

○萩原文書
増補訂正編年大友史料二六

態用一書候、敷田至両切寄、往返之人、其外地下人等、
聊爾之子細出来之時者、自一雲、一途可被申付候、誰人
違乱之儀申妨候共、不可有請引候、為御存知候、恐々謹言、
(十指)
五月七日
種專 (花押)

「天正十一年」萩原美作入道殿
申し給へ

六八二 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

○二十四日、○我兵攻廣津治部少輔万田岩_{在下}、○屠之、
壘所守其岩廣津式部少輔以下、而告之義統、此戰森玄蕃
允被創、中島主殿助力戰、○小田民部少輔被官秋台左京
亮・麻生仁介及野上民部少輔・野上_{筑後二}與次郎被官等
負創、與次郎僕從得首級、各有軍功

六八三 大友義統書状案

○大友家文書録
大分県史料三三

在郡辛勞之儀、察存候、方角立柄之儀、至坂本備中入道・
財津讚岐入道申遣候間、被遂入魂、無油断才覚頼存候、
將又從豊前目如注進者、前_{廿四}到津治部少輔抱之万田切
寄取懸、即時打崩、為始城督廣津式部少輔、不殘一人討
果之由候、先以大慶候、勝利之儀候条、為御存知候、猶重々
可申候、恐々謹言、
(天正十一年)
九月廿六日
義統 在判

大神常陸入道殿

志賀常陸入道殿

六八四 大友府蘭書状

○坂本文書
増補訂正編年大友史料三六

從五条鎮定至其方之書状、同密通之切紙、銘々加披見、
得其意候、鎮定忠貞珍重之段、雖不断候、心懸之次第奇
特存候、不謂実不実、聊_茂不審之子細候者、不移時日、
入魂候様、切々被申通肝要候、如永_{宗方}者、無心元存候、
當時豊前表行半候之条、從敵方者、可為種々之悪略候、

能々被聞合、至盛岡細々注進專一候、爰元遠方_之飛脚等、
造作之至候、無余義題目者、從盛岡可有到来候之間、被
得其意專要候、乍勿論立入条々者、何時_茂承、可申談候、
為存知候、恐々謹言、
(天正十一年)
九月廿七日
府蘭 (朱印)

坂本備中入道殿

追而昨今如注進者、去廿四日下毛郡悉令発向、切寄
二三ヶ所落去之刻、敵數十人討捕之由、手始之勝利、
珍重候、如此候者、余方々覚、可相替候歟、猶重々
可申上候、
坂本備中入道殿 府蘭

六八五 大友義統感状案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二六

至今度豊前表、從最前名代以出陣、軍身殊去月_{廿四}万田
切寄打崩候之刻、親類与力被官分補高名、被疵粉骨之由、
軍忠状遂披見感悦候、雖無申迄候、倍可被励馳走事可為
祝著候、恐々謹言、
(天正十一年)
十月八日
義統 在判

太田九郎殿

六八六 大友義統感状

○北里文書
増補訂正編年大友史料二六

至今度豊前表從最前以出張、軍勞殊去月廿四万田切寄打
崩候砌、惟久_{宗方}自身依被碎手、親類寄揆被官數十人被疵、
粉骨之由、軍忠状、銘々加披見候、寔忠儀無比類候、親

父惟昌連々忠意之覚悟、令顯然、弥御頼敷存候、雖無申迄候、向後倍可預馳走事、可為祝著候、必以使節可申候、恐々謹言、

十月八日

北里次郎左衛門尉殿

義統 (花押)

六八七 大友義統力合戦手負注文一見状案

○大友家文書錄 增補訂正編年大友史料 三六

袖判

天正十一年十月八日、豊前国宇佐郡佐野切寄控刻、一萬田民部少輔統賢被官、被疵著到、銘々加披見事、

廣瀬左近允、 鐘疵

衛藤主計允、 鐘疵

都甲市兵衛尉、 鐘疵

以上、

六八八 大友義統感状

○久保文書 大分県資料 三三

前八佐野切寄落去之刻、別而依被碎手、被刀疵之由、粉骨之次第感入候、必以時分可賀之候、恐々謹言、

十月十日

戸次図書允殿

義統 (花押)

六八九 大友義統感状

○一万田文書 大分県史料九

去月廿四下毛郡之内、間田切寄打崩之刻、分捕高名、殊前八、宇佐郡佐野切寄控之砌、被疵粉骨之次第、旁以忠儀無比類候、必追而一段、可賀之候、恐々謹言、

十月十一日

一萬田市進殿

義統 (花押)

○大友家文書錄 『大分県史料』三三(二)二七収ム。

六九〇 大友義統感状案

○大友家文書錄 大分県史料三三

去八、佐野切寄打崩之刻、自身別而依被碎手、家中之人等被疵着到、銘々加披見、以袖判申候、向後弥被申進、可預馳走事肝要候、必至統賢一稜可賀申候、恐々謹言、

十月十一日

一萬田民部少輔殿

義統 (在判)

六九一 大友義統感状写

○竹田津輝夫文書 熊本市千反畑町

今度田原常陸介以同心、別而辛勞、殊前八、宇佐郡之内佐野切寄打崩候刻、自身被碎手之条、被官歴々、軍旁次第、着到所披見、以袖判申候、連々其方心懸之故、如此勤粉骨候事、感人候、向後弥可被加進事、專一候、猶親家可申候、恐々謹言、

十月十一日

竹田津志摩守殿

義統 (花押影)

右一通、肥州熊本藩士竹田津志摩右衛門

藏書、天地三寸、左右一尺五寸、天正八年田原右馬頭親貴討手之時、鞍掛及宇佐郡迄之働感状也、

六九二 大友義統感状案

○大友家文書錄 大分県史料三三

〔今度機轉圖〕 癸向之刻、被遂出張、於所々軍旁、殊〔 〕 郡之内佐野切寄控候之砌、与力、被官、分〔 〕 疵戰死之由着到、加披見、以袖判申候、統尚〔 〕 懸故、励粉骨事、感悦候、向後弥可被加諫事、〔 〕 為祝着候、必追而一段可賀申候、恐々謹言、

十月十一日

林左京允殿

義統 (在判)

六九三 大友義統感状案

○大友家文書錄 大分県史料三三

〔今度機轉圖〕 豊前国兎向之刻、被遂出陣、於所々軍旁、就〔 〕 宇佐郡之内佐野切寄控之砌、被官被疵、戰〔 〕 着到加披見、粉骨之次第感悦候、向後弥可〔 〕 為祝着候、必取鎮一段可賀之候、〔 〕 統 (在判)

六九四 大友義統感状案

○大友家文書錄 大分県史料三三

〔今度機轉圖〕 衛門尉殿

前八当郡之内、佐野切寄被打崩候之刻、被励粉骨之由、感入候、弥向後馳走肝要候、猶田原近江入道可申候、恐々謹言、

十月十五日
久保大藏少輔殿
義統 在判

六九五 大友義統感状案

○大友家文書錄
大分県史料三三

前八、当郡之内、佐野切寄被打崩候刻、別而軍旁之次第感入候、向後弥可励馳走事肝要候、必追而一段可賀之趣、猶田原近江入道可申候、恐々謹言、

十月十五日
上野左介殿
義統 在判

六九六 大友義統感状案

○大友家文書錄
大分県史料三三

今度宇佐郡之内、佐野切寄被打崩候之刻、鎮官家中工藤主膳正、励粉骨戦死之由候、忠儀感心無極候、寔不便之儀候、彼子孫於在之者、能々可被賀之事肝要候、為御存知候、恐々謹言、

十月十五日
朽網常陸介殿
義統 在判

六九七 大友義統感状

○常念寺文書
増補訂正編年大友史料二六

至今度豊前目出陣、殊野仲表江、于今在陣辛勞感入候、向後弥可励馳走事肝要候、恐々謹言、

十月十六日
八坂主馬允殿
義統(花押)

六九八 大友家文書錄綱文

○大友家文書錄
大分県史料三三

○十六日、義統在豊前、攻是則些陥之、古後玄蕃允負創、獲首級、其被官二人、小田民部少輔僕從等亦被創、

六九九 大友義統合戦

打死頸手負注文一見状

○平井寛昭文書
大分県史料一二

〔三三〕
〔花押〕

天正十一年十月十六日、豊前国下毛郡是則切寄挫之刻、平井宮内少輔鎮郷親類被官、或分捕或戦死、被疵著到、加披見畢、

頸一 平井隼人 佐討之、
榎町縫殿 助 鑑疵
衛藤玄番 允 矢疵
衛藤五右衛門尉 同
七右衛門 同

藤十郎 刀疵

又右衛門 石疵

平井隼人 佐僕從
新右衛門 戦死

同
半 介 石疵
以上

七〇〇 田原紹忍恩賞宛行状案

○中島文書
増補訂正編年大友史料二六

昨日十八、於其表、時枝衆、西部逆徒被懸、台、数刻遂防戦、父壹岐守戦死無比類候、何様忠賞之統、永々不可有忘却候、先以五町地、令扶助候、当切寄之事、弥堅固相覚願入候、恐々謹言、

十月十九日
中島主殿助殿
紹忍

七〇一 大友義統感状

○財津孝之文書
熊本市清水町打越

今度豊前国発向之刻、從最前在陣、殊下毛郡万田切寄打崩候砌、被官被疵之由候、軍旁之次第、感入候、必追而一段、至其方、可賀之候、恐々謹言、

十月廿八日
野上民部少輔殿
義統(花押)

○「大友家文書錄」(「大分県史料」三三) 二七取ム。

七〇二 大友義統感状

○財津水延藏野上文書
西国武士團關係史料集八

今度豊前国発向之刻、以野上治部少輔同心、在陣辛勞、殊下毛郡万田切寄挫之砌、以刀打別而軍勞之段、感入候、必追而、一稜可賀之候、恐々謹言、

十月廿八日 義統 (花押)

野上紀右衛門尉殿

七〇三 大友義統感状案

○大友家文書録
大分県史料三三

今度、豊前国発向之刻、自最前在陣辛勞、殊下毛郡之内、万田切寄挫之砌、其方事以刀打、別而被励粉骨之由、感入候、何様取鎮、一稜可賀之候、恐々謹言、

十月廿八日 義統 在判

中島主殿助殿

七〇四 大友義統感状案

○大友家文書録
大分県史料三三

今度豊前国発向之刻、自最前在陣辛勞、殊下毛郡万田切寄挫之砌、被官秋吉左京亮・麻生仁介被疵之由候、就中前十六是則切寄打崩候砌、即從一人被疵候之由、粉骨之次第、其方心懸故候、感入候、必別一段可賀之候、恐々謹言、

十月廿八日 義統 在判

小田民部少輔殿

七〇五 大友義統感状案

○大友家文書録
大分県史料三三

今度豊前国発向之刻、以野上治部少輔同心、從最前在陣、殊下毛郡万田切寄打崩候之砌、被疵之由、之次第、感入候、必取鎮、一段可賀之候、恐々謹言、

十月廿八日 充殿

充殿

○渡辺澄夫氏ハ恐ラク野上一族宛ト比定スル。

七〇六 大友義統感状

○矢野厚男藏平井文書
杵築市大字符宿

今度豊前国発向刻、為無足從最前在陣、殊下毛郡万田切寄挫候砌、被疵之由、軍勞之次第、感入候、必追而、一段可賀之候、恐々謹言、

十月廿八日 義統 (花押)

○充所ヲ欠クモ、渡辺澄夫氏ハ平井内藏助充ト比定スル。

七〇七 大友義統感状

○大友家文書録
大分県史料三四

今度豊前国発向之刻、從最前在陣、殊前十六是切寄挫候之砌、分捕高名被疵、内兩人被疵之由、旁軍勞無比類候、感入候、必取鎮、一稜可賀之候、恐々謹言、

十一月廿八日 義統 (花押)

古後玄番允殿

○(一)内ハ、増補訂正編年大友史料「二六ニヨリ傍注ス。日田郡石井村古後平右衛門所持仕候」ノ貼紙アリトイフ。

七〇八 大友よし統感状

○小野尾文書
大分県史料二

今度豊前国発向之刻、さいちん、殊下毛郡佐野切寄挫候砌、被疵よし、忠儀感入候、必追而、一段可賀之ものなり、かしく、

十月廿八日 よし統 (花押)

小野尾河内入道とのへ

七〇九 大友よし統感状

○豊田文書
大分県史料一

今度豊前国発向之刻、さいちん、殊下毛郡佐野切寄挫候砌、被疵并小者一人疵よし、忠儀感入候、必追而、一段可賀之もの也、かしく、

十月廿八日 よし統 (花押)

長野主殿助とのへ

七一〇 大友府蘭感状写

○頼田義史津崎文書
大分県史料一〇

就今度親家在陣、於所々軍勞、就中、宇佐郡佐野切寄取崩候刻、別而、励粉骨故、親家手之衆分捕高名、被疵、殊戦死之様体、銘々令承知、感入候、弥家中以一味同心、

忠儀之覚悟、肝要候、猶重々可申候、恐々謹言、
十一月十二日 府蘭 (花押影)
津崎大和入道殿

城鎮之、久保大藏少輔・飯田麟清・都甲三河入道等、從
紹忍、有功、義統作感狀、

〔千五百三〕(天正一年) 義統 在判
飯田但馬入道殿

七二一 大友義統感狀

○大友家文書錄
大分県史料三四

〔前巻〕
一天正十一、九、廿四条採但〔六二テ採〕

今度豊前国発向之刻、從最前在陣、殊下毛郡万田切寄打
崩候砌、被官被疵、并 僕從分捕高名之由、誠軍忠之次第

感人候、必取鎮、至其方、一稜可賀之候、恐々謹言、

十一月廿八日 義統 (花押)
野上与次郎殿

七二四 大友義統感狀

○長野康雄文書
大分県史料一一

宇佐社中之者共、企一雅意之条、田原近江入道以下、城
相閉目候、然者其方事、妙見岳留守番、被遂其節由候、
辛勞之儀候、必追而、一稜可賀之候、恐々謹言、

十二月三日 長野弥十郎殿

義統 (花押)

七二七 大友義統感狀

○大友家文書錄
大分県史料三三

〔前巻〕
〔中〕
〔佐社中之者共、企一雅意候条、閉目之儀申□□□□
処、田原近江入道以同陣、別而馳走之段感□□候、必其境
取鎮、一稜可賀之候、恐々謹言、

十二月三日 都甲三河入道殿

義統 在判

七二五 大友義統感狀案

○大友家文書錄
大分県史料三三

宇佐社中之者共、企一雅意之条、田原近江入道以下城相
閉目候、然者其方事妙見岳留守番被遂其節由候、辛勞之
儀候、忠意之段、必追而一稜可賀之□、恐々謹言、

十二月三日 久保大藏少輔殿

義統 在判

七二八 大友義統感狀

○平井文書
大分県史料二一

於今度豊前表万田・是則兩切寄、被打崩候之刻、以刀打、
依勵粉骨、被鏗疵之由候、忠儀之次第、感人候、必追而、
一段可賀之候、恐々謹言、

十二月十三日 平井彈正忠殿

義統 (花押)

七二二 田原紹忍感狀

○萩原文書
増補訂正編年大友史料 三六

今朝時枝悪党取出候哉、以魁別而粉骨之通案中候、仍郎
從六郎次郎被刀疵之由候、感人候、何様一稜可賀之候、
弥可勵忠意事肝要候、恐々謹言、

十二月二日 紹忍 (花押)
元重安芸守殿

七二六 大友義統感狀案

○大友家文書錄
大分県史料三三

〔中〕
〔中之者共、企一雅意候条、閉目之儀□□近江入道
以同陣、別而馳走之段、□□取鎮、一稜可賀之候、恐々
□□、

七二九 大友義統感狀

○田原瀧藏氏文書
増補訂正編年大友史料 二六

於今度豊前表、佐野切寄被打崩候刻、分捕高名之由、忠
儀之次第感人候、必取鎮、一稜可賀之候、恐々謹言、

十二月廿日

義統 (花押)

七二三 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

十二月、先是宇佐社職等叛義統、命田原紹忍、下妙見

七二五 田原親家書狀

○森文書
大分県史料三五

每陣軍勞神妙候、就中於佐野切寄、依碎手被疵、粉骨之趣、聊雖非忘却候、當時闕地等依無之、不顯其志候事、心外候、然者來秋出張之儀、別而可勵馳走事、專一候、必追而可賀之条、能々可得其意候、恐々謹言、

六月廿四日

森木工助殿

親家(花押)

七二六 田原親家書狀

○郷司文書
大分県史料三五

数度出張之刻、軍勞感入候、就中於佐野切寄碎手、被疵之次第、無比類候、殊去年当春筑後表発向打続、粉骨之趣、聊雖非忘却候、相応闕地依無之、不顯其志候、然者來秋御出勢之儀、稠被 仰催候、誠辛勞雖無尽期候、以分過之馳走、別而可勵忠貞事、可為此節候、必追而可賀之条、能々可得其意候、恐々謹言、

六月廿四日

郷司監物允殿

親家(花押)

七二七 田原親家書狀写

○宮水氏影写文書
大分県史料一〇

数度出張之刻、軍勞感入候、就中於時枝佐野、碎手次第、

無比類候、殊去年当美、筑後表発向、打続粉骨之趣、非忘却候、相応之闕地依無之、不顯其志候事、心外候、然者、來秋御出勢之儀、稠敷被仰催候、誠辛勞雖無尽期候、以外過分馳走、別而可勵忠貞事、可為此節候、必追而可賀之条、可被得其意候、恐々謹言、

六月廿四日

溝部右近允殿

親家 書判

七二八 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

義統、賞柴田礼能能或作農、從宗滴勵忠功、准門葉、免著杏葉紋、以授書、又賞財津久右衛門尉戰死戰卒于黒木表、授感牘於其子千松、又與書于四日市切寄士豊前宇佐郡渡辺統忠、命事、

七二九 大友義統書狀案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二六

別而、忠意之次第、度々申出候、
者、当切寄商売人諸方往反之刻、諸儀、從前々免許之趣、今以無相違候、為存言、

天正十二年十一月廿八日

四日市切寄中

義統 在判

七三〇 田原紹忍・田原親盛連署奉書

○渡邊文書
増補訂正編年大友史料二六

為折々軍勞之御感、当切寄商売人方々往反之刻、諸公事諸点役等之儀、永代被成 御免許之由、以御書被仰出候、尤珍重候、於何方、先立此旨可有沙汰事肝要候、恐々謹言、

天正十二年十二月三日

四日市切寄衆中

親盛(花押)
紹忍(花押)

七三一 大友府蘭書狀

○大友文書
大日本史料二一〇

追而申候、日田へ道雪被差置之由候、弓箭方者郷旁マナ第一にて候間、あハれ、秋月高良山へ一行仕候へかし、何さま日田より差合、悉討果、弓箭之明隙候するなど、境目へ聞えわたり候やうに、御武者專一存候、無申迄候へ共、かやうなる才覚、道雪并坂本道州などへハ、折々密通可然存候、猶々從日州此間時衆罷歸之由候、彼申表も從方々到来同前候、定而住持可被申候、旁御油断有間敷候、急度以飛脚申候、夜前保戸又從余方も如到来者、土持事薩州へ罷越候儀、必定にて候、就夫海陸通路等相留候之条、爰元壳船之者、荷物以下少々日州へ捨置やう下候て、俄罷歸之由候、薩州衆者悉陣立之催、海陸共不穩便之由候、子細者從秋月・龍造寺使を付置、申分者、豊州衆皆々帰陳候、高良山へハ小人数にて在陳候之条、以一行弓箭之根切を可仕との申事二付而、出勢之由候、愚老存候ハ、今度宗運如入魂者、肥州之儀も

肝要之砌候、毎事不可有御油断候矣、

從阿蘇惟光^并甲斐刑部太輔^上・同兵庫頭所之書狀、被差遣候、銘々令披見候、此方へも從彼衆書音同前候、殊宗越

一通之趣、旁以阿蘇家・御舟・隈庄表之儀、氣仕令相聞之候、彼条兼日申旧候之間、今以不及仰天候、然者阿蘇御舟加勢之儀、両志賀・戸次宗傑、彼堺為差擲雖被残置候、今度宇目村風聞付而、親善^留留之由其間候哉、從此

方不申遣内、帰宅之条などやうにも被加下知肝要候、前日宇目堺之儀、風説一篇かと存候之処、又先度密通之一人、此一兩日以前罷越候、去月十九日嶋津中務太輔土持

へ令着陳、同廿一・二三者あつさ口、佐伯者三口之通道を切者三人差遣見せ候て、此度者不及行、同廿七日先々佐土原迄罷帰、今月八日嶋中同山見之衆烈、鹿兒島へ罷越、此表海陸之儀、義久^高以談合一行可仕之由、濃々令入魂候、從彼表至爰元、かほと被添心候する事、更不存

寄子細候之条、種々尋搜候之処、先年高城表之時、至田北鎮周始中終申通候つる儀、粗露頭候て、于今疑心無止事三付而、為其首尾如此申越之由候間、先々請付申候、從余方も辻合事共候、とかく佐伯を物よく見懸たる

と聞之候之条、行之浅深者難計候、当月中者何如候する哉、末^二入候者可為必定候歟、彼者申候ハ、土持以一分是非一鮎可仕と、嶋中へも望たると申候、これハたと

ひ其分に候共、不可有差儀候、嶋中又々堺目迄罷越候て、相催候者時宜難計候、その時者、津久見之儀者無人數候之間、登城一篇たるへし、又阿蘇目へ、加勢之儀も覺はかりにてこそ候へ、両志賀にてふか〜と、難成存候、

宗傑^官事者、玄珊在陣候之間、梅牟礼^一城番一篇之様^二申候、又明日にも、宇目・佐伯へ敵取出候者、親善懸付候ハてハ難成候之条、前後之儀、以思惟御才覚可然存候、將又其表之儀親家郡衆申談、馳走之由候、珍重候、吉左右猶

重畳可申承候、恐々謹言、

壬八月十三日

「義統まいる」

御返 申給へ

府蘭 (花押)

七三六 大友義統書状案

○大友家文書録 大分県史料三三

蘇家之仕合、誠絶言語候、每^一油断趣、乍案中祝着候、^二于今以在城、別而粉骨高名之段、今^三下城所注進当来候、此時者肝要候、雖^四兵庫頭在城之由、至其堺直左右候、

候、自然替儀於有之者、重々承可得其意、^一津守・田代至薩州、同意候哉、無実所様子、^二是非候、

一高知尾之儀、無替儀之由候之間、肝要存候之処、親^三久無滞山、南郡表候様、越山之由候、無心元候、併兩人無恙候事、先以專一候、別而可加力覚悟、無余儀候、方角^四江滞留候者、可被添心事、不及申候、

一薩州衆合志領所々^一江令居陣、阿蘇家内略之由候哉、銘々預入魂候、今度折々懇切之儀、喜悅不斜候、

一小国兩人之事、今日迄者無別儀候、雖然質人等、不差置候間、重々以使節可申内意候、從道雲^二親類一人被差出、專要之由可被申達候、委細浦上長門入道可申候、恐々謹言、

閏八月〇三日

志賀武藏入道殿

義統 朱印

七三七 大友義統感状

○大津留文書 増補訂正編年大友史料一七

去月九日、於長尾要害仕寄、其方僕從龜介彌七郎被疵之由候、粉骨之次第感悦候、亦可被励馳走事、可為祝著候、必取鎮一稜可賀之候、恐々謹言、

九月二日

大津留六右衛門尉殿

義統 (花押)

七三八 上井覚兼日記

十一日、中書御使兩人へ、御酒寄合候、從夫彼衆

同心申、出仕申候、種々御談合共也、鍋嶋飛驒守より書状到来候、趣者、去五日、針目之豊州陳敗北候て、夜中三引退候由也、菟角急々使節にて可申之通也、此朝、愚弟源左衛門尉身上訴訟之義共候、一ヶ条忠棟へ

内義にて申候、伊集院淡州にて申候也、此日、中書御返事、稲富新介にて被仰候、趣、さてハ高知尾之事、先々質人指出、属御手三候歟、肝要候、就者、此節豊後入可目出之由、其元御談合にも出合候歟、此方御同前候、

併御両殿御神慮次第と被思召候間、諸談合も御下之由、勿論ながら被申候、然者御神慮次第可相定之由御返答也、此日、爰元諸城地頭定候てこそ、四壁等荒ましく候間、先々飯二地頭定なされ候て可然之由、出合御談合共也、并檢地衆なと被仰付候、

七三九 大友府蘭書状

○佐田文書 増補訂正編年大友史料二七

為音信傳武、并水鳥一折贈給候、御丁寧之儀祝著候、然者阿蘇目変化付而、前日之時分者、諸堺雖無実様候、海陸打廻等申付、無油断加下知候之条、近日者耽相鎮候、縦於堺目悪党現形候共、引入切所可討果之段、至義統陣所申談、調儀半候、郡衆之儀茂時枝境江在陣之由候、辛勞察存候、弥馳走專一候、猶重々可申候、恐々謹言、

九月十九日

府蘭(花押)

佐田因幡守殿

七四〇 上井覚兼日記

一、廿四日、地藏菩薩へ別而祈念仕候、明日於隈庄戰場、大施餓如御佳例可被成ため、福昌寺東堂御越也、使者にて、御着目由申候也、其御伴被成候所々之衆、礼義也、日新寺・総禪寺・直林寺・法花嶽寺・妙谷寺此此外爰彼之衆僧達也、御茶・酒肴など被持来候也、銘々ニ御酒参会申候、福昌寺東堂様も、拙宿へ御礼とて来儀被成、御茶など被下候也、御会尺如常、此日、秘書御宿にて談合也、福昌寺御宿へ秘書御同前ニ参候、御酒進上申候也、良久御閑談にて御酒也、此歸さ、秘書御宿へ可参由候て参候、御振舞也、秋月・龍・筑使者、秘書へ御礼ニ被参候、先、武庫様へ進上物渡候、秋月より馬・太刀・龍より太刀・織物、筑紫より太刀・百疋、兼又星野九郎・高良山本之座主より使書進上也、秘書即見参被成候、拙宿へも礼義之由承候、明日被来候へ、其次を以御酒寄合候する由、稻新にて申候也、何と様にも分別次第之返事也、此日、奈須彈正忠、計策を以売人のことくやつれさせ、内之者を豊後へ指通

候、彼者歸来候とて、飯野之衆被相烈被来候、趣者、

義統當時ハ小国堺へ耽被居、城誘其外此堺行、用心之体之由也、阿蘇家へも被仰組之由聞得候、然者甲斐大和守此方へ罷越候、此帰を待居候て、一行之由申様に候、是非以彼者之事、爰元へ御留被成候ハ、何事有ましき由共也、

七四一 上井覚兼日記

一、十四日、忠棟へ可参之由候間、其分に候、吉利殿・拙者也、奥にて寄合被成候、此日、於殿中御談合也、新納武州より昨日書状到来候、豊後南郡入田方牢々候て、五六ヶ年已前、又大夫殿被召直候、併領知等如本に無之候故、此度此方へ申入、可散意霧企候処、豊後より被取懸候故、ゆる木と云城取構、入田方一類六千程楯籠之由、坂梨より註進仕由也、一定此儀にて候ハ、御発足も可有候、先々諸方へ統之義可被触之旨候て、廻文被認候也、南林寺東堂殿中へ御参候、客殿作之談合共也、此晚、拙宿にて各へ寄合申候、客居吉利殿・町田出羽守殿・上原長門守・本田刑部少輔、主居忠棟・吉田美作守・拙者・伊知地越中守也、此夜、珠長・可丹・本田信州被来、深行まで閑談也、一王大夫来候て、小唄などにて酒宴也、

七四二 上井覚兼日記

一、五日、県堺見償之衆打立せ候、従当所敷祢越中守・勝目但馬守申付遣候、吾等悴者、鳴海舍人助・梶山佐

藤兩人相付候也、従飢肥兩人被来候、上原長州伝言共

候、委承候て、彼衆へ御酒寄合、聽而、可被打立由申候也、従高知尾、甲斐長門入道宗撰処より使書遣候、即使僧へ見参申候、山臥也、書面者、高森入道悪心故、新武州を始として、各彼館へ馳向、即時ニ討伐被成候、宗撰も罷出候由也、殊高森入道、高知尾衆討取由也、敵ハ切捨にて候間、数不分明候、併一処ニ頭二百計見申たる由、使僧物語也、次ニ豊後之志賀道輝、頃勘氣にて、迦住城遠方へ隠住候、然者入田方同前にて、無異儀由共也、従爰彼、年頭之礼衆多々候、皆々酒肴持来也、

七四三 上井覚兼日記

一、十六日、鹿兒島へ参上之為打立、麓迄下候刻、従高知尾使者到来之由候間、中村内藏助処ニ罷居、様体承候、入田宗和より使者、堀名字之方被来候、其案内者ニ、高知尾役人衆より、田那邊主水正被指添候、趣者、志賀道益と申ハ、道輝之息にて候、彼人頃義統被召仕候一之対を盗取、招護被申候、就夫、慮外之由候て勘気候間、菅迫と云処ニ籠居之体候、然者、入田方と一味之由候、当春中御行於有之者、豊後之事可属御案利事、程有間敷由也、不限右之仁、国衆儀々区々罷成、無正体之由也、即使者ニ見参申、御酒寄合候、閑談共也、豊國中絵図写被持来、爰彼之為体など、委口能也、拙者書状道益へ遣候て可然之由、而使被申候条、即認遣候也、其趣、雖未申馴候、令啓候、仍去年已来、入田宗和、到当邦被仰合子細共候、然処、頃御一致之段承取、肝心令存候、各如御存知、豊薩和平之事、京都御媒介故

候、然二旧冬以降、從大友殿對當家違目歷然候、殊更、於俎表度々執懸被成候、此上者、返答之防戰不可有異儀候、其節御入魂所仰候由申候也、高知尾役人衆之返答、相応申候、馬原右近大夫より、今春之慶書并驚舌預候、是も相応ニ返書仕候、入田方使堀方へ、織筋一遣候、田那邊方へ、喉輪一遣候也、從夫、兩使者被帰候間、拙者も打立、田野にて長藏坊処へ留候、亭主種々会尺共也、

七四四 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

二月、義統聞秋月種実窺豊後、進発日田郡、屯財津、先鋒奈多大膳大夫鎮基・清田氏・坂本道烈・財津了簡、大撃破秋月兵於大井莊河内、種実使大山源左衛門尉・勝木氏等留守於針日・鳶尾兩埦俗曰之、附城、而身自引兵帰、而後道烈與其伯父坂本紹玄相謀、誘針日土石井彦次郎、授銀一貫目、令之乘夜開其門鎖、而道烈・紹玄先登、我兵進攻陷埦、翌日鳶尾埦亦陷、既而義統凱旋、

七四五 田原紹忍感状

○元重文書
増補訂正編年大友史料 一七

前十八時枝悪徒、當切寄口近相絡候刻、最前懸合、別而被励軍勞、刺郎從藤三敵一人仕臥之由、感悅候、必一稜可賀之趣、原尻右衛門大夫可申候、恐々謹言、
三月廿一日
紹忍(花押)

元重兵部丞殿

七四六 上井覚兼日記

一、廿二日、雨不艶降候間、大宮司処へ然と罷居候、從爰彼酒肴など到来候、各寄合慰候也、終日、暮にて候、此晚、從宮崎申來候、佐土原より、高知尾よりの書状御持せ被成候ハハ持來候、即披見候、先日迄註進、去十八日、志賀・入田へ、豊衆同意以可取懸儀之候、然者、高知尾衆ハ、彼方へ即刻可馳統候、高知尾へ、此方より番衆可指籠之由也、

七四七 上井覚兼日記

一、四日、從鹿兒島則都來候間、平家語せ承候、二百正遣候也、此日、從飯野、有川雅樂助殿書状到来候、趣、先刻高知尾よりの註進申上候、即鹿兒島・八城へ忠棟候ニ被仰越候、左右方之返書、披見申、分別可申由候て持せ也、鹿よりの書状ハ、他方へ番衆被指籠事ハ、不輕儀候、中書・忠棟・拙者へ、能々御談合候て可然之由也、忠棟書状ハ、從彼方番衆懇望候ハ、被指遣候て可然候、先々寄々之衆可然候歟、御行も程有間敷候間、番衆被指遣候ても肝要之由也、有川殿へ拙者返事之趣、兩方之書状、委見申得其心候、先日高知尾より被申候ハ、志賀・入田へ頃豊衆取懸由候、左候ハ、高知尾衆被見統として可馳統候間、跡之番憑由候、然者、未豊衆取懸たるとハ不聞得候間、今少可承合候、若々替儀候ハ、中書へ御談合申、分別可申候、可安御心之由申候也、

七四八 田原親盛感状

○廣崎嘉十郎文書
増補訂正編年大友史料 二七

時枝表凶徒等、節々現形之由候間、寄々之衆被相諫別而被励軍勞肝要之段、令申候キ、然処德弘村中之仁、無緩馳走之通感悅候、何様一稜可賀之趣、先々從鎮道御心得專一候、恐々謹言、
〔天正十四夜四〕
六月八日
中山左近助殿御復所
親盛(花押)

七四九 上井覚兼日記

一、廿四日、興禪寺・柏原方早朝被打立候也、此日、鎌田源左衛門尉にて、鎌雲州へ内談申候趣、佐土原にて如出合、兩使御座元へ御進上候、目出候、吾々其後思案中候にも、入田御見次無之候ハ、外間実儀笑止に候、殊中書公其御下ニ雲州・我々、旧冬已來申替候て、自然彼身体減却候てハ、迷惑之儀候、雲州納得候ハ、中書へ御内談共候て、楚忽ニ当国衆まてにて、梅口へ被召懸候てハ如何候する哉、内談申由申候也、
〔東白書〕
泉口へ遣候悴者兩人、帰來候、輒豊後内へ調状之矢射させ候由、申候也、国見通候て、城のこしなと云あたりに射置候由、申候也、

七五〇 上井覚兼日記

一、十六日、鹿兒島談儀所之御隱居、諏方之座○御祝

言二御參被成候とて、拙宿御尋被成候、酒肴・御茶被下候、被疵候由共承候也、此日、伊地知勘解由左衛門尉殿を以、上意之趣、昨日筑表御陳より、大口昌雲寺を以、各御申被成候、岩屋・宝満、属 御案中候、立花之事、于今相支候へ共、当時暖之懸引共候、其上立花之城、頼三候、此内二三罷居候物、所領さへ被下候ハ、統虎事を打果、御幕下ニ可參由申候、然者、此義可然思召候ハ、典厩御登可有候、其時御行可有候、如此共候ハ、彼表御隙急ニ可明存候、左候ハ、忠長・忠棟其外諸軍、如境日直ニ可被參候、爰元ハ、御両殿様御談合次第、豊後入之御分別可目出候、日州衆も此方へ罷居候する衆者、直ニ此口より豊入たるへ候、日州へ居候衆ハ、中書被召烈、梟口たるへく候由被申上候、就夫、昨日、爰元へ被罷居候談合衆被召寄、御談合候キ、拙者ハ気分患由候て、無其義候間、委被仰聞せ候、御返事之趣ハ、立花之事、計策之義共候哉、併、其忠儀之者兩人へ所領被下候するを、只統虎へ被遣候、降参さへ申候ハ、順路ニ御校量肝要ニ被思召候、其故ハ、自今遙々之御弓箭候条、聊も逆義ハ可惡由被仰候、又豊後入之事、爰元へ罷居候衆も、此節可然之由申候事ハ、同前候、併、能々御談合可入被思召候処、忠長・忠棟直ニ堺目へ可被指寄由、御得心無之候、是非共此方へ參上候て可然、被思召候、又日州衆爰元へ居合候衆者、此口之由被申候、是も無御得心候、其故ハ、主人者別方、手之者ハ別方ニ候てハ、不可然候、地頭ハ別方、衆中ハ別方、是も諸篇下知等事成間敷候、然者、春已来如御談合、太守様ハ日州口へ可為、御進發御地体候、拙者其覚悟申候て可然、被 思食候、御談合之時も、是非共 太守様者、日州口へ御發足可目出由申候て可然被 思召候、是者、

御内義之由也、然者、朝日岳と哉覽、梅口ニ候之歟、是を攻させられへく被 思召候、是又拙者、入魂申候て肝要之由共也、昨日御談合ニ可罷出之由候つれ共、疵未^{前難力}然々候て、無其義候処、巨細被仰聞候、忝奉存候、殊更、日州口へ 御發足御所好之由、一段目出候、諸篇拙者入魂之儀、緩有間敷之通、申上候也、蒲池殿より、使書并袍表一預候、今度參陳之刻、御行前にて無沙汰候、殊更致軍勞、疵をかふむり候、併不痛之由目出通、承候也、遠方まで使書到来、祝至極候由、返事申候也、

七五一 上井覺兼日記

一、廿二日、出仕如常、御虫少御快気候条、新納武州孫、元服候、模様如常、御三献御寄合被成、御前ハ三肴、次ハ削物計也、二郎四郎と名被給候、御腰物拝領被申候也、進物等如常、太守様ハ御虫氣時分と候て、廳而御座被立せ候、武庫様御代ニ、持參之御酒等御賞翫にて候也、嶽米良殿、当時養性気にて候とて、名代として子息被參候、未被懸御目候間、拙者頼之由被申候条、寄合中へ談合申候て、取成候、進物御太刀・御馬也、弥太郎と名被下候、其時又、御太刀・五百疋進上也、此日、新武孫殿同心にて拙宿へ被来候、酒肴・引物等預候也、即參会申候、米良弥太郎殿被来候、二百疋・熊皮預候也、即參会仕、御酒肴合候也、此日、伊地知勘解左衛門尉殿にて、上意候、先日御内義を以如蒙仰候、日州口へ御進發可有被 思食候、然者、梅口朝日岳、又豊後内端へ、針を被伏度被 思召候、川田方へ、御祈念之事被仰付候、拙者談合申候て、然々之仁申付、被針を伏させ候て可目出由也、此口よりも、針一可被仰付由也、即申上候、朝日

七五二 豊臣秀吉御内書

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二七

九月廿一日之書状、今日三日、於京都披見候、一筑紫主、居城ヲ取返候由、由越候、尤之仕合候、右仕立惡敷様ニ相聞候処、今度、彼居城を手に入、忠節あるべき由、尤候、念を入、人数、兵糧、玉葉以下、安国寺與令談合可然様ニ、可申付候事、一龍造寺、色を立候ハ、丈夫に、人質以下、於相卜者、元春、隆景、渡海尤候、輝元者、門司之要害へ、有登城ちかき城を、手寄にまかせ、被取卷、可然候哉、島津事させる儀、有間敷候と、思召候、其子細者、今度、島津相動候而、やせ城二三ヶ所、以調略召置、星野を入置、其動を島津、存分の様相心得、退候処を、從立花罷出、星野もち候城、乘崩、星野ヲ初、不殘刎首候は、島津、筑紫九ヶ国を治たるよりも、立花左近將監には、面目之至候か、又島津、ろくひ付なる動をいたし、星野か刎首させ候事は、島津、弓矢面目候儀、又ハ、心中之程、相見^江候間、武篇かたさせる儀、有間敷候事、一毛利自身、被出馬、一廉無之候ては、如何候条、関戸をこされ、手寄可然候を、何之敵城成共、被取卷越年候ても、可被相果候儀、尤候事、一長陣於有之者、初龍造寺、敵方何之城も、可託言、令察候、其子細者、敵者、出事成間敷候て、春へ成候ハ、

上方之諸勢、可下候者、何之敵、百姓以下にゐたるまで、さけすみを可仕事、

一 城を被取巻候ハ、長曾我部、千石権兵衛尉、兩人方へも、人を切々遣、能々、可相談候、権兵衛尉事、めうけんへ、可相移由、被仰遣候、左様候得者、程近候間、諸事、無越度様、可逐相談事、

一 城を取巻候共敵者、後巻、有間敷と、被思召候得共、敵後巻に可越道に、敵を可請城を、四も五もかなわのことに相拵、人数を入置、敵城を中に取こめ候ハ、敵五万と取こめて、二万五千有之共不苦候、日比、秀吉、城々を御取巻の手立、敵を請候、城を、不取巻さきに相拵、人数を入置、其うしろにて、取巻候事、得物にて候、大敵を相手にいたし、数度御本意有之事候間、其行等、両川、輝元へも、申候て、右之分、可然候事、

一 右馬頭、其表に、長陣候而、越年はあらは、島津事も、さつまへ引入儀無之、中途につりとめられ越年いたすへき儀者、案内候事、

一 敵味方、春に成候ハ、くたひれ候て、大あくび有之而、可令迷惑候処へ、段々に被遣人数、被出御馬候者、被悪逆人は、ひとりころひを、いたすべく候条、手間不入に、一人も不相残、可刎首候儀、手にとらせらる、やう、被思召候条、片時もはやく、年の暮にも成、春を待かね候者、被得其心、可然之由、可相談候事、

一 兵粮玉葉、さしつ次第に、弥、ふねを被揃、重而、当年中に、追々、可被遣候来年之ために候間、兵粮く一 廉、可被仰届候条、二万石も三万石も、入候様、藏以下、可申付儀、専用候、其藏次第に、御兵粮、可被遣候事、

一 小西彌九郎に、さき兵粮を、被遣候ハ、兵粮と申ハ、

家のばを取候物にて候之間、能々さけすみ、彌九郎帰次第、追々、御兵粮、可被遣候、其心得、専用候事、

一 輝元降景、元春、人数、長陣をいたし、兵粮相きる、儀候ハ、可申越候、其すきまを見、兵粮を、各にも、可被遣候事、

右条数、何も、令得心、可申付事、重要候、諸事、無越度、分別尤候也、

十月三日 (天正十四年) (豊臣秀吉) (花押)

安国寺 (忠境)

黒田勘解由とのへ (孝高)

宮本右兵衛入道とのへ (宗徳)

七五三 大友義統書状

○北里文書
増補訂正編年大友史料二七

前三至宇佐郡令著陣候之処、早ニ示給候、被添心候儀祝著候然者千石秀久申談、此表之儀、過半調達候、雖然能々可申付覚悟候条、耽滞在候、必可直陣候之条、於方角者、可預馳走事肝要候、恐々謹言、

十月六日 (天正十四年) 義統 (花押)

北里次郎左衛門尉殿

七五四 上井覚兼日記

一、八日、払曉御粥參候而、聽而、越二御立候、我々

ハ沈酔故、御跡より參候、此朝も、越無爾々候、乍去、

七八留候也、従夫、直二御帰之由候つれ共、川之水鳥

など、御供申候て見せ申候、又景清之石塔など、懸御

目候、色々なくさめ申候て、又大藏丞処にて、御会尺申候、御座衆、大略夕之衆也、衆中又地下衆など、御

酒進上候、未之刻計まで御酒宴共也、従夫、御帰被成候也、従臬使僧にて候、大藏丞処にて承候、柏周意趣被聞候、去四日、志賀道輝前より、あかの村二罷居

候矢野内蔵助と申者まで被申越候ハ、土持殿事、

先年之遣恨深重二候らん、然共、今度ハ京都より加勢

共候、左候へハ、天下之弓箭二罷成候間、是非以分別

入へく候由申候、ケ様之義、即拙者まで被仰由也、道

輝より被申候趣、具被仰頭候、尤肝要ニ存候、先々、

あなたより申旨ニ、何と様にも任られ、京都見次之体、

又ハ豊後國中様子等被聞拔候て、可然由申候也、右説

にも千斛権兵衛、二百程にて来候、高崎辺二居由申候、

長曾我部、是も二百計にて、にうの嶋二在由候、召烈

候衆も、兵具等然々不帶、商人など様の、無分者と聞

得候由也、又去月合之比、本々県之者にて候、此間豊

へ罷居、頃又落来候、其説にも同前候、豊下々ハ、加

勢之体見候て、結句頼少存由申候也、此晚、越二立候

てより、城之様二罷帰候也、衆中十人計同心申候、

七五五 豊臣秀吉御内書

○豊公遺文
増補訂正編年大友史料二七

九月廿八日之書状、十月二日之書状、今日十日同時到来

披見候、輝元、隆景、元春被越関戸付而、長野色を立、

出人質候由神妙候、並山田、廣津、中八屋、時枝、宮成、

出人質、城々へ入人数候由可然候、於此上、何も帰參之

者共、島津行之様々被相尋、以其分別可然候、併豊後と

肥後之間被取統、宗滴義統とも有談合、長曾我部、仙石

權兵衛尉、一手二陣取已下、手堅く被申付、敵後卷可越候道筋に城を拵、其覚悟有之、其上^二而何之城成共被取卷、仕寄已下可被申付義專要候、於取卷、兵糧つめか、仕寄下之堀をうめ候歟、水責か、水の手を留候か、又可成城は被見計、長陣以退屈なく可攻殺に可相定候、人数已下人候は、追々可遣候、其上越年可有之候条、春は被出御馬、島津一城^二被取籠、可被刎首儀案の内と思召候条、其心得有之、無越度様諸事分別可有之由、輝元^二も此旨申聞、豊後^江も右之分可被申触候、将又帰参之者共^江、別紙之儀如書付遣候也、

(天正十四年) 十月十日

(豊田秀吉) (花押)

小早川左衛門佐とのへ

安 国 寺

黒田勘解由とのへ

七五六 大友義統感状案

○宇都宮文書 増補訂正編年大友史料二七

今度高岩城番之儀申候処、至遠方長々預馳走候、祝著候、結局妙見岳在城之上里目在陣之由、乍案中感悦候、親盛若輩之儀候之条、倍当城堅固之才覚、別而頼入候、何様取鎮一稜可賀申之趣、猶河野肥前入道可申候、恐々謹言、

(天正十四年) 十月十二日

(大友) 義統

佐田因幡守殿

七五七 田北統周知行預ケ状

○志手文書 大分県史料一 一

其方事、連々以貞心之覚悟、夜白被抽辛勞候、然者御弓箭成立付而、松牟礼下城之砌、無別儀同心感入候之条、為其賞玖珠郡之内、引地村役織井五ヶ所坪付、以別紙預進之候、弥無緩奉公專一候、為存知候、恐々謹言、

天正拾四年丙子 十月廿八日

(豊田) 統周 (花押)

野原久内允殿

○「大友家文書録一」(大分県史料)三三二七収ム。

七五八 大友義統感状案

○岡部忠左衛門文書 萩藩閣録一

至利光越前入道要害、登城之儀申候処、即差籠之由候、殊前廿八、悪党取懸候之刻、遂一戦分捕高名之段、岐部左近大夫申候、心懸之儀感入候、弥而役人被申談、可被勅忠儀事專一候、猶重々可申候、恐々謹言、

(天正十四年) 十月卅日

(大友) 義統 判

岡部佐渡守殿

七五九 大友家文書録綱文

○大友家文書録 大分県史料三三

○鳥津家久○自日向越梓山、入○豊後向宇目○柴田紹安
○帥手兵出朝日岳城、属家久、紹安属野津院士等驚
欲拒之、而不能、遂不獲止去城、抛王子山要害、家
久使紹安附兵、居井田・尼顔墨、於其子柴田左京亮所抛
星河塞、亦入兵守之、取朝日岳城、使土持○九郎親信守之、
親信故土持親成子也、親成為宗滴被誅之時、親信逃、依

義久、及義久徇日向、使親信復旧領、今也為家久之先鋒、至此、家久進、至三重郷、陣松尾山、

七六〇 大友家文書録綱文

○大友家文書録 大分県史料三三

○野津院在大津、及柴田紹安坂、分兵抛王子山・岩瀬両墨、薩摩隊長白濱周防守、尾相伊勢守等攻王子山墨、廣田大膳亮・彈正忠・内右衛門尉・新介・喜右衛門尉・白杵内記・掃部助・又兵衛尉・堀民部丞・隼人允・井上左馬助・兵介・吉良宗伯・伝右衛門尉・岩屋道景^{皆野津院地土等}、逆擊却之、既而廣田等、去王子山墨、屯屋戸、又白濱等攻岩瀬墨、中村左京進・與右衛門尉・善四郎・柴田大蔵丞・利光宗玄・久土地刑部丞・縫殿助・奈須右馬助・土屋主税助・竹中飛彈守・荒瀬隼人允・三栗氏^{皆野津院地土等}請降、白濱等入其墨、又其後廣田等、擊薩兵於留村、殺其隊長鎌田筑後守、又戰於吉岡原、殺鬼塚刑部少輔・伊知地丹後守、又攻拔岩瀬墨、斬獲許多、

七六一 大友家文書録綱文

○大友家文書録 大分県史料三三

○緒方莊○有三十六人地土、○佐伯惟定○属之、耳忍○地土党之、築墨於柏野・小牧・高知尾^{三所共在}、各分兵抛之、薩摩隊長白坂式部少輔・伊知地民部少輔・川上大炊助及日向高知尾○主三田井正利家士師千余兵来、攻○之、軸丸藏人・大膳亮等降、又丸田強兵衛尉・矢噬彈正忠○小牧墨、守兵降、薩兵入柏野・小牧墨、

被遣候、其城へも可相籠由申遣候、鉄砲○葉三百斤、鉛三百斤進之候、何之道二も来春二月比、殿下可被進御馬之条、諸事無越度三様、覚悟可然候、今度其国へ鳥津令

乱入候も、義統を初、別之国へ被相働候二依而、其国之

者構謀叛、敵を引入候歟、先書二千石権兵衛・長宗我部彌三郎被遣候も、其国之儀、無御心元二依而、為同心、

右之分候三之、若者故他国へ可手懸ために、境目まで相働候、依而敵取出候と被思食候、是以後者籠城之体にて

も、来春可被出御馬を被相待、可然候、当年者無余日候、早来春と申候も、五十日之間にて候条、少茂みしかき働

有之而、越度候者、其子々孫々まで不相届と可被思召候、可被得其意候也、

十一月廿日

秀吉 御判

／諱ハナシ、判計也、

体菴

○大友松野文書『大分県史料』二五巻）ニモ同文ノ文書アリ。

七六七 豊臣秀吉書状

○吉川家文書
増補訂正編年大友史料一七

豊前宇留津城、去七日二責崩千余首を被刎、其外男女不残はた物三二相かけられ候儀、心知よき次第候、手柄之段、無申計候、殊敵方味方中覚と云、御祝著之儀、難尺筆紙、被思召候、時分柄、下々者、長陣之段、被痛思召候条、當年二も、御馬を可被出と、被仰出候処三、春迄可相延旨、安国寺、渡邊石見守、黒田勘解由を以、言上候条、被任異見、当年者、不被出御馬候故、無心本、被思召候間、来春者、其方へ無届、早々可被出御馬候条、被得其意尤候、其刻以面忠不忠被相立、高名以下きわめ候仁二、御褒美

可有之候之間、各二此旨申触豊後へも、則蜂須賀阿波守、脇坂中務少輔、加藤左馬助、其外人数都合壹万四五千差遣候也、

十一月廿日

花押

吉川駿河守とのへ

吉川治部少輔とのへ

七六八 大友義統書状案

○大友家文書録
大分県史料三三

今度至高崎、令登城、別而辛勞、殊普請等之儀、預馳走之由、祝着深重候、弥無油断、覚悟肝要候、猶田原近江入道可申候、恐々謹言、

十一月廿一日

義統 在判

賀来社大宮司殿

七六九 豊臣秀吉書状

○豊公遺文
増補訂正編年大友史料一七

其表敵未最前所に、在陣候哉、様子切々可申越候、然者うすきへ兵糧加勢已下、丈夫に差籠、尤二候、当年之間も卅日被出御馬も、四五十日之事、殊に人数追々被遣之間、今迄所二其儘陣取有之候而、味方中無越度様三、諸事手堅く可被申付候事、肝要候、自然不出御馬前二越度候は、可為曲事候之間、得其意、下々迄可被申付候也、

十一月廿三日

花押

仙石権兵衛とのへ

七七〇 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

○十五日、島津家久大分縣陣大塔梨尾山、遣兵、二視鶴城、城主利光宗魚、逆撃、慶九十六人、三二十日、伊集院忠棟有軍事之用、自佐賀関乘船、赴日向、私曰、来月利光役、忠棟在之、則令赴日州、頼帰来、曾家久乎、

七七一 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

○十二月二日、親善遣志賀掃部助・後藤遠江守・真肥後守・帥一千五百兵、攻柏野壘、是日山崎薩兵発浪野原辺、親善使中尾伊豆守、属家中坂田・中津野・律原地士、擊卻之○秀吉遣森兵吉・森堪八、諭軍議於毛利・吉川・小早川・黒田等、且賜内書於宗滴其書作天徳寺右衛門入道者乃宗滴也

七七二 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

○四日、佐伯惟定天正十四年七月、志賀清部助等告之親善、親善許之定遣高畑新右衛門尉等、攻柴田左京亮星河塞、守士芦荻大膳進叛、放火、塞陷、左京亮其弟次郎及其母為二、從士柴田等意父子・田北彦三郎・赤峯玄蕃允・工藤尾張守等皆戦死、柴田紹安在尼顔壘、聞星河敗、悲妻子死生、頗有反覆心、薩兵覺、擊殺紹安及從士帆足市弥太等、其

後惟定承義統命、斬所虜之男女於西正寺

七七三 大友家文書錄綱文

○大友家文書錄
大分県史料三三

○島津家久欲攻鶴城、遣伊集院美作守・白濱周防守・野村備中守、押曰杵（元正十四年七月）○七日、家久大兵圍鶴城、攻守連日、十日、利光宗魚力戰、死之、從士首藤・今村・板井・帆足・高島・池長・上尾・原・佐藤・橋本・高橋等諸氏能守城○十一日、義統及仙石秀久、長曾我部父子議援鶴城、共率兵発府内、致義統屯利光村、仙石・長曾我部屯山崎、家久解鶴城圍、屯岡山、隔戸次川（附詳）○十二日、秀久欲涉川而擊敵、義統・元親不肯、然秀久不聞、既而其先鋒三好正安・田宮氏涉川、自藪裏伏兵起、放炮矢、河中兵皆中矢而死、家久先鋒伊集院（附詳）○涉川、而擊秀久本屯破之、義統先鋒田原親盛・奈多鎮基與忠棟接戰、而敗、衛藤又右衛門尉有戰功、義統・□久退、又備兵、薩將新納大膳亮一作新納武藏守非也等擊□親・信親、破之、信親戰死於中津留河原（十一）、從士□河孫六（附詳）○存○武田氏等七百人戰死、義統・秀久引兵、赴豊前、義統入妙見城、秀久入小倉城、元親供桑名弥次兵衛尉・中島與一兵衛尉等逃、過上原時、宗滴价来告曰、卿直来我城、元親曰、我無從兵、則雖□卿、敢無益、退集兵而後可至、遂往沖浜乘船、至予州日振島、家久進赴府内、陣守岡、翌日入府内○頃間、宗滴遣价於鶴城、命其守兵等感之戰功、且使□悉去其城、来丹生島城○家久欲攻臼杵、発府内、至□□押陣平清水口、先鋒至兔居島、宗滴命武宮武藏□□城中放大炮（此之火矢、砲乃名國崩）其炮玉中兔居島□□之薩兵、為之殪命者若干、又使古莊丹後入道・荒□□防入道・葛西九郎右衛門尉大擊破兔

居島敵、又使□岡甚橋等擊敵於仁王座口、却之、於此利

光彦兵衛尉・吉田一祐有戰功、又使白杵鎮順・柴田礼能○擊□於平清水口、礼能戰死、其子十郎死戰、引兵歸時、

聞父死、還轡奮擊、斬父仇、遂戰死、家久引諸兵、而退、

城兵追之、宗滴遣价制止之、（或云、此行為是月五日之事、然頗胎疑故、推為頃間之事）○伊集院美作守・野村備前中守・白濱周防守攻鶴崎（高田郷）、吉

岡甚橋領地也、（マ）城其母林氏為尼、名妙林○、在鶴崎、

集高田郷土、善構壘、設策防之、接戰數回、薩兵死傷若干、

經日薩將勸和妙林、慮衆寡難敵降、伊集院・野村・白濱

入其壘、妙林居別宅、與薩士接交○賀來刑部少輔鎮綱為

由原八幡宮神職○兼武仕、佯為叛義統、降島津家久、每

聞家久謀計、密告之宗滴・義統、家久粗疑之、詰問鎮綱、

鎮綱陳謝、而接來如旧○高崎城守將挾間刑部少輔鎮秀叛

義統、降家久、家久使福原氏・枝次氏入其城、共守之、

一說鎮秀降也、明春薩兵掃國時、追擊而顯素意、按明年義統礼家臣忠否、鎮秀亦以叛○之故誅焉、今從之、則一說頗有疑乎○津

久見卿（在海部郡）士鳩兵部少輔源介在鳩浦、賀島中務少輔・右

馬助于久保浦、賀島三河守・主殿助于深浦、紀主馬助・

九郎于越智浦、共扼久保泊壘、屢出兵船、遮擊薩兵之自

日向渡海者、於是薩兵連戰、艦至○河原入江下船、攻久

保泊壘、壘兵能防卻之、宗滴遣鉄炮・玉葉於久保泊壘、

而令之、

七七四 田原紹忍書狀

○大津留連文書
大分県史料二五

今度方々令乱入、諸卒□（實）之覚候処、被含忠節之旨、至由布院宮尾切寄楯籠、御馳走之趣、乍案中候、何様達上聞、一稜取合、不可存疎略候、聽而、御賀書□相調、可進之間、先用一管候、倍々御心懸、專一候、恐々謹言、

（天正四年）
十二月三日
大津留飛驒守殿
御宿所
紹忍（花押）

○「大友家文書錄」卜校合、（一）内傍注八同書。

七七五 大友宗滴書狀

○岐部文書
大分県史料三五

尚々秀竹領内者無異儀様、別而可被添心事專要候、秀竹此度之心懸令感心候、為存知候、以上、不慮之乱念付而、方々無実所体不及是非候、郡衆之儀も睨在陳之由、御辛勞察存候、当城弥手堅候、不可有氣仕候、然者帆足河内入道以連々之心懸、今度早々罷越、今籠城、老足夜白励馳走候、然処秀竹在所人畜之間、以分散多分、宗閔至領中居任之由其聞候、雖無申迄候、方角之儀候之間、秀竹留守中別而被添心、右之者共不散失之様、被申付肝要候、可被得其意候、恐々謹言、（天正四年）
十二月七日
岐部中務入道殿
御報
宗滴（花押）

七七六 島津義久書狀

○入田文書
宮崎県史料編中世一

誠到此境遂発足候之処、両口之諸城等、任利運候、為如斯之祝意、使書并鉄放到来、懇志之段欲悦候、然者、從最前以御入魂之首尾、符内表迄、輒屬所勘、剩千斛・長曾我部敗北之儀、自他国之覚、大慶不過之候、弥对残党へ、

被廻計略候之者、一着不可有程候哉、猶巨細之旨、年寄可達之候、恐々謹言、

〔天正十四年〕
拾二月廿日

〔原書〕
義久〔花押〕

入田丹後入道殿

○『日向古文書集成』（入田系図所収文書）ト校合。〔一〕内八同書。

七七七 大友義統感状

○帶刀文書
大分県史料二

昨日廿三、至当城薩摩之悪党被懸候之処、鎮勝別而依被
励粉骨、各事茂、尽軍勞、分捕高名之由、忠儀之次第、感
入候、弥可抽馳走事、可為喜悅候、必被鎮、至鎮勝一稜
可賀之候、恐々謹言、

〔天正十四年〕
十二月廿四日

〔原書〕
義統〔花押〕

帶刀玄内允殿

七七八 大友義統感状

○堀文書
豊後速見郡史

昨日廿三、至当城薩摩之悪党被懸候処、鎮勝別而依被励
粉骨、各事茂、尽軍身、分捕高名之由候、忠儀之次第、感
入候、弥々抽馳走事、可為喜悅候、必被鎮、至鎮勝一積可
賀候、恐々謹言、

〔天正十四年〕
十二月廿四日

〔原書〕
義統〔花押〕

堀與次郎殿

七七九 豊臣秀吉書状案

○黒田文書
増補訂正編年大友史料二七

去十二日注進、昨日二十六日、於大阪到来、披見候、野
中家来楯籠候、犬丸城責崩、数百人討果、則首進上候、
尤無比類被感思召候、雖若輩候、入精候故、早速令誅、
伐候儀、神妙候、為御褒美、御秘藏之御馬被下候条、可
成其意候也、

〔天正十四年〕
十二月二十七日

秀吉 判

黒田吉兵衛とのへ

七八〇 豊臣秀吉朱印状

○豊公遺文
増補訂正編年大友史料二七

去る廿一日之一書、今日晦日到來披見候、其表つなきの
城は丈夫、申付候由、可然候、龍王、妙見兩城江、玉葉差
籠通尤候、秋月事兎角見合候は、不可許容候、殿下出
馬上は不可赦免候、度々如申遣、正月十五日より諸勢差
遣、則被出御馬候間、城々丈夫に申付、御動座可相待候、
縦人数出候共、此方より被出働候事無用候、聊無越度様
可申付事專一候、此由籠造寺へ可申遣候、今少之間聊
爾之働無之様堅可申付候也、

〔天正十四年〕
十二月晦日

〔原書〕
朱印

安 国 寺

黒田勘解由殿

七八一 毛利輝元書状案

○井原藤兵衛文書
萩藩閩録二

賀木詰口丈夫之由尤可然候、御方別而御心遣之由祝着候
殊内衆被立用由候、心懸之至候、弥不可有緩候、恐々謹
言

〔天正十四年〕
十二月廿二日

右馬 輝元 御判

井 四兵 まいる

七八二 大友義統感状案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二七

前廿七、至角牟礼、薩摩之悪党取懸候処、遂防戦、分捕
高名之由候、感入候、弥可勵軍忠事、肝要候、必追而、
一段可賀之候、恐々謹言、

〔天正十四年〕
十二月晦日

〔原書〕
義統 在判

森玄蕃允殿

七八三 大友家文書録綱文

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二七

〔天正十四年〕
古後撰津守 元主、森若狭入道養春、其子玄蕃允、森五郎
左衛門尉、魚返伊豆入道、魚返宮内少輔、魚返民部丞、
太田九郎 童名、中島主殿助等、捩玖珠郡角牟礼城、坂本氏、
財津氏等、捩日田郡城、吉弘嘉兵衛尉統幸、捩国東郡屋
山城、各挑戦不違勝数○島津義弘隊長、坂瀬豊前守、攻
駄原畑壘、志賀親善子城、而朝倉一玄所守也、一玄乘夜
去城、捩其並管迫墨跡、而焼駄原壘、坂瀬屯其焼地、二
十二日、親善遣早速掃部助、後藤遠江守、大森彈正忠、
帥十五百兵援一玄、而攻破駄原畑、後藤大学助、斬殺坂

瀬及斬獲許多○二十四日、義弘隊長、白坂石見守帥數百兵、攻篠原目罫、志賀親善子城、而阿南三右衛門尉惟秀所守也、惟秀偽降白坂、入其罫、惟秀守搦手、而密通謀於親善、二十八日、親善遣中尾伊豆守、大森彈正忠等、帥千七百兵攻篠原目、先降後藤美作守、放砲矢白坂出罫、接戰惟秀放火於罫、原田伊賀守入罫、惟秀、白坂遂敗逃、至老戸口惟秀等追擊之、親善遣佐藤右京進為援、佐藤至老戸口、乃接白坂手斬之、其余薩兵悉戰死、於是親善告馱原畑、篠原目兩所戰攻、于秀吉、

七八四 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

○廿九日、在玖珠郡薩兵、攻角牟礼城、城兵○森若狭入○春・其子玄蕃允・志津利治部丞・魚返伊豆入道・魚返民部丞・中嶋主殿助等擊却之、森玄蕃允戰死、養春僕從清十郎被創○二十四日、魚返宮内少輔欲入角牟礼城、義統命之、與森五郎左衛門尉・古後撰津守・太田九郎等、議軍事、○義統授于天津留舎人允・荒木治右衛門尉・小佐井袈裟千世・手嶋右京亮・梅月内右衛門尉・渡辺藤兵衛尉・片山越後守・魚返宮内少輔・森養春・堤新介入道・若林八郎・若林越後入道等感贖、

七八五 豊臣秀吉書状案

○志賀文書
熊本県史料中世二

今度千石権兵衛尉依不屈動、不慮無是非次第候、然処其城堅固ニ相踏候旨、忠儀神妙候、先勢追々被差遣候、

頓而被出御馬、嶋津事、可被刎首之段、不可移時日之条、
御直判
彌丈夫覚悟專一候也、
正月三日
志賀太郎とのへ
首可被刎事、
程有間敷、

七八六 豊臣秀吉朱印状案

○大友家文書録
大分県史料三三

今度千石権兵衛尉不慮之仕合、無是非次第候、然処其城堅固相抱之由、尤神妙之至候、先勢追々被差遣候、頓而被出 御馬、嶋津事可被刎首段、不可□□日候条、今少之聞、丈夫之覚悟專一候也、
御朱印

七八七 豊臣秀吉書状案

○大友家文書録
大分県史料三三

今度仙石権兵衛尉於其表失利候段、曲事候、聊爾之働不可然、能々可示合由、重々申聞候処、如斯之儀、無是非次第候、彌三郎討死、尤忠節無比類候、然者元親無異儀白杵相抱付而、可入城由宗滴言上候、誠丈夫之覚悟、堪感情候、当春早々出馬、嶋津事悉可討果候、其間之儀、弥休庵令相談、堅固之行專一候、猶秀長可申候也、
御判
長曾我部宮内少輔とのへ

七八八 大友義統感状

○渡辺文書
大分県史料三五

今度薩广之悪党、至大神兵部太輔要害、取懸候之処、其方別而軍旁之由、感悦候、弥可励馳走事肝要害、必取鎮、一稜可賀之候、恐々謹言、
正月三日
義統(花押)

渡辺宮内少輔殿

七八九 大友義統感状

○渡辺邦夫文書
大分県史料三五

今度薩摩之悪党、至大神兵部太輔要害、取懸候之処、其方別而軍旁之由、感悦候、弥可励馳走事肝要害、必取鎮、一稜可賀之候、恐々謹言、
正月三日
義統(花押)

渡辺彈正忠殿

七九〇 大友義統感状

○渡辺文書
大分県史料三五

今度薩广之悪党、至大神兵部太輔要害、取懸候之処、其方別而軍旁之由、感人候、弥可励馳走事肝要害、必取鎮、可賀之候、恐々謹言、
正月三日
義統(花押)

渡辺熊千代殿

七九一 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

○天正五年正月十三日 我兵擊薩兵于畑切寄、拔之、大津留舎人允・白
□□内田主水・荒木治右衛門尉力戦、小佐井袈裟千□□世被立
官亦得首級○長曾我部元親自日振嶋陣、入白□□宗滴
○秀吉賜内書於志賀親善・佐伯惟定、命□□□、

七九二 小早川隆景書状

○吉川家文書
増補訂正編年大友史料一七

尚々、於新庄平藤右懸御目候由、爰元にて物語候、
御様体等御頼敷候、何様自是可申速候、
追而御折紙披見候、誠其以來者無音^二罷過心外^二候、
一元春不慮之儀不及言語次第、於吾等案内迄候、御力落
之通、是又可為御真実と察存候、中々於此段者無申迄
候、無異儀於致帰国者、新庄にて懸御目可申承候、
一此表之儀如仰所々得太利手前如形候処、豊後自節故候
歟、大友方退散、無是非次第候、當時者、此国之端妙
見近辺龍王と申城^二義統御堪忍候、兵粮人数等差籠
黒官吾等申談副力申候、上勢下著次第、至彼国被出、
薩州衆と一戦之覚悟迄候、御弓矢之すえは校量難計候、
御察之前候、

一此方角珍候海苔^{一箱}送給候、遙々御志之段難謝候、恐々
謹言、

正月十四日

佐衛門佐
隆景 (花押)

吉泉入 御返報

「到天正十五
正一廿三」

七九三 大友義統感状案

○大友家文書録
大分県史料三三

今度薩摩之悪党現形付而、国中之者共、少々構未練候之
処、各申談、院内耽被差擲、從最前順儀之心懸、聊無変
化候事、乍案中感悦候、殊去^{十三}畑切寄挫候刻、別而粉
骨之次第、忠儀悦入候、弥可励馳走事肝要候、必取鎮一
稜可賀之趣、宗像掃部助可申□□、□□謹言、

○天正十五年正月十五日

荒木治右衛門尉殿

義統 在判

七九四 大友義統感状

○大津留連文書
大分県史料二五

今度薩摩之悪党依乱入、国中之者共、少々構未練候処、
各申合、院内耽差擲、從最前順儀之心懸、聊無変化候事、
乍案中神妙候、殊去^{十三}畑切寄挫候之刻、内田主水討留
之由候、為無足、軍勞粉骨之次第、感入候、弥可励馳走事、
肝要候、必取鎮、一稜可賀之趣、猶宗像掃部助可申候、
恐々謹言、

○天正十五年正月十五日

大津留舎人允殿

義統 (花押)

○「大友家文書録」(「大分県史料」三三)二七收ム。

七九五 大友義統感状

○大津留連文書
大分県史料二五

今度薩摩之悪党依乱入、国中之者共、少々構未練候処、
各申合、院内耽被差擲、從最前順路之心懸、無変化候事、
乍案中神妙候、殊去^{十三}畑切寄挫候刻、被鑑疵之由、為
無足軍勞感入候、必取鎮、一稜可賀之趣、猶宗像掃部
助可申候、恐々謹言、

○天正十五年正月十六日

大津留飛彈守殿

義統 (花押)

七九六 大友義統書状案

○大友家文書録
大分県史料三三

今度薩摩之悪党依乱入、国中之者共、少々構未練候、從最
前順路覚悟之由、乍案中感悦候、然者畑切寄挫之刻、被官
之者分捕高名著到、令披見候、軍忠状加袖判進之候間、
弥被申進、可励馳走事肝要候、必取鎮一稜可賀之趣、
猶宗像掃部助可申候、恐々謹言、

○天正十五年正月十八日

小佐井袈裟千世殿

義統 在判

七九七 豊臣秀吉朱印状案

○志賀文書
熊本県史料中世二

熊染筆候、其城堅固相抱候段、尤以神妙思食候、今月廿
日・廿五日、羽柴八郎初為先勢、追々被差遣御人数候、
殿下二月末・三月始、至于豊前表可被成御動座事、八幡
大菩薩非偽候、今廿日・卅日之^前、丈夫二可相抱候、此
刻無二之覚悟、誠忠儀不浅候、彼逆徒等可被勿首事、案

之内候、各可被成御褒美候間、城中之者とも申聞、成勇、
弥堅固可相踏候、兵粮玉菓之事、被仰付候間、定可差籠候、
猶追々可申聞候也、
(天正十五年)
正月十七日
(備前守書)
御朱印

志賀太郎とのへ

七九八 大友義統知行預ケ状

○佐田文書
増補訂正編年大友史料二七

就爰元在城之儀、最前以来以忠貞之心懸、折々彼是之馳
走、誠頼敷、感悦無極候、仍於当郡中拾町分坪付在別紙之事、
預置候、可有知行候、必闕地次第、重々可顯其志候、倍
可被抽忠節事肝要候、猶年寄共可申候、恐々謹言、
(天正十五年)
正月廿三日
義統 (花押)

佐田因幡守殿

七九九 大友義統書状案

○大友家文書録
大分県史料三三

到角牟礼登城之由、肝要候、雖無申迄候、森五郎左衛門
尉・古俊撰津守・大田九郎被申談、城内堅固支候之様、
才覚專一候、聊不可有油断之儀候、恐々謹言、
(正月廿)
義統 在判
(天正十五年)
宮内少輔殿

八〇〇 大友義統感状案

○大友家文書録
大分県史料三三

薩摩之悪党、至当城取懸之刻、於岸涯遂防戦、
息玄蕃允戦死、忠儀之次第感心候、旧冬浅分捕高名之間、
一入不便儀候、必至子孫、可顯其志趣、猶斎藤紀伊入道
可申候、恐々謹言、
(天正十五年)
正月廿八日
義統 在判

森若狭入道殿

○(一)内八八〇一号文書ニヨリ注ス。

八〇一 大友義統感状案

○大友家文書録
大分県史料三三

前廿三、薩摩之悪党、至当城取懸候刻、於岸涯遂防戦、
自身碎手、小者清十郎被疵之由、粉骨之次第感入候、弥
可励馳走事、肝要候、必取鎮、可賀之之趣、
入道可申候、恐々謹言、
(正月廿八日)
義統 在判
(天正十五年)
春

春

八〇二 大友義統感状

○竹中家文書
大分市大字志津留諏訪一男蔵

今度薩摩之悪党、国中へ令現形、既至庄内乱入候之処、
遂籠城、用心方普請等、無緩之由、乍案中感悦候、休庵任
下知、弥可被励馳走事、肝要候、必取鎮、一稜可賀之候、
恐々謹言、
(天正十五年)
正月廿八日
義統 (花押)

竹中宮内少輔殿

八〇三 大友義統感状案

○児玉編採集久保文書
増補訂正編年大友史料二七

今度薩摩之悪党国中令現形、至庄内乱入候之処、籠城
用心方普請等、無緩之由候、乍案中感悦候、休庵任下知、
弥可被励馳走事肝要候、必取鎮、一稜可賀之候、恐々謹言、
(天正十五年)
正月廿八日
義統 書判
久保右近入道殿

八〇四 大友義統感状

○石松文書
大分県史料一三

今度薩摩之悪党国中へ令現形、即至庄内乱入候之処、遂
籠城、用心方普請已下無緩之由、乍案中感入候、休庵任
下知、弥可励馳走事肝要候、必追而可賀之候、恐々謹言、
(天正十五年)
正月廿八日
義統 (花押)

財津平右衛門尉殿

八〇五 大友義統感状案

○岡部忠右衛門文書
萩藩閣録二

今度薩摩之悪党、国中令現形、既至庄内乱入候之処、
遂籠城、用心方普請等、每事無緩之由、乍案中感入候、
休庵任下知、可励馳走事肝要候、必取鎮、一稜可賀之候、
恐々謹言、
(天正十五年)
正月廿八日
義統 判

正月廿八日

義統 判

岡 松菊殿

平林兵部丞殿

八〇六 大友義統感状案

○大友家文書錄
大分県史料三四

今度薩^{サツマ}之悪党、国中へ乱入候之処、吉岡彌三郎以同心、至丹生嶋、遂籠城、每事馳走之由感入候、必追而可賀之候、恐々謹言、

正月廿八日

吉岡寛進殿

義統 判

八〇九 大友義統感状案

○大友家文書錄
大分県史料三三

今度薩^{サツマ}之悪党、国中に令現形、既至府内乱入候之処、遂籠城、用心方普請等、無緩之由、乍案中感入候、休庵任下知、弥可被励馳走事、肝要候、必取鎮、一稜可賀之候、恐々謹言、

正月廿八日

堤新介入道殿

義統 在判

八一〇 大友義統感状

○文化庁蔵若林文書
大分県史料三五

今度薩^{サツマ}之悪党、国中へ現形之刻、於津久見要害、別而辛勞之由、感入候、然者依不慮之成立、至丹生嶋籠城之由、忠貞之心懸、神妙候、必取鎮、一稜可賀之候、恐々謹言、

正月廿八日

薬師寺兵庫助殿

義統 (花押)

今度薩^{サツマ}之悪党、国中へ令現形、既至庄内乱入候之処、遂籠城、用心方普請等、無緩之由、乍案中感悦候、休庵任下知、弥可被励馳走事、肝要候、必取鎮、一稜可賀之候、恐々謹言、

正月廿八日

若林越後入道殿

義統 (花押)

八〇八 大友義統感状

○平林文書
大分県史料二五

今度薩^{サツマ}之悪党、国中へ乱入候之処、吉岡彌三郎以同心、至丹生嶋遂籠城、用心方普請已下、無緩之由感入候、弥可励馳走事、肝要候、必追而可賀之候、恐々謹言、

正月廿八日

義統 (花押)

八一二 大友義統感状

○文化庁蔵若林文書
大分県史料三五

今度薩^{サツマ}之悪党、国中令現形、既至庄内乱入候之処、遂籠城、用心方普請等、無緩之由、乍案中感悦候、休庵

任下知、弥可被励馳走事、肝要候、必取鎮、一稜可賀申候、恐々謹言、

正月廿八日

若林八郎殿

義統 (花押)

八一二 大友義統感状

○田部修寛集文書
大分県史料一三

今度薩^{サツマ}之悪党国中へ令現形、既至庄内乱入候之処、從最前遂籠城、用心方普請等之儀、無緩之由、乍案中感悦候、弥夜白以堪忍、每事無油断奉公肝要候、必追而一段可賀之候、恐々謹言、

正月廿八日

一萬田筑前守殿

義統 (花押)

八一三 大友義統感状

○一萬田鹿蔵文書
大分県史料九

今度薩^{サツマ}之悪党国中へ令現形、既至庄内乱入候之処、從最前遂籠城、用心方普請等之儀、無緩之由候、乍案中感入候、弥夜白以堪忍、每事無油断奉公肝要候、必追而一段可賀之候、恐々謹言、

正月廿八日

一萬田新介殿

義統 (花押)

八一四 大友宗滴感状案

○大友家文書錄
大分県史料三三

〔天正十五年〕
二月十四日
義統 在判

○田北宮内少輔殿

其方事、為檢使至佐伯、被差置候之処、今度薩摩之逆徒乱入已来、惟定以同城、別而粉骨（御半札邊）。次第、度々（守）雖申候、猶以令感心候、右之悪党于今滞在之条、惟定被申談、弥忠儀之心懸肝要候、至義統遂披露、何様一稜被成 御感候様、取合不可有疎意候、恐々謹言、

〔天正十五年〕
二月一日
宗滴 在判

〔後〕
北宮内少輔殿

八一五 長宗我部元親書状案

○大友家文書錄
大分県史料三三

御札拝披本望之至候、連々承及候条、従是可申（御）。御去年以来被尽粉骨、御忠儀之段、都鄙無其（御）付、洩上聞候哉、御感被成 御朱印旨、御名譽（御）。御面目候、拙者儀、旧冬府内成行已後、日振島令居（御）。去十三日至当城罷渡候、休庵様得尊意、可励愚（御）。儀、無私曲候、御進発弥火急（御）。被仰出候間、御本（御）。不可有幾程候、猶以可被募武威段、肝要候、旁追（御）。可申達候、恐々謹言、

〔天正十五年〕
二月六日

長宗我部宮内少輔 在判
元親
佐伯太郎殿 御返報

八一六 大友義統感状案

○大友家文書錄
大分県史料三三

今度從最前惟定（保）。以同城、別而馳走之由感悅候、何様取鎮、一稜可顯其志候、弥可被励馳走事專一候、猶浦上長門入道可申候、恐々謹言、

八一七 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

〔天正十五年〕
十五日、親善遣右田佐渡守・大森大炊助・後藤遠江守・美作守・原田伊賀守・真肥前守帥一千五百兵、攻拔小牧壘、真氏斬丸田強兵衛尉、志賀掃部助斬矢噓彈正忠、及薩兵悉戰死、緒方忍耳土復親善（京軍）。○黒田官兵衛尉（幸高軍）。送糧米（及）。○鉄炮玉葉於玖珠角牟礼城守士森氏・古後氏・魚返氏・太田氏等、有書、且義統授感贖於其城兵森養春・志津利治部丞・中嶋主殿助・魚返民部少輔、

八一八 大友義統感状案

○大友家文書錄
大分県史料三三

今度薩摩之悪党依現形、当郡之者共、少々構未練之処、以順路之覚悟、魚返伊豆入道令同心、至角牟礼遂籠城、折々軍旁之次第、感入候、必可賀之之趣、猶齋藤紀伊入道可申候、恐々謹言、

〔天正十五年〕
二月十六日

中嶋主殿助殿

義統 在判

八一九 大友義統感状

○魚返文書
大分県史料三三

今度薩摩之悪党依現形、当郡之者共、少々構未練之処、以順路之覚悟、魚返伊豆入道同前、至角牟礼遂籠城、折々軍旁之次第、感入候、必可賀之之趣、猶齋藤紀伊入道可申候、恐々謹言、

〔天正十五年〕
二月十六日
義統 (花押)

魚返民部丞殿

八二〇 大友義統感状

○森猪松文書
大分県史料一三

今度薩摩之悪党依現形、当郡之者共、少々構未練候之処、以順路之覚悟、至角牟礼遂籠城、折々軍旁之次第、感入候、必可賀之之趣、猶齋藤紀伊入道可申候、恐々謹言、

〔天正十五年〕
二月十六日
森雅楽助殿

義統 (花押)

八二一 大友義統感状案

○大友家文書録
大分県史料三三

今度薩摩之悪党依現形、当郡之者共、少々構未練之処、以順路之覚悟、至角牟礼遂籠城、折々軍旁次第、感入候、必可賀之之趣、猶齋藤紀伊入道可申候、恐々謹言、

〔天正十五年〕
二月十六日

森養春

義統 在判

八二二 大友義統感状案

○大友家文書録
大分県史料三三

今度薩摩之悪党依現形、当郡之者共、少々構未練之処、以順路之覚悟、至角牟礼遂籠城、折々軍旁次第、感入候、必可賀之之趣、猶齋藤紀伊入道可申候、恐々謹言、

今度薩摩之悪党依現形、当郡之者共、少々構未練之処、以順路之覚悟、至角牟礼遂籠城、折々軍旁之次第、感入候、必可賀之趣、猶齋藤紀伊入道可申候、恐々謹言、
二月十六日
義統 在判

津利治部丞殿

八二三 大友義統感状

○古後文書
大分県史料一三

今度薩摩之悪党依現形、当郡之者共、少々構未練候之処、以順路之覚悟、至角牟礼遂籠城、折々軍旁之次第、感入候、必可賀之趣、猶齋藤紀伊入道可申候、恐々謹言、
二月十六日
義統 (花押)

古後刑部丞殿

八二四 大友義統感状

○古後文書
大分県史料一三

今度薩摩之悪党依現形、当郡之者共、少々構未練候之処、以順路之覚悟、至角牟礼遂籠城、折々軍旁之次第、感入候、必可賀之趣、猶齋藤紀伊入道可申候、恐々謹言、
二月十六日
義統 (花押)

古後勘三郎殿

八二五 大友義統感状

○古後文書
大分県史料一三

今度薩摩之悪党依現形、当郡之者共、少々構未練候之処、以順路之覚悟、至角牟礼遂籠城、折々軍旁之次第、感入候、必可賀之趣、猶齋藤紀伊入道可申候、恐々謹言、
二月十六日
義統 (花押)

古後八郎殿

八二六 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

二月十七日、嶋津家久薩州ニ赴クヲ、佐伯惟定自ラ朝日嶽ニ陣シ、佐伯氏久左衛門・高畑氏伊守・新山田匡徳及ヒ矢功氏門尉・高畑氏右衛門尉・河野氏三右衛門・須氏右京・杉谷門尉ヲノ梓山峠ニ伏スシム、薩兵ノ至首級ヲ得タリ、泥谷氏進戦死ス、此時薩兵捨ヲ捨、惟定コレヲ得タリ、此肩衝ハ、初幕府義輝義鎮ニ賜フ、義鎮白杵紹冊賜フ、然ルモ島津家久乱入スル時、コレヲ取テ愛ス、梓山ニテ惟定カ手ニ入、其後豊後落去ノ時、惟定モ牢人メ藤堂高虎ニ寄宿ス、此其時コレヲ高虎ニ贈ル、高虎甚愛メ其高ニ伝フ、寛文年、月高致仕ノ日、コレヲ幕府ニ献シ奉ル、佐伯肩衝トハ
在ル薩將白坂氏式部・弘呂木氏左京進等暇ヲ告テ帰ル、志賀親次・後藤氏遠江ヲノコレヲ送ラシム、

八二七 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

二月二十八日、薩兵岡城ヲ窺ヒ、其追手暗灯岩屋ニ至ル、志賀親次、右田氏中務・阿南氏下総ニ弓鉄炮ヲ附テ、コレニ対セシム、橋ヲシ、且水深フメ涉リニ由ナシ、故ニ薩兵爰ヲ去ル、二十九日、其薩兵一千余、彼川上小渡牟礼ニ至ツテ、鬼城ニ対ス、鬼城ハ岡ノ子城也、親次ヲ上角口ニ陣シ、中尾右近、大森正忠助、右田美作守、丹肥前、志賀掃部等一炊助、千余兵ヲシテ、鬼城ヲ守ラシム、薩兵川ヲ涉リテ城下ニ進ム、城兵急ニ撃テ大イニ走ラシム、別ニ薩兵河辺ニ備フルアリ、志賀掃部・石田佐渡、コレヲ撃破ル、親次得ル所ノ甲首三百七十余級、岡ノ雑兵六十余人、城ヲ出テ敗兵ヲ木野ニ撃ント欲ス、伊集院氏肥後ヨリ来ツテ木野ノ兵ニ会ス、而シテ岡ノ兵ヲ囲ム、岡ノ兵衆寡敵シ難キヲ以テノ故ニ、出テ帰ル、凡親次去年十月、今年二月ニ至ルマテ、拔屠ル所ノ城壘十五所、所謂、緒方普方・寺本湯要害・白谷壘・烏岳・朽網城・榎牟礼・駄原・篠原目・高城・目迫、鎧嶽・小牧・水五合・鳥屋・神角也、

八二八 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

三月朔日、秀吉進発大坂○三日、義秀長去朔到関、欲執調、
癸妙見城、赴之○五日、宗滴聞在府内、而陣戸次清田○謂再来、侵白

八二九 大友宗滴書狀

○久保文書
大分県史料一三

今度方角無実所^二付而、其方事、白谷湯城へ差籠、一旦雖敵案候、志賀親善任申旨、被頭心底之由候、順路之覚悟感入候、京都御人数、豊前表江打統著陳付而、諸口御行可為近々之由候条、親善任裁判、此節別而馳走肝要候、必公儀之取合、不可有疎意候、恐々謹言、

三月一日
宗滴 (花押)

戸次近江守殿

八三〇 大友義統書狀案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料一七

前^州日夜、薩摩衆取出、火矢仕懸、其外種々成行候之処、各以堅固之格護、即被打消、悪党被追崩之由候、無油断才覚、弥城内用心氣遣、肝要候、猶齋藤紀伊入道可申候、恐々謹言、

三月二日
義統 (花押)

森五郎左衛門尉殿
魚返伊豆入道殿

太田九郎殿

古後撰津守殿

八三一 薩州軍某内覚

○舊記雜録後編一
鹿兒島県史料

内覚^{天ノ十五}
三ノ三

儀定之事、
一彦山二敵取登候者、日田・玖珠・津江・五条・鴻巣迄可相統事、

一日田郡之儀、従比方一動雖仕度候、筑紫、龍造寺・草野・高良山馬岳・秋月ヨリ程近候之条、人数之催不^レ成候之事、

一日田郡打破、秋月二可被相統儀、第一彦山之御加勢二可罷成之事、

一日田郡被打破候者、御行之物都合、御大利二可罷成之事、付仲間・野仲之事、付野仲手切仕候者、龍王岳迷惑二不罷成事、付角牟礼可為迷惑事、付山三人間注所可^レ相証事、付岡・長手切候ハ、鴻可為迷惑、付草・高可破却之事、付山下迄相統事、城・不さき城屋・宝満岳、此内一城も敵案二罷成候ハ、御行之障二可罷成事、

一日田郡不被打破、御陣と爰許の通路不輒候之間、爰元へ御加勢之儀、敵味方遠見懸候事、

一於此上も、日田郡之御行御延引候者、此表はたと迷惑二可相極之事、

一御和談之御椿者、ぬきてと相聞え候之事、

以上、
(花押)

八三二 大友宗滴書狀案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二七

惟定江以狀申候条、染筆候、今朝從龍王如到来^{宗在郷}納言殿前^{朔日}、御著関付而、義統御事、同三日、^{宗在郷}納言

之由候、殊從黒官^{集田首兵衛孝高}預書状候、今^{宗在郷}納言

之条、爰元氣遣^{宗在郷}、可為今^{宗在郷}清田^{宗在郷}戸次表散候分者、此間、玖珠^{宗在郷}可再来事^茂、可有之

江陣替之様申候、於^{宗在郷}申付候、其表之事、惟定申談、倍哉、弥用心等之^{宗在郷}申付候、猶重々可申候、恐々謹言、

三月五日
宗滴 (花押)

田北宮内少輔殿

八三三 大友宗麟感狀案

○佐伯文書
増補訂正編年大友史料一七

今度土持親信、相籠朝日岳城刻、被出自身馬、今落城、御心懸之段、感悦不浅候、度々之軍功、切々之忠節、不可勝計候、猶田北宮内少輔方江申遣候、恐々謹言、

三月十三日
佐伯太郎殿

○コノ頃大友義鎮、宗滴ト称シ、宗麟ト称スルコトナシ。

八三四 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料一三

○十五日^夜大雨、薩軍逃、^{宗在郷}後兵與京軍共遂擊之、殺千余人、而我^{宗在郷}去府内、帰国者、

或次三重郷松尾山^{宗在郷}到日向、

○十七日、島津家久引兵、至^{宗在郷}朝日岳、設

伏兵放所々擊之、泥谷左^{宗在郷}後藤主水正等、

戦死者若干、家久幸^{宗在郷}之櫃中、有碾茶壺、惟定得之為珍、最初大樹^{宗在郷}輝所賜義鎮也、義鎮與之家臣臼杵

紹册、家人到府^(内)□□時、乱妨、而得此碾茶壺、而至于此
後年推定寄食藤^(和)□和泉守孝虎時、贈此碾茶壺於
孝虎、孝虎進獻之大猷公、号佐伯肩衝是也。
○『増補訂正編年大友史料』二七所収下対校セリ。

八三五 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

^(天正十五年)月十五日、志賀親次、右田^(佐渡)・大森^(大友助)・後藤^(遠江守)・美^(美)・
伊賀^(肥前)・丹^(肥前)・中尾^(伊豆)・志賀^(掃部)・阿南^(五)・朝倉^(一白)
五百余ヲ率メ、薩將丸田氏^(彈正)□□□□
ヲ小牧城^(二)攻ム、主客大キニ相撃ツ、□□□□属スル、緒方^(方)・
耳忍ノ地士等、火ヲ大手口ノ小屋ニ放チテ、城兵ヲ撃ツ、
阿南^(五)カ放ツ所ノ矢、丸田^(強兵衛)力股ニ中ル、又丹^(肥前)會戰
メ、丸田ヲ斬ル、志賀^(掃部)・矢墜^(彈正)ヲ斬ル、而メ薩兵
悉ク敗、

八三六 大友宗滴感状案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料一七

今度薩摩之悪党、令乱入国中、雖不慮之成立候、当城依
持支、去^(十五)敵敗北之条、本望候、然者此節以籠城、旧
冬以来、別^(而)勵粉骨辛勞、愚老被見届候事、誠頼敷存候、
何様永々不可忘却候、必被取鎮、従公儀一稜、被成御感
候様、取合不可有疎意候、恐々謹言、
^(天正十五年)三月廿三日
宗滴 在判

羽野五郎左衛門尉殿

八三七 大友家文書録綱文

○大友家文書録
大分県史料三三

^(天正十五年)○佐伯惟定帥師、攻土持親信朝日岳城、親信乘夜逃去、
惟定復其城、

^(天正十五年)中旬、佐伯惟定自ラ佐伯惟澄^(久左衛門)・統安^(小右衛門)・高
畑^(伊守)・山田^(国入道)等ヲ率シテ、土持親信カ朝日岳
城ヲ攻ム、親信已下ノ城兵、悉逃去ル、惟定、則其ヲ燒
テ帰ル、
○「以降ハ、大友家文書録ノ別ノ記録ナレドモ、佐伯惟定ノ朝日岳城攻
メノ記録ニツキ、ココニ合取ス。

八三八 鎮貞感状

○大庭某所藏文書
日田郡天ヶ瀬町大字湯山

今度至當郡、薩州衆乱入之刻、其方忠儀之心態、難^(難)尽筆
候、於角牟礼、就中辛勞之段、無比類候、何様追而、可
願志候、事々、恐々謹言、
^(天正十五年)卯月廿八日
鎮貞(花押)

佐藤紀右衛門尉殿

八三九 豊臣秀吉朱印条々案

○大友家文書録
大分県史料三三

一大隅・日向兩國之儀、有人質、不殘請取可申候、自然
不渡城於有之ハ、義久^(義忠)・嶋津兵庫頭^(家心)・嶋津中務^(三)人
に相届、右之不渡城を可取卷候、渡す城をは^(主)主を懇

にいたし、其在所に足弱等かた付候時、□□以下迄も
政道堅申付、猥成儀有之者、可為一^(鉄新之事)、

大友休庵へ出し候間、休庵被居候□□候ハハ
城を相拵、在付候様に可申付候、立候□□て不叶城をハ、
日向之内に三ツも四ツも可然候哉、其内之城を一ツ大
隅の方へつけ、城に一郡相添、伊東民部大輔に是を取
せ、休庵為与力、合宿させ可申事、

一去年、千石権兵衛置目を破、不屈働をいたし、越度を
取候刻、長曾我部息彌三郎を討死させ、忠節者之事候
間、為褒美大隅国^(マ)を長曾我部宮内少輔に、為加増
被下候条、長曾我部居候而能城に置、普請等申付、国
之内に置候ハて不叶城を三ツも□□、普請何^(茂)申付、
長曾我部に可相渡事、

夫、主之義久儀を、大切に意得、^(其身を不憚り方)
陣所へ走入、御佗言申上候、敵に^(於ても兼理難也)敷者候、
取そたてへく候間、^(天降之内一職)摩のかたへ相付とらせ
候間、其外□□儀者、有次第、長曾我部に一職可
申付候事、

十方此方へ越候へと申候ハ、右之一書懇に可申付と思
食、被召寄候へととも、道之用心無心元思食、又ハ此
方へ越候日敷可行候、下々の者も相草臥候へハ、如何
候間無用之事、

一毛利右馬頭・小早川左衛門佐・吉川治部少輔兩三人
者、人数二三千にて、此方へ可被越候、惣人数ハ造作
候間、無用にて候事、並黒田勘解由者馬乘四五騎して、
右馬頭可為同道事、

大友休庵召寄、右之内々之儀、可申渡候、休庵被居□□
□、休庵次第可然候事、
臣^(於後大友家)之者共、且々覚悟を替候へ共、^(其質)太郎兩
人、無比類致働、大友家に非義□不働者に候条、兩人

に日向国にて、為褒美一城□、とらせ、其際にて知行
出候儀者、休庵も可然可致談合候、知行に大小も
可有候か、夫ハ休庵次第能様可仕事、

豊後国にて、去年以来表裏を仕候者之儀ハ、城を請取、
可致破却、其中にも城を置候ハて不叶城ハ、大友左兵
衛身に成候者に相持せ、可然候哉、夫ハ左兵衛督と致
談合、可為分別次第之事、

日向国者、大友休庵為隠居出し候間、日州にて取
知
行之役者、休庵覚悟次第たるへき事、

大友左兵衛督に一職に出候間、諸事
様にいたし候て、可然候
箇国にハ、城を拵、城主それ
多之近所に、御座所普請
部中務法印・蜂須賀
尾藤左衛門・黒田勘解
由、右之者共として、日向・大隅・豊後城普請可申付
候、并不入城ハわらせ可然事、

豊前国ノ儀、是も不入城者わり、豊後と豊前之間に城
一ツ、馬かたけと右堺目之城と遠候ハ、其間に一城
豊前之内に可置、城普請可有候、国々之者共、忠不忠
を相糺、知行可遣候間、其分心得、諸事油断申付、細々
に少之儀も、以一書御本陣へ、毎日成共、不及思案事
於有之者、可申上候、請御返事悟可然候事、

儀者、不請御意儀、分別違候へとも、
為には外聞可為迷惑候間、
右高城之様成儀に、不請
候、
之条々、猶兩人可申候、
以上、

天正十五年五月十三日

御朱印

羽柴中納言殿

○「大友興廢記」ニ、若干送り仮名等ヲ付シタル全文ヲ収載ス。「文書録」
所収ノ欠字ヲ「興廢記」ト校合シテ傍注ス。尚「興廢記」ニハ、末尾ニ
以下ノ文章ヲ付シタリ。
「大友興廢記」ニ、
「右如斯といへ共、病のきざす所は、厭辱も又のがれぬ宿病頼りにして、
天正十五年五月廿三日に大友休庵俄に御遠行に付て、右之御配當も、重
て與替被成たる様に見ゆ。(以下略)」

八四〇 豊臣秀吉朱印状

○豊公遺文
増補訂正編年大友史料二七

今度為御恩地、於豊前国京都、築城、中津、上毛、下毛、
宇佐六郡之事、被宛行訖、但宇佐郡之内妙見龍王南城、
当知行分相除之、其外全令領知、弥可抽奉公忠勤之由候
也、
天正十五年
七月三日
黒田勘解由とのへ
○朱印

八四一 豊臣秀吉朱印状

○福岡市博物館

豊前国宇佐郡内妙見・龍王両城、当知行分四百八拾九町
三段之由、其方所へ申越旨候、任其帳面相改致檢地、右
田島之員数彼両城へ相付、大友左兵衛督二儘可相渡候也、
天正十五年
七月廿七日
黒田勘解由殿へ

八四二 大友義統感状

○植田文書
大分県史料二五

今度、薩戸之悪党現形之刻、至由布城、睨遂籠城、軍勞
之段感入候、必追而、一段可賀之候、恐々謹言、
天正十五年
八月廿四日
植田宮内少輔殿
義統(花押)

八四三 大友義統感状

○久保文書
大分県史料二三

今度薩摩之悪党、現形之刻、至由布城、睨遂在城、軍勞
之段、感入候、必追而、一段可賀候、恐々謹言、
天正十五年
八月廿四日
久保治部少輔殿
義統(花押)

八四四 田原親賢旗下妙見城番籠勢人数

○宇佐郡田頭伝記
増補訂正編年大友史料二七

田原親賢旗下妙見城番籠勢人数
有永河内入道 岡部下総入道 市丸長門入道
種田因幡守 清成山城守 稲光次郎右衛門
清成式部少輔 糸永惣左衛門 糸永河内守
種田大膳亮 糸永藤五郎 清成軍兵衛尉
都留右近允 右田権右衛門尉 岡部弥次郎
有永宮内少輔 有永又七郎 蘆刈越前入道
牧小四郎 市丸六郎 竹田津大炊助
竹田津作之進 黒田兵庫助 竹田津刑部少輔
綾目右馬允 綾目玄蕃允 竹田津左近允
林治部少輔 郷司右京入道 成吉十郎
竹上六郎 清成惣三郎 市丸式部少輔

市丸左京亮 黒田彈正忠
林勘助 市丸七郎
松成左馬助 松成弥兵衛尉
綾部匠分允 市丸宮内少輔
竹田津市進 市丸監物丞
市丸織部助 清水彈正忠
郷司九郎 渡邊主水亮
稲田藤次 都留喜太郎
倉成刑部入道 有永勘解由允
市丸左馬助 深町主水亮
是藤大学助 波多大学
田北権内 木野市郎
林民部少輔 波多善介
綾日宮内丞 竹田津藤内
原口與三左衛門 内田新介
稲光主馬允 綾部内蔵丞
清成八郎 江上治部丞
蘆荊掃部助 蘆荊玄允
綾目三右衛門 山下小次郎
市丸彌右衛門 渡部兵庫助
眞玉三之丞 波多伊勢入道
田原勘解由丞 田原左近大夫

宮寿人数并同城衆懸合、或分捕或戦死者到、銘々加披見
訖、
頸一 井手口淡路守討之
頸一 中村将監討之
頸一 時松大蔵丞戦死
同城衆

黒田和泉守 松成美濃守
綾部撰津介 市丸李助
市丸藤左衛門 清末掃部助
蘆荊善次郎 岩室清三
陣新介入道 野田新介
波多南右衛門 久保大和入道
久保大蔵丞 清成玄内丞
長木監物丞 清成兵部入道
竹田津内膳 清成大隅守
糸永勘内 上野左介
田原右近大夫 田原玄介

波多南右衛門 久保大和入道
久保大蔵丞 清成玄内丞
長木監物丞 清成兵部入道
竹田津内膳 清成大隅守
糸永勘内 上野左介
田原右近大夫 田原玄介

魚返伊豆入道殿 御宿所
古後撰津守殿 御宿所

鐵炮之玉薬進候処、乍御報具預示、本望存候、弥粮・玉
薬之儀、可指籠候之間、可御心易候、追々上□□□候間、
是又可御心安候、近々取出可及

森 虫喰字
森 不全
太田 九郎殿
魚返伊豆入道殿
古後撰津守殿 御宿所

八四五 岐部宮壽合戦戦死

分捕頸注文披見状写

○岐部文書
熊本県史料中世四

八四七 豊臣秀吉書状

○小早川家文書
増補訂正編年大友史料二八

去十二月廿一日之書状、於京都到来、披見候、

岐部中務入道宗閑居城近方迄、薩摩悪党取出候刻、岐部

一肥後之様子、安国寺一書之通、被聞召候、属平均諸城

へ人数丈夫二指籠之由尤候、誠寒天之刻、長々在陣、
別而痛入候、
一有動事、先書二委細被仰遣通候間、可成其意候、則為
御上使、四国衆淺野彈正少弼、加藤主計正、小西撰津守、
其外貳万余、明日廿日二被差遣候、於様子ハ、被仰合
候間、遂相談可被申付候事、
一阿蘇之儀も、一揆棟梁人可在之候間、有御礼明、可被
加御誅討と思召候処、以大友御佗言可申之由、沙汰之
限候、是又様体御上使二被仰付候事、
一豊前之悪徒等、悉令誅討、首到来候、定而其方へも可
相聞候、
一九州儀者、度々如被仰遣候、何方迄も於惡逆之輩者、
不殘此度可被加御成敗と思召候条、弥無緩可被申付候
事專一候也、
正月十九日
小早川左衛門佐とのへ

八四六 黒田孝高書状案

○大友家文書録
大分県史料三三

（花押）

八四八 大友吉統知行預ケ状案

○大友家文書録
大分県史料三四

連々奉公辛勞、殊先年至龍王岡登城之刻、越山忠儀心懇
之次第、感悦無極候、仍為其賞、玖珠郡之内野上鬼千世
一跡之事、預置候、可有知行候、恐々謹言、
六月十日
小田原左京亮殿

八四九 吉弘統幸知行預ケ状案

○大友家文書録
大分県史料三三

於日州、息連右衛門事、宗仰同場之戰死、感悅候、其已後田原親貫惡行之砌、統幸事、如御座所令參上、數月堪忍之折節、依幼雅雖不弁東西候、其方事、聊以供奉種々勵辛勞、就中至爰元者、為人質、妻子等鞍懸麗迄差登、始中終、以斗略相補候故、代々忠儀之節目、毛頭無替儀、被成御感、其後豊・筑・日向、其外所々在陳、殊屋山岳籠城之刻、方破却故、南北之親類中、悉同城之砌、糧等無懈怠被相統、其故、何無難被遂本意、祝着候、仍為其賞、兩子山之内葉丸名、長岩屋之内面之屋敷、緒方庄之内日小田百貫分役職之事、預進之候、全知行肝要候、恐々謹言、

天正十七年正月五日 統幸 在判

諸田土佐守殿

八五〇 大友吉統書狀

○宮師文書
增補訂正編年大友史料二八

先年龍王岳在城之刻、由原宮鐘樓可有再興之段、立願故、無程遂本意候条、誠擁護無別儀候、彼一字、雖造營奉行役所候、此度之事者、右為成就、豪榮一分造畢之由、感悅無極候、弥可被勵懇祈事肝要候、恐々謹言、

正月廿八日 吉統 (花押)

由原宮
宮師御坊

八五一 田原親家書狀案

○大友家文書錄
增補訂正編年大友史料二五

就便宜一筆令申候、其表動亂之次第、不及是非候、然者其方事、從最前無別儀以心懸、今更惣勘切寄江、被差籠候旨、案中候、爰元御評議、相調候間、御出勢火急候、可御心安候、殊麟清、今度之忠貞無比類儀、申、親家殿在府之儀、申、何様一稜取合不可有余儀候、追而以坪付、可示給候、其元通路次第何とぞ、如妙見岳、御登專一候、猶重々可申候、恐々謹言、

二月八日 親家 在判

飯田内記允殿 御宿所

(封)「田親」

八五二 阿蘇惟前書狀

○五條文書
熊本県史料中世四

追而、中紙二十帖預候、祝著候、

如示預候、一兩ヶ年申旨候処、城親久、以中達屬無為候、本望候、此等之儀自是可令申折節、態御音札祝著候、仍多年津江在山刻、別而被添御心候、于今聊無忘却候、雖遠方、弥可申通候、御同前可為快然候、細猶々神照寺可被達候、恐々謹言、

二月廿二日 惟前 (花押)

五条殿

八五三 田原紹忍書狀

○萩原文書
增補訂正編年大友史料二五

賀所迄一通、具令披見候、源三郎在城之儀候間、賀以

一致、別而、御忠貞肝要候、於向後、御同様無忘却、可申談、殊切寄人数指加候条、被申合、御馳走憑入候、委細從賀、恐々謹言、

卯月十三日 萩原山城守殿

紹忍 (花押)

八五四 田原紹忍書狀

○吉村茂助氏文書
增補訂正編年大友史料二五

今度親類中一致、至阿波甲斐入道切寄、差籠忠貞之覚悟、無比類候、然者為彼賞、其方拘一部名之事、濟物如前々定進之候、聊不可有別儀候、恐々謹言、

卯月廿八日 紹忍 (花押)

吉村民部丞殿

八五五 田原紹忍書狀案

○大友家文書錄
增補訂正編年大友史料二五

今度最前已來籠城、無比類之段、依遂注進、一稜可被成御感之由、被仰出候、尤珍重候、然者先以鎮久当知行分之事、諸点役并檢断不入之段、被遣御書候、可得其意候、永々不可有他妨候、為御存知候、恐々謹言、

五月十四日 紹忍 在判

上野左介殿

八五六 田原紹忍書狀

○吉村韓大文書
增補訂正編年大友史料二五

從今度最前、至伯父須賀切寄、被差籠、以無三之覚悟、忠意之次第、公儀髓而対紹忍御頼敷候、然者彼為忠賞、兄弟四人拘下作之事、永々御段錢、又者御城錢催之時、

日別雜事等之儀、令免除候、殊為地頭方、増錢・増米新儀之非法申付儀候共、為今般之加扶持、分別之段申出之上者、不可有承引候、為存知候、恐々謹言、

六月十四日

吉村民部承殿

紹忍(花押)

八五七 田原紹忍感状

○津々見文書
増補訂正編年大友史料二五

前二日、時枝被懸合、別而辛勞之由、粉骨無比類候、何様比節貞心之覚悟、於向後不可有忘却候、必一稜可賀之候、恐々謹言、

八月五日

津々見勘右衛門殿

紹忍(花押)

八五八 大友義統感状案

○児玉頼探集西文書
増補訂正編年大友史料二五

去月十四日、於井上里城麓防戦之刻、其方別而依碎手、被官白石九郎兵衛被疵之由、粉骨之儀候、必追而可賀候、恐々謹言、

九月十八日

森右京亮殿

義統

八五九 佐田鎮綱書状

○廣崎嘉十郎氏文書
増補訂正編年大友史料二六

尚々被閣飛脚、大慶候、世上無実所迄□候、毎事油断有間敷候儀、自然夫丸等用所候者、示給可其意候、其表□評今千一聞合致て、一人差遣可承知候以上、

態注進之趣得其意候、仍西衆近日可為現形之由、風聞候歟、比表批判も同前候、然者山上等心懸可有之哉之由候、尤之儀候、其元切寄、當時破損之様見へ候間、其表物並被聞合覚悟肝要候、將又高岩番易之儀、于今無帰著候、大易之事、仲間方二雖被仰付候、無心元風聞仕候間、不可有正趣候、猶用口上候、恐々謹言、

十月十四日

宗善まゐる

綱(花押)

八六〇 田原統周書状

○吉松文書
大分県史料三五

其方事連々奉公辛勞候之条、小原之儀如前々申付候、早速被罷移、城番肝要候、聊不可有油断之儀候、恐々謹言、

十一月十七日

吉松右京亮殿

統周(花押)

八六一 大友義統知行預ケ状

○糸永文書
増補訂正編年大友史料二五

数年籠城為忠賞、徳弘八町之儀申付候処、佐田弾正忠先

判之地無紛之由候条、令還附候、然者、為代所、其国之内拾町紙有之事、預遺候、可有知行趣、猶田原近江入道可申候、恐々謹言、

十二月九日

糸永右京亮殿

義統(花押)

八六一 田原紹忍感状

○元重實氏文書
増補訂正編年大友史料二六

前廿日、到当切寄、時枝表悪徒等成行之刻、別而被励辛勞、端的二敵宅人被射伏之通、高名之次第感入候、殊先度新力分、捕之砌、其方被官藤兵衛碎手之由、是又具令承知候、旁以忠意之統、以後不可有失念之趣、猶中山内記允可申候、恐々謹言、

十二月廿四日

元重兵部承殿

紹忍(花押)

八六二 田原紹忍感状案

○大友家文書録
増補訂正編年大友史料二五

□□切寄、別而抽粉骨、其後大方奉公無□□□□深
妙候、必一所可加扶助候、弥忠貞之□□□□、謹言、

八月八日

福田彦三郎殿

紹忍(在判)

八六四 田原紹忍覚書

○大友文書
増補訂正編年大友史料二四

覚

一統綱御進退之儀、從最前(宗輔義統)御而殿様御同前申上候、入組之事、

一彼一儀於被成 御分別者、(佐田)統綱興然、可有在庄事、付、出陣刻之事、

一妙見岳御城并郡職等之事、

一右之申事、御而殿様、不相叶御気色者、重々御佗言、可致停止事、

以上

○裏三田原紹忍ノ花押アリ

八六五 某書状案

○林文書
大分県史料三五

畏而申上候、仍而我等若輩事、数陳励軍旁、就中此一兩年之事、耽御城誘、彼是夜白無油断難遂堪忍候、若輩居屋敷分徳代名之事、近年弟候市介・久保平兵衛尉・山下七右衛門尉弥太彼三人江被宛行候、其上去年大水以来、井手大破罷成、給所無御付田代河成過分候、此時小事入候御公役等、所難難成候条、山下七右衛門給ノ二反地之事、我等本領ト申、次作半申談作仕候条、此刻為御加恩と二反地事、可然之様以御取合、可被仰付事可着候、万

- 一 れいしん
- 一 御としの神御まつり
- 一 やまやく 右之前所有増以一書申上候、勲御濟之候条、
- 一 谷やく 能々以御分別御取合奉頼候、
- 一 御公役

八六六 乃美宗勝一代感状陣所合戰場付立

○浦岡書文書
萩藩閩録一

乃美兵部丞宗勝一代方々ニ而働ニ付而元就公・隆元

公・隆景公并秀吉公ヨリ之御感状陣所合戰場付立

初陣十六之年御感状有之

一出雲国尼子御取詰之時嶋根之御陣ニ而之鐘之疵所鼻

御感状有之

一 能見嶋人之瀬ニ而之鐘之事

御感状有之

一 土州戸坂力峯ニ而之鐘之事

御感状有之

一 豊前国門司ニ而之鐘之事、疵所なた長刀ニ而右之うて

御感状有之

一 筑前国立花籠城之事

御感状有之

一 摂州木津籠船被焼捨、大坂門跡江兵糧迄入候事

御感状有之

一 播州高砂辺符之町放火之事

御感状有之

一 豊後今井元長ニ而之手柄之事

御感状有之

一 予州麻嶋ニ而之鐘之事

御感状有之

一 巖嶋陶御取詰之時之鐘之事

御感状有之

一 讃州摺臼山合戦鐘之事

御感状有之

一 摂津国花熊籠城鐘之事

御感状有之

一 予州たかふな西王寺城責之時鐘之事

御感状有之

一 備前児嶋蜂浜ニ而之合戦鐘之事

付、田坂善慶御成敗被仰付事

右之通御感状御本書写共ニ展転仕候得共、如是覚書所持仕候、

付、書付差出申候事

八六七 細川忠興自筆書状

○松井文庫

目出度期見参候、以上、急度申候、
石治部・輝元申談、色立候由、上方今内府へ追々御注進候、加此可在之と、かねて申上たる事候、其外、残衆ことく一味同心之由候、定而、内府早速御上洛可之候、然ハ、則時ニ可為御勝手候、此状参着次第、松井と市正ハ番子まで不残召連、丹後へ可被越候、自然之時ハ、松くらをもすて、女子をつれ、宮津へ被越、可然様ニすまざるべく候、頼入候、(有吉立行)四良右・其外之者ともの儀ハ、其国のていを見合、可成ほと木付ニ候て、其上ハ如水居城へうつるべく候、如水とかねて申合てをき候、此状ハ丹後ヨリひめち辺へ遣、舟にて届候へと申付候、

一 内府ハ江戸を今日廿一御立候由候、我等ハ昨日うつの宮まで越在之事候、さためてひつくり返し、上方へ御はたらきたるへきと在候、恐々謹言、
七月廿一日 忠(花押)

- 松井殿
- 四良殿
- 市正殿

八六八 加藤清正書狀

○松井文庫

以上

去二日之御狀、昨日五日二令拜見候、然者、其元丈夫二可有御在城之旨、尤存候、就夫、与介被留置候由、得其意候、
隨而、玉葉取合五千放持せ令進之候、其許不自由二候者、
重而可進之候、上方之様子具二被仰越、其上各々之書狀
并写已下迄、被入御念被差越候事、別而令満足候、我等

も舟用意出来次第に、舟を廻可申候間、上洛程有間敷候、
彌、上方之様子到來候者、可被仰知候、從此方も可申入候、
猶、立本可申候、恐々謹言、

八月六日

清正（花押）

松 佐渡殿

有 四良右殿

御返報

八六九 太田一成書狀案

○松井文庫

以上

其以来久不懸御目、無音、背本意存候、上方之様子、定
而可被及聞食候、就其、其御城、拙子請取申様にと御
奉行衆被申付而、前後不存候へ共、昨日罷下候、則、御
奉行衆御折紙持進之候、從御返事、重而可得御意候、此
時候間、別而御馳走申度心底二候、委曲、小倉長齋二申
含候間不具候、恐々謹言、

八月十三日

一成判

松 佐州殿

有 四良右殿

人々御中

八七〇 松井康之・有吉立行連署狀案

○松井文庫

「幽齋様への書狀留」

去二日、幡磨へ伝へ捧愚札候、定而可相達候、

一先書二如申上、当城之義、如水へ相渡、海陸共成次第、
各一同二可罷上談合相極申候へ共、加子無御座候、何
程成共賃可遣由申候へ共、落武者と見申候て、不罷出
候、其内二人数出、御籠城之通相聞へ申候状、不及是
非候、然時ハ、当城堅固二相抱、於此地、御届可仕二
相極、普請等無由断、昼夜申付、下々迄丈夫二致覚悟
候事、

一安芸宰相殿・備中納言殿・三奉行・石治・大刑少各使
として、太田美作守うすきへ罷下、使者を被越候、各
分被对佐渡守折紙共候、大閣様御懇御知行等■各別
にも被下候間、秀頼様へ致忠節候へ、然者、当城ハ相渡、
可罷上之旨書中二候、美作方ハ兩人への折紙にて、
何とそ談合有度書中二候、於此地、各腹を可仕二相極
候間、別二御返事無之候、重而飛脚も給候者、討捨可
申由使二申渡、折紙共皆なけ返し申候事、

一其御城堅固二被仰付、度々被及一戰、寄衆敗軍之由申来
候、御銘余不及是非候、各手■高名可有之と羨申候事、
一内府様、去二日江戸御立、漸伊勢・美濃へ可被打出候、
謀叛之一揆ハラ、敗軍眼前卜存候事、

一北国之義、肥前殿小松之城へ被取懸、二ノ丸迄押破、
本城へ悉追入、責手ノ人数残置、大性寺へ被働、即時
二責崩、山口父子被討果由候、丸岡・北庄肥州へ手ヲ
入申由候、府中ハ堀帯者共堅固二相踏旨候、然者敦賀
へ早速可被打出旨候、御本意不可有程候、当城之者共
ハ、今之分二御座候者、アハウ勝二可為本意候と、各
若者共無念かり申候、可被成御推量候事、

一如水先書二如申入、女房衆甲州御内義迄盗出、一途二
内府様御味方二て御座候、当城へ万事御心付にて御座
候事、
一主計殿、是又同前二て御座候、当城へ兵糧・玉葉御入
候て御懇共候事、事、
一右御兩人之外ハ、皆敵ニテ御座候、併内府様御上之う
へハ、何も草のなひきたるへく候事、
一態人を進上申度候へ共、慥成者ハ一人も手前大切二御
座候、陸侍・中間・小者などハ其程へも不相届、直二
走可申と存候条、此書状も又幡磨へ上せ、其分相届候
様二申越候、目出度御返事奉待候、此旨宣預御披露候、
恐々謹言、

八月十八日

松井佐渡守

康之

有吉四吉良右衛門

立行

麻吉右

里夕

八七一 松井康之列書狀案

○松井文庫

謀叛之一揆ハラ、敗軍眼前卜存候事、

如人ヲ差下由候条、致言上候、

一 七月晦日如御使二捧一書候、定而可致參着候事、

一 其以後、弥、普請無油断申付、仕置等丈夫二致覚悟候間、可被思召御心安候事、

一 輝元・備中納言殿・三奉行・石治少・大形少の使者として、太田美作うすきへ罷下、右各分被对松井、折紙もたせ候て、作州一札、佐渡・四良右衛門兩人へ宛所にて使者差越、当城相渡候やうにと、色々様々被申様

二候、各一途二存切在之条、別二御返事無之候、然上ハ、御状共此方ニ留置不入由申候て、一通も不残なげ返し、重而人ヲ被越候ハ、討捨可申由申放、使返し申候事、

一 太田飛驒・美作親子、舟共相催、深江之古城へ夜籠二舟を着、足懸可柁申由候間、本丸・二丸まで念を入、引破申候、一分之働ハ中へ成申ましく候、日向・薩摩衆相催由申候事、

一 大伴よしむねへ当郡之義奉行衆分進之、中国まで被下候由候、うすき・府内・熊谷城・垣見城四ヶ所之内へ被着、当郡へ之行可仕と存候、在々人質、弥、丈夫二相申候、誰々何程にて參候共、堅固二相抱可申候条、被成御氣遣ましく候事、

一 如分色々様々御心付、大筒も三丁御いれ候、先度舟にて御出候て、被成御見廻候、城無越度やう相抱候へハ、何時も可有後卷出、頼敷被仰やう、申計無御座候事、

一 主計殿、追々人を被下、御懇共二候、兵糧、府内にて御かり候て、式百石計被入候、玉葉五千放被下候、何程成共申次第、可被指籠旨候、御念入候段、書中二不被申上候事、

一 田辺之義、御堅固之由候間、珍重二奉存候事、

一 加主御女中盗出、一昨日廿六中津下着、昨日隈もとへ御送之由、如分申来候、珍重無申計候事、

一 竹豆州ハ煩と候て、今二不被上候、当城へ一段懇にて御座候事、

一 早主馬、丹後へ被立由候へ共、内右衛門一段無疎略、万事心付にて御座候事、

一 毛民太も丹後へ被立由候、是も留守居ハ当城へ申通候事、

一 中修理、今二不被上候、四五日以前、平右衛門被上候、妻子新駿へ奉行衆被預候故、あいしらいと聞へ申候事、

一 毛老、去十八日罷下、隈本へ被越旨候、輝元奉行衆分として被下由候、今度伏見にて森九左衛門・同勘左衛門・其外数多致討死候、家中よハリ無正体旨候、如ハ人数被集、何れへ成共働構にて候条、小倉、不成大方、氣遣之旨候、然者、主計殿大坂へ之御返事も、使者にて被申登、主ハ上洛あるまじきと存候、もじの城拵申之由候、是も毛老被相抱義不罷成、輝元人数可被入やうに申候事、

一 御吉左右之御返事、奉待存候、此旨宜預御披露候、恐々謹言、

八月廿八日 各

加々山少右衛門殿 牧 新五殿

八七二 大友家文書録綱文

○大友家文書録 大分県史料三四

九月、中庵到于安芸大島、輝元則授軍艦及炮卒百人、而解纜○吉弘加兵衛尉統行在筑後柳川、立花統虎居城、統欲赴江戸仕能乘、乗船於豊前小倉津、過防州上関、中庵亦至此、統幸謁見焉、中庵諭其入国、統幸○諫日、公曾與

黒田如水有約、且令嫡侍江府、此度当毛利者恐不可也、公能慮之哉、中庵意其出言於此、則船路○有恙故、如不容之○統幸亦止東行、從之○八日、及晚中庵著艦於豊後

国速見郡熊谷、熊谷大垣見、寛和泉居城、時熊谷、而城之間、其夜過木付沖、繫船於高崎表○九日晚、中庵下船於別府浦、

軍于立石村、而召田原紹忍・宗像鎮統、請得柏紋旗於中川可成、而番代・旧臣・百姓等謂、旧主人国、

中庵還軍艦及炮卒於吉四郎右衛門立行、

付興別、庄官及百姓長悉出質、以鋼於城二丸、訴中庵

且構飯屋於外郭、使其庄官民長等居之、衆士、我親戚被駢、在木付城、不可不得之、中庵以衆言、囂々不能強制、擬使於木付請質子焉○十日、中庵通入国之信於大坂知己、有授岐部夫婦・柴田書、

八七二 大友家文書録綱文

○大友家文書録 大分県史料三四

谷久蔵曰、此度旧主大友入本国也、告余遲滞、且不容諫言、今当自殺、久蔵曰、子之所有謂矣、然啣恨亦死举大事、亦死等死為主、此地幸近木付城、是丹後松井処守焉、

乘夜襲之可也、吉弘肯首焉、於是焚輜索、而經大内山・木田台・若宮・馬場尾、進兵、隔木付可十五六町、松

井康之望見吉弘兵、過城下、恐其謀遣家士下津半左衛門於百姓丸戒、其監衛者、百姓等議曰、下津来則勸酒、直執左右手、以可鑿殺之、然謀不成時、統幸懇森末村庄

官中野惣左衛門宅、而過上八坂、至辻堂、去日計、以通

於立石本屯○此日及暮、中庵遣天德寺治右衛門尉統生稱

田小六、平林津介時稱連於木付城、以請復質子、城兵固守

不許之、又使吉弘統幸、吉弘七左衛門○富兵内、岐

部玄達、吉良伝右衛門、衛藤又右衛門、小田○又左衛

門、上野弥平、上野長介、大神堅介、一万田民○新

參士十人率其所謂質子之、雜兵數百人、柴

田、平林之後、共赴木付、吉○炮長也、旧

臣都甲兵部○予通志于我軍、○

板屋燒亡、城下町以引入○二丸、

松井家士中川下野、下津半左衛門○右衛門、今井惣

兵衛等數輩出拒之、○上野長○陌刀與中川下野鏈

接戰、殺倒下野於溝中、直欲取○下野奴僕甚六斬長

介○後、長介眩、欲執陌刀、然不得○、以刀接甚六、

柴田統生來助長介、敵兵井口六兵尉○接、柴田○共被

創、而退、及遲明我兵○伏、在○燒痕、敵兵放矢進之、

運○天介為今井惣兵衛被射胸板、而死、大神堅介與下津半

左衛門合鏈、互○創、江藤又右衛門與板○三郎右衛門接

鏈、其餘奮戰、城中太苦、有吉立行及○住○等、放鳥銃

尤急也、此間雜兵○悉復質子、而歸路○二町計、柴田統

生登高处、脱甲、制諸卒時、中島銃○有○所、而死、諸

卒護統生遺骸、而乘船於頭成、上於田○屋、入于立石陣、

一說曰柴田平林者率十四五騎、過○地及朝日寺下安住寺川邊、經驗

難、○弘者率而余兵、經馬場尾、白水時、都甲兵部放火于○屋、於是

我兵進到城下、吉弘家士森清左衛門與○下津半左衛門合鏈、互退、

都甲等出城、加我○城中大動、松井、有吉制士固門戶、飛炮矢、我

兵破○、直過二丸時、柴田、平林、於是中庵不得已○付衆

中炮矢而死、於是悉復質子而退矣、○左

絕矣○十一日、中庵感天德寺統生戰死○左

八七四 大友家文書錄綱文

○大友家文書錄 大分県史料三四

松井康之、有吉立行、屢告中庵○入國及夜戰事於黑○如水、

乞援兵○見城、在豐後、於是如水使久野次左衛門、曾我見○或

曾上、又作曾我、五右衛門、母里○或作毛利、與三兵衛、時枝平

大夫、井上九郎右衛門、野村市右衛門、後藤太郎○帥步

卒二千人○或作趨木付、且戒康之、立行○待我至、莫猥○戰

○十二日、如水為赴木付、解垣見之圍、到于熊谷城下雄城、

遺价於立石、論中庵曰、君今度入國、而雖與木付衆絕矣、

我未空旧約、且西方敗軍○近、君縱得一旦○利、豈為多

日之功、自今以後復志隨○者共、攻拔國中敵城、以贖先非、

宣稱東方之忠戰也、○庵曰、嗟是我素志也、然木付夜戰後、

衆議不一故、末○志之計○十三日、中庵曾慮木付衆襲

來、使竹○田如水○到木付、久野治左○山相與美○山相距

松井康之、有吉立行發木付、向○山○美相寺山在、時枝為先

驅、入津留見村松○山○美相寺山在、時枝兵向○兵

過山峽、向北、而軍原野○呼津留見原、母里與○衛亦同軍、

二隊千余人○中庵亦自帥九百余兵、發○至石垣原、向

東而陣、時枝○軍列在右方、相隔○許○吉弘統幸

獻言於中庵曰、今度合戰縱得勝利○無益耳、我當戰死、

以今日為今生○別、而向石原○中庵以田原紹忍、宗

像鎮統、吉弘統幸為將、分隊、先○吉弘○率新參士二

隊三百人、放鳥銃、誘敵兵、時○母里進○合鏈于原中、

松井、有吉○亦下山接戰○立旗○山○分、下、小田原又左衛

門、深栖七右衛門、吉良伝右○衛、木部玄達、大神堅

介、清田民部等力戰、大擊之、時○母里敗走○于犬

馬場、殘兵逃及于灰木峠○三、松井亦被創、而敗于

山上、我兵逐○、而屯原中、久野治左衛門、曾我○五右

衛門帥數百人○三千、愧、前隊潰來進、宗像鎮統制諸卒曰、

只今來○黑田一方將也、不可不鑒之、吉弘復共進之二

隊○余兵接戰、可半時久野手兵○五十、光富立左衛門、戶田

有利、斬敵八十人、○戰○田九藏、下田作左衛門○相競戰沒、

吉弘、宗像進到山○戰○之後、

門等○帥千余兵、大○於母里、時枝敗卒、亦來

屬之、中庵遙見之○右衛門行、制宗像、吉弘曰、

衆寡不可當、速退○可也、統幸曰、今日必戰死、豈以

小勢而退乎、中庵○吉良命之、○又不可、○又使吉良

太郎右衛門○副伝右衛門○赴之、統幸以前度答直進焉、

而吉良告之本屯、共入○吉良三右衛門亦從之、中庵命

諸卒、為援勢、田原紹忍率物軍拘向之、中庵旗下纔清田

需閑、衛藤又右衛門、春山善八僕從一人耳○壽開始在木付、

如水及竹中○介兵三千許、○又作一萬、竹中兵七百、按如

譯兵數、如水此時未來于此、今接戰者先驅○三千、自兩方○或作襲

來、松井、有吉亦下山、宗像、吉弘頻放○炮、物軍統至

大桃原野、野村家士十餘騎○困、統幸、統○奮戰擊之、井上、

後藤家士數十人、自山上橫行、我軍○危、吉良三右衛門、

吉良太郎右衛門○被創、得首級、吉○七左衛門亦負創、深

栖七右衛門接大野久大夫○小原又左衛門接大野堪右衛門、

吉良伝右衛門接太○或說吉良伝右衛門與丹後、魚住右衛門兵衛戰死非也、力戰、共死、

其○安達、豐饒彈正、清田味左衛門○舍

人、都甲兵部、下郡治部○原田堪右衛門、田尻吉

藏、摂津覚右衛門○川二郎作、永富與右衛門、永富九

郎、原田勝六、橋○右衛門、原田休伝、深栖蟹介、

野上平介、柴田惣次郎、秋岡式部○光道有、山下不庵、

大津留主馬○胡麻津留○七、久我統治、城後寬内、中

入道○久

事、

一竹伊豆母義・女房衆・息右衛門二良ぬすミ出し○父子共
如水と被相働候事、

一去十七日、木付迄陣かへ候て、昨日十八、熊谷城被取

卷候、 城中（加藤清忠）懇望申候、頓（毛和）相済可申候、各在

陣仕、攻口もふんさい程請取申候事、

一主計殿へ吉統下着之さた有之二付、先加勢として鉄炮

五十丁百五十（上下）ノ着到にて被指越候、 吉統中津

へ被遣候日、被着候間返し申候事、

一 熊本へ大伴下着之注進十四日参着、十五日二被打

立、久玖郡迄御着陣之处へ、立石 落居候注進有之

二付、御帰陣候事、

一如水之御事ハ不及申、主計殿御情入候段、中く難申

尽候、便宜次第御札様々被遊候て可被参候、御両所御

心付、面二ならてハ 不被申尽候事、

一田辺御堅固之由、目出度奉存候事、

一濃州表御手柄共之由、珍重存候、

御吉左右追々奉待候、○宜可預御披露候、

九月十九日 康之 立行

米田助右衛門殿
加、山少右衛門殿

八七七 黒田如水覚書案

○松井文庫

一手切働之事、

一吉統取上候節之事、

一中川修理、初中後違之事、

一府内留守居、前後無相違事、

一民太留守居之事、

一竹伊豆事、

一柳川相働、付城申付、鍋嶋人数入置、薩摩へ可罷出事、

一熊谷・垣見城之事、

一太田飛驒父子之事、

已上

十月七日 松佐州参

如

八七八 細川忠興書状案

○松井文庫

以上

急度申候、我々事豊前一国ニ豊後にて国崎郡・速見郡

相副拝領候、

木下右衛門大夫二も、豊後にて早主馬拝領之郡可被遣由

候、左候へハ、我々拝領之郡へ并候、無残所忝儀候、此

状参着次第、玄番・松井・菅勝兵・平左早々豊前へ被罷

越、城々可被請取候、具、吉左ニ申候、可被得其意候、次、

丹後之儀、当年所務被下候、是又忝儀候、納所儀、急度

可申付候、恐々謹言、

十一月二日 越 忠興

玄 番殿

松 井殿

勝 兵 衛殿

五右衛門殿

曲（加藤） 齊

新太 郎殿

新（松井） 五殿

平左衛門殿

八七九 加藤清正覚書

○松井文庫

覚

一府内兵糧之事、

一松佐御上洛候て、有四御残候始末之事、

一其御城、如水御うけおい候て、いつれも一同二御上洛

之時之事、

一如水御うけおいなく、其御城二御入候時の事、

一此方へ御越候て、北浦、松佐御一人にても、又は有四

同前二御上候共、御談合之上にて、御報二承へき事、

一御兩人此方御上候共、御家中衆、其下々ハ、舟数二

てハ、結句路次何如敷候ま、とても主計可罷上候条、

其時御同船可然候、其間ハ、此方二御逗留あるへき事、

一各一同二御上洛、此方人数遣候時ハ、たれくにて

も、待衆御一人被置候事、

一此内、いつれ二なりとも相極

候者、我々飛脚にても、与介にても帰候時、御兩人之

御使一人可被下候、其も、それ分すく三御上候へハ、

いらす候、如水と御談合不相済、此方分被申分、於御

同心、一人可被下候事、

一御兵糧入候て、草与介符内へ被遣候者、尚以、我等も

の二御一人可被下候、其迄もなく、急松佐此方へ御越

候か、又、各一同二御越候はんならハ、可随其候、其御城御あげ候てハ、いか、二候間、右之分二御さた候て、一同二此方分御上ありた候まつく松佐まで御越尤候、さやう二候ハ、此方分人数可遣ため二候、以上

八八〇 黒田如水書状案

○日向伊東文書
日向古文書集成

今度伊東我等方へ申越候条々、

一 七月廿日之日付にて申越候は、对内府様え、輝元宝永奉行共逆心之条、伊東義者内府様え御届仕度候、如何仕候而能候はん哉、伏見へ人数等をも遣間敷候条、拙者申次第に可致覚悟と申越候、

一 拙者返事には、少身に候条、上方え居候而御届成間敷候条、帰国仕可然之通申上せ候、就然八月十日比之日付にて又申越候は、私事は以外煩候条、今程罷下候事不罷成候間、於日向留守居之者共、申次第、奉行方へ手切之働をさせ、息左京亮延慶を下可申由申越候条、左京亮帰国之儀者尤可然候、働之儀者時分により左右を可申由、返事仕候事、

一 拙者者、九月九日に居城を罷出、十一日未明に垣見城國基郡を取巻候所に、大友木付え取上候を、注進有之に付て、十二日木付へ懸付候へは、早大友も引退立石と申所へ取籠有之候を、翌日十三日拙者先手之者押寄、及一戦に、勝利を得申候、十四日大雨降候に付て、少遅候内に、大友致化言、十五日早朝拙者陣所へ懸入申候、然而十六日伊東留守居の方へ使者遣、加主計も手切之働被仕候条、其元見合次第に、何方へ成共致手切候へと申遣

候、拙者か使者、九月廿八日参着候、則留守居之者共令相談、拙者使者を留置、高橋右近相拘候、宮崎と申城へ取懸、夜せめに仕、十月朔日切取、城主を始、首数二百余討取申候故、兼日より拙者を証人と存申越候条、如此候、被遂御分別候者、御耳に被立候而可被遣、奉頼候、

御奉行中

如水黒田孝高

八八一 松井康之・有吉立行覚書案

○松井文庫

覚

一 草与被差越、尊書拝見、彼口上承届、忝奉存候事、
一 各一同二可罷上談合相况次第之事、
一 南浦可罷上二極申様子之事、
一 丹後へ働之様子、母里太兵衛被申、其上、小縫不辨不違殿也 所中重利竹伊豆へ書中見申候て、南浦ハ打置申候事、
一 北浦可廻旨申候へとも、加子無之二付、打置申候事、
一 越中守へ書状跡書披見二入候事、
一 姫地分中村神左衛門書状参候、此書中二候間、当城丈夫二致覚悟、在付可申候、就其、御兵糧可申請ため、
一 府内へ草与差越候事、
一 玉薬ハ丈夫ニ在之事、一付人数之事、
以上

八八二 松井康之・有吉立行覚書案

○松井文庫

一 主計殿へ進候一書留八月四日草与へ申渡候覚徳永

覚

一 爰元様子弥一途二致覚悟、普請已下無由断申付候事、
一 御兵糧事、
一 玉薬之事、
一 当郡所務申付様之事、

一 上方昨日迄之取さたの事、
以上、

八八三 魚住右衛門兵衛書状

○武内文書
大分県史料一

一 細川三斎公御書出包紙ハ書

以上

今度義統乱入被仕二付而、郡中百姓心替を仕候処ニ、其方木付之城にこもり、忠節ひるいなく候、其しるしとして、日出浦之出ふね・入ふね、其外之とい之儀申付候条、如前々、可申付事肝要候、

魚住右衛門兵衛

一月卅日慶長六年

(花押)

日出浦
惣左衛門まいる

八八四 細川忠興書状

○松井文庫

一 松井佐渡守殿 越中

尚々、彦山之事も得御意、無残所らちを明候、可心安候、以上、

急度申候、

一先書ニ内々申候木付之儀、此中、色々申上、弥相濟拝領仕極候、於其廻知行壹万石余拝領候、其様子、大方、采女・少二良ニ申付下候、口上可被聞候、誠外聞実儀満足此事候、則、木付城其方ニ預候間、早々相越、普請等似合ニ可被申付候、大方、木付廻此方之知行ニなりさうなる在所書付遣候間、被得其意、百姓ニ心付肝要候、乍去、五六日中ニ所切之割可相濟候、其次第、具、書付可下候条、借米以下之儀、牧新五・源八談合候て、今から取寄、在所之割符下次第二被借付候様ニ用意候て可被待候、但、借米ニ不及、毛も付可申候哉、才覚肝用に候事、

一先納之儀、其外人返之儀、古未進之儀、何も如存分被仰出候、乍去、^{〔東田長政〕}黒甲近日上候由候間、とてももの儀ニ相待、弥、らちを明候て可下と存候事、^{〔徳川秀忠〕}一中納言殿、明日江戸へ御下向事候、^{〔上杉〕}景勝儀者何共知不申候事、^{〔御山藩〕}一幽齋煩、弥すきと御本復之事候、可心易候事、^{〔慶長六年〕}一猶、吉事追々可申候、恐々謹言、

卯月十日 ^{〔慶長六年〕} 忠 (花押)

松井佐渡守殿

八八五 木付・立石合戦高名者回状

○松井文庫

尚々、来六日^二参津相濟候、以上、
急度申候、去年木付之夜打并立石表合戦^二一角手柄を仕

候者、来七日可被御覽候条可召寄旨被仰出候、成其意六日^二此地へ着津相待候、為其如此候、恐々謹言、

七月四日 ^{〔慶長六年〕} 佐 康之 (花押)

- 井口六兵衛殿
- 中川下野殿
- 下津半左衛門殿
- 坂本三良右衛門殿
- 杉崎作左衛門殿
- 今井惣兵衛殿
- 中川五兵衛殿
- 松井加兵衛殿
- 近藤弥十良殿
- 田中清三殿
- 上原長三良殿

八八六 立石へ動之時

木付留守番之者交名案

○松井文庫

〔^{〔源実書〕}松井新介扣書〕

立石へ動之時木付留守番之者
矢藏番者

- 早藤源右衛門
- 八田長介
- 山内与左衛門
- 小嶋弥右衛門
- 明田惣右衛門

矢野満介
萩野彦介

関 吉右衛門
やなせ甚介
上村小介
井口九介

人しち番

上川源左衛門
桜井又兵衛
萩野三介

嶋田平七

楠田勘右衛門

門番

北村弥兵衛
和田小介

同 与右衛門
森田弥兵衛

七月六日 ^{〔慶長六年〕}

右分、幸御存事二候間、

御取成奉頼候、

松井新介様參

一 島津義弘譜

天正十三年九月四日、阿蘇氏寄使書、進太刀・馬、其使者称村山美濃守者也、其書無裏付、以故執事等不受也、使者曰、先是所贈大友氏之書不為裏付、類其書如此乎、即遣矢部書裏付、再可献之也、

天正十三年九月五日、新納右衛門佐・稻富新介差一价於合志曰、合志藏人親重無異儀為下城、寄中宿於小山村云云、

同日、秋月氏・龍造寺氏・筑紫氏以使書懣祝詞、進太刀・織物等、又自覽島 太守賜而使伊集院淡路守・平田豊前守也、

天正十三年九月六日、為犯三池封疆、伊集院肥前守・山田越前守・猿渡越中守等、率宇土・隈本・大津山・和仁・辺春・小代之軍衆、進入宇津・久我、放火山下里目之辺、則江之浦・堀切之敵、難勘忍乎、然則逼秋月來豊後敵軍亦難堪、而無程可退陣乎、

天正十三年九月七日、自肥後至豊後之通路、未知其難易、由此今日遣新納武藏守赴其封疆、副以平田豊前守・柏原周防介也、

同日、使野村兵部少輔・蛟島備後守持十有一箇之条目上達覽島、是亦令伊集院淡路守・平田豊前守・所命之告返答故也、

同日、内空閑下野守鎮房為祝礼所參進、遂対面也、
天正十三年九月十日、使稻富新介達諸將曰、相良義陽於堅志田之辺響之原遂戰死者異于他也、以故立其後於求麻矣、今也称懸命地、可充行豊田於相良氏、諸將共以善焉、同日、出田助九郎有為訟訴之事曰、小子称号土地、當時為公領、請許之於吾、諸將聞此言曰、今也城入道一要抽無式之忠節、助九郎者一要之愛子、雖曰許之於渠、何妨之有乎、所以充焉也、
同日、島津中務大輔家久使吉田右衛門佐・高崎越前守通達曰、高知尾已以出所質屬旗下、不血刃矣靜謐也、且復伊集院下野守・比志島式部少輔・上原長門守・鎌田出雲守・吉利下総守等共在高知尾、各評議有言曰、豊後発向之佳期宜有此時、請其可廻籌於帷幄之中也、
同月十一日、使稻富新介報家久之使者曰、既高知尾所屬手裏、家久謀計之所致也、有孰敢比之者乎、且復豊後発向諸將衆心、無一人之有異違歟、如此則請可否於天神地祇、而後宜定進発之期也、
同日、鍋島飛騨守寄捷書曰、針目之豊後陣敗北、夜中悉以退散、於細粹者、再令一价告報也、
天正十三年九月十三日、伊集院肥前守・山田越前守・猿渡越中守・自筑後注進曰、昨日十二、襲堀切城、忽以陷之、獲敵首三百余員云云、
天正十三年九月十五日、有馬氏雖曰渡海來格、使兩輩糾遲參之故、而未遂対面也、
同日、裁数ヶ之条目、使平田豊前守・田代刑部少輔、上達覽島也、
天正十三年九月十六日、上蒲池某、憑新納武藏守有言曰、去歲以降、欲属旗下之情、無少變違、然而無目付離散之間、所以不得一封之献愚書也、又豊後州南郡之士五六輩憑阿蘇氏、有請属旗下者也、

同日、宥有馬氏遲參之罪、招旅宿進饗応、太刀・段子・酒肴持參也、
天正十三年九月十八日、使莊巖寺詣阿蘇山、拜進龍蹄、以其次曰、成滿坊與福滿坊、有島津氏争宿坊之風聞、吾能不知由緒、決定真偽可有満山衆口也、
同日、伊集院肥前守・山田越前守・猿渡越中守注進曰、江之浦城主得全身命、当去居城、其約既成之後、及領地之多少、而變其約矣、自心有悔乎、依他人密通謀乎、未知其実也、
天正十三年九月廿日、出田助九郎來、而據前日称号之地安堵礼詞、且復為官途所望、仍任宮内大輔、謝而事以太刀・刀・織筋矣、今夕招有馬氏、再進饗応也、
同月廿一日、甲斐大和守從矢部遂參向、先使一价憑稻富新介告官途所望矣、忠平報曰、心其求宜転任焉、又有馬氏請不可有後來違變之得誓紙者素矣、然而渠者尊南蛮夷狄宗旨、亡日本神祇靈妙、何界誓紙於渠乎、裁盟約書以附與之、安徳上野守亦对当家抽忠節、故界感買贖也、市來大日寺為国泰民安之修懇祈、從忠平抽精誠、今度得勝利者懇祈故乎、賞之以御船六町之内五町之寺矣、
天正十三年九月、肥筑前後州軍務既成矣、故廿二日、忠平從御船俟鷄鳴、所以為帰陣也、

同日、島津凶書頭・上井伊勢守使日州財部之大平寺到矢部阿蘇氏、曰、俾奈須氏党族安堵本領、伝称、矢部士卒、為違乱於其地、若為事実者甚以不正也、再止闕之、
天正十三年九月廿四日、奈須彈正忠以計策使家臣似商人、差豊後州郡之窺聴細大、其人來飯野曰、大友義統當時在小国堺、高墨深隍、堅弱地設城壁、封疆警衛不敢怠、且復阿蘇氏大臣甲斐大和守親英從八代未帰宿、帰宿則為評議、可致一行云尔、使大和守留八代、不許帰宅者可乎、副飯野之士、遣八代之地、謀之於臧者也、

天正十三年九月廿五日、忠長・覺兼等、使新納縫殿助・稻富新介・柏原周防介達甲斐大和守親英曰、阿蘇氏屬旗下、殆乎將迄靜謐矣、然而頃有彼此告來者、大友義統在小国辺地、廻計策於四方之最中也、阿蘇氏雖為幼雅、以親英之計略補公私云尔、丁此之時也、可在八代、而不帰焉、親英請帰者再三、然而不可背薩摩下知之旨、既有誓紙、何今變乎、伏其理赴八代矣、新納縫殿助・伊地知民部大輔及蒲生之士卒所以警衛也、甲斐長運・野尻某亦同赴八代矣、

同日、於隈莊戰場修大施餓鬼、福昌寺大和尚燒香也、新納武藏守・有馬筑前守沙汰之也、

天正十三年九月廿九日、新納右衛門佐、從堀切贈書簡於在肥後之執事曰、去廿六日、到着彼地、而達旨趣矣、筑紫氏陷宝満・立花、由是高良・北野之豊後陣亦退散矣、即與返書於使、且復使大寺大炊助赴其地、達諸士軍勞、又山下守兵江之浦・堀切等謀之於臧云尔、

天正十三年九月晦日、阿蘇氏之有司等贈書於在御船之執事等曰、甲斐大和守遂出頭、匪甞不許帰、且復所居渠於八代、由是弟右京亮遂電在野尻肥後内也、

天正十三年十月朔日、隈部但馬守注進在御船之諸將曰、山下已入手裏、而守兵未入来云云、秋月氏・龍造寺氏・筑紫氏依軍勞有勝利也、上井伊勢守等差使僧、摠札詞於三十以下云云、

二 新納忠元勳功記

一天正十四戊正月七日、右三付忠元市来下総守与家来立本玄蕃等召列大口打立、九日、三船江參着、則致手分家来式人を坂梨江遣、新納四郎左衛門忠秀入道、大口

衆有村隼人忠正・蘭田丹後守等を矢部へ遣、野心之者共何れも加成敗、其時野尻城ニ陰謀之聞得有之、新納慶雲与有村隼人を差遣、城主之親類を人質に取置、左候而此月廿三日、高森城可攻崩口取吟味之節、伯圍様御日柄不宜与為申人も御座候由、然共、伯圍様三者、誠ニ軍神御座候付、却而御擁護こそ可有之与、忠元亦申論、終ニ其日ニ致決定、為被攻取由御座候、

一同年十月、大友家之儀、此前三者伊東方救として、日州高城を取囲ミ却而及敗北、今又、大闇に訴へ、其力を借り薩摩江可討入企被仕由、就而者被滅置可然与之御吟味中ニ、豊後住人入田丹後入道宗和・志賀入道道益等近隣之士、被致催促此御方江頼上、却而怨を大友方へ相報度所存有之由、八代住人蓑田信濃守・高橋駿河守等、此御方へ御注進申上、貫明様御感悦思召、

則忠元へ何卒可廻智計旨被仰付、直ニ仙鏡坊与申山伏を、入田城ニ差遣、一先聞合させ、其後忠元家来中馬源之丞与三船住人勘丞与申者を右之城中ニ差遣、猶又令探聞之、自彼方も吉良甲斐守与河南勘解由とを八代まで差遣、忠元取成ニて、松齡様へ御目見迄被仰付、

左候上、猶木右京亮与家来中馬源之丞を志賀城ニ遣、右之実否を聞合為仕、自彼方も大塚右馬介・新野新助を差上、弥御奉公可仕旨申上、盟約之證状等被取替、

左候得共、入田方夫程真実之手形見得兼候ニ付、又候大口衆有村隼人佐忠正に、檢使平田豊前守宗祇・濱田民部左衛門経重を被差添、入田城ニ被遣、其上、松齡様より忠元江被仰付、兵道之作法共執行ひ、野村與三右衛門与忠元家来尾崎彦兵衛・中馬源之丞を志賀城ニ

差遣、右秘法之針を為埋置、左候而此月中旬、貫明様八ヶ国之大軍を被為催置、豊後江御発向、松齡様・中書様先陣之將として、肥後与日向与兩路より御討入、

忠元儀者、松齡様ニ相付、肥後路より豊後之南郡へ致乱入候処、志賀・入田之両氏も千余之兵を召列内応仕候間、此等を案内として、同十二月廿一日、高城を攻取珍珠表に打入、其比忠元筋気差起候故、次男弥太右衛門忠増に人数相付、平田豊前守宗祇等与先ニ為致進發候処、権現城・城ヶ尾・那女利城等に押寄せ、皆為攻取由、今一手者、大口衆有村隼人忠正に人数三拾六人相付、房ヶ畑城・舟ヶ比良城に押寄せ、皆共攻取、小島刑部左衛門等戦死仕、此手も四五ヶ所為攻取由、左候而房ヶ畑者隼人江在番為仕置、其年者貫明様茂於日州塩見城野山、御超歳、松齡様者朽網城、中書様者府内ニ而新年為被為迎由御座候、

三 新納忠元譜

忠元遣忠増率兵及平田豊前守宗祇等俱往攻、権現城・城ヶ尾城・菜飯城等皆陥之、此行忠元遣有村隼人忠正率大口士三十六人、襲房箇畑城、舟箇平城等四五城取之、小島刑部左衛門死之、乃使忠正戌房ヶ畑城、土人謀伐成衆忠正隊、卒内田某・紫村某・山元某・池田某等十八人死之、

四 殉国名籤

天正十四年丙戌

三月二十七日、伊地知藏人重増豊後の坂梨にて、戦死、年四十二、七月六日、川上左京亮忠堅筑紫上野介廣門か鷹取城を攻めらる時奮進て戦死、年二十九歳、田筑前守政心・上野隼人佑忠元九歳、脇元城之助忠隣、福

崎左近北郷忠

十八日、赤城源助源太左衛門重賢弟也、筑前岩屋城戦死とあり、廿七日の説歟

廿七日、喜入掃部助久親高橋紹運か筑前岩屋城を攻らるる時力戦して死之、年二十四歳、伊集院左近將監近允、伊集院宮内左衛門忠連或作久景、伊集院弥左衛門久兼祿重、張臣、白濱源左衛門重葉加賀守重頼ノ子、鎌田長門守攻基・

葦田弥四郎八代、住人、矢上太郎五郎五作、或作四、有馬源左衛門・宮原

越中守或為忠、長臣、宮原伯耆守忠長、山元助六上、同、森助七同上、或作七、

崎土佐介同、鎌田源左衛門兼政石打二、逢死す、敷根民部少輔石打二、

長山兵部少輔石打二、野村主水佑知綱、年廿七とあり、唐仁原藤七兵衛石打二死す、

関治部少輔宮崎、野村左近將監宮崎、黒

江萬介宮崎、丸田山之丞上井寛、楯持一人上、佐多紀伊介忠辰、年四十三、子孫、川野筑後守通泰、年六、藤見長介、清武、伊集院

作州内二、遠矢軍兵衛高城、山田越前内衆、川崎大膳亮高山士、加藤大学助福嶋、伊東與右衛門朝久深見次郎右衛門上、南郷治部少輔忠永・毛利助太郎、養女正、四本彦兵衛忠次、初半、川島縫殿助忠虎、星山九左衛門あり、此に誤考、村山市助張の家臣にて、伊集院久兼と共に、若松助安・長谷道寿・税所筑前・霧

籠田英金・馬場四郎左衛門・上妻若狭家方種子嶋氏臣、岩下五人、布施三助・上里肥前・梶原主水・岩元正嘉・岩本強八以上種子嶋

此日前田兵部左衛門尉兼政あり、戰場誤歟、飲肥にて戦死と

十月、田中筑前中書家久臣、豊、赤坂源七左衛門、利満城にて戦死

廿一日、津曲玄蕃頭兼詮北郷忠虎臣にて、豊後南部の、前田弥四郎国実、或前原とも、四或作七、亦吉田某、南郡に、忠虎臣にて同じく戦死、吉田某戦死也、

十一月五日、濱田大炊助豊後入の、時戦死

十二月、遠矢信濃守良時高津忠隣後見として、豊後御陣に、従軍、竹田駄原に戦死、年五十二、

十二月六日、寺師筑後守宗重十一、子孫大口の士也、

七日、新納勘解由次官忠家豊後後光城にて鉄丸に当り死す、所、被の甲冑今尚存す、子孫大口にあり、

八日、本田治部左衛門戸次城下、にて戦死

十二日、橋口弥市郎兼元利満城にて戦死

十三日、鬼塚藏之介秀俊豊後に戦死とあり、

此年月日、不詳、志和地治部少輔忠繩・原豊前以上二人北郷家臣にて、豊後陣に戦死とあり、皿良善助貞行大友合戦討死とあり、有村隼人房ヶ畑城にて主従、以下四人も同じく戦死、都合内田某・柴村某・山元某・池田某、以上二十二人戦死とあり、内田某・柴村某・山元某・池田某以上衆なる、山田右京亮久俊、船川に、遠矢信濃良時、竹田駄原城にて、

萩原出雲豊後に戦死、萩原源介兼肆出雲子なり、父子戦死、小島刑部左衛門、豊後房ヶ畑に有村隼人忍ひの時、

治豊後戦死と、有川藤七兵衛貞朝の子也、上原五郎四郎久

此年冬、古市與三左衛門実政・羽生右衛門能春・岩本大

五郎以上三人皆筑州三重城に於て戦死とあり、皆種子嶋氏臣也、

五 筑前岩屋城合戦従軍者交名

天正十四年六月十三日、筑紫上野介廣門を攻させらるる時、八代迄打入玉ふ、

大守義久主 義弘主 『○』左衛門尉歳久
中務太輔家久 薩摩守義虎

『△』伊集院右衛門太夫忠棟 伊集院下野守『久治』
伊集院肥前守『久春』 喜入撰津守『季久』
吉利山城守 上井伊勢守『寛兼』
鎌田少外記 鎌田出雲守『政近』
山田越前守『有信』 本田因幡守『正親事力』
上原長門守『高近』 税所新介
宮原左近將監『景晴』 稲留新助『長泰入道閑栖』
遠矢信濃守 『△』梅北宮内左衛門尉

『七月六日筑紫城九占ニテ』『深手負』
『〇』川上左京亮『忠堅十四年七月六日戦死』

同年七月廿七日、岩屋城攻二重勞、

久留撰津介久留木トモ作ル、痛手負、山田越前守痛手負、

上井伊勢守寛兼、宮原左近將監全、

新納右衛門佐久饒時年三十九歳、

長谷場兵部少輔孝純太刀始、向江吉左衛門純駒宮内左衛門トモ、脇太刀初、

新納縫殿助久時時年三十九歳、

中島右衛門尉重統脇太刀、井牟田宮内三郎親綱手負、

的場五藤兵衛手負、新納藤四郎十六歳、

八代住人、

肝付彈正忠兼寛久時子、

十四年十月廿一日、阿蘇之内南郷・野尻肥後表より被

打出、

御大将兵庫頭様 『○』左衛門尉歳久

右馬頭 図書頭忠長、

『△』伊集院右衛門太夫忠棟、町田出羽守久倍、

川上上野守 新納武藏守忠元、

天正十四年十月、義久主日向口へ発向シ玉ふ、同十二

月、大友義棟・千石権兵衛と歳満合戦軍、中務太輔家久 図書頭忠長

豊後守久親天正十四年、豊後入二騎馬御供、長谷場織部介純辰嫡子、

十月、丹生の島二戦ふ、

『○』伊地知丹後守重政、天正十五年、豊後野津戦死、同子新三郎

『○』濱田民部左衛門尉経重、殉死、天正十四年、豊後白杉三而、敵七人打也、濱田主水重昌、

肥後口の大將二八、

兵庫頭忠平主 『○』左衛門尉歳久

薩摩守義虎

八代在番、

右馬頭幸久天正十四年十月、豊後入中書御供、

坂二忍ノ御使者ニ差越密事相達無難帰國豊後入前、彼国志賀播ノ守力管ノ迫ノ、

坂二忍ノ御使者ニ差越密事相達無難帰國豊後入前、彼国志賀播ノ守力管ノ迫ノ、

坂二忍ノ御使者ニ差越密事相達無難帰國豊後入前、彼国志賀播ノ守力管ノ迫ノ、

坂二忍ノ御使者ニ差越密事相達無難帰國豊後入前、彼国志賀播ノ守力管ノ迫ノ、

坂二忍ノ御使者ニ差越密事相達無難帰國豊後入前、彼国志賀播ノ守力管ノ迫ノ、

坂二忍ノ御使者ニ差越密事相達無難帰國豊後入前、彼国志賀播ノ守力管ノ迫ノ、

坂二忍ノ御使者ニ差越密事相達無難帰國豊後入前、彼国志賀播ノ守力管ノ迫ノ、

坂二忍ノ御使者ニ差越密事相達無難帰國豊後入前、彼国志賀播ノ守力管ノ迫ノ、

坂二忍ノ御使者ニ差越密事相達無難帰國豊後入前、彼国志賀播ノ守力管ノ迫ノ、

坂二忍ノ御使者ニ差越密事相達無難帰國豊後入前、彼国志賀播ノ守力管ノ迫ノ、

玖珠表^二打入衆^一、^{〔新納四郎左衛門忠秀入道慶雲〕}

川上上野守^{〔忠亮〕}

町田出羽守^{〔久倍〕}

新納武藏守^{〔忠元〕}

^{〔〇十五年夏、御引陣ノ節後殿、且坂無岡ノ陣打破候時、先登いたし手負〕}
^{〔新納四郎左衛門忠秀入道慶雲〕}

六 大口士濱川西市丞覺書

天正十四年七月七日ニ、筑紫岩屋之城を責落、人体ニ
しうわん様^{〔宗義〕}、城内衆八万余騎打取被成候由成、其外九
ヶ国之分の大名・小名皆々薩摩御旗下ニ罷成候故、大
勢共中々無申限之由也、御家記ニ有之、あらく書写
置也、

一天正十四年春之比、大友之宗林上洛して、関白へ木々ハ
日向已来も嶋津殿分ほそめられ無念也、肥後・肥前・
筑後・筑前も薩摩分押とられ、無念之至と存候、関白
様を奉頼而、大友之家を残し被下候様ニと訴訟被申上
候ニ付、御領掌被成候、其折節薩摩分爲御使、鎌田刑
部左殿都へ御上せ被成、九州之御使被成、関白様分も
薩摩大隅其外ニ肥後半国・筑後半国・日向半国嶋津殿
へ御給之由也、日向半国ハ伊東殿、豊後・肥前半国は
大友殿、肥後半国ハ毛利殿へ遣したまふへし、筑前一
国は関白様御領地たるへしと被仰下ける折節、筑前之
岩屋江^{〔江〕}打出かけたまふ、此岩屋の儀いまた都に不聞得
内に黒田殿・千石殿九州国わけとして下たまふ、千石
殿ハ豊後へ押渡、大友殿同心ニて豊後へ越給ふ、黒田
殿ハ中国之毛州殿同心にて、豊前へ着給ふて、国わり
の暖なをし給わんと相談被成処、薩摩分ハ岩屋の陳
を引、城井・長野・秋月・高橋など薩摩方にて可被成、
いまた吉仰御下ニ参たるニ付、其ま、御陳めされ、薩

摩衆ハ肥後口、右之衆ハ日向口、両方分はや両郡へ打
入、豊後半国打破之由申けれハ、其時千石殿・大友殿
ハ豊後之ことく引返しけり、其外軍衆も驚、早馬ニ而
皆々引せたまひけれ共、黒田殿ハ豊前へおわします、

大友・吉宗・千石殿ハ府内之上之原ニ陳取かまへ、薩
摩衆よせ来るを被待ける、然処ニ十二月十三日ニ、家
久としみやへ陳取御座す、千石殿ハけちらかし給わん
とよせ来りたり、家久を始として、薩摩衆かけ合軍め
され、千石殿はいほく、長宗我部殿兩人衆之内、一千
余騎打取被成、千石殿漸命計をたすかり給ふ、此由都
へ聞得、関白様残念に被思召、嶋津殿ハ国わけをそむ
き、筑前へ打出、岩屋などをせめ崩、豊後と一和之由
被仰越もそむき、剩千石か軍衆も数多討果し、遺恨の
後ニハ都へあたをなす事治定也、只自身発足してせめ
んと儀定ましまして、追付都を立給ふ、無程関の戸に
着給ふ、薩摩衆ハ十二月十三日ニ野神を立被成也、肥
後・豊後旗下の衆も皆々心替候へとも、皆々切崩て肥
後口・日向口を退給ふ、関白様御弟中納言殿ハ廿万騎
引つれ、豊後へ打入給ふ、薩摩衆者日向の様ニ引退之
由被聞召、追付日向之高城・財部へ五十一の大陳を付
させ給ふ、義久様・義弘様ハ都の城へ籠、大隅・薩摩
の軍衆の参事を待給ふ内ニ、京陳ハ取かため、京かた
弥の増重なり、玉葉など用意しけれハ輒亡し給ふ事な
らす、然共一陳崩候てとあり、稲葉せしやう坊か陳に
打寄被成候へは、敵陳つよく成故、薩摩の軍衆ハ退給
ひかうさんし給ふ也、此事天正十五年の四月なり、

七 島津義久譜

天正十四年九月廿八日、土持氏自隰至宮崎、贈簡書於上
井伊勢守曰、千斛権兵衛尉自四国渡豊後來、又豊後士卒
少々發出、当日在于宇目村舍、又自高知尾至佐土原有注
進、豊後士卒有欲攻入田氏居城之聞矣、

義久欲退治豊後州之企有其故、曰、大友氏所積怨於我国
之憤無所欲止、夫薩隅日三州者、正二位右大将頼朝卿以
降所領知之地也、以故撫恤憐国、安堵四民、遐邇貴賤無
不來附、庶乎不失以大事小之礼、然而日向州伊東氏背我
為敵、屢狂我之土地、拳所救乱誅暴之義兵討之、渠之軍
衆已敗乘死之際、僅遁出奔于豊後州矣、於茲乎、大友氏
欲救伊東氏遷之於故郷也、先是天正六年戊寅之冬、率太
軍來圍我之日州新納院高城、然而失利於一戰、悉以敗北
大半亡其軍矣、今也不止其憤、反聞薩摩退治之免於有請
関白秀吉公矣、吾熟思之、先渠之計策、以不誅伐之者、
豈異坐而待亡乎哉、遂欲催発軍衆之際、肥後八代之土藁
田信濃守・高橋駿河守馳一价曰、豊後州入田宗和・志賀
道益^{〔道益〕}背大友氏属薩摩方欲致忠功、其故何哉、道益者宗麟
之婿、而背宗麟之心將迄切腹、仍一門中為評議請有免、
而不許焉、不得已而去居城、憑志賀播磨守入管迫城、入
田宗果亦不合宗麟之心、殆乎庶幾切腹、因茲属薩摩之旗
下有欲報怨之深念^{云々}、義久聞此之事、以為所天之界我
之指南也、乃召新納武藏守忠元曰、宜廻豊後退治計策、
忠元承諾、即使仙鏡房往入田宗果之城問所背大友氏之故、
而後俾御舟之卒勘丞及忠元之陪臣中馬源丞者彼城之試実
事細大、又使濱田民部左衛門尉・山口大藏助往菅迫城、
問道易所背宗麟之故、此時道易・播磨守相共議、以見岡
之城於兩使、而令赴歸路也、於茲乎、入田氏差吉良甲斐
守・阿南勘解由次官於八代、見兵庫頭義珠也、其後義珍
遺榎木右京亮・中馬源丞往志賀氏之城問真偽窺実否、于
時俾大塚右馬助・新野新介者達降薩摩之故、因茲遣野村

与三右衛門尉及忠元之陪臣尾崎彦兵衛尉・中馬源丞等於志賀氏之城、納兵道密法之針於其城矣、

天正十四年十月八日、土持氏自泉差使僧於宮崎、謂上井伊勢守曰、我之領內有矢野內藏助者、去四日志賀道輝通于內藏助曰、土持殿先年遺恨有所難止之者乎、不問可知、然而今度有京都之加勢、而為天下之鬪戰、則廻思慮止憤懣可乎、以此言問伊勢守、伊勢守報曰、先隨渠之所言、

豐後模樣京都加勢已下各可細密尋問者可乎、此使僧亦言、千斛權兵衛尉率二百騎許來在高崎邊、長宗我部氏率二百騎許在丹生島、相從士卒不帶兵器、宛不異商人也、

天正十四年十月、兵庫頭義珍為大將率軍衆、發於肥後州向於豐後州、相從將等弟左衛門督歲久・同三郎次郎忠隣・島津右馬頭征久・同姓凶書頭忠長・川上上野介久信・新納武藏守忠元・同姓縫殿助久時・北郷讚岐守忠虎・樺山兵部太輔規久・伊集院右衛門大夫忠棟・同姓肥前守久春・同姓筑前守・鎌田尾張守政年入道而稱管稱・同姓出雲守政近・川上左近將監久辰・平田新右衛門尉・大寺大炊助・白濱周防守・宮原筑前守・町田出羽守久倍・肝付

彈正忠兼寬・敷根藤左衛門尉・大野七郎久高・伊勢弥九郎貞昌以下騎步（一本マ）三萬七百餘騎討入南郡、同十月廿一日、到乎阿蘇郡野尻設乎陣柵、同廿二日、陷高城之時、獲數十之敵首也、其中強敵一人伊勢弥九郎得之、實年十七也、義珍感褒不鮮矣、入田宗和・志賀道益素合心於薩摩、而待軍衆之到來、如大旱之望雲霓、丁此之時、宗和・道益引率從卒一千有餘來為指南、是以乘夜入宗和之城、松尾墨及烏嶽城皆陷走矣、其後進津箇牟礼、城主戸次撰津守統貞入道源珊者也、同廿四日、圍其城、宗和・道益以籌策源珊下城、則義珍入彼城、道益之老父道輝與道益之子小左衛門尉親次者、拋岡城称病龜縮、其地嶮峻、且有大河之不可徒渡者、以故評議未決之際、義珍之步卒乘夜密

進登其城、敵兵何不知乎、當追來時超壁、而欲遁去不能、忽落于城隍死矣、道輝者入田宗和・赤星備中守之親戚也、是以差使節誘出質為和平、道輝依其言、所以粗忘諾也、

弟中務大輔家久為日向口大將、天正十四年十月十四日、進發於佐土原、自泉封疆向豐後州、所相隨輩上井伊勢守覺兼・吉利下總守忠澄・土持左馬頭・山田越前守有信・伊集院下野守久治、同姓美作守・本田下野守親貞・樺山安藝守忠助已下一万余騎、踰越梓山討入三重、教吉利縫殿助為矢谷、三十四歲、本性、撰本性故如斯而後近郷諸墨村舍悉放火去、而後伊集院下野守・同姓美作守・本田下野守・上井伊勢守領軍衆振武威、而陷結方城、則家久屯陣於盤東寺、使前鋒掃退進來強敵、豐後半国已攻平也、

義久有祭地祇、其齋既終、則十月十八日、率軍衆發首途、其夜占一宿於脇本、而赴日州之封疆三城、塩見・門川、在日知屋在於塩見矣、

八 北郷忠虎譜

同十四年十月十日、自府內至豊前境置警衛之將、於此忠虎拔於肱、矢藏兩城、從軍戰死者許多也、同月二十一日、忠虎・三久為 兵庫頭義弘公之從軍攻入南郡、丁陷烏嶽城之時、先陣瑠瑣之兵其次兄弟、率軍登城内屋上鷹軍、指揮斬獲夥、此時忠虎家臣津曲玄番兼詮・前原弥七郎国実戰死、

九 北郷三久譜

天正十四年丙戌、豊後發向之時、與兄忠虎俱十月十日發

於莊內到於肥後、 兵庫頭義珍公之為從軍攻入南郡、丁陷烏嶽城之時、先陣球麻之兵其兄弟、率軍登城内屋上鷹軍、而指揮斬獲敵兵、

一〇 島津義久譜

先是使文之和尚・鎌田刑部左衛門尉許九州於 殿下秀吉公、公報曰、可為大隅薩摩日向及肥後半国・筑後半国・豊前半国島津氏領知、豊前・筑後・肥後各半国加豊後界大友氏、肥前一国賜中国毛利氏、筑前一国可為 公領也、其令已定、則而使未辭京師之際、達捷書於薩摩矣、聞此之言深憤曰、九州悉以為島津氏土地則可乎、不然兵革不可敢止、乃增益軍威修鍊干戈、丁此之時、小寺官兵衛田也・仙石權兵衛尉・中国毛利氏等所以分割国郡之奉重任、而下向鎮西也、仙石氏渡豊後來赴豊前矣、小寺氏與毛利氏同渡豊前、各欲行分国之令、而筑前城井氏・長野氏・秋月氏・高橋氏等深屬薩摩方不可也、此間薩摩方之太軍鳴鼙鼓如雷電逼迫豊後、殆乎已破却半国矣、於茲乎、大友左衛門尉義鎮入道宗麟・同左兵衛尉義統聞此變事、則周章驚躁魂魄飛散、自豊前歸豊後欲防禦、而忘其道矣、漸而築一陳於府內上原、俟敵兵進來而已、

一一 島津義久譜

称利滿（利光）墨者去府內不遐遠、家久率軍來攻彼城、即日城下悉以破却、而唯本城未陷、然而所圍堅密不進攻不退去、徒俟京勢之所以競來為後責矣、於此之時、十二月十三日、大友左兵衛尉義統・仙石權兵衛尉與土佐之長宗我部弥三

郎・秦信親・讚岐之十川軍人佐政泰・尾藤甚右衛門尉等

率大軍來、欲侵家久之利滿陣、吾軍潛隱城麓林間、而待

敵兵渡川流進來接兵刃之有佳期、漸已悉洛川將通城中、

以此之時為得佳期、發出我之軍衆對之合戰散火、初也京

勢勇氣宛似穿鉄壁、終也匪雷周章捨兵器競先敗走、不測

川流淺深、涵溺所以死去之者未知幾多、豈異落葉之浮山

川隨下流乎、于時斬戮秦言親・政泰、大友左兵衛尉・仙

石權兵衛尉・尾藤甚右衛門尉此尾藤氏、殿下退治北条氏、且

而出頭矣、殿下戮之等惜微命以北去矣、而況於步卒乎、

於相州小田原之地云云、而況於步卒乎、

高田者限於里門、府内者限於祇園川原、追亡逐北而伏屍

矣、就中京兵之敗宛如湯于雪、實非筆舌之所得而伸、吾

軍乘勝、其夜以称延岡之地構一陣、燒篝火發鬨音也、雪

月霏交薄雪、冒戎衣、手足共以冰寒、然而唯有勝軍之勇、

無一人之屈寒氣者、義統懼薩摩軍衆之陷居城也、翌夜委

府内退高崎、即日家久入府内、則義統此地亦不得支、而

又去高崎奔走乎豊前龍王也、未知仙石氏之保露命、在何

地焉、

天正十四年十二月廿二日、義珍入志賀道易居城、則白仁

之志賀道運亦降參矣、一万田・滑・瀧田城皆以陷焉、同

廿四日、換陣於朽網城、而越年於此地也、

志賀播磨守属薩摩旗下、因茲息男左馬助兄弟称質出焉、

預置之於櫛木右京亮矣、大友左兵衛督義統命于岡之城守、

天正十五年丁亥正月七日夜中、發遣多勢於阿蘇、围左馬

助之居处右京亮之宅、右京之士卒二三百人對之防禦尽筋

力之際、右京之同姓三九郎左馬助之被官田代藤左衛門尉

遂戰死、且被傷者多矣、不得以無勢禦有勢、退于坂無之

近隣、而後右京亮使廣瀬惡左衛門者告件事於菅迫城也、

播摩守聞此事、則與当城守将伊集院三河守・犬童休意俱

議、而設伏兵於敵軍歸路、忽得勝利斬敵首者七十三員、

其外虜者牛馬共二百有余、於此戰場球麻之士犬童又十郎

敵將对戸高兵右衛門尉戰死、被傷者不違記之也、

一一一 島津義弘譜

伊東氏在日向州御家人中而匪雷守護之背教令、且恣暴虐、

島津氏之為寇敵者尚矣、丁 太守修理大夫義久公之世、

弥逼我有土、由此運籌策漸漸犯敵地、天正五年丁丑季冬、

率軍衆迫渠党徒、一壘已陷、則諸壘共不得支、義祐逃去

豐後矣、豐後太守大友氏流涎於伊東氏之旧地、謂再入伊

東氏於故郷、天正六年戊寅孟冬、率豐肥筑前後六州之大

軍來、围我日州高城、未嘗有勝利、反会敗北失騎步大半

之凶矣、島津氏雖得大利、惡渠之不正其憤未敢止之際、

依 織田上総介信長卿之命、緩其情止鋒楯既成和平矣、

雖然大友氏動侵島津氏所領肥後・日向封疆者孰不知之

乎、此歲天正十四年丙戌冬之孟、義珍為大將自肥後向豊

後、相從副將・騎將、島津左衛門督歳久・同三郎次郎忠

隣・同姓右馬頭征久・同姓凶書頭忠長・川上上野介久

信・新納武藏守忠元・同姓縫殿助久時・北郷讚岐守忠

虎・樺山兵部大輔規久・伊集院右衛門大夫忠棟・同姓肥

前守久春・同姓筑前守・鎌田尾張守政年入道名管橋、同姓出雲

守政近・川上左近將監久辰・平田新右衛門尉・大寺大炊

助・白濱周防守・宮原筑前守・町田出羽守久倍・肝付彈

正忠兼寛・敷根藤左衛門尉・大野權左衛門尉久高・伊勢

弥九郎貞昌都合其勢三万七百余騎、自肥後之道路入豊後

之南郡、十月廿一日、到于阿蘇郡野尻設陣柵也、同廿二日、

攻高城而獲敵首者數十、城亦乃陷矣、于時貞昌斬強敵一

人、今也十七歲而有此勇猛、諸將無不感者矣、入田宗和・

志賀道益素帰心於薩摩、而待発向之不早、宛如大旱之望

雲霓、以故宗和・道益引卒一千有余從兵迎來途中、而為

指南矣、是以乘夜暗入宗和之居城、則松尾及烏嶽之城皆

放火委而退去矣、翌日迫于片加世田城無程入手裏、柏瀬

城入置守兵也、一万田・鎧嶽兩城共降參矣、久多見城亦

入手裏、故人其城留滯之際、滑・瀧田兩城陷焉、津箇牟

礼城主戸次撰津守統貞入道源珊者未属旗下也、

天正十四年十月廿四日、諸將進津箇牟礼困其城、宗和・

道益廻籌策使源珊下城、則義珍入津箇牟礼城也、道益嫡

子道輝・其子小左衛門親次拋岡城称病龜縮矣、其地嶮

峻、且有大河之不可徒渡者、是以未決其城陷與有評議之

際、義珍執鞭之士乘夜暗密進登其城、則敵兵怪以追欲屠

殺之、退去超壁欲逃不能、而忽落于城隍死畢、道輝者入

田宗和・赤星備中守之親戚也、故遣价使曰、早可出質属

薩摩旗下焉、道輝聞其言粗相応矣、

島津中務大輔家久為大將、山田越前守有信・吉利下総

守・土持左馬權頭・伊集院下野守久治・同姓美作守・本

田下野守親貞・上井伊勢守竟兼為副將、領一万余騎自日

向封疆躡梓山入三重、近郷諸壘村舍悉放火去、而陷緒方

城以設陣柵於盤東寺、使前鋒弘除進向敵兵、通价使於南

郡決評議、而後家久之隨兵警固三重・年滿、義珍之從軍

鎮護鎧嶽台城矣、

先是 太守義久公使文之和尚・鎌田刑部左衛門尉訴九州

於 殿下秀吉公、公曰、聞九州過半入島津氏手裏、今也

可去與肥後・豊前各半国・筑後一國於大友氏、又去肥前

一國於毛利氏、可為筑前一國於公領、此外可許島津氏、

宜容此言速為和平、然則去歲七月以前、刑部左衛門尉再

可參洛、否則秀吉自將七月可発向云云、薩摩諸將聞此言、

有言曰、九州之地不漏寸土属我太守可乎、不然則兵革豈

可停乎、增益軍威修練干戈、所以破却豊後半国也、丁此

之時、小寺官兵衛尉後号黒田称如水也、仙石權兵衛尉・中国之毛利

氏、奉分割国郡之言下向鎮西、仙石氏渡豊後而赴豊前、

小寺氏・毛利氏同渡豊前欲行分国之令、而筑前州之士城井氏・長野氏・秋月氏・高橋氏等心服於薩摩、而不容於小寺氏・仙石氏之言、薩摩諸將弥增勇氣矣、大友左衛門尉義鎮魂魄飛散、身體驚躁不知所防禦之道、而與仙石氏俱來於豊前、而議構陣於府内上原之地矣、

十二月十二日、大友義鎮・仙石權兵衛尉・土佐州之長宗我部弥三郎・秦信親・讚岐州之十河隼人佐政泰・尾藤甚右衛門尉等率太軍到年滿、前光侵中務大輔家久之陣、当兵刃已接之時、屠殺秦信親・政泰、則敵軍敗、而仙石氏・尾藤氏等纔保微命分散不知其所之、而況於步卒乎、追亡逐北伏屍者不知幾百千也、義鎮退去雖曰入府内城、家久乘勝利振猛威、義鎮痛懼其勇氣也、不為一戰去府内城遁高崎城、以故家久不血刃入府内城、弥輝軍威、義鎮不得暫支、又去高崎城出奔豊前州龍王矣、

義珍在津箇牟礼城之際、三重軍衆得勝利、聞入府内之幸事、則我之諸將半曰、速到于府内、半曰、往于府内、則南郡如之何乎、且復秋月三郎種実有俾价使馳以為懇^懇、曰、所冀早發向玖珠郡、放火遠近悉以破却、則匪番秋月氏幸事、高橋氏亦不去領地、可遣卑家於子孫云尔、義珍聞衆議三様、而未得先後之定方所、又招諸將欲決可否、而群議区區而不能也、於茲乎、質所疑于神靈、而依著靈十二月廿二日、入道益之居城、則白仁之志賀道運亦降參也、一万田・滑・瀧田之城共以陷焉、岡城主志賀氏称虚病不出頭、然而先以措之、十二月廿四日、換陣於朽網也、

一三 島津中務大輔家久譚

豊後州之太守大友左衛門尉義鎮積怨於我國者多矣、我之太守積累遺恨無所欲散、由是天正十四年丙戌十月、催日

向大隅薩摩肥後筑後已下所領之軍衆、赴于豊後、兵庫頭義珍主領三万七百余騎、自肥後封疆發向南郡、家久領一万余騎、踰梓山之險路、其山下佐伯之内有古壘、攻之忽以陷焉、而入三重欲陷松尾城、爰三重市人有称紹把者、子孫一族繁茂、滿金銀珠玉於倉廩、積米錢財器於宅中、嘗聞国郡貴賤士卒大半忠渠之言、是以先是家臣卒將使長田播磨・田中筑前為白浪往三重壳馬駒、丁此時也、兩輩時々入紹把之宅漸為知音、而後密語曰、若我太守運逼当国之謀有發軍衆、則卒一族家臣呼播磨・筑前、而速迎來、作數箇榜木以界之、堅盟約期後來、而兩輩婦去矣、今度欲攻松尾城、則紹把卒一族子孫家臣已下、簞食壺漿以迎我師、故不勞而入手裡也、其後陷小牧・野津兩城、爰丹生島者大友左兵衛尉義統居城、而柴田入道レイ能在于此、岡之城主志賀小左衛門尉親次、父子入道道輝共未降旗下、而為通路之障、是以遣甲斐石京亮及高知尾土卒・予之臣等守小牧城也、府内近所有称利滿之城欲陷之、而卒多勢進城下外郭已以破却、此時家臣田中筑前遂戰死矣、我軍不去城下者一兩日、城裏宛如籠鳥、故敵兵窮困、而無兵術請和出質、移時刻之際、十二月十二日、大友左衛門尉義鎮・仙石權兵衛尉・土州長宗我部弥三郎・秦信親・讚州十川隼人佐政泰及尾藤甚右衛門尉已下欲為我軍陣之後攻、引卒大軍鳴鼓鎗來矣、我陣不發一言潛于林間宛以無人、故敵兵爭先以渡大河將入城中、悉待所渡川之佳期、指揮我之軍衆發於林間、对太軍以競戰、初也上方之兵有不可当之勢、終也無一人之接干戈者、不顧瀕瀕任足敗走、或溺死川流、或脱甲冑捨兵器踊去、追亡逐北、高田者限里門、府内者限祇園川原、伏屍者不知幾百千也、此時討殺秦信親・政泰・則仙石・尾藤兩輩纔保微命逃散不知其所之、其夜府内近所有称延岡古壘、入其壘燒篝火、終夜吐氣、雲交薄雪滌甲冑寒身体、而乘勝不屑勇氣有余、義

鎮聞剛声懼威也、其夜捨府内退高崎矣、家久不血刃、而同十三日入府内、則義鎮去高崎、而向豊前龍王以奔走也、如此聞彼此之勝声、則朽網某亦降于義珍主之旗下、故義珍主替陣於球珠日田、家久越年於府内、迎東皇於異郷揚霞盃祝万歳矣、

一四 樺山忠助譚

天正十四年丙戌十月十五日、催薩摩大隅肥後軍衆發向于豊後也、肥後口之大將者、兵庫頭義弘主、率三万七百余騎攻入南郡、日州口大將者中務大輔家久主、率一万余騎討入于三重也、忠助者為家久之從軍矣、南郡者岡之城、三重者丹生之島城、唯依地利所以警固者亦不緩、故不得陷耳、夫豊後半国已敗矣、是以大友不可敵于我兵、兼慮知之乎、請救於將軍家秀吉公、秀吉公応諾、而仙石權兵衛尉・土佐国守長宗我部右衛三郎・十川隼人佐政泰為大将、有著于豊後府内之聞、府内近辺有称利滿之城、家久主為大将攻件城、已破下柁、只上城警固不緩、吾軍敢未退、俟京勢之到而為後圍、于時大友左衛門尉義鎮・仙石權兵衛尉・長宗我部右衛門三郎・十川隼人佐等襲來、而欲利滿之為後圍、吾軍隱城籠之數陰、漸敵勢渡川以通城裏之時為佳期、而各発向競前攻戰、京勢初也欲穿鉄壁、終也敗走、而不顧瀕瀕而涵溺者多矣、且亦討捕於長宗我部・十川、限於高田里門、府内者限於祇園之川原、追亡逐北、就中京勢之敗走、筆舌之欲伸、而未嘗有可比類之事、味方以称延岡之古城構一陣、燒篝火發鬨音、十二月雲交之薄雪冒戎衣、手足共以宛冰寒、雖然勝軍之勇、無一人之屈寒氣者、地下之者亦與京衆俱翌夜捨府内逃去畢、故味方即入府内者也、南郡亦朽網某屈旗下、是以枹肥田所

所入手裏也、家久主於府内為越年也、

一五 樺山紹鈞自記

一天正十四年^丙、薩隅日肥後催数千騎豊後江押懸る、先日州口^二者中書御大将、肥後口には武庫様御大将^二而、義久様八日州迄御出陣候、然者南郡には岡と申候城、三重口ニハにうの嶋と云城こたへたり、其上こたへたる城も有しに、從京都 大閣様大友へ御加勢也、然者為大将千斛権兵衛・土佐之国の住人長曾我部以同心令渡海、府内と云処ニ勢揃して有由聞得けれ共、彼府内近き利満^{利満}之城を、中書大将にて責被成けるに、下城仕払、上城計^三而敵こらへける、其籠ニしかと責寄、定而京衆後卷仕候半、其時一戦可有とて一兩日待処^ニ城^分又人質を出し、時刻を延引する処^ニ、見次之衆如雲霞のおそひ来る、先大友殿・千石・長曾我部三手之衆、川之向を跡方まてとりつ、む、雖然城籠之藪之蔭に堅まり居る、川を渡し城衆江取合、京勢皆々川渡取時分、能此也とて打出及合戦、京勢初之儀勢にも不似崩立て、溯瀬共不云追はめられ、高田と云城之城戸口迄責付、府内者前之祇園之川原まで追責、中々京衆北軍之為体難尺紙面、一日抱候而次之夜、京衆・地下之者跡先^三府内を逃去る、其間身方ハ延岡とて城分声懸なる古城江取籠て、篝を焼吐気を作り、此ハ十二月、ミそれまじりの薄雪に手足氷ニ雖被閉候、勝軍成故いさみの、しる、次夜敵府内を捨て逃行之間、府内江打入也、此等之由朽網方申入ける間、武庫様御知行^二而、懸頓而くすひ田など云所へ御座を直されける、

一六 島津世録記

一 太守思征伐豊後曰、大友積怨我国遺恨難忘、昔越王勾踐不忘会稽恥辱、臥薪嘗膽十年教訓、終雪羞於吳、燕昭王遠思子会^{昭王父也、為之所發}之辱、卑辞厚幣以招賢知、乃執仇於齊、自古男子如有讎敵、不共戴天者衆矣、夫薩^{サツマ}广大日向三國自右大将頼朝卿之時我家領帶之地、故撫恤隣国安堵傍民、遠近貴賤無不來附、庶乎不失以大事小之礼法、而日州伊東背我為敵屢犯我地、故以救乱誅暴之兵討之、彼勢窮垂死之際敗走豊州、及天正六年戊寅冬、大友欲救伊東還之於故郷、率兵來襲我日州新納院高城、而反得敗北半失其軍、而今聞有訴望薩^{サツマ}广征伐之謀於前関白秀吉公矣、先彼策不伐之異坐而待亡乎、遂欲催兇兵之時、肥後八代之兼田信濃守・高橋駿河守馳价曰、豊後国入田宗和・志賀道益背大友、因 太守、有報我怨之志、於是 義久主以為幸也、乃召武蔵守忠元曰、可致豊後征伐之智計^{云云}、忠元承其命、遣仙鏡坊於入田城、聞背大友之志、而遣御船之兵勅丞及忠元之陪臣中馬源丞者於其城試実、故吉良甲斐守・阿南勘解由次官來見兵庫頭義弘主、其後遣橋木右京亮・中馬源丞於志賀城、而志賀之兵以大塚右馬助・新野介、伸降薩^{サツマ}广之言、因茲野村與三右衛門尉者忠元之倍^倍臣尾崎彦兵衛^{彦兵衛}門尉・中馬源丞納兵道蜜法之針於志賀城、而及天正十四年^丙十月、義弘主為大将向豊後、相隨運衆者、弟左衛門尉歳久・同子三郎次郎忠隣・從弟右馬頭征久・同函書頭忠長・川上上野介信久・信納武蔵守忠元・同姓縫殿助久時・北郷讚岐守忠虎・樺山兵部太輔規久・伊集院右衛門大夫忠棟・同姓肥前守久春・同姓筑前守・鎌田尾張守^{法号}寛柄、同姓出雲守政近・川上左近

將監久辰・平田新右衛門尉・大寺大炊助・白濱周防守・宮原筑前守・町田出羽守久倍・肝付彈正忠兼寛・敷根藤左衛門尉・大野権左衛門尉久高・伊勢弥九郎貞昌、都合其勢三万七百余騎、自肥後之境討入于豊之後州南郡、同十月廿一日、到阿蘇郡野尻設陳柵、同廿二日、陷高城之時、得敵首数十、貞昌年纔十七而斬得強敵一人、義弘主感囊不淺、入田宗和・志賀道益素合心薩摩、而待之如大旱之望雲霓、於是宗和・道益引率隨兵千有余來為指南、乘夜入宗和城、松尾星及鳥嶽城皆陷走矣、厥後進津箇牟礼、城主戸次源三者、^{俗名撰津守統貞}同廿四日圍其城、宗和・道益以策、源三下城、則兵庫頭義弘主入津箇牟礼城、道益嫡子道輝^{俗名小左衛門尉親次}拋岡城称病龜縮、其地嶮峻、且有大河之不可徒渡者、故評議未決之際、義弘主執鞭之士乘夜蜜進登其城、乃当敵兵追來而欲越壁去、而不得忽陷于城隍死^{云云}、道輝者宗和・赤星備中守親戚也、故請遣使出質、道輝忘其言相隨矣、太宗義久主亦在軍中、先自赴日州之境三城、暫駐於塩見、以弟中務太輔家久為大将、山田越前守有信・吉利下總守・土持左馬權頭・伊集院下野守久治・同姓美作守・本田下野守親貞・上井伊勢守寛兼、其外人數一万余騎、踰梓山征三重近郷之壘放火、而後下野守・美作守・本田下野守・伊勢守率兵陷緒方城、則家久構陳於盤東寺、使前鋒掃其進來強敵、議於南郡之大將 義弘主、而家久之隨兵警固三重^{前光}、義弘主之兵鎮護鎧嶽臺台城、先是 太守義久主使文之和尚・鎌田刑部左衛門尉訴九州於秀吉公、公曰、大隅薩^{サツマ}广并肥後半国・筑後半国・日向半国為島津之土地、日向半国許伊東、豊前筑後肥後半国又添豊後賜大友、肥前一国與中国毛利、筑前一国為 秀吉公之公領令已定、而將婦文之和尚・刑部左衛門尉之際、此事已聞於薩^{サツマ}广諸將有云、九

州地皆属我主可也、不然則兵不可停矣、乃增益軍威修鍊干戈、是時小寺官兵衛尉黒田如、仙石權兵衛尉黒田如將以分割国郡事為任、而下向九州、仙石渡豊後而向豊前、小寺與中国毛利同行而着于豊前、雖欲行分国之令、筑前之城井某・長野・秋月・高橋等專附薩摩、而不聞於小寺・仙石・薩摩勢霜刃鉄騎雷軋凡驅大破豊後半国、大友左衛門尉義鎮驚蹙魂魄散、而不知其所防禦矣、義鎮與仙石議構陳於府内上原之地、十二月十二日、義鎮・仙石與土州之長宗我部弥三郎・秦信親、讃州之十河隼人佐政泰等、侵年前滿家久之陣、臨其戰、而我兵討殺秦信親・政泰、則仙石權兵衛尉・尾藤甚右衛門尉秀吉公討征陸奥而掃陣之時、尾藤為髡出、纜保微命而竟敗北矣、况於公殺之於相州小田原之地云云、纜保微命而竟敗北矣、况於步卒等乎、追亡逐北、伏屍者不知幾百千也、同十三日、家久乘勢入府内、則義鎮雖退高崎亦不堪忍焉、向豊前龍王而走散也、義弘王十二月廿二日到道益城、則白仁之志賀道運亦降參也、一万田・滑・瀧田城皆陷焉、同廿四日、換陳朽網、而後中務太輔家久自府内來会踰年云々、

一七 長谷場越前自記

一 薩摩の国より豊後の国江御弓箭を被対根源者、日州郡司伊東三位入道累年依為逆臣、御退治を被成之砌、国方の寄々として無理之加勢を被仕、其科を預大友宗麟上洛して関白様を被奉頼事天下無其隠、嶋津方を可有御追討之由被達上聴、豊州家ニ上古より重宝の骨ハミと云へる御太刀進上す、亦青ヲ鶏方冠葉トとして名筆無類之掛絵也、於豊家者普代相変の重物を、是も同く進上す、此外於国境目者、種々ニ智略を廻て当家退治之企

也、扱者不及力御弓箭を食懸れん、先手ニ可被構鉾櫓事、御兵儀之刻ニ天運ニ有哉、地之時ニも有哉、大友宗麟披官之者心替りを仕、入田宗和父子式人、志賀道易之一党が其親属ニ到ル迄、年積る述懐を此時節ニ散んとて、八代表江言上す、蓑田信濃守・高橋駿河守者承り、夜白を不云わセ鹿兒島へ被申上、太守様は聞食、彼の豊州の兩人者、対大友家二者普代之下人たりしが、他人ニついで申事如何あらんと上意也、是を各承り、御定尤ニ御定尤ニ候得共、於豊州者手間入事者候へし、只々出馬と偏ニ諫め奉る、于時天正十四年丙戌十月の吉日ニ御国元を御出馬有り、同十月廿一日ニ阿蘇之内南郷野尻と云へる処ニ肥後表ヨリ被打出て、御太將義弘様、御舍弟二年久、御供を被成者、相並て右馬頭・凶書頭・伊集院右衛門大夫・町田出羽守・川上上野守・新納武蔵守・此外之軍兵も皆野尻ニ被陳取、打取て勝吐氣の折節、入田宗和父子式人御迎ニ參陳す、前後之隨兵数千騎也、か、りける処ニ、志賀道易之一党を数千騎率て參陳を被致て、御太將武庫様を入田か城ニ奉申請、如兼約申すにて、近国者扱置ぬ、遠国迄も籌策す、彼の吉左右を承り、不付随と云者なし、いつきかしづき奉る、日者夜二つゞき夜八日に成る迄御幕下に參陳す、大名小名出入りハ、門前ニ市を成すこととく也、同廿四日ニハ辺次前か為城ニ押寄せて、功者の武兵ニ被為見、去程ニ入田宗和と志賀入道ハ御案内者仕り、辺次前か父子ニ教訓被致宛下城ニ社ハ取成けれ、今三日ハ城内を掃除して、右兩人ニ去渡しける処也、然者追付御太將軍武庫様を奉申請被抽忠貞ヲ、其分五日指過て、志賀道易の嫡男ニ親次と云へる者の居城を構て楯籠る、彼のはまりを知らぬメ大軍を打出し岡野城を見せらる、此在城と申者、四方ニ岩石立廻り、

岨々とそびへて弱てなし、麓ハ大河漲りて可渡様更ニ無ク、大勢を指向て悪しかりなんと儀定して、先々軍兵被打入、於此刻、真幸方の御中間進ミ出て申様、如何ニも子細あらんとて忍態をそ巧ける、頃しも冬の寒き夜の月空なきニ雲はわく、雨風者はけしくて深夜のいふせき限りなかりし時分ニ、只一人岡の城江忍入り、若シ者弱手も有べしと心を寄せて通りしを、地下人ニ不似とて薩戸サツ姿の奴原を遁すまじきと追懸る、兼而所存之事成れハ、さあらん体ニ持成して行過る処を、万方よりたひまつを出しけり、扱ハ先身をかくさんと岩かけニ踏ミさがる、運命も尽ぬるや、落て其儘空く成る、此事を武庫様ハ聞食、忠ニは恩を与んと、其子少年召出し、侍ニこそ被成けれ、其後ハ無行、岡之城主親次は志賀道易嫡子也、入田宗和者慣父親ニて赤星備中守者縁類之事ニて有り、種々の謀略を廻シ挽出んとせしか共、大友方へ順儀之旨を勤んとて、同心致す事そなき、角ても不成指置事ハ、少年成共息をば先今日に差上て、自身ハ快気仕り、重而可致參陳と申聞ケらる趣を、岡之城主は畏て承る、城内ニ出入り之子細ニ付、ろうせき法度之為とて検者衆を被申けり、扱親次が為そとて、入田宗和と赤星備中守ニ被仰付、此衆より者薩摩方の御人衆ヲ嗜るの為として、今一人可被相添之由、頻ニ被申上、此趣を聞食て、長谷場兵部少輔を被加其勢、都合三百余騎ニて岡之城の麓迄そ打寄ける、親次よりも両三使を差出し、其理りを被申上、此程百姓以下之在城仕たる事なるに、少し掃除を仕り、頓而時分次第ニ御案内者を可遣由、大河を不渡被申けり、此日も斜ニ見得けるニ、重而使者を呼出して、遠見か尾迄指懸り、さきの返事を被尋、彼者共ハ爾々ニ申上る事もなく、城内の人衆者談合ニ日を暮し、致延

引計り也、扱こそ可有子細と御方の軍兵心得て、御陳所江上意を請、人質を所望して、翌日御陳ニ打帰る、其後ハ親次が参上も事ならず、世上を補ふ計也、事を左右ニ指延て、九思一言此時と雑兵迄も才覚す、其頃ハ天正十四年丙戌十二月廿二日ニ、御太将武庫様を道易之居城へ奉申請、無別儀御仕合間一日之御兵儀にて、同廿四日ニハ、御陳易を被成宛九多細カ居城を繰おろし、御大將軍奉申請、御供の軍勢モ一同ニ被陳取^{云々}、

一八 勝部兵右衛門聞書

一 去程に同年十月十四日に、太守匠作鹿兒島を打立、日向口へ発向し玉ふ、大將ニハ中務大輔家久・凶書頭忠長・豊後守久親、其外一家他家の大名郡司諸外城地頭職の人々、物具兵粮用意しておもひく打立、其勢二万五千余騎、義久ハ千騎計にて三庄のことく赴、塩見ニ暫く相控給へハ、諸軍ハ皆々縣・阿津佐越して三江に打入、自夫諸方の城をも攻落し、頓^前而歲滿^前へ押寄着陳をそ被成ける、去れハ大友義棟・千石権兵衛尉ハ府内の上原ニ陳取構へ、薩^前勢を相待れける、家久歲滿^前へ陳取御座を蹴散んとて、同十二月十三日ニ押寄らる、薩摩勢、家久を始諸軍兵珍しき都人ニ趨合師せん事、今日そ軍のはれ成へしと勇掛り合、誠ニはけしき師也、千石敗北となれハ、四国の長宗我部を如一千余騎を減けり、其儘府内へ乱入んとする、宗麟入道も府内を出、高崎をさり、豊前の龍^正口^正如く行玉ふ、丹生の嶋即押寄相戦ふ、柴田入道齋翁直前ニ進て相働ける程ニ、慈乱足^二成、伊地知丹後・同子新三郎合戦す、齋翁入道深入しける処を、濱田民部左衛門尉此間損して不知、肥

後口大將ニハ兵庫頭忠衡、前吉松陳の折節分義久の御統子と定り玉へハ、忠平を改て義廣と名乗玉ひける、左衛門尉歳久・薩^前守義虎、其外一家他家諸外城地頭職の人々、其勢一万余騎、南郡さして打て入、右馬頭幸久ハ、肥後ハ諸国の中成間、可然人御座ますへしとて、八代ニ御在番とそ聞えける、南郡の入田道町、志賀の道喜ハ兼て薩摩へ申合たり、内々待設て居たりけれハ、先入田の館に入らせ給、同廿一日、高城を攻落し、又入田のことく立かへり、其夜即松尾の城烏嶽をも打捨落行けり、やかて津賀牟礼の城へ押寄玉へハ、戸槻源三も下城して、薩^前方へそわたりけれ、岡ノ志賀道益ハ代官を差出し、我身ハ虚病して未參陳不申、白根の志賀入道ハ早慈ニそ参ける、一問田も下柵を攻破られ、降参して城を薩^前へ渡けり、那女利・瀧田^前も攻落て薩^前軍勢打入ける、久田美も降参とて参られたり、玖珠表も類ニ薩^前番を申請られけるほとに、川上上野守・町田出雲守・新納武蔵守など如玖珠打入らる、野上・喜江・江良・切頭も早御下に参けるニ、小国の北の里も参らる、

一九 日向記

一 同年十月ヨリ亦豊後入ト定、義久ハ日向口ヨリ南郡打入ントテ、五百余人ニテ三城ノ如被越、義久ハ塩見ヨリ控テ、県山ヲ三重ニ打入大將ハ家久也、兵庫頭ハ吉松陣ノ時ヨリ義久ノ養子ト成、忠平ヲ改義弘ト申ケル、肥後口ヨリ打入大將ハ義弘、都合七百余人也、去程ニ南郡ノ入田殿・志賀道益兼テ薩^前方へ被申合事ナレハ、内々待モウケテ御在ケル、十月廿一日ニ高城ヲ攻

落シ、頓テ其夜入田館ニ打入玉フ、同夜此城モ明退、烏嶽モ如其也、津留牟礼ハ押寄玉へハ、已ニ戸次ノ深見モ下城ス、雄原ノ志賀ハ名代ヲ差出、吾身ハ作シテ参陣セス、シカ子ノ志賀ノウンモ早味方ト成テ、一万田モ下城降参也、ナメシ田是モ攻落薩^前番衆入、朽網モ降参、家久ハ無程三重知行、緒方ノ城ヲモ詰落ス、其後俊光へ押寄、向陣ヲソ付ラレケル、

二〇 日向記

一 大友宗麟天正十四年丙戌春上落シテ、日向高城敗北以來島津家ヨリセハメラレ、肥後肥前兩築モ薩^前ヨリ被押取事無念ノ至極、依秀吉卿ノ猛威ヲ仰、大友家残ル様ニ侘玉ケリ、依其御領掌有ケル時節、薩^前方モ鎌田刑部左衛門尉ヲ都ニ登セ、戦功ノ佗言ヲ被申ケル、然間秀吉ハ被仰出ハ、大隅薩^前ハ元ヨリノ儀、肥後半国・日向半国嶋津知行タルヘシ、亦日向半国ハ伊東民部太夫祐兵三遣スヘシ、豊前・築後・肥後半国ハ大友知行タルヘシ、肥前一国ハ中国毛利方へ遣玉シ、築前一国ハ都ヨリ御公領タルヘシト被仰下ける、然間使者下シ、如古代令上洛奉守君命ヤウニ可有トテ、九月十二日、千石権兵衛尉ヲ先豊後迄差遣さる、土佐國長曾我部弥三郎・秦信親、讃岐國十河隼人佐政泰・尾藤甚右衛門尉以下軍衆卒來、其沙汰ニ及ト云トモ同意ナシ、豊州口へハ黒田官兵衛・小早川左衛門尉隆景八千余騎ニテ、同十月下旬、豊前國暖ナトセントシ玉へハ、薩^前衆ハ筑前岩屋打出懸ケレトモ引入ケルニ、紀伊・永野・秋月ハ高橋一円ニ嶋津方ヲナシ、一揆蜂起シ、宇呂津ト云所へ差出要害ヲ構、通路ヲ取切タリ、兩人相議在、十一月五日、逆寄ニ切テ掛り要

害ヲ攻破、名士十一人、其外雜兵五百三十討捕玉イ、凱歌ヲソ挙タリケル、其夜障子嶽ニ陣ヲ取、同七日、河原嶽へ陣ヲ居、要害ヲ構エ玉フ、伊東民部大夫祐兵日來ハ秀吉公ノ御手廻ノ供奉タリシカ、此度ハ黒田官兵衛尉殿組ニ付玉ヒ、先陣ヲ被成ケリ、十一月五日ノ逆寄ニモ御高名在、河原嶽麓ニテモヌケカケ有、署名ノ手柄ヲ被成シナリ、其頃嶋津中務太輔家久大将ニテ、二万余騎豊後利満ノ城ヲ攻ル時、千石殿豊後勢ヲ加へ六千余騎ヲ卒、十二月十三日、河ヲ渡來テ薩戸陣後攻ヲナス、既ニ合戦ヲイトナミ互ニ武勇ヲ磨、数刻太刀打鏝ヲ合、勝負マチ（ ）也成シ所ニ、長曾我部信親手者廿二騎、左右ニ隨へ鏝ヲ合セ打死也、依之勢堪リカネ敗北シテ、十河新太郎・矢野・田宮ヲ初数多討死セシカハ、千石殿モ虎口ヲクツロケ這々引退玉フ、薩戸勢勝ニ乘テ逃ヲ追、府内祇園ノ川原迄高田八門口ニ至迄、討捕首數不知、其儘薩戸勢府内へ乱入ント指カ、ルニ依テ、頓テ大友殿府内ヲハツシ、高崎ノ城ニ逃籠ル間、家久府内へ打入玉へハ、義統高崎ヲハツシ、豊前龍王へ退玉フ、夫ヨリ義弘朽網ノ如陣替有テ越年也、所々手ニ属シ、天正十五年^{丁亥}三月中旬迄、豊後半国早嶋津家手ノ内ニソ入ニケル、

二二 天正拾四年豊後へ発向之事

一天正拾四年

嶋津豊後江発向之事

天正十四年十月ニ、豊前国ニテ大友旗下ニテ有ケル時枝左馬助・宮城数馬ヲ先トシテ城井叛ヲ企、各カ近所ニ、大友方ノ小組人ナトヲ与セサル輩ヲハ討亡シテ旗ヲ上、手余ニヨシ、都甲備中守・久志野彈正忠方ヨ

リ到來シケレハ、大友左兵衛督義統尙上使へ仰達ラレケレハ、兩人共ニ氣ツヨキ仁ナレハ、其一揆トモイソキ退治アハヘシ、我々モ発向候ハントテ豊前国へ発向シ玉ヒテ、^{ヨメス}ノ岩手ニ陳取テ、數^〇奉陳ニテ一揆ノ輩退治セラレケリ、カ、リケル所 入郡・大野郡ヲ知行シケル大友數代ノ家老ニテ、国家ノ政道ヲ司トリタル仁イナル^〇天討ニヤ、數代主君ノ大友家ニ敵ト成テ嶋津義久公ニ内通シテ、薩戸勢ヲ豊後へ引請、国家ノ大事被成臬、豊後ノ逆心ノ頭領人ハ志賀道益・同道雲、朽網崇曆、是ハ家老之戸次玄三・同鎮連、^〇一刀田紹伝、柴田紹庵、是等大友近辺ニ宮仕ノ者也、是等ヲ宗徒ノ謀數人ニテ、三重ノ町人麻生方陸入道紹和ト云商人、是ハ常ニ薩戸馬商人ノ宿ノ亭主ニテ、薩戸大隔日向ノ方へ折々行通ヒタルニヨリ、豊後ノ内通ヲ薩戸へ謀略シタル者ナレハ、此者ヲ使トシテ、時既ヨキ折節ナレハ、早々出陣有ヘシト云遣ケレハ、嶋津修理太夫義久公ハ此由ヲ聞タマヒテ、内々ハ豊後へ発向有ヘキヨシヲ蜜々フレヲカレタルコトナレハ、両國中ニメクラシフミヲ遣シテ、豊後発向トシテ肥後国通、嶋津兵庫頭忠平大将ニテ、都合其勢二万三千ヨキ、日向ノ国ト豊後国堺ノ大山阿津佐山ヲ越、豊後へ討入トシ聞エシカハ、豊前へ飛脚ヲ府内ヨリ指遣、仙石權兵衛・長曾我部土佐守・大友義統ハイソキ府内ニ帰陳シ玉ヒケリ、此ハ天正十四年十一月十五日ニ、嶋津中務少輔家久門^〇阿津佐山ヲ越テ、同二十六日ニ豊後国三重ノ仁ニ着陳セラレケリ、同十二月五日ニ戸次ノ内利光鶴か城ニ押寄、家久申サレシハ、此城即時ニ攻落ス事ハ眼前ナリ、然共臼杵ヨリ^〇複^〇ノ加勢指向ハン事必定ナリ、若サモアラハ、合戦手余ニ成テ難義タルヘシ、先々臼杵城ニケイコノ軍兵ヲ遣ヘキトテ、大将白濱周防守・野

村備中守兩人ニ騎馬武者百五拾余キ、都合其勢二万余キ、十二月五日ニ臼杵ノ城ニ押寄テ、時ヲツクリ矢合シテ、薩戸軍勢ハ城ヲ攻ヘキ手立モセス、少引退キ遠陣ヲ取テ、難所ヲ前ニ當テ、城ヨリ打出ハ防而戦ハンヨシニテ、遠陣ニシテ用心キヒシクシテソキタリケルカ、嶋津中務少輔家久公ハ同六日ノ日、戸次利光ノ城ニ押寄ントテ、先蜜内検見ノタメニヤ、歩武者百余人城ノ間近ク遣着還ス、鶴か城ノ麓迄寄來ルヲ城中ヨリ見カケテ、竹中久藏・岩瀬玄番ヲ先トシテ、其勢三百余キ計懸出散々ニ戦ケルカ、薩戸ノ軍兵大勢ニ無勢、叶ハシトヤ思ニケル、シトロ足ヲフムト見エケルカ、城中ノ軍勢キヲヒカケテ攻戦ケレハ、叶ハシトヤ思ヒケル、我モ（ ）ト引退ク処追打ニ攻ケレハ、薩戸方ノ者共、三キ討取テ、勝トキアケテ門出ヨシト匂テ城ノ内へ引退ク、則其者トモ城下ニ獄門ニ懸ケリ、薩戸ノ軍勢是ヲ見テ無念トヤ思ヒケル、先陣ノ勢ノ中ニ心ハヤリノ軍勢四百五キハカリト見エテ、大塔村マテ寄來リケルヲ、城中ヨリ是ヲ見テ、利光伊予守・佐藤美作ナト云者ヲ先トシテ、其勢三百余キハカリホト出、面モフラス命モ不輕、一向ニ伐テカ、ル、薩戸勢モ先ホトノ敗軍ヲ本意ナク思ヒケレハ、ヒクナス、メヤ者共トテ、互ニ諫メ恥シメテ、爰ヲセント、ウツマクツ、戦ケルハ、城中ヨリ討テ出タル勢ト云、誉ハ一筋二十死ニ一筋二打テカ、ル大勢ノ中ヲワツテ攻戦ヒケレハ、今度モ薩戸ノ軍兵共三町ハカリ引退ク、城中ヨリヤラ出タル軍勢ノ中ニ、佐藤美作ヲ先トシテ、討死三十二人、手負共數多アリシカ、薩戸ノ軍兵共五十余人討レ、手負數シレスト聞エシ

ニツヨク働キケレハ、暫ク

イキヲ休メントヤ思ヒケル、互ニアヒ引ニ引退キケル、
嶋津中務少輔家久公ハ利子尾ト云丸山ニ陳取テ居ラレ
ケルカ、軍法者シトロニシテ諸勢モ面任せニハタラキ
ケレハ、番頭ノ人々ヲ召寄せ諫メ申サレケルハ、阿津
山ヲ若越テ当國中迄発向セシ所ニ、酒ニ向フ者一人モ
アラサレハ、軍勢キホヒカ、リ、□軍ノハタラキ今度
両度ノ不覚ニテ、敗軍以ノ外ノ事共也、軍法ノ掟ヲソ
ムクマシキ由、諸軍勢カタク下知セラレルヘシ、軍ヲ
評定シテ七日ノ早朝ニ城攻トフレ渡サルヘシ、軍法ヲ
破ハ輩ハ何程ノ高名アル共、身ノ勘氣ハ申ニ不及、子々
孫々迄大事タルヘシ、軍ノ不覚有之者ナラハ、国家ノ
大事是ニ不可過、軍ノ手初ニ是程ノ小城ヲ攻カネテハ、
世間ノ人口モ恥カシ、サレハ、先年日向国美々川ニテ
豊後勢ノ不覚ハ、時ニソノミシ大將ヲロカナリシ故ニ、
旗頭之働キ我カ儘ニシテ敗軍シタル事眼前ナリ、殊城
ハ戸次伯耆守カ在城他シカ、筑前国へ 越中国西国ノ
押ヘトシテ、大友代官ニ立花ノ城ニ在城ナレハ、サシ
テノ強敵ハ籠城スヘカラス、当 大友家頼ニ小身
ノ旗コモリキタルト聞エシ、大將ノナキ軍ハ思ヒ
ノハタラキニテ、

去程ニ大友義鎮ハ豊州ノ田津久湊ニ塞逼セラル、義統
ハ同国府中ヲ落テ豊前国云走、評定マラサル事ナ
レハ、味方ノ軍兵ヲ能キハメ一モミニセメヤフリ、其
イキライニ府内へ発向、 大友・仙石・長曾我部ト
一軍遂ント、衆評ヲカタ一旗ノ番頭ヲアラタメ、
一番備ハ伊集院美作守ヲ大將ニテ、与力ヲ軍勢五千余
キ、二番備ハ新納大膳正、其勢三千余キ、三番備ハ木
庭主税助、其勢二千余キ、
嶋津中務少輔家久公ハ都合八千余キニテ、番手ヲ四番
ニ組テ、物見ノ役ハ酒瀬川豊前兵衛・相良民部左衛門、

兩人ニ足輕六十余人サシソヘテ、家久ヨリ下知ヲ請テ
働キケリ、戸次利光鶴カ城ニ楯籠ル軍勢七百余キ、男
女老若共ニ都合三千余人トソ聞エシ、薩戸ノ塞ノ手軍
評定ノ沙汰ヲ城中ニ内通ノ者有ケレハ、七日ノ日ハ一
日ニ討死ト思ヒ定メ、女ワラへ老若共ニ一命ヲ露チリ
ホト云不惜、薩戸勢ト合戦シテ討死ト相定メ、兵具ハ
申ニ不及、竹ヤリヲコシラへ、木ノキレ・手コロノ石
ナト取集メテ、夜ノ明ルヲ待兼テソキタリケリ、薩戸
寄手鷄ノ声ヲ相聞ニテ、物ノ具ヒシクトサシカタメテ、
テンテニタイマツヲトホシツレテ、先陳ニ伊集院美作
守五十余キヒテ城下ニ押ヨセ、マタ夜モ不明ニ時ノ声
ヲ上ケレハ、二番備新納大膳正三千余キカラメテニマ
ワリ、是モ時ノ声ヲ合セケル、天地モヒ、クハカリナ
リ、城中ヨリモ七百余キノ軍兵時ノ声ヲ合セケリ、寄
手ノ軍兵共大勢ノ事ナレハ、此城即時ニ攻破ルヘキト
オモヒ、我モノ高名分トリセントテ、イサミサケン
テ攻上ル、城ノ内ヨリ徳丸伝八・加藤兵庫介兩人一陣
ニ懸出、其勢五千余キ、討テ一面ニ向テ鉄炮ヲハナシ、
弓ヲ射させ、矢コロハ近シアタ矢ハナク、寄手ノ兵者
十四五キ矢庭ニ討死スルヲフミコエ、是ヲ事共せ
ス、一騎打ノ上リ坂ニテ、殊ニサカモキヤラ大石大木
キリカケタリケレハ、輒垂超難キ難所ヲ吾先ニト上リ
カ、リ、ヒルム所ヲ鎧長刀ニテツキ通シキリ伏ル、觀
面ニ伊集院カ手ノ軍兵六十余人討シケル、城中者共痛
手ウス手ハ負ケル共、討死ハ搦手ハ千余キ、ヲメキ叫
テ戦ケル共、難所ナレハ寄手ノ討死計ニテ、輒ク可攻
巷共不是ケルカ、引色ニ見テ上リ兼テ有ケル所ニ、伊
集院美作守サイハイメカシ、ツ、ケト下知スレハ、後
陳ノ兵者面モ不振攻上ル、要害カシコシトイヘトモ、
城中小勢成ケレハ堀涯ニ攻近ク所ニ、鉄炮・弓ヲ放チ

タル有様ニテソ居タリケル、兩上使仙石・長曾我部ハ大閣様工嶋津方ヨリ逆意ノ趣ヲ委細ニ言上セラレケレトモ、戸次ノ城ノ軍難儀ニ及ビタル由ヲ聞玉ヒテ、大友味方ノ軍勢ヲ案内者トシテ、兩人大将ニテ都合其勢六十余ニテ、戸次ノ城ヘソ馳向ヒ玉ヒケリ、十二月十二日ノ早朝ニ、戸次川トテ大河ノ有ケルヲワタシ、山崎ト云所ニ出張シテ、一箇ニ 嶋津家久公ノ陳所ニ攻入ント衆許シ玉ヒケリ、中務少輔家久ハ爰社攻所ヨト思モ、軍勢ニ下知セラレケルカ、今日ノ合戦ニ家久ニツキテハ、上使ニテ罷向ヒシ仙石・長曾我部、是非共ニ戦死ト相定タル也、一万八千余キノ軍兵共、一人モ生テ本国ニ帰ラント思フヘカラス、其敵ハ只今 義久公ヘモ其趣ヲ云遣ス也ト書札ヲ認メ、河上半蔵ヲ使トシテ一刻モハヤウ薩^{サツ}廣^{クワウ}ヘ参着スヘキトテ、家久公ハ今日ヲ最後ト思ヒ定ラレケレハ、ハナヤカニ出立テ諸軍勢ニ下知ヲセラレテ、相定メシ軍法ヲ破ルヘカラストテ、元ヨリ番組ヲ前々ノコトク三段ニシテ、十二月十二日ノ明ホノニ、ワキノ津留ト云所ニテ、互ニ時ツクリ矢合シテ合戦初リシカ、イカ、シタル事ニヤ、一番備ノ伊集院カ軍勢、シハシ打入テ防戦ヒケルカ、上使ノ勢ノ勢アラ手ナレハ、攻立ラレテ利光ノ村中ニ引退ク、上使ノ軍勢キホヒ懸テ、逃ル軍法共ヲ進テ分捕高名ヲソシタリケル、 嶋津家久ハ味方敗軍ヲ見テ、手ニアセヲニキリ、ハカミヲシテ、ハヤカケ出ントシタマヒケル所ニ、二番備ノ新納大膳正都合其勢三千余キ、サカノ口ト云所ヨリ東山ノ高キ所ニ馳上リテ、敵味方ノ備旗色ヲ見ケルカ、ヨキ時分トヤ思ヒケル、仙石・長曾我部ノ本陳ト覺シキ所ニ只一向ニ攻カ、リ、千死カ一生ヲモカヘリミス、今ヲ最後ト攻戦、大将軍 嶋津家久公ハ津留川原ヨリ一面ニ責カケル、

三番ノ本庄カ軍勢モ一ツニ成テ戦ケリ、敵味方ノ軍勢都合二万四千余キカ入乱レテ、火花ヲ散シテヲメキ叫テ攻シハ、天地モヒ、ク計也、只一時ニ時計ノ合戦ニ、敵味方二千余人討死スル、長曾我部土佐守信親心ハヤリノ大将ニテ、アマリ深入シ玉ヒテ、命モ不惜而モ不振、手痛カ責戦ケルカ、痛手薄手数所ヲヒ玉ヒテ討レサセ玉ヒケリ、兩上使ノ軍兵都合六十余キ、一而ニ懸向テ命モ不惜面モ不振責戦ケルカ、多勢ニ無勢ニテ、カケ合ノ合戦ニ戦レテ力ニ不及引退ク、仙石権兵衛秀久心ハ猛ク思ハレケレ共、味方大勢討死シテ敗軍シケレハ、力ニ及玉スワカニ廻リ、五六十計ニテ戸次ノ川ヲ渡シ、府内ヲ指テ引退玉ウ、中務少輔家久公ハ其勢ヒニテ、府内ヲ指テ攻近ク、大友左衛門督義統ノ御内ニ吉弘加兵衛尉統行ハ、此由ヲ聞テ手勢三百余キニテ、物具ヒシ^シトカタメキ^シ河原ヘ出張シテ、寄ヘ敵ソ待カケシカ、薩^{サツ}廣^{クワウ}方ノ軍勢^類テ津留河原迄寄来リケルカ、吉弘カ出張ヲ見テイカ、思ヒケルニヤ取テカヘシ守、岡ノ古城ニ取上リ、其夜ハ野陳トリテソ居タリケリ、上使大友豊州宛向ノ事、仙石権兵衛尉秀久ハ長曾我部土佐守ノ子息三郎兵衛尉元親、是モ父信親 所ニ 陳ニス、ミ玉ヒシカ、数カ所ノ手ヲ負玉ヒシカ、父ト一所ニ討死シ玉ウヘキトテスマレケレトモ、大友家頼竈門兵庫介ト云物、今度長宗我部信親ニ与シテ同陳ニテ戦ケルカ、三郎兵衛尉元親ノ間近ク懸寄申ケルハ、軍ノ勝利ハ時ノ仕合ニテ候、大勢ノ中ヘ只御一人カケ入せ玉ヒテ、何ノ勝利カヲワシマスヘシ、犬死せさせ玉ヒテ、何ノ益モ御座有間シキ事也、是 引退かせ玉ヒテ、重テ御勝負ヲトケサセ玉ウヘシトテ諫メ申ケレハ、元親モケニモト思召

レケルニヤ、仙石秀久ト打ツレ玉ヒテ、府内ヘ帰陳シ玉ヒケリ、夜ニ入ケレハ、吉弘加兵衛尉統行ヲ宗像掃部助・大津留河内守方ヨリツカハシ、ヨヒ寄テ内談シケルハ、中務少輔家久公ノ事イキヲイ懸テ、夜ノ明ルヲ待兼テ夜中ニ攻来ルヘシ、当時御旗下ニテ御人数三千余キニハヨモスキシ、吾々手勢ヲカリ加ヘ申共、五千余キニハヨモスキシ、嶋津カ大軍ニ懸テ軍 危事也、今端当城ヲ退かせ玉ヒテ、高崎ノ城ニ御座ヲウツシヲハシマシ、豊前筑後前ノ御勢ヲ催シ玉ヒテ、重ネテ大軍ヲ、コシ、嶋津ヲ御退治轉スカルヘシ、其上直入郡・大野郡ニテ、志賀・朽網・万田ナト数代ノ御厚^クヲシテ志レテ嶋津ニ相隨テ、御当家ニ至テ逆意ヲ企テ、弓ヲ引矢ヲハナツ上ハ、其外面郡少クノ士卒迄モ、志賀・一万田・朽網等カ下知ニ隨テ、嶋津方ニ 身スヘキ眼前ナリ、若又当城ニテ、御旗本ニモ彼逆意ノ者ニ心ヲ合テ、嶋津ニ心サシ有者、 後矢ナト仕ニおテハ以ノ外ノ大事、是ニスクヘカラスト評定シテ、大友義統公ハ委ク言上シタリシカハ、実モト思召シケルニヤ、大山田兵部・田比六郎ヲ召寄せラレ、此由ヲ上使ヘ仰合サレテ、其夜ヒソカニ府内ノ城ヲ退せ玉ヒテ、上使ハ別府ニ懸 カナ越ト山ヲ越させ玉ヒテ、山番ノ口ヲサシテ豊前国妙見岳ノ城ニ着シ玉ヒケリ、此城ハ田原紹忍カ代繼 原与兵衛尉親盛トテ、大友義統為ニハ弟ノ在城也、大友義統ハ高崎ニ登城シ玉ヒケルカ、又宗像・大津留・吉弘内談シケルハ、此城ハ大友先租刑部大輔氏時ハ菊地肥前守ト合戦ノ時籠ラせ玉ヒテ、御運ヲ上ラカセ玉ヒ 尊氏將軍ノ御父子御下向ノ砌ニ、大忠孝ヲ遂玉ヒシト承ル、去共当時俄ニ御登城ナレハ、人倫遠キ高山ニ共粮

運送不自由加ヘシ、豊前国龍王田原紹忍カ居城ナレハ、遠路ナカラモ御越境有ヘシト云里テ言上シタリ、勢ニテ龍王ハ聞カセ玉フ、御方ハ白仁弥助・石合武助・敷戸九兵衛尉替合テ持歩行ニテ、御近所ヘ御供仕リケリ、大津留河内守手勢百拾キ、其内五拾キハ引分テ、己カ居城ノ松カ尾 番ニ指遣ス、我身ハ勢百キニテ 仕リケリ、宗像掃部介手勢五百余キ、吉弘加兵衛尉手勢三百余キ、同弟ニ田比平介手勢百五拾キ、其外參府仕、タ、軍勢御本都合其勢五千余ニテ ノ城着陳ナサレケリ、 嶋津家久公翌日相良民部左衛門尉兩人ニ歩行武者 百二十キ指添、府内ノ有様ヲウカ、ハセテ、其後天台寺ニ 壽寺トテ六坊有ケルヲ本陳ニカコノセ、府内ニ在陳セラレケル、

岡城攻ノ事、

天正十四年十一月十五日、豊後発向ノ御大將軍、薩州太守嶋津修理大夫義久公ノ御舍弟 兵庫頭忠平公ハ、新納武藏守子息右衛門佐ヲ先トシテ、其勢二万五千余騎ニテ薩^{さつ}廣^{ひろ}ヲ打立テ、肥後通ニ同十二月二十二日ニ肥後国 志郡ニ着シカハ、 嶋津兵庫頭忠平公・新納武藏守・同右衛門佐、其外ノ人々ニ申サレシハ、阿蘇山ノ社人城中ハ多勢ニテ、前マヘヨリ大友方ニ与力シテ、互ニ他事ナキ心指ト聞エシカ、阿蘇郡ニ着陳ノ折節、サ、ヘラレテハ然ヘカラス、謀略ノ為ニ三端使者ヲ指遣シ阿蘇山ニ下キテ、今度ノ出陳先勝ノ祈禱ヲ頼ノ由、衆徒坊中社人ニ頼遣シ、一山ノ坊中社家ノ所存ヲ窺見テハ、如何有ヘシトイハレケレハ、皆一同ニ此義至極、シツハカラヒ哉トテ一日逗留シテ、佐川彈正・加藤兵部左衛門ト云者兩人ヲ使者トシテ、色々ノ進物カタノ如ク拵テ取持セ、阿蘇山學頭ノ坊・宮野地神主兩所ヘ、嶋津薩^{さつ}廣^{ひろ}大隅ノ太守修理太夫義久御方ヨリノ

音信也トテ、今度出陳ニテ豊後退治ノタメ、同姓兵庫頭忠平登發向仕ラセ候、幸ニ大明神ノ御門前ヲ罷通ノ由、其義ニオキテハ、先勝武運長久御祈禱ヲ頼奉ル由ニテ、兵庫頭ヨリ我々兩人ノ者ヲ進シ遣シ候由ニテ、進物ヲサ、ケ、其外坊中社人方ヘモ懇ニ進物ヲ音信シケレハ、少モ異義ニ不及、坊中社人都合七百余人ハ嶋津使者ニ対面シ、一山ノ社家坊中違變是有マシキノ由請負、使者ヲ取持テ心ノ及ニ馳走シテ帰シケル、佐川・加藤ハ急キ帰テ、嶋津兵庫頭忠平公に云ケレハ、大キニ悦ヒ、 同十一月二十四日ニ阿蘇郡ニ着陳シテ一日逗留シ、嶋津兵庫頭公・新納父子ハ神主ニ対顔シテ、金五百兩ツマセテ、大明神ヘ御祈禱ノ御初尾トテ參ラセケル、學頭ノ坊ヘモ山上ノ三池大明神ヘ御祈禱ノ初尾ニトテ、金五百兩遣シケル、相伴一軍勢二万五千余キモ思々ニ初尾ヲ捧ケ、武運長久ノ御祈禱 頼由ニテ、社人の人々ニ送ケレハ、社家ノ人々ハ前角ノ沙汰ニハ、薩^{さつ}廣^{ひろ}ノ軍勢此所ニ參着 ハ、徒党狼籍ノ族多カルヘシト無心元思ヒシニ、思ノ外ニ引替テ社家方ヘ音信多カリケレハ、悦ヒ勇ム事限リナシ、 同十一月二十七日ニ、豊後国朽網ニ着陳シテ、朽網三河入道字曆^{しり}ハ 頭領ニテ、薩^{さつ}廣^{ひろ}ヘ謀略ノ由通シテ嶋津ニ一味ノ事ナレハ、少モ異義ニ不及、嶋津兵庫頭公・新納武藏守・同右衛門佐ニ対面シテ軍評定ヲシタリケル、岡ノ城ニ志賀湖左衛門尉在陳シテ居 ケルカ、多勢ノ者ナレハ、府内ヘ出陳ノ後矢ニ射ヘキ仁ナレハ、手初ニ攻亡サントテ、嶋津カ勢二万五千余キヲ三手ニ分、一万五千余キニテ 嶋津兵庫頭ヲ大將軍ニテ、十二月六日ニ岡ノ城ニ指向、新納武藏守六千余キニテ玖珠郡ニ登向スル、新納右衛門佐四千余キニテ分郡ヘ向ヒケル、比ハ

天正十四年十二月二日

嶋津兵庫頭岡ノ城ニ押寄テ散々ニ攻戦ケレ共、難所ノ山城ナレハ寄手討死ハ數ヲ不知、サレトモ此城ヲ攻アクミテハ マシキ事也トテ、荒手ヲ入替^か 同五日ノ日迄攻ケレトモ、寄手討死日々數ヲ不知討レケレトモ、城中ニハ手負モサノミ無リケリ、運ノ尽タル者ハ自然鉄砲玉ニ当リ死ル者計リ也、寄手ノ勝利一度モ無リケレハ、遠卷シテ攻也トテ、軍兵少ハ残 テ、嶋津兵庫頭公朽網ニ引退キ在陳シテソキタリケリ、新納武藏守其外六千余キニテ玖珠郡馳向、津ノ無礼ノ城ニ賀悦・芝・小田・長野ナト云者共多勢ニテ籠城シタリケルヲ、新納武藏守押寄テ、此城郭ノ要害ヲ見テ、人間ノワサニテハ攻落シ難ク思ヒシ、サレ共時ヲツクリ矢合シテ責戦ケレトモ、岩尾 ニ聳テ立ノホリタルケンナンノ城ナレハ、寄手ノ討ル計ニテ城中ハ少モ痛事ナシ、武藏守モ重テ智略モ有ヘシトテ、遠陳取テキタリケル、新納右衛門佐久持ハ其勢四千余キニテ分郡ヘ馳向ヒ、田比ニハ当所ヲ知行シケル、田比平介統員ハ多勢ノ者加ケレ共、府内大友義統ノ旗ニ下睨トカタメテキタリシカ、龍王迄義統ノ供ヲシテ指越ケルカ、其アトニ田比平介統員カ養母家頼ノ老若共、松無礼ニ籠城シテ居タリケルカ、城中難所ナレハ輒攻落シカタク有之、朽網ニテ伝聞其上後矢ヲ放ヘキ事ノナシト聞テ、朽網三河守入道カ与力ノ者共ヲ案内者トシテ、夜中十二月七日ニス分郡何南見 内サシ越、夜ノ明方ニ松カ尾ノ城ニ押寄、時ヲトツト作りケリ、城中ニ齋藤將監 彼矢門幡ト云者ヲ先トシテ四百余人計有ケルカ、同時ノ声ヲ合せケリ、齋藤將監ハ鉄炮ノ達者ナリケレハ、大手ノ木戸ヲヒラカセテ、大石ノ影ヲ楯ニシテ扣テ敵ヲ待キタリシカ、寄手ノ足輕頭ト見エテ、小

川掃部兵衛ト名乗テ歩武者三十キ計クシ、一陳ニ進タルヲ待　テ坂ヲ登上ラントスル所ヲ、矢比ハヨシ、タメテ放シケレハ、目付ヲ違ヘス矢坪ヲ指テ、胸ノ加ヨリ　通サシテ^{ヨメズ}タラス、馬ヨリ顛ニ落ニケリ、是ヲ軍ノ手初ニテ、城中ヨリ小野丸兵衛・東家平介・土師弥七ナト云者七八十キ、面モ不振命モ不惜、爰ヲセント、戦ケルカ、寄手ノ軍兵　ラレテニ　計引退ク、寄手ハ大勢ナレハ、荒手ヲ入替^レ攻戦ケルカ、城ヨリ是ヲ見テ、味方勝又　テキホイセリ、五十キ計見出、新納右衛門佐久得カ勢五十余キノ勢共馳向テサン^レニ責戦ケレハ、寄手ノ勢モ責立ラレテ引色ニ見エケルトコロニ、加佐波天同幡ト云木ハ前方朽網三河入道ヨリ内略ニテ、薩^{ツマ}廣^マへ組テ後矢ヲ射ヨカシト云合タリケレハ、能柄トヤ思ヒケル、城中ニ火ヲ　テ焼立タリ、黒煙天ニ充、北南ノ河風四方ノ山々ヨリ嵐ハケシク吹ヲロシテ、城中既ニに焼立タリ、寄手ノ軍兵共是ヲ見テ勢カ、リテ攻メ来ル、籠城ノ老若男女童部周童ヲタメキ行方モ弁ス、取モ

リケレハ、通ントスレ共川キシハ高シ、漲ル水ハ岩カト大石ニ礙リテ瀧ナリ、瀬マクリ落テハヤシ、女童部老若ハ河ニ溺レテ死ル者数ヲ不知、船カ尾ノ城落テ火々天ニモエ上ル、爰ヤ彼ニ登城シタル大友方ノ者共、是ヲ見テヲノツカラ氣ヲクレニ成テ城ヲ明テ落行ケル、武宮辻台ノ城・橋爪鳥鼻ノ城籠リシ軍兵ハ、船カ尾ニ敵寄カケテ、閤鉄炮ノ音ヲ聞付テ、加勢ノ後矢射ントテ我モ^レトハセ進ミケルカ、黒煙ノ立ノホルヲ見テ、ハヤ落陳ト見エタリトテ、道ヨリ取テ引返シ、老若童部ヲ扶ツレテ、大津留河内守鎮益カ在陳ノ松カ尾ノ城ニ取籠ル、新納右衛門佐久持　武者ニテ有ケレハ、船カ尾ノ城ヲ輒ク攻落シタルイキホヒニ、大津留

松カ尾ノ城ヲ攻落サントテ、同月ニ松カ尾ノ城ニ押寄テ見レハ、四方難所ニテ、岩岸峙チ谷ハ幾千丈ノ深サ共不知、鳥ナラテハカケリ難ク思ハレケレハ、矢入ヲモセス取テ帰シ、其日ハ人馬ノ息ヲ休ントテ、松カ尾ノ城ニ野陳取テソキタリケリ、明レハ狭間山城守鎮秀カ籠リ居タリ權現山ノ城ヲ攻メ破ラントテ押寄ケルカ、是モ難所ノ高山ニテ、鳥モ輒ク翔　人間ノワサニテ力攻ニナリカタク、殊其身大身ニテ多勢取籠リ、城中ニ人数居アマリ　キ、山ノツ、キニツハメカ城トテ有ケルカ、椿与力ノ軍勢ヲ入置タレハ攻カネテ、数日　過ケルカ、新納右衛門佐久持若武者ナカラ高智ノ賢キ仁ナレハ、色々ニ方便狭間山城・松カ尾ノ城面所ノ城ニ大勢ノ敵　リ居タリケレハ、無心元思ハレケル、扱龍王迄義統公　供仕リシ宗徒ノ人数、宗像掃部介鎮繼・吉弘加兵衛尉統行・其弟田比平介統員・大津留河内守鎮益・田比六郎統辰・臼杵彈正統光・寒田六之進統政・齋藤勘介・賀求主膳・秋岡式部、其外宗徒ノ人々龍王迄君ヲ守護シ、敵言同シテキタリケル間、大野郡・直入郡ハ　嶋津ニ隨身シテ、志賀　左衛門カ大友ニ無二ノ心指ニテ、岡ノ城ニ籠城ニテ居タリケレハ、　嶋津兵庫頭モ朽網ニ睨ト在陳シテ居ラレケリ、大友左衛門義統豊前龍王迄引退キ玉ヒ、シカモ豊後国ニハ臼杵丹嶋　ニ宗麟公御在城ニテ、薩^{ツマ}廣^マノ軍勢攻兼テ引退ク、佐伯權正カ城・岡ノ城・松カ尾ノ城・玖珠津無礼此城ニ籠リシ者共ハ、大友方ニフリハモナク心指　ナレハ、薩^{ツマ}廣^マノ軍兵共無覺束思ヒケレハ、日田郡・速見郡・国東郡迄ハ討入カタクシテ、　守ハ朽網ニ在陳、嶋津家久公ハ府内ニ在陳、伊集院美作守・白濱周防守　新納右衛門佐久持　庄滝ノ河内ニ在陳シテ、薩^{ツマ}廣^マ使者ヲ遣シ加勢ヲコハレテ、後詰ノ　ヲ待

テソ居ラレケル、　由ニテ權現ノ城ヲ引退キケル、船カ尾ノ一城計コレ加　佐波矢カ後矢ニテ輒ク責破リケレ共、松カ尾ノ城・權現城、

二二一 島津義久書状

誠到此境遂発足候之処、両口之諸城等任利運候、為如斯之祝意、使書^并鉄放到来、懇志之段歎悦候、然者従最前以御入魂之首尾、府内表迄輒属所勘、刺千斛・長宗我部敗北之儀、自他国之覺大慶不過之候、弥对残党へ被廻計略候之者、一着不可有程候哉、猶巨細之旨年寄可達之候、恐々謹言、

拾二月廿日

義久(花押)

入田丹後入道殿

二三一 島津中務大輔家久譜

家久在于府内熟讀、豊後半国已入手裡、雖然諸将争雄、而不所退治敵国之思大勇、或難遂首尾乎、然則絶粮道泥前後進退無如之何、予不可無其謀、由是使樺山兵部大輔忠助退三重守松尾城、乃天正十五年丁亥正月十八日、忠助発於府内到於三重、素加新納縫殿助・平田狩野介之守其城、所以通道之追凶徒也、

二四 樺山紹劔自記

一中書は府内にして年を越候而、目出度春^{天正十五年也}の始也、忠助

ハ岩や城攻之時石打ニ合、從塀涯堀底ニ打落されければ、
とも、此城責取らずして薩州衆開運事難成、然ハ敵に
打合戦死仕より外無別儀と思切つる間、起直り少し心
をしつめ、又塀ニ付て責戦程ニ城手ニ参候、就夫気合
然々候ハね共、玉泉と云唐の名医養性申候間、仕立候
而、彼豊州入御当家の御一大事と存候間罷立候、利満
此度之運をも見申候、めてたく候、先くいとま申帰
り候すると申て、正月五日六日比中書へ申候へハ、御
用之子細有、今卒渡罷居候へと也、十日比ニ被仰ける
ハ、豊州を嶋津殿御敷可有事不取覚候、其故ハ諸人物
ほしかりに打成候、分限を望心計にて、更手をくたく
事なく、当又武庫様御手花無然々ニ付、あらそう様成
御気分、惣大将之御振舞ニ不成合候、是悪事共候、伊
十院右衛門太輔も底意地不可然候、我々も兎角申延候
而歸申度与中書被仰候、定而此分見及候半、乍去忠助
へ談合申候する事候、以一人可申候間、被仰候而平田
伊賀守を御使にて、中書御意趣ニ忠助を頼存ニ而候、
三重口ニ御坐候而彼所之番被入御念候得、其故ハ必国
中へ押入候人衆長番不届候而打歸候する、其時彼三重
を敵取切候ハ、無行方為体笑止之儀ニ候へ共、今敵
人此等之底意不知候而、目出度など、申候事、当家之
運浮雲くくと存候、是非共忠助三重へ御坐候而、可然
候する由承候、我等御返事ニ申候ハ、承候通一々合点
申候、乍去今日迄ハ万事目出度事計候之間、御暇と申
候処ニ御奥意御坐候而被仰候、追而御返事申上候する
と申候へハ彼使又押返し来候而、早々敷御打立候得、
一重ニ頼思召由承候、又忠助此国之様子何と見申候哉、
御談合と被仰候、其時御談合と候へハ、申事ニ者、御
意之様ニ我々も存候、御油断有間敷候与申候、其後高
崎越前便ニて具足・茶壺など給候而、又御内談共候、

三重へ番直し候而、彼所頼思召之由也、左様ニ候ハ、
御意次第と申候而、正月十八日利満迄罷候而、次之日
三重へ罷着候、十九日ハ在郷へ宿申候而、次之日松尾
の城へ上り見申候、城ハ岸切廻し候而、番や一ツ作候
而、平田狩野介麓に被居候、新納縫殿助も麓候て、
夫丸之様成もの老人ツ、番ニ上七候、城之後又向之原
ニハ、高屋衆とて地下衆七百人の衆と申候而罷居候、
是を見申候、当こそ中務被仰候ける、今分ニ候へハ遠
慮不入事と存候、縫殿助殿狩野介申候、乍推参我か
の上城へ移可申与申候得者、我々も左様ニ存候とて、
家作候而廳而罷上候、如此候而聞合候へハ、城分近き
ハ巷里、遠きハ式上り、人数二百三百、六七百、千式
千三千宛にて柀たる在郷衆初皆撫付て、礼儀迄ニて有
ける人衆拾三ヶ所敵と成候、其中ニ小牧といふ城、鍋
田と申城ニツハ此方分人衆少々差籠被置ける、敵仕取
候や、さい木にうの島より野伏日々打廻候、松尾麓之
人衆計未其色不見得候、日夜用心仕候而人質を取手ニ
付候へハ、地下思付由也、如此候而日州之通路絶々成
をおきのひ、中務御座候へ与度々注進申候間、この在
所江中務待付候而打廻を被指候、然処ニ三城衆南郡江
番とて被参候を、先々此地へ留置申候之間、あたり五
六里か間無敵追払候、如此候而思ひ迷る体ニ候、然処
ニ京都分木食上人被下候由ハ、大友方天下を頼存之儀
ハ、就夫御楯とて彼木食上人被差下候也、左様之祝と
も下輩之者聞及、從京可然聞得候とて、味方ハ勝ニ乘、
又緩々子細も日々まさり候、如此之砌、美濃守と申候
を大将ニて豊前へ着之由聞而、去ハ地下等之者心替し
て、武庫様も伊集院御供ニ而楠飛田分府内江御坐候、
木食参会也、又府内を暮方ニ御出候而退被成候、御門
前分矢を射、応地下之族も候へ共、少もさわわすして

御開ニ、清田と申城分合取切候へ共、御前ニふさが
る人衆多々有之間、事共せず打通候而、日差出る比松
尾の城江御入候、今こそ中書之御遠慮も我々前ニ辛勞
仕候つる儀もあらハれ候也、去ハ前之夜半計ニ福島衆
高田と云城ニ候けるが、樺山陳屋ニ来候而被申候、昨
日高田之地下衆心替仕候而、伊集院美作守・白濱周防
助父子を始として打死にて、伊集院下野守ハ府内へ御
談合とて、三日先より被参候、府内之由ハ不知、國中
皆々如此之由申候、爰元御油断ニ而候与被申候、彼人
河ニ入候歟、又雨ニぬれ候や、震候而散々敷体ニ候、
忠助委敷承候、此段最前分存付候事ニ候、先々悠々と
候得とて、火を焼小袖共着替、ぬれたるをあふらせ候
而、食酒など賄候へ、御身之事ハ中書告知せ候事、忠
節の儀ニ候と申、則倅者共ニ申聞せ候由ハ、今更さわ
くへからすあてかいの前也と申て、弥落着候とて静ニ
罷居候を彼人被見候而、いやく御油断ニ而者不可然
候、此国を打捨本国へ引歸候する御談合之由候、縦令
御存命候共如此候、いわんや跡之事も不知候与申候間、
鳥の鳴声を聞て中書へ参候得者、彼にも聞ゆる子細候
けるが、此方へと仰候、先刻福島衆来候而、如此之様
子申候、実事ニ而ハ候ハしと存不申上候とて其由申候
へハ、爰許へも聞得申候、于今不及沙汰とて中々常之
御雜談也、さてこそ為此爰許番頼候、国中人衆此城へ
のき入候ハ、何程なりとて此元ニて籠城之用意と被
仰候、然ハ日指出候比早打来て、夕部 武庫様府内御
開にて候、夜入候而清田衆通路を取切候、跡之事者委
敷不存候与申、当ハ何所迄も御迎ニ参候とて、中書も
又七殿も参候假、規久最前ニ懸付候へハ、武庫様靜
ニ御出候、御供申皆々城へ御籠ニ而候、其夜御談合候
而、又松尾を御開之由候、いかなる者の告渡候けるや、

夜中三人衆引取候而、夜明候而見候へハ城之衆計也、日指出て 武庫様城を御下候而、程経て中務分柁山江御礼被成、早速罷帰へきよし承り候折節、忠助莞尔として越ノ王呉ニ事ノ如く、人々有腹心之病痢ハ如疥癬と申候歟、大友身之難儀ニ及候とて、天下を頼奉候する事を無慮慮故と雑話など申、まつ早々中書先ニと申候へ共、又御使有、猶も同篇ニ御返事申候間、左有者御坐候とて、三度之御使也、遙ニ御坐候而、忠助・規久今ハはや孟之反か心ちせよと互ニ語り、心静ニ松尾城を罷下り候、地下等之者共立并候而、是を見物仕候、其中ニ地下之者悪口を仕たるを一兩人打せ候而罷出候へハ、敵味方之境見分申候、如此候而心静ニ千葉師堂江參見物いたし候而、緩々と坂之向上る処ニ、從跡鉄炮を打懸候へとも物共せず上りけるに、坂より上を輿畑と云所之人衆未明より可助切覚悟ニ而、手火矢重ニなりけるを跡ニ者不知、各鉄炮衆を指合せ射のけてハ通る程ニわつらひなし、跡ニ者三城衆吉利殿其先ニ柁山參候処ニ、皆々のき上る処を見而、三方より敵押懸候而、ひたと着、其時任無了簡三城衆立留候、然処を後之向之尾分吉利殿相注「二字本ママ」立留候跡ニ、由有けに候与大音にて申人有り、忠助聞付候而、規久若役也、見つろろひ候へと申候、規久則弓手之方へ馬をおり直し、道上を矢たり計り懸掃し時、初より取切候輿畑之方之敵に取合、太刀下ニ敵を打首差上たり、是を見て追懸り、三城・佐土原・穆佐衆之手柄首数百に及ぬ、如是ニ而心安し、次之日山々分鉄炮射候へ共のきとり、

二五 島津義珍書状

返々御聞之事、於 霧嶋社頭御申之儀も勿論有之、又被成勸請、從何方モ被伺 御神慮事も先例多々候之条、余仕悪ま、如此候、自然談合衆之内ニ表裏共候て気任之由、言上之方もや候之覽と、寔乍邪推ケ様にも存計候、右条々、貴所為得心申候間、相構而書体他見有ましく候、

改年之御吉兆千喜万悦、多幸々々、仍如存知至榊牟礼滞在候処、於三江口依勝利、府内へ罷越候て可然之由、被申衆モ有之、又南郡ヲ堅め候て可然之段、被存候方モ有之、又從秋月者玖珠郡ニ火色を立候ハ、秋月事者不及申、高橋迄家連続之儀不可有別儀之由、使節被指越、頼ニ懇望候之条、何共難止故、談合衆ニ相尋候へ者、二三方之儀召惡候之段尤候、当者可為御神慮之山、各被申候条、任其旨 霧嶋へ御聞申候へ者、玖珠郡之可為行之由、御神慮事成候間、朽網致陳易、玖珠郡へ先勢指越候処、先々松木与申城冷落去、其外二三ヶ所所属利運候、御神慮寄特候歟、然慮從府内可參之由被申越候間、既雪月廿八日ニ如府内立候処、白刃之内候之哉、相賀鶴并一兩所岡より致破却候、就夫道折・入田左馬助を始各地下衆、府内へ罷通候てハ、南郡事皆々可相易候、左様ニ候ハ、府内事通路可為不通之由申候、拙者モ令納得、自然府内へ罷越候て南郡打替候ハ、此跡之辛勞可為徒事存、其日ハ相留、年頭ニ又府内之様打立候之処、野上よりハ頼越山之儀被申候、又地下衆ハ如旧冬朽網へ滞留ト申候間、榊牟礼ニてのことく仕悪候て可為如何之由、談合衆へ尋候へ者、又々御聞申御神慮次第可然之由、皆同被申候間、又 霧嶋へ伺 御神慮候へ者、陳易之儀野上へとおり申候、ケ様ニ兩度まで御神慮事成候ま、中書を朽網へ相頼候て此方へ罷越候、然処以気任令陳易候之由、大守様被思召候哉承候て、心遣千万候、曾以私之非分別候、

種々致談合、其上御神慮重く存如此候、其首尾候之哉、帆足之事致落城、打続數ヶ所任存分候、乍重言聊無私曲之段、出合之時者執合所希候、余者美作守可被申候条、省略候、恐々謹言、

二月七日 （義珍（花押））

喜入撰津守殿

「此御書、喜入季久譜中ニ在リ、正文在当家トアリ」

二六 殉国名藪

天正十五年丁亥

正月、犬童又十郎戰場詳ならず

二月十八日、甲斐右京亮重尚前年より豊後小牧戎将にて、岡の両城を陥す時、戦て死之、家僅百八十人死之、甲斐加賀守重武・甲斐肥前重朝

高士、甲斐豊前守重利・甲斐甚七重房・甲斐長鶴・甲斐重正・甲斐弥太郎重次・坂本飛驒・福永四郎三郎主

百三十余、丸田郷兵衛家久、矢上弾正同、宮之原淡路同、瀬之尾二助同、志和地治部太輔豊後にて戦死、年三十四、前年二治部少輔載す、同人ならん

志賀播磨介普通城主にて豊後に戦死とあり

三月十一日、長井縫殿介北郷忠虎臣にて、貴明公師を野上よ戦ひ、黒田将監同、山内備後守上

「三月十一日ノ下ノ貴明公ハ松輪公ノ誤」

十五日、佐多常陸介久政松輪公豊後より師を回さるの時、瀧人、其他數人、伊集院美作守久宣、鶴崎或清田にてとも、百人死之、年五十八歳、池山掃部兵衛尉久宣と或、淵辺平内左衛門元秋

年三、平田新左衛門尉宗張年四十二、或四十八、長谷場出雲守純真此日鶴崎戦死、松下越中守或刑部、池上掃部兵衛尉池山、福永藤五郎、枝次左兵衛、志和地外記、伊佐敷左近将監久理、族、年二十五、從卒五、赤崎神藏神祇佐とも、山口平内左衛門上、同、

同、

場仲左衛門上、松元源助同、村岡休丙同上、或作山之内藤太左衛門上、朝隈兵部上、鮫島四郎左衛門上、名越助左衛門上、安楽大炊助上、春成内藏介此列二あり、疾考、新納民部太輔同上、此に平田采女伊集院久宣從兵二て同し、、子孫孫佐ノ士なり、、永谷河内梓、越にて戦死、、阿多筑後守死之、、大寺仁兵衛、梓越にて死を蒙り、、田野三回て死す、、豊後坂裂二て戦、、有川兵部、豊後鷲ヶ、死、年月なし、但、馬子なり、疾考、此月或四月十、宮原筑前守景種、肥後隈の庄ニ在番し、御柏原、某與三郎、景種小姓にて同し、、川畑甲斐守、花の山城下兵船取切り戦、死、月日詳、四月十七日、、島津三郎次郎忠隣、京軍と根白坂日白坂とも、、四本半九郎忠次、猿渡越中守信光、年五十四歳、時家臣、院日向守忠兼、根白坂に戦ひ死す、、年十九、伊豆重年、村岡図書介重栄、子也、吉富次郎五郎忠堅、廻狩野介頼政、別府隼人佐頼延、酒勾新左衛門尉、或作左衛門、本田帶刀親次、赤松彦次郎則基、義秀、新納藤四郎殿、助久時の子、伊集院宮内左衛門忠吉、同人歿、父子歿、喜入季久也、年十七、伊集院宮内左衛門忠吉、同人歿、父子歿、喜入季久也、年十七、長野豊前守、季久臣、年、木通志岐国陰忠、村松弥太郎上、、貴島勘解由上、島原勘助上、貴嶋源四郎上、来住備前綱、雪、北郷時久臣三百人、小杉図書頼弘上、高橋某、吉加江、某同上、帖佐治部宗典、根白坂戦死とあり、、此日ナルヘシ、、二十八日、、牧参河、桂神祇忠助の臣にて、従て平佐に城守し、、村原对馬、村原新助、桐原平右衛門、有馬分左衛門、前田四郎左衛門、岩本外記、松田主税助、藤田五左衛門、児玉休介、有馬右京左衛門、村原左衛門次郎、開聞寺代官金兵衛、木通某、有馬権左衛門、森主税助、田中出雲守、田中弥七、高城讚岐守、松田助八郎、拔見筑後守、円満寺屋敷之大左衛門、内門乙名一人、皆平佐の城に、此年、、逆瀬川奉膳兵衛、武安子なり、豊後の野津にて戦、死、二月八日の事なるへし、下

も同伊地知丹後守重政・志和池治部大輔忠繩年三十四、伊地知新三郎・鬼塚兵部左衛門弟八、坂元郷兵衛城以下は皆日州高、細山田内記・日高弥左衛門・米田孫十郎・山下兵七・石原助太郎亦新納院高城に於、豊後佐伯にて戦死とあり、、此に疾考、年月関、、郷田安芸守兼年、あり、此に疾考

二七 島津義久譜

天正十五年丁亥正月廿六日、義珍換陣於球珠郡野上城、彼地諸城主粗降旗下、然而下城未降旗下、川上上野介久信・町田出羽守久倍・新納武藏守忠元等、領阿蘇家之士卒・攻彼城、即日破却外郭、乘得二九斬戮数多之敵、本丸雖堅支五日而陷焉、且復岐部・恵良・切加布・小国之北里某等、皆以降伏矣、津ヶ牟礼者不背大友氏、而不降我之旗下也、天正十五年二月上旬、攻下莊某之未降伏、不得防禦而請降、以応其求、然而未下城之際、殿下秀吉公算島津氏之罪曰、匪啻不用分国之令、且復追散仙石氏・尾藤氏等、殺戮長宗我部氏・十川氏及筑前州岩屋城主高橋鎮種入道紹運、是皆其罪所以不可赦免者也、然則向海西以不可不征伐渠之党徒、乃到著于赤間関、其勢殆乎庶幾二百万騎、其声已振豊後、由是往昔降来者皆背島津氏、傾心於大友氏而已、

二八 北郷忠虎譜

同十五年丁亥季春、殿下秀吉公催於畿内中国四国之兵数十万騎、航于西海、大旗将入豊後之日、所属于旗下之

士卒忽叛、而塞大鶴城之通路、且強敵競来、是以僅拭得鰐涎退于府内、此時忠虎家臣長井縫殿助・黒田将監・山内備後守戦死于大鶴城下、其外死者多、同年三月十五日、忠虎従 太守兵庫頭義弘公、凱旋於府内、同十八日、入于日州県城、

二九 樺山忠助譜

天正十五年丁亥正月五六日之際、忠助訴中書公曰、去年陷岩屋城之時、愚身不幸而所以投之当大石、加療養未快心身、而今度從貴駕為発向、逢于利満頼光之合戦因勝利迄府内入手裏大慶之辰矣、於忠助者蒙恩免欲帰国云、同十日之比、家久主曰、豊後州迄後島津殿可成領知者未能謀知、吾子慮之則諸人有怨、而專所領之望、更無碎手之功、伊集院右衛門大夫臆意亦非予之所好、所忠助之欲帰国者予知焉、為之之故也、吾亦與忠助俱有帰国之願、雖然進退敢不可私、且亦有可遣一价達之事云、其後使平田加賀守達曰、情慮今度征伐之首尾、所攻入于当国之士卒、長不得警固、而為帰陣之催乎、及其時敵軍若警固三重塞通路、則吾之軍進退何之如乎、忠助三重之為警固者是幸之幸也云、忠助報曰、貴命段々所以謹承也、去年当国自伐入之初当年至今日、只有吉事而無惡事矣、故請帰国之免、然而無免許、而且加一役為思慮、而後宜告報矣、加賀守即時再来曰、不日所以願進発、敢勿彷徨、忠助之思慮如何、無所殘有言、則宜依善言也、忠助曰、所命之遠慮共以金言而已、敢不彷徨者可乎、又使高崎越前守伝曰、三重之警固偏所以頼者也、且亦賜甲冑頼、與好茶一壺、如此則無所辭、不得已為忠諾、而正月十八日、発於府内、其夜宿于利満頼光、翌日著于三重、宿于民屋、同廿日、登于

松尾城、見構以下用意、則造立於警固之一小亭、類于人足者教一人守之、平田狩野介・新納縫殿助者居城麓、又城後與向原有人家、問之則曰、称高屋之地下人等共居七百余輩云、忠助寒心、即謂伴之兩人曰、吾移彼城可警固、速營草亭為居処、而後地輩人家之間遠近多少則曰、去此城者不過一里二里三里、人数亦或二三百六七百、或一千二千三千、或構楯、或在郷郡居者十三ヶ所、初者雖屈旗下、漸皆為敵、其内小牧・鍋田之両城者、味方少少籠置、雖令為警固為敵所陷、故發野伏於佐伯丹生島、然而松尾城麓士卒未有違意之企、且使彼等出質、撫之懷焉、依之補日州之通路將絶、所以俟家久公也、其後家久公渡御于松尾城也、于時 將軍家秀吉公教島津之罪、欲為征伐向海西、已有渡関之戸之間、且亦高野木食上人・一色宮内少輔來為和睦之媒、而不合于吾之將心、於茲議曰、有佗邦與大軍戰、不如早歸吾國以保日隈薩三州要害之地依地利、三月十五日夜半、兵庫頭義弘主發於府内之路、遮清田之郷強敵一兩輩討捕、其外追退無恙歸陣之旨、粗有告來者、故中書公・又七殿為迎進發也、愚息規久最前企參迎者也、同十六日日出、著于松尾城也、因茲兄弟潛以評議、明日十七有開陣之議定、未令諸卒知、悉夜中為開陣矣、

義弘主者待日出發於松尾城、其後中書公之父子出城門也、從其後忠助・規久為開陣、爰地下之貴賤群聚、而為見物、其中有惡口之族、一兩輩討殺之、而後令進發矣、其路有千葉師堂、兼有所聞以偽參詣、緩緩然致礼仏、而後踰嶮難之路辺、有称奥畑之處、彼迎之敵勢遮前途、未天之白先陣之輩發鉄炮為矢軍、悉射退、而後押通、忠助之後者吉利下総守率三城師旅、已過嶮難、于時敵軍自三方襲來、故三城之勇士立留、而為防戰之勞、此事未知、自向之尾忽以大音有告度者、于時忠助謂規久曰、為若役宜合力也、其言未終、規久引直馬於弓手、向道上懸出指

會于奥畑之勢、強敵一人討捕、其首貫太刀以高指上矣、因茲三城・佐土原・穆佐之軍兵等、競前斬敵首數百、故凶徒退散者也、其翌日道路之左右、雖發鉄炮於諸山中、不屑退去、而躰梓山無恙著於日州臼杵之郡矣、於茲有恨愚心者曰、昨日高動野之合戰得勝利、而發凱歌遂本意、雖然愚息久高者有南郡、其忘安否如何思全吾身、而不再有愛子之念者口惜哉也、

三〇 樺山久高譜

天正十五年丁亥春三月、豊後州開陣之時、久高者島津左衛門督歳久公之為從軍向肥後、所退之路過白根城、敵軍蜂起而以為煩也、支前途則為前鋒、逼於後則退為殿、一夜之間打太刀者七八度、如此以為勞苦漸敵勢防退、而後有歳久公之後、爰岡之城主志賀小左衛門尉親次道益之子、道輝之孫、引率徒党、逼來者太急也、久高者相良之家臣與犬童美作入道休矣・同軍七・稻富將監等俱阿蘇之有坂無城、敵軍圍坂無者未知幾重、任運於天防禦不怠經三五日、于時新納武藏守忠元・伊集院肥前守久春・町田出羽守久倍三輩之從軍歸來為後圍、城裏得勇力、翌朝四月十六日、開城門向大軍、尽筋力為防戰、敵軍漸敗、故斬得敵首者一百有余、而後全身以為帰国者也、

三一 内覚

〇八三二号トシテ取ム。

三二 長谷場越前自記

一府内中務太輔家久者、鎌田出雲守を被召烈、御參陳まし〜て、同十五年丁亥正月五日より御評定事終り、同正月廿六日に九多網之城之御留守番ニ被定、扱又御神慮ニ被任、義久様之御陳処を楠の郡内野神か城へなをさせらる、彼の表の城主者皆御幕下ニ參陳す、か、りける処ニ、志岐の城の悪党等楯籠る処を、新納武藏守と阿蘇方ニ被仰付て、若手の軍兵相具して合戦を致す、太刀下ニ敵多く打取て二の丸を攻破り、上は城計りニ詰成て、夜白五日ニ攻果してそ被捨ける、其後兵もの開陳して野神之御陳ニ在番す、然者彼の表の悪党ニ或ハ參陳仕る、或ハ落居し、残る処もなかりけり、去間、天正十五年三月十二日、野神之御陳を直せられ、其夜ハたけ宮といへる処ニ御在陳を被成けり、此時ニ地下の者共京方ニ心をよせて致内通処也、彼近方ニ湯の城として有けるに、京衆の先手ニ黒田官兵衛尉指籠り万方ニ計策す、此事世以無隠、足輕衆を五拾騎計り被打出さ、湯の城よりもたけみやニ寄かへる折節ニ、右之足輕衆懸合せ、手柄を碎きて防戦し、敵十五六人打取て、夜中の事ニ而有りけれハ、打洩したる者共を万方へ追散して如御陳被參けり、同十三日ニ者早旦より勝吐氣を被作せ、其儘ニ府内ニ御陳易を被成宛、同十四日ニ兵船少々浮出て、沖の脇と萩原と両村を放火シて引退ク処を、味方の軍兵つゝ、き合ひ、各高名仕る、其討頸の実見ハ、為御名代川上上野守被打出、役者河田駿河守ニ被仰付、然処ニ方々より物いひ共出来る、時節や同三月十五日巳之刻計ニ事成ニ、木食上人一色宮内少輔と打烈て、御太將軍武庫様の御陳所へ始て御礼被申上、此時之御祝物一段殊勝之御仕合申計ぞなか

りける、

三三三 長谷場越前日記

一日州表より 御大將軍修理太夫義久様御発足を被成宛塩見の城にて御越年ましませは、先手の御大將軍ハ中務太輔家久を被遣、梓山を打越て、其中道三年寄の城柵を破却して、村々を放火させ、三重の城に被討入、近辺の城主共残り少く召出し御頼有りけるに、尾方と云へる悪党等之憚り申処を、伊集院下野守・同名美作守・本田下野守・上井伊勢守ニ承り、多勢を以て被攻、城内の武者共が手を碎といへ共、四方より火を懸け吐気作り責けるに、大地も動く如く也、なしかハ以て可勘へ、唯ゆみくと責崩し、物ニ能備ふれハ、尾方等が存外ハ、卵を以て石を討ニ異ならず、諸軍兵の勢ひニ知るもしらんも押なへて進む計の気色也、其後ニ寄せ懸て盤東寺江取て、先勢を打出し寄する敵を待居たり、去程ニ南郡表の御大將軍武庫様、上二重表之御大將中務太輔と申者、御兄弟御中ハ水魚の様ニましゝて、互の使節ひまをなし、鎧嶽と鷲の台の城ニハ南郡より御手勢を御指籠、又利満前光と三重ニハ日向口之御人数を被遣処ニ、彼の城主ハ是を見て内にて兵儀を致し宛、府内江注進仕り、則御敵ニ罷成る、扱悪しきさなしと云、軍兵を被指向、我もくと攻破り、上城計りニ成る處ニ、内手の猛勢統合ひ、跡を遮る謀略をなす、用捨の兵ものきつと見て、御方の勢ニ下知をなし、しつくと繰り退けて、陳中ニ被討入、其夜も払曉ニ成りしかは、各支度し打出て、大河の渡りを見合せて戦儀を加る時刻也、京勢と指見得て大登り馬

駿もこ、やかしこに備へつ、左も花やかに出立て、城近く成る儘ニ打入らんとせしか共、薩摩の兵ものが手なみの程を見せんとて、太刀を取るとき作り、而も不振切て入る、京勢も懸り合ひ一合戦仕る、薩摩方の兵物ハ馬ニ離て早き事、猿猴の梢を伝ひ、新ら鷹が鳥屋を出て雉子ニあふごとく、此方タ彼方タと散々ニ切る程ニ、花の様成京人ハ、馬を乗捨て無力散々ニ落て行く、是を彼を聞よりも我先ニと打程ニ、切捨てハ敷不知、せんごく返せと言葉をかく、権兵衛尉とハ名乗つ、口と心ハ相違して、をく馬の一物ニ捨鞭打て逃をの、く、名ニのミ聞得し豊州の上の原ニぞ走籠る、懸りける処ニ、御大將中務太輔家久を始めてハ、諸軍兵、一同二勝て甲の緒をしめて、田舎馬とハ申せ共、走る馬ニつきしよりいさめる事ハ無限り、上野原の見向への森岡ニ懸付て、御着陳をわします家久の御心中、味方も敵も諸共ニ感せぬハなかりけり、懸り暮る処ニ、中務太輔合諸軍兵へ御礼をこそハ被成けれ、将又今之御下知ニハ、時刻を不移今宵府内入りとそ被仰、軍兵是を受給ひ、我先ニとそ進ける、彼を見る敵方ハ取物を取あへず、友義宗を引立て豊前を指て落て行、被打洩し京衆ハ千石権兵衛押立て、跡ニ先ニと逃て行く、薩摩衆是を見るよりも上の原ニ懸上て、分捕り高名遂ニけり、於此節ハ足軽や山野郎、かゝる奇特ニ逢事ハ室の山と覚得たり、金玉可得と云ま、に、義宗の重宝や千石の捨物を拾ひ取り、町家百姓手ニ付て目ニ余たる土蔵を、三ツ五ツ宛各々格護せぬハ無りけり、同十二月十二日より徳を得て、明くる弥生の中旬迄、倉開き蔵納メ我を増りとせし間ニ、年月キ日次は押移り、山野郎者堪忍もことならず、皆本国ニ打帰る、跡ト者無人ニ成事を豊後衆者喜びて、本意を遂んと友義

宗江注進す、亦京衆江茂言上す、扱者宗麟・義宗の頼ミ被成是一ツ、千石権兵衛尉指下し置処ニ敗北したるは一、筑前国之内蔵助被討果是一ツ、彼是為雪恥辱西三拾余か国を駈催し、太閤様の御心も築紫方ニ御発足とぞ聞得ける、先ツ衆賦り者ニ夕手に分け関の戸を押渡り、筑前筑後肥前肥後の海陸を関白様之御討下りましませば、御陳問と号し宛、東西南北無残諸軍兵被指下、亦爰ニ豊前豊後ニ四国衆迄引卒て、御舎弟の中納言美濃守様御大將軍を被成宛、如雲霞被打下、先勢ハ豊後の内ニ湯之城ニ打籠ル、太閤の御先勢ハ石田治部少輔数万騎を卒て筑前前ニ被討下由、其間得有しかハ、御兵儀之為にとて、御大將兵庫頭者楠の郡より府内表ニ御動座ヲ被成宛、中務太輔家久、凶書頭久長ニ御評定事終る処也、又肥後表ニ被指向て、御大將軍左衛門督年久・右馬頭・薩摩守、此隨兵者町田出羽守・新納武藏守・同右衛門佐・伊集院肥前守・同源介・寺山四郎左衛門尉・町田左京亮・同名新左衛門尉・梅北宮内左衛門尉・二階堂安房介・猿渡越中守、此外之人々も我先と進出て肥後表へ被打向処ニ、阿蘇家の内北坂など云へる者心替りを仕り、跡切をいたすなり、かゝりける処ニ、伊集院肥前守・同源介を始として、右之兵もの手を碎きて合戦し、げきしんを退治して御舟表に被打出けり、然処ニ宮原筑前守隈の庄ニ在番して居たりしが、駈出て御方の軍衆ニ取り合とせしか共、地下の悪党落合て数か度の太刀討いたせ共、老武者の再期とて高き所ニ打上て、寄手の敵を一見して、少シのひまにおもひいて、逃るまし処を、兼ておもひきれときに至りて涼しかるべしと、日新様の御詠歌を乍恐も吟味して、亦切り入て無異儀高名仕り、其場ニ而戦死也、柿原名字も討死す、於此與三郎と云

果し、逃物者追散し、手を碎き高名す、

三四 長谷場越前自記

一同十六日三重之城ニ御光着を被成けり、終夜御評定最上也、御坐中の御人衆者、御大將軍兵庫頭義弘様、御舍弟ニハ中務太輔家久、川上上野守・伊集院右衛門太夫・吉田美作守・鎌田出雲守、此外之兵物も、我もくゝと進つ、同十七日ニハ、

三五 日向記

一京勢下向有ケレハ、豊後國中ノ者共亦薩方ヲ背、年頃ノ味方ナレハ大友方ニ属シ、色替セヌ人ソ無リケル、

三月十一日野上ヲ立テ、其夜建宮へ宿陣、翌十二日建宮ヲ立テ、其日府内へ引入ケレハ、アトカヨリ頓テ敵ト成、陽城ト取合ケリ、権現岳ノ狭間殿モ心替、嶋津へ矢ヲ射懸、同日ニ高野ノ木食興山上人・一色駿河守府内ニ着テ和睦有シカ共、嶋津気色ニ不合取暖故和談不調、豊後国乱入ス、嶋津方ニハ嶋津中務太夫家久ヲ大将トシ、二万余騎府内ノ城ヲ柵相支トシケル、秀吉公蜂須賀ナト召列ラレ、城ノ南北ヲ下墨光遠卷ニシ、責具ナト用意シ、稲麻竹葦如クニ囲ミ玉ヒシカハ、難抱ヤ思ケン、浜手ヨリ雨風ノ紛ニ船ニ取乗退ニケリ、然ラ速船ニテ追懸、二艘追留首トモ数多討捕ラセ玉フ、同十五日夜半ニ薩方衆爰カシコノ人数ヲマトメ退シヲ、追掛々々伊集院美作守・平田新左衛門尉・田濱周防守其外有名武士数百人討取也、夫ヨリ彼方此方ニテ

道筋ヲ取切シカハ、漸ク微命ヲ遁テ日州ノ如ク退散ス、府内城番トシテ大友宗麟・義統父子入置玉フ、亦相瀬ナトニ有ケル薩方番衆、色々道口ヲ乞請テ引退ケル、朽網ノ城ニハ宇土番代タリシカ、兎ヤ角調テ引取、根白ハ嶋津左衛門尉歳久番代タリシカ、是モ肥後ノ如ク引、入田モ薩方ノ如退、野上ヨリノ二手分テ嶋津右馬頭征久大将ニテ、町田・新納武蔵守ナトハ日向口ヲ通、秋月へ取合ントテ、上筑後へ打越へキ催ヲナシ、北ノ里迄打立シニ、豊後ノ城ニヨリ薩方衆日向ノ如退入由告来ケレハ、筑前ノ如越へキコトモ不叶、其儘肥後ノ如ク引キリカソへ、伊集院肥前求廣衆ナト籠居ケルヲ迎取、漸面白ク調テ引退、此里モ同心ニテ阿蘇ノ如引取、岡ノ志賀ハヤ坂梨ニ付テ陣ヲ取、新納武蔵守・伊集院肥前守ナト懸入漸切崩シ、肥後へ打出テ合子ニ籠、右馬頭征久ハ三船へ籠ル、

三六 島津義弘譜

天正十五年之春、丁豊後州帰陳之時、使赤塚源太左衛門尉重堅領歩卒五十人、往菅之迫増勢、携志賀播磨介宜到薩摩、且復昇甲冑一領・鉄炮二挺於播磨介、播磨介報曰、非翅得加勢衆、且賜甲冑・鉄炮、謹所以拝領也、於加勢士衆者即迨返進者也、当時警衛之將與伊集院三河守・犬童休意俱可赴薩摩焉、右之旨趣源太左衛門尉反命者也、後日聞之曰、源太左衛門尉帰參、翌曉與警衛士共、播磨介欲首途於菅迫之際、称大森彈正者為大将、領一千四百発於岡城、逼来於菅之迫、與守將為同意指揮汗馬、自辰時至未申時防戦尽筋力、遂戦死被傷者雖其数多、漸攻退太敵、委乘馬只甲冑帶之、與妻子共步行逃肥後州甲

へる者宮筑州の小姓ニテ拾六歳ニ罷成る、合戦場を切り通り三町計り過ぎけるが、返シ合せて名乗る様、此程ハ側ニ居て戦死之供を不致者、末世の恥辱と覚へたり、数ならん身なからも人者一代名は末代、早頸取れや各と呼ぶ声の内よりも、念仏を唱つ、腹一文字ニかき切て空く成し心さし、哀と問ぬ人そなき、角で時刻も移り行、肥後の国衆ハ媒坂とそ聞得ける、速々可致開陳と下知を加る処ニ、たに山党之族共後切を仕る、にくき者の振舞哉とて、新納武州ハ乗りたる馬を引返し、心有ん兵ものハ我を見次げと云捨て、谷山ニ切て入る、是を見る兵者ハ我先ニと駈付て、手柄を碎き責果す、敵強きと見得しかと、合戦ニ打負て数輩頭をそ被取ける、各高名を被遂て、八代之内ニ有る関之城にそ被着かせ、次之日者とふ朝ニ打出て八代を切り通り、あぜち山ニ打向ひ、亦求麻山の難処をも静くと被開せ、諸軍兵の有様ハ如何成る天魔鬼神と云へる共、是ニハいかで増るへきとほめぬ人はなかりけり、相良方ハ承り、此時ニ多年之御恩を報んとて、真幸越の上野迄堅固ニ送り奉る志こそ神妙なれ、去る間、豊後の国府内表の御仕合、其比ハ天正拾五年三月十五日酉の刻の下リニハ御退出そ被成ける、跡者放火ニ成りけらし、地下旅之人々も身を助んと入り乱る、此時に地下衆共宗麟の奉公ニ後切を仕る、佐多常陸介を始として、伊集院美作守・白濱周防介父子三人・平田新左衛門尉・長谷場出雲守・松下越中守・池上掃部兵衛尉・福永藤五郎・枝次左京亮・志和知外記各致粉骨宛、無余儀戦死を被遂、其夜ハ殊更雨降りて、無案内者の旅の道、くらきよりくらきに入ることくにて、手取くて行く路を、地下者共こ、やかしこを横入りして切り崩さんとせしか共、御方兵物落合て向ふ者を打

佐来也、

天正十五年三月十一日、去野上赴府内、今夜陳健軍矣、
同十二日、欲發於健軍、則 殿下之前鋒已来于湯之嶽者、
與小寺氏及權現嶽迫間某交心族共運籌策欲侵健軍之陣、
我軍相對競戰、而屠殺者十有六人、是以凶徒悉退散也、
揚勝吐氣、而到著府内矣、

同月十四日、叛逆交心者漂泊泊兵船、且復放火沖之州萩原、
則我之兵衆走進斬獲敵兵數十者也、

天正十五年三月十五日、高野木食興山上人・一色駿河守
昭秀持 義昭卿旧冬十二月四日、又去月廿六日御教書、
来于府内勸和睦矣、

〔此ニアル御教書 十四年十二月ニ載ス、参照スヘシ〕

然而不合于諸將心、而僉云、不如早帰我国以保薩隅日三

州中要害之地而待其時、由是各相議、俾弟島津左衛門督
歳久・同姓右馬頭征久為將、町田出羽守久倍・新納武藏

守忠元・同姓右衛門佐・伊集院肥前守久春・同姓新左衛
門尉・梅北宮内左衛門尉国兼・二階堂阿波介秀行・猿渡

越中守等為從軍、經肥後路退去、義珍・家久率大軍、經
三重路議到日向如斯決定、而後待夜半以遂發於府内之路、

欲過清田郷嶮難、敵兵遮前路悉以欲屠殺、整騎步不乱先
後、使前鋒追退凶徒之際、伊勢弥九郎貞昌・久富木撰津

介各斬獲強敵一人、此時我之軍中戰死者佐多常陸守忠
常・長谷場出雲守・松下越中守・池山掃部兵衛尉・福永

藤五郎・枝次左京亮・志和池外記等也、且集彼此警衛之
士卒退矣、爰鶴崎城警衛士伊集院美作守・平田新左衛門

尉・白濱周防守・大寺大炊助戰死、其外士卒戰死不知員
數也、其翌十六日、致三重入松尾城之路、使川上上野介

久信・伊集院右衛門大夫忠棟・吉田美作守清存・鎌田出
雲守政近已下、追退前後凶徒也、

同月十七日、待朝日出而去松尾城、過千葉師堂赴梅之嶮

難、凶徒等雖發鉄炮於後、不屑而已登坂上、則有称奥畑

之地、彼地凶徒為遮前路、發鉄炮以進來、俾我之軍中持

鉄砲者對之、以射退而無障導焉、少焉凶徒從三方逼來、

而欲屠殺後陣衆、義珍・家久指揮軍中、各勵氣奮威逼凶

徒接兵刃、敵軍忽瓜潰、由此獲敵首者及百矣、今夜宿于

長谷川内也、

同月十八日、發於長谷川内凶徒等進來、則指揮以追退之、
丁此之時阿多筑後守戰死焉、敵兵漸以退散、則超過梓山、

于時薩隅日三州中在国軍衆迎來、今夜入梟城、山田越前
守有信亦率多勢來、先諸軍帰国、故同十九日、入高城也、

同廿日、發於高城到於都於郡、参云 義久公、公謝軍勞
感驅馳之勲功者不少者也、

三七 肥後口・日向口合戰從軍者交名

天正十五年三月、肥後御引陣之節、野上より二手^ニ別れ
日向口へ引退く人数^ニ、

町田出羽守^{久倍} 新納武藏守^{忠元}
大閤先勢筑前表へ被討下由相聞、肥後表^ニ被指向人数、

○左衛門督年久 右馬頭^{征久}
薩^守廣^{義虎}守 町田出羽守^{久倍入道存松}

新納武藏守^{忠元} 新納右衛門佐
伊集院肥前守^{久春} 伊集院源介

寺山四郎左衛門尉^{久兼} 町田左京亮
町田新左衛門尉 △梅北宮内左衛門尉

二階堂安房介 ○猿渡越中守^{征久} 十五年四月十七
日根日坂三戰死

十五年三月十五日、及退於豊府陣、逢賊兵之難軍勞、
肝付彈正忠兼寛

十五年三月十六日、義弘公三重之城^ニて御評定人数、

中務太輔家久 川上上野守^{忠克入道意鈞}

△伊集院右衛門太夫^{忠棟} 吉田美作守

鎌田出雲守^{政近}

同年三月廿五日、阿蘇の内坂梨^ニて合戦ノ時軍勞、

新納武藏守^{忠元} 伊集院肥前守^{久春}

犬童美作守^{忠元} 同子軍七

桂神祇正 大野治郎太輔

樺山太郎二郎^{肥前守子} 伊集院源左衛門

隈元在番

新納武藏守^{忠元}

合子在番

新納右衛門尉

津守在番

伊集院肥前守^{久春}

同年四月六日、京勢日州新納院高城^ニ着陣、我兵防禦の

輩^ニ、 喜入撰津守^{季久}

山田越前守^{理安}

平田新四郎^{増宗幼字ナラン} 上原彦五郎

本田弥六 本田治右衛門尉

三原下總守 三原右京亮

野村狩野介 伊地知刑部少輔

宅間與八左衛門 八木越後守^{正信}

肥後宮内少輔 奈良原安芸守^延 初狩野介^延

同狩野介 宮内勝兵衛尉

同年四月十七日、是常房か堅陣二切掛り致手柄輩^ニハ、

御大將義久公・義弘公 中務太輔家久

北郷一雲^{左衛門尉時久入道} 北郷讚岐守忠虎

喜入撰津守季久 △伊集院右衛門太夫忠棟

本田下野守^{親貞} 平田美濃守^{光宗力}

同左馬介<sup>政宗左馬介トモ云シナラン、
左ナケレハ光宗ニハ当ラス、
亦ハ左近將監ノ説カ</sup> 伊集院下野守久治

上原長門守尚近

鎌田出雲守政近

凶書頭久長

河田駿河守義朗

肝付彈正忠兼寛

穎娃左馬助

稲留新介

比志島紀伊守国貞

鎌田刑部左衛門尉政廣力

比志島式部少輔

市乘美作守

吉田若狭守

新納縫殿助久時

新納越後守忠包陽州山田・薩州隈之城地頭

新納狩野介

平田左近將監嚴宗

京勢平佐の城二押寄候時、神祇与力之土防禦して抽戰功、

谷山紀伊守紀伊介トモ

同子刑部之丞

宇都伊豆介

同子八兵衛

同弥七郎

谷山次郎右衛門

春田主水正

阿久根權介

高木帶刀長

天正十五年六月十日、持明君為人質大閣御陣へ御差出

之節御供、

本田下野入道親貞

野村狩野介

渡邊權介

持明君御上洛之御供衆、

伊地知駿河守「納戸代官兼役、大閣御帷子一ツ拝領」

伊地知丹波守「全」

長谷場筑後守「純右筆役、全、純辰初織部介」

川東善左衛門「走舞、全」

田尻仲左衛門「下司也」

岡本主計允「下司」

原田伊豆守「御包丁役」

山口早左衛門「打込之御供也」

田尻才允「御中間ノ役」

長尾源五「全」

曲田吉六「御小者役」

大羽吉次「全」

三八 島津義久譜

羽柴美濃守秀長為大将、領數十万騎、有到著于豊前州之

声、天正十五年三月十一日、義珍率薩摩群衆、去野上陣健軍、当地近辺有称湯之城之地、小寺官兵衛尉為前鋒入彼城、與地輩俱運籌策侵陣所來、我軍對之相鬪、而斬首十有五六、乘勝追敵於四方、其翌十二日、揚勝吐氣、而去此地府内、同十四日、敵船進來放火冲洲與萩原之兩村、而欲退去之際、我之騎步馳到其地對之挑戰、獲數多敵首矣、

天正十五年三月十五日、高野山木食興山上人・一色駿河守昭秀來府内勸和睦、然而不合諸將之心、由是僉謂、不如早歸我國以保薩隅日三州中要害之地、得人和待其時、因茲相議分歸陣於兩道、使島津左衛門督歲久・同姓右馬頭征久為將、町田出羽守久倍・新納武藏守忠元・同姓右衛門佐・伊集院肥前守久春・同源介久洪・寺山四郎左衛門尉・町田右京亮・同姓新左衛門尉・梅北宮内左衛門尉國兼・二階堂阿波介秀行・猿渡越中守等從之、向肥後路退焉、又義珍・家久將向日向路退去、待三月十五日夜半、義珍遂去府内之路過清田之郷、敵兵遮前路悉以欲屠殺、義珍整諸士卒、暫停前鋒追退對敵之際、伊勢弥九郎貞昌于時十八歲、後任兵部少輔也、久富木撰津介上原長門守尚近弟也、各斬敵一人也、于時佐多常陸守久政・伊集院美作守忠宣・白濱周防守・平田新左衛門尉・長谷場出雲守・松下越中守久孝・池山掃部兵衛尉・福永藤五郎・枝次左京亮・志和知外記遂戰死矣、同十六日入三重城、同十八日、超梓山入梶城也、此之時義久在都於郡矣、

三九 島津中務大輔家久譜

天正十五年二月十八日、岡之城主癸師旅密襲來、陷小牧・鍋田兩城、而我兵戰死者多矣、就中小牧之守將甲斐右京

亮自勢一百余人、高知尾之士甲斐肥前・同姓弥太郎・坂本飛彈・福永四郎三郎等主從百卅余人、家久之臣丸田郷兵衛・矢上彈正・宮之原淡路・瀬之尾二助同遂戰死也、而後忠助屢差价使、而招吾於三重、故發府内入於松尾、丁此之時、三城日知縣・門河、之士卒為南郡之換守兵進來、使夫士卒留于此地而為警衛、故四面五六里之間、追退凶徒而安靜也、三月十三日、義珍主發於野上入於府内、同十五日、高野山木食興山上人・一色宮内少輔來于府内、勸于和睦、而不合于諸將之心、而僉云、在于他国徒勞軍務、不如早歸鄉國保薩隅日三州要害之地而待天時、同十五日夜半、義珍主去府内欲赴日向之路、過清田之郷、敵兵遮其道路、雖然整於士卒前途悉以追退、同十六日、來入于松尾城、是以終夜為評議、決定于歸陣、同十七日、發松尾城過千葉師堂、踰梅之嶮難到于高動野之際、奥畑士卒遮前途、三重士卒逼後路、且運弓手從三方競至矣、

四〇 佐多久政譜

三城・佐土原・穆佐之銳兵共對之得勝利、斬獲數百、殘党悉以追退、其夜宿于永谷川内、同十八日、發於永谷川内之路頭、凶徒屢雖進來、指揮而追退四方、踰梓山之際、薩隅日之軍衆為加勢進來矣、其夜已入梶城、同十九日、義珍主發於梶城入於高城、家久三日後而歸佐土原也、

久政從軍 太守公、屢抽勲功、
天正十五年丁亥三月十四日、久政守衛豐州瀧田城前也、時敵兵大逼、久政奮戰死、年四十二、法名春岩道劫上座、

四一 勝部兵右衛門聞書

一下ノ庄ハ不參候程ニ、明^{又正}十五年二月上旬着陳し玉へハ、降參の由訴へける間、陳を開れけれども未下城ハなかり計^ナ、豊後の諸城御旗下に悉く參れとも、岡の志賀・津賀牟礼・湯ノ庄・杵築の城此等未參といへ共、先差放し置て、義久ハ野上城へ御入御越年あれハ、家久ハ府内へ御座す、義廣ハ朽網に打入御越年被成ける、去程ニ千石権兵衛尉敗北して、軍勢多く減ひたるよし都へ告上せけれハ、関白天下聞食、御気色不好、彼嶋津ハ国分をもそむき筑前ニ打出、岩屋の城なども攻果し、又豊後と一和のよし被仰下けるをも違背して、豊後国ニ乱入、剩へ千石カ勢とも打果せし事実ニ異恨の至也、殊如此成共ハ四国・中国迄も攻隨へ、終ニハ都の怨と可成者なれハ、急速ニ追伐を加へて遂^{カタマ}関白自下向ふへしとて、天正十五年^{丁亥}三月初ニ御馬出下らせ給ひける、日向口の大將御弟の大和納言美濃守秀信卿大將にて、四国・中国の勢十二万騎引卒し、豊後をさして攻下り給ふ、東海道・北陸道・京都畿内の諸勢ハ御旗元ニしたかひ、坂東ニハ長門国赤間関ニ着せ給ふ由相聞得けれハ、薩^{サツ}の大將宗徒の人々評儀せられける者、無案内の国ニ美濃守殿の大軍引受師せん事も成かたからん、其上豊後国中の城々降參しける者共、于今心變せん事有まし、所詮唯我國に引入勢を催し師せんニハしかしとて、同三月十一日、大守義久野上を御立、其夜ハ嶽宮ニ着玉ヒ、明る日ハ府内の如く退給へハ、豊後ハ大友家年来の国なれハ、國中皆大友方と成、心變せぬ者そなし、権現嶽の迫も湯の庄とくり合、早心變りして薩^{サツ}勢ニ矢を射なしたりけり、

四二 勝部兵右衛門聞書

一同^{ヨロ}十二日ニ府内ニ着せ給ふなり、其時都より木食上人・一色兵部少輔無事の嘸なし給んとて下向ある、義久即參会し玉ひけるに色々御異見のミ有けれども、御承引なきなれハ彼兩人ニも不及力、即立せ玉ふ也、然ハ急ぎ御引陳有へし、国の留主に敵入替る事あらハ、後悔するとも叶まし、其上此国の者共皆心替りと見へけれハ、早々御引有へしとて、同十五日の夜半計ニ打立引せ給ふ程ニ、在々所々に入番して、方々に馳散たる者共を漸々に相集退れける、遮る敵ニ隔られ佐多常陸守・伊集院美作守・平田新左衛門尉・白濱周防守などと打死せられけり、路次伝大勢往々に相集て前々を取ふさく、されとも薩^{サツ}勢返合く切崩追散給ふ程ニ、大將已下無難日向へ引入せ給ふ也、又肥後口も義廣退給へハ、各々おもひく退れける、白根の城ニハ左衛門尉歳久御座か、肥後の如く退き玉ひけるを、路伝そこくをとり切れれとも打破りてそ通り玉ひける、朽網の城ニハ伯耆顯隆・城久基せられけるか、菟角としてあひしらひ、此等も難なく退れける、扱又野上より二手に別れ、町田出羽守・新納武藏守杯ハ日向口を通、秋月へ取合ん其為ニ、上筑後へ打越んとて已ニ打立れける折節ニ、薩^{サツ}勢日向のことく悉く退せ給ふ由聞えけれハ、筑後表を通ん事何かハなるへきとて肥後のことく退れける程ニ、切頭城ニ伊集院肥前守、相良か老名犬童美作守・同子ノ軍七求^{サツ}の勢を相具して籠居れけるを、迎取んとて中途まで打寄れける処ニ、案のことく切頭の者共早心替して、薩^{サツ}の者共一人も遁しと着来ル、返合て合戦し追退け、同廿日ニ各北里ま

て退れける、同廿五日に北里をも同心にて肥後のことく退ける処ニ、阿蘇の内坂無ノ城ニ桂神祇正・大野治部太輔・花山太郎二郎、右之各々籠り居られける処ニ、岡の志賀其辺の者共を駈催し追来て陳を着取籠たりしニ、武藏守・肥前守・同息の源左衛門杯大將として返合て、同廿六日其陳をも切崩し、敵七百人打とり、肥後の国へそ出られける、隈本ニハ新納武藏守、合子ニハ新納右衛門尉、津守ニハ伊集院肥前守在番せられける、八代ニ右馬頭御座す、去程ニ秀信公大軍を卒て豊後国へ打下り玉ふ処ニ、薩^{サツ}の勢疾如日向引入たる由聞給ひ、又日向を差てそ攻下らる、追付高城・財部ニ近寄、各々陳をそ着られたり、先陳ニ因幡国の住人宮部法印是常坊・小寺歛兵衛尉諸軍皆人番勤て堅らる、従夫打続き毛利安芸守輝元・小早川左衛門尉・吉川十郎・浮田八郎秀家の陳、其外益田右衛門尉・木下右衛門大夫・羽柴伊賀守・羽柴美作・毛利右近大夫・生駒雅樂助・小川土佐・東堂七郎左衛門・蓮香右衛門尉・加藤左馬允・大田源六・早川主馬允・稲葉兵庫・奥山雅樂・山崎左馬允・赤松上総守・市橋下総守・谷出羽守・出方勘兵衛・小野木縫殿助・福原右馬允・山口右京進・別所豊後・中山修理亮・木下肥後・嶺田伯耆・有馬法印・石川備後・寺田下野・同備中・中江民部・堀尾帶刀長・山内対馬・松下右兵衛尉・有馬玄蕃・稲野下野守・中村式部・浅野弾正・齋藤左兵衛・宮部兵部・木下備中・亀井豊前・増尾隱岐・細川与一郎・池田備中・竹中源介・長谷川右兵衛尉・山崎右京亮・藤田権介・大友義棟豊後の勢を相催て、三十余ヶ所の陳を取続け来らんをそまたせ給ふ、然ハ去年の十月今豊後の陳旅ニ疲れ、引足ニハ物具矢薬等をも打捨ける程ニ、是等の物をも取調んとしける其ひまニ、時

刻こそ移りける、

四三 阿蘇玄與入道黒齋書出

一天正十五年、豊後国楠の郡野上と申城^二而、兵庫頭様玄与を召寄御振廻候、御老中者圖書頭殿、御使者吉田美作守^三而候、被仰聞候者、九州無残所御手^二したかひ候、然処^二京勢下国候、豊前国龍王の城^江ハ黒田官兵衛尉殿・浅野とのを前手として着陣之由候、府内表^江ハ四国中国之兵船相着候、豊後国^三而一戦と思召され候得共、先々薩州^江兵庫陳候て、御国^二而防戦之兵儀^二定候、日向表^江兵庫頭様・中書様、其外諸大將可被成御帰陳、肥後表帰陳之軍衆ハ右馬頭殿・町田殿・樺山殿、其外新納武蔵守・伊集院肥前守其外諸軍兵帰陳^二相定候、当時九州侍共皆々豊後^江在陳申、兵庫頭様御下知^二随ひ申候、然共肥後士共を初め九州皆々御敵^二なるべく被思召候、薩州の軍衆肥後表を無異儀引取候ハ、御国之事別儀有間敷被思召候、就夫玄與事連々無別心御覽せ被及候、此節薩摩軍勢つ、かなく御国^元江引取へき才覚御頼被成候之由、愚老申上候ハ、上意のことく、肥後を始として九州御敵たるべく候、雖然玄与御味方仕候儘、御帰陳之儀御心遣有間敷候、小国と申神領分八代之堺を阿と申所までハ、神領四日路程他人の知行ましらす候、諸堺目をかため、何さま此節身命をすて可抽忠心之由申上候、兵庫頭様被聞召御悦被成候、愚老^江被仰聞候者、右之軍勢無事^二薩州^江打入候者御勝利たるへき由候て、御褒美之儀共候、扱者火急之時分候、明日帰陳仕候て諸堺目をかため可相調之由候、玄与伯父阿蘇宮内少輔と申者^江

軍兵千程相添、兵庫頭様御傍本^江相残置、則肥後^江帰陳申、諸堺目下知を申候処^二、豊後御帰陳候、されハ諸国皆々御敵^二罷成候、然処樺山権左衛門殿其外軍勢、阿蘇之内坂梨左近太夫と申者之城^江被引籠候、彼坂梨ハ玄与一門之者候、されハ彼坂梨か城大勢^二而取巻候、彼城^江ハ樺山殿御大将^二而方々の人衆籠り被申候、三日之間防戦、火出る程の軍候、その様子弟子丸越後守蒙粉骨存知申候、玄与被居候所ハ矢部と申所^二而候、高知尾より美濃守殿先手の兵、其外日向山つ、きの者共案内者仕候て、矢部山之内鞍岡と申城^江取かけ申候、玄与おとろき申候て、矢部・南郷・大野・大河など、申在所之人衆を差遣候て防かせ申候、矢部分阿蘇ハ大山を越^二二日路^二而候故、玄与分別成り兼候処^二、阿蘇之住人久我大藏太輔・恵良左衛門・三之宮弾正左衛門三人譜代之者^二而候得共、俄敵心をさしハさミ、岡の城志賀左近太夫^江申合、敵^二成候由阿蘇より申来候、則村山丹波守と申者を阿蘇へ差遣候て、右之三人則打果候、以其故阿蘇境無異儀候、去れとも坂梨か城ハ敵大勢^二而取巻候、然処^二右馬頭殿・町田殿、其外新納武蔵守・伊集院肥前守諸大将豊後より愚領を国と申在所^江引取られ候、彼のを国は豊後筑後の境^二而候、を国より阿蘇^江者一日路^二而候、中途を敵取切り候ま、阿蘇御引取被成かね候、玄與飛脚^二而小国^江申遣候ハ、阿蘇^江敵心之者共候し、皆々打果候、されとも坂梨か城を敵取巻候て無油断防申候、いそぎ阿蘇^江御引取肝要之由申遣候、小国の地頭申候、北里大藏太輔^江足輕迄^江召列、薩州^江御人数御案内者仕候得与申付候、北里大藏御案内者仕候て、阿蘇の宮のちと申候て、阿蘇下宮の社頭ちかく、薩州諸大将を国より御引取く、追付敵大勢にて阿蘇宮のち御陳所^江取懸

申候、然るを薩州諸大将兵儀被成、敵陳へ御取掛け候、阿蘇宮内少輔下知申、阿蘇の者共一番^二押寄候、軍きひしく候て、玄與一門の者阿蘇阿波守打死仕候、其後敵陳破申候、数百人の敵打取被成、されハ坂梨か城を攻候敵も崩申候、方々御勝利候故、薩州御軍勢ふたへと申大山を御越候て、肥州国中^江引取被成候、肥州の者共宇土・城・隈部・赤星・小代・三池杯御敵と成り候、されとも愚神領相統候ま、薩州御勢八代御打入候、其日宇土より隈庄城^江取懸、城主宮原筑前守打果申候、町田出羽守殿分承候ハ、玄與薩州^江引取候へと承候、愚老申候ハ、三ノ城かたくこしらへ人数も五六千も有へく候、一防戦仕候て其後御国へハ参へく候、いそぎ御帰国候へと申候、さらハとて諸軍勢八代^江帰陳候処^二、谷山の城御敵と成り候、芦北とほりハ肥前兵船取切り候、川畑甲斐など打死仕候、八代よりあせちをなされ求^江御着く、深水三河入道^江徳病など仕候て馳走不申、武州・肥州など深水入道か宿所^江御出候て、深水入道をとりのことくにして、薩州の軍勢無恙^二大口^江御着候、然ハ肥後国中^江京勢雲霞のことく打入候、愚老^江浅野殿分以使承候ハ、薩州^江関白様御下向候、九州皆々したかひ候、阿蘇宮可致参陣候、いそぎ人数を差遣し馳走不申、然ハ神領前代之ことく可被下候御朱印御持せ候、愚老御返事ハ、忝御意候、然共神領を薩州分此内信仰^二て候し、其恩深候、鹿児島^江此段申入、其後馳走可仕候段返事申候得共、分別次第と候て薩州^江御とほり候、玄與夜白城郭を拵へ人衆を集中候、たかちを山をく、り、以飛脚都の郡^江肥州表ハ御心安かるへきよし申上、御老中より承候ハ、弥肥州表御頼之由、悴家之年寄共申候者、前代より天子^江申上^江候、た、し京方仕候て悴家を残し度由申候、

愚老申候ハ、各申散尤候、去ながら野上^二而^一 兵庫頭様へ申上候首尾相違候てハ、玄與事人ならず候、忤家滅亡迄^二候、薩州方^二て可相果之由申候、左候へハ無是非由申也、譜代之者共一味同心候、されハ 関白様御帰陣^二八代分矢部へ京勢十人の大将^二而、阿蘇宮御追伐として着陳候、愚老城を遠攻^二而候し、浅野殿より承候ハ、 関白様ハ箱崎^江御逗留被成候、阿蘇事城を渡し候ハ、身上事侘可被成候、神領ハ前^二御朱印返し申候ま、少も有ましき由承候、愚老存候ハ薩州御無事之上ハ、身上全候て肝要之由存候て、城を渡し可申段約束申下城仕候、玄與養子六才^二成候を浅野殿同心して、箱崎御陳所^二而身上無別儀相濟候、その明年御^江江參候時分、譜代之者共^江江暇を遣候て大口^江參着候、数十年申上度心中ながら斟酌故心中^二こめ置候、折ふしも候ハ、被備上覽候ハ、越中守ためまて候、以上、

愚老

玄與印

御老中

參

「右直本ハ、杉原のよふなる紙^二而巻物也」

四四 新納忠元勲功記

一天永十五亥正月廿六日、貫明様野神城江御陣を被為移、其比城主計降服^二て、志岐之党類不相隨者打込罷在忠元^二被仰付、阿蘇之人衆と攻寄せ、敵余多討取御番為仕由、同三月、大閤秀吉公大軍^二て肥後口より、舍弟羽柴秀長ハ豊後口より被攻入事相聞得、同十一日、松齡様御引陣之御相談として府内城^二被為入、松齡

様ハ日向路より、金吾歳久様ハ肥後路より被為曳^二相決、忠元も其手^二相付、同十五日府内打立、同廿日北里^二到着、然処桂神祇忠助・大野七郎久高・樺山太郎二郎、玖麻衆犬童美作守休意并子稻留將監等致在番候坂無城^二、岡之志賀氏等豊後衆と押寄せ、致後切事承付、忠元并町田出羽守久倍・伊集院肥前守久春・其子源左衛門等申談、忠元家臣田中藏之丞等を開合として忍^二遣、同廿五日北里出立、夜中^二押寄、同廿六日曉於宮之路遂合戦、敵七百人討取、同四月五日、忠元右之衆と坂中出立、肥後之様に立退、忠元ハ隈本城、新納右衛門久饒ハ合子城、伊集院久春ハ津守城、右馬頭征久ハ八代城^二打入、夫より三船城等見廻引取折柄、松浦筑前守堅志田衆と谷山城より付ケ送候間、忠元為乗馬を引返し、久春等と人衆^二加下知、谷山城^二切入、何れも碎手、松浦ハ山中^二遁隠、又尾牟田^二て肥前衆とも合戦、是又討破、八代之内関之城^二到着、同十七日、忠元桂神祇と花見^二事寄、八代地下之子共を人質^二取付、同十八日、月之出^二八代出立、阿世知山より右之質人共ハ差返、同十九日、忠元等之立跡^二京勢為討入由、左候得共、同廿日、無事^二玖麻江到着、爰^二而深水某心替と承、忠元即人衆三百人を召列、人吉城^二差越及直談候処、表裏無之玖麻川迄堅固^二送來別れ為申由、同廿一日、忠元ハ大口城^二帰着、同廿三日、桂神祇も平佐城に帰着、各籠城之手当仕居候処、太閤者秀長於日向口為被得勝利事最早被為聞、出水口より被為人、出水領主又太郎忠辰一言も無御方江不奉伺、存外川内迄致案内、同廿五日、泰平寺^二御着陣、則小西撰津守行長・九鬼大隅守嘉隆・脇坂中務太輔安治等を將として、同廿八日、平佐城^二押寄せ被攻圍、神祇忠助三百余之人衆^二加下知拒之、城中^二致内応者^三三人

糺付悉致誅伐、志を皆一致^二して致防戦候処、日向之御陣所より致下城候様被仰下、同廿九日、忠助小姓海老原市十郎・太田治部左衛門を人質として、九鬼・脇坂之陣所^二差出、太閤分忠助を泰平寺に被召出御目見、且脇差一腰拜領為被仰付由、左候処、日向路之方ハ四月六日、秀長式拾万騎^二て高城・高鍋之間^二被討入、高城地頭山田新助有信等堅固^二城守いたし罷在、然処京勢之先陣宮部善祥坊等一万五千騎^二て、根白坂^二陣屋相立、同十七日、貫明様 松齡様式万余騎^二て都於郡より御出馬、於根白坂御合戦利あらず、三郎次郎忠隣等三百余人戦死^二付、都於郡迄御退陣候処、高野木食上人興山と一色駿河守昭秀等御陳江来調、和平被相勧メ^二付、御許容被為在、同廿一日、伊集院右衛門太夫忠棟と平野六郎左衛門政友を人質として、木食上人江被付遣、其時山田新助も高城分致下城、則人質として山田千代太郎^{後ハ民部少輔有榮}、喜入式部少輔久道・平田太郎左衛門増宗・本田内藏允親孝等を桑山修理亮陣所^二被遣、暫御安堵之思召^二候処、同五月二日比 太閤川内江為被討入事初而被聞召上、俄^二北郷一雲・喜入撰津守季久・伊集院下野守久治・本田下野守親貞・鎌田出雲守政近等を御前へ被召寄せ、一大事之御吟味^二て、一雲ハ是非在所庄内へ御越、被遂一戦御開運可然と遮而被申上、季久・政近・親貞等ハ、太閤川内迄於被為下向者、最早大勢鹿兒島迄為討入筈、今夜中必御出立、太閤之前^二御差出御切服可然、秀長之和平も心中ハ難計と為知候方も有之、智略^二被為乘候而者残念之至と申上、其曉御出立、貫明様者鹿兒島江、松齡様者飯野江被為帰、北郷一雲も野尻迄者御供^二て、返々庄内江御光越被相願候得共、御聞入不被為在、霧嶋越^二て鹿兒島江御帰城、即川内江御差出と聞得候得

共、御供之軍衆も在所く、罷越、御供衆頓与無之、御老中喜入季久・町田久倍・伊集院久治等諸士纒七拾人計被召列、同六日、伊集院迄御越、御母堂御寺雪窓院にて御剃髮、其時分ハ、日幽様共と御改名、左候而御出被遊も夫丸等走失せ、御輿可昇人も不罷居、伊集院衆安藤左近・春口土佐守・中馬十郎左衛門・市来豊前守・大迫佐渡守・上村宮内左衛門・河添千助・小田原但馬守等御輿を奉昇、同八日、泰平寺江御參謁、佐々陸奥守成政・堀左衛門佐秀政等取成にて、思召之外被為通様被 仰出、御僧服被為召、二王門被為入候処、番人御供を為差留由、然共御太刀持川上左近將監久辰是非と申無理ニ為罷通由、然者季久・久倍・久治等ハ可罷通旨被仰出、皆罷通、貫明様白洲ニ御差出御拝伏候処、太閤よりは江くと御意、縁頼迄被為進候時、義久慇懃之至、腰之廻淋敷連、御自身被為帯候御腰物大小備前包平、三条宗近、手自御拔被為賜之、且御小袖も御拝領、左候而御盃相立、其時此酒可被召上哉、御疑之心被浮候処、太閤疾ニ其機を被為察、盃事何ぞ酒を不及盛と御意有之、別而 貫明様も御感服為被遊御事之由、其上翌九日、薩摩一国之御朱印茂御頂戴、其節御供被仕候喜入季久等も御前へ被召出、何れも御小袖一重ツ、拝領、且御手自御茶迄被下、汝等者此度義久於致切服者供ニ可切与為存歟、義久彼等ニ目を能可被懸、我者左様之節可切服者一人も無之と、殊之外御感為被成由、尤此時分御老中伊集院右衛門大夫忠棟・平田美濃守光宗・本田下野守親貞・嶋津図書頭忠長等も追々御目見為被仰付由、又兵道役者野村兵部少輔良綱・御陣僧長寿院盛淳・御右筆八木越後守昌信等も為被召列由、左候而石田治部少輔三成鹿兒島ニ差入、龜寿様人質御差出候様被為催促、直ニ京衆佐々孫十郎・平塚三

郎兵衛を御迎ニ被遣、依之同十五日、本田下野入道・平野丹後入道等御供にて御出立、伊集院江御一宿、同十七日、泰平寺ニ御參謁、御拝領物等有之、直ニ太閤より伊地知右京亮重春・原田伊予守・蓑輪丹後守重長・長谷場筑後守純辰等江御帷子一宛拝領にて、大坂迄之御供被仰付、当日御乘船、脇坂安治船奉行として川内御出船、本田・平野等者御暇にて奉別、不及落涙者無御座由、左候而翌十八日、太閤泰平寺より平佐城に御陣を被為移、夫より山崎城ニ被為入、又鶴田城ニ御陣を被移、三日程御滞宿、是より以前 松齡様ハ五月初方日向路より飯野ニ御帰城被為在、金吾様御方と籠城之手配等被仰通、入来院要嶮之城候間、典厩征久被差籠度、真幸・菱刈者日州筋京衆之往還ニ候間、一人手強可被相防御手当可為肝要、祁答院者金吾堅固ニ可持対と之事ハ乍承、一所計ニ而ハ少勢候半、伊集院肥前守等被差添可然、飯野ハ随分手強踏答可申、乍然埋草拵にて於攻寄者、城悪候間可及大事、庄内方江重暲被為頼越事可為第一、今迄ハ味方と相聞得候ま、彼是御賢慮可目出度、忠棟ハ從日州出船之由、何方ニ堪忍候哉、預示度認掛候折ニ使罷帰、 関白様江御差出之筈と承、是ハ誠ニ一大事、就而者福智三河守歟石田治部少輔之間一人質ニ被為留置、御指出候様御調儀可為肝要、返々も一大事ニ候条、御指出不被為在内ニ能々御立願可為肝要、尤此度日州於御安堵者、宮崎又者高原迄も霧嶋江可有御拝進御祈念可被為在儀肝要思召趣之御披露状、同七日、松齡様飯野より本田下野守迄被遣置、其後右次第御和平被為濟候事御聞及、同十九日、松齡様ニ茂野尻城ニ御差出、秀長ニ御面謁、即人質として赤塚三右衛門・佐谷田寛右衛門を桑山修理亮陸屋江被遣置、左候而 太閤鶴田城ニ御滞留之時

分、同廿六日此、一唯様と御同伴にて御參上、太閤御目見相濟、此日大隅国御拝領、其内肝付一郡ハ忠棟無親疎被思召、最前より為被下置趣之御朱印御頂戴、一唯様ニ者諸県郡御拝領之御朱印被為賜之、自其御陣を曾木城ニ被為移、此時宮之城領王金吾歳久様案内を被為出、太閤之大軍を九尾之嶮難、人馬も難通山路ニ導參候故、乍漸曾木ニ御着城、五ヶ日程御滞陣、然処忠元儀者此より以前大口ニ帰城にて、菱刈表伊地知備後守重康・同子民部少輔重堅・木脇三右衛門祐吉等、其外大軍之軍衆ハ不及申、庄内表又ハ志布志瀧間越後守宗清・土持大膳亮綱家・二階堂阿波守 等有志衆ニ申通、大口ニ櫓籠可遂防戰手配等疾ニ相備置、大軍之京勢数月之遠陣、兵粮尽果候事を能聞取、忠元使者を以米一俵を細川幽齋陣屋ニ差贈、京勢粮迫及困疲と承及、必是を被食せ、我大口ニ押寄被励忠戦度、随分御会尺可仕と為申遣由、然者幽齋を初京勢一統感激仕、太閤ニ迄被申上、太閤も忠元之大膽ニ者別而為被為感事之由、左候処伊集院忠棟・石田三成を致案内菱刈ニ差向、本城より大口ニ致推參間、忠元加下知鉄砲打掛為防候処、汝等忠棟を不見知哉、暫相止候様申參候故、出迎及面謁、然者 貫明様 松齡様最早御和睦被遊、自分を入質ニ初発より被差遣置、 龜寿様と又一郎様も御質として御差出被遊候間、必忠元も下城可仕旨為承届候得共、忠元合点不仕、此国中一箭も相防者無之者無男子も同然、夫故吾京勢粮絶及難儀事聞取居候間、城下ニ寄せ付一戰討勝事胸中ニ有之候間、必々以此旨御異見可被申と、防戦一箇ニ相定中く承引不仕、忠棟・三成も難及力ニ一先引去候処、同廿四日、太閤も御馬を被為出、先勢曾木之天堂か尾迄着陣、洪水之故川者未渡候御、 貫明様よりハ新納右衛門佐

久饒、松齡様よりハ伊東右衛門佐を以度々御下知被

為在、其趣者、御質人様京方ニ被為出候上於致弓箭ハ、

即可為御敵被思召旨被仰出、忠元も此上ハ不及力、誠

ニ口惜乍存出頭ニ相定、一味之衆ニも成行申越置、自

其大口之成就寺ニ至り、致剃髮拙斎と改名仕、洪水ニ

て馬越之様相廻り、天堂か尾之陣屋ニ參謁仕、其時乘

燭之比候得共、即 太閤御前ニ被召出拝伏仕候処、

太閤御直ニ、武藏ノ此上と可敵我哉と被仰掛、忠元

畏り、主人義久さへ思立候者幾度も敵対可仕、乍然如

此御和睦為仕上者、義久も表裏仕ましと尊答仕候得者、

太閤別而御感賞被為在、兼而被聞召及相忠勇ニ少も相

違無之旨御意ニて、御長刀一柄無銘、鞘柄梨地、赤鍋金物金桐、被下之、

忠元拝伏乍仕拜戴仕、而を拳不申由、然処何卒忠元顔

色を御覽被遊度思召、又々御道服一領被成下候得共、

是亦拝伏之成ニて拝領仕、初終而を不奉由、其節太閤

一説、御発句、
幽齋、
是ハ御酒被下候、
時其申説御座候、

鼻のあたりに松むしそなく

忠元打笑、其時初て頭を挙て、

上ひけをちんちろりとひねりあげ

と尊答仕候得者、御感為被遊由、然処其夜直ニ天堂か

尾御出立、羽月園田を被為通、其節も忠元騎馬ニて罷

出、御道筋より遙敷町之所ニ相扣罷在候処、 太閤御

覽被為在、騎馬之士を御使ニて被召呼ニ付、忠元即下

馬仕、御輿之傍ニ拝跪仕候処、御手自被為持候御扇子

表鏡金画柄、
裏金砂画菊、 拝領被仰付、謹而頂戴仕、御近士ニ相付右

之御礼且御帰鞍を為奉賀由、此年忠元六拾二歳ニ御座

候、今以右之品々多者内藏方江格護仕居申候、

一 同年右様忠元奉送候以後、 太閤者大口止神より平泉

上場を被為通、肥後之様御引陣有之、其比連歌之宗匠

紹巴書述為申記行ニ、新納忠元と云鬼武者あり、吾領

内ニ乱入者あらハ大口に食んとすと書置、余程其時代

より名高く為申事之由、左候而 貫明様も其年六月

十五日、鹿兒島御発駕ニ而御上洛被遊、御案内者者木

食上人被相勤、同十六日十七日、大口小河内ニ御着到、

忠元儀者前により御中途迄罷出奉迎之、直御供仕候処、

則 御前江被召出、此度之忠節寔に無比類被思召上旨、

御直ニ奉蒙御感賞、其上剃髮名も為舟と拝領為被仰付

由、自其以前忠元事ハ、御一族其外大身衆同前ニ人質

可差出旨 太閤より被仰出、二男弥太右衛門忠増を差

出置候処、 貫明様御供ニ被召列上洛仕、同年九月二

日、初而聚楽江御登城被遊御も御供為仕由、但其比迄

者左京亮と申時分ニ御座候、

一 同年十月、此夏 太閤御開陳之節、佐々陸奥守成政江

肥後一國被成下、隈本城ニ罷居、其外国人之城地等持

留人質差出為致降服者ハ、某之御朱印ニ而安堵仕候衆

も不少由候処、成政檢地申付、右之面々ニ領地も不渡

加之自分妻之弟相良方江ハ八代七浦を令配分、其外百

姓等迄も非分申付、又大坂江御届も不申上、隈部但馬

守親泰居城ニ取懸、旁無道ニ付、其子式部太輔等山鹿

城ニ走入、城主宇動左衛門、其外三船城主甲斐掃部助

并其弟甲斐相模守・同弟林兵部太輔、隈部城主甲斐上

総介等之歴々多者致一揆隈本ニ取懸、成政及難儀事

太閤被聞召及、諸候江上使且軍衆可被仰付候得共、先

為見聞毛利右馬頭輝元等被差下ニ付、 貫明様御供ニ

而在洛候伊集院忠棟入道幸侃も同様被差下、就夫肥後

表之儀忠元等存分も可被聞召、旁為見聞細事忠元江被

仰遣候間、忠元事も能々示談仕、何篇 松齡様御下知

次第可相働旨、段々成政罪科之次第も被為書、此月廿

一日、 太閤御朱印并長岡兵部入道玄旨・石田治部少

輔三成之奉書相付、皆武藏守宛にして被成下、依之

松齡様則忠元江先手之大將被仰付、人衆召列肥後表

江出陣仕候処、相良方八代七浦を相固メ通路無之、彼

是仕内ニ、安雲之安国寺惠瓊右之一乱ニ隈本及難儀事

聞付、筑後より為被駆着風聞伝承、同十一月七日、忠

元より使僧を以致書問趣有之、同廿六日惠瓊返翰、南

之関ニ打入隈本通路切明、成政無恙候間、和仁・辺春

等楯籠候一城取巻、五日中ニハ可及落去、次ニ者山鹿

宇働城ニも可取詰京都御下知於有之者、必軍衆差出隈

本ニ可有加勢旨、武藏守宛ニて被申遣、右ニ付同十二

月廿日、 松齡様飯野より大口迄御出馬ニて、段々御

下知為被遊由御座候、

(本文ハ底本ニ欠ク、鹿兒島県立図書館本ニヨリ補フ)

一 宇目梓山覚書

○中川家文書
神戸大学文学部日本史研究室蔵

梓山之覚書

- 一 梓山東西へ長し、国見峠より豊後杉日向杉八午ノ方也、
- 一 豊後杉日向杉ハ梓より八戸へおり候尾筋ニ有、
- 一 豊後杉日向杉ノ間、式拾四間程也、
- 一 豊後杉ノ梓ノ峠迄拾三町程也、同所三足ノ馬場ハ大杉
ハ六七町国見ノ方也、
- 一 梓ノ坂ノあかり口ノ峠ハ国見峠かく石迄五町程、かく
石ハわりこ谷迄拾町計、
- 一 わりこ谷ハ長谷のあかり立くろ土峠まで拾七町程也、
- 一 長谷にミそ川有、すいが谷へなかれ出る也、
- 一 黒土峠ハ城之越ノ三辻迄拾壹町計、
- 一 城ノ越ハ井ノ川がたをノ志里杭迄八町程、
- 一 梓ハ日向ノ内八戸村ハ巳午ノ方、梓ハノ下着ノ在所也、
- 一 此道志里半計、
- 一 梓ハ日向之内下赤村午未ノ方也、此道志里計、
- 一 梓ハ日向之内志いや村未ノ方也、此道志里余計、
- 一 梓ハ日向之内上赤村甲ノ方也、此道式里計、
- 一 梓ハ宇目之内桑原嶽甲酉ノ方也、桑原村ハ酉ノ方也、
- 一 此道三里計、
- 一 梓ハ宇目ノ内藤河内村酉ノ方也、此道五里計、藤河内
嶽ハ甲酉ノ方也、
- 一 梓ハ宇目之内木浦も西山も戌ノ方也、梓ハ木浦迄道五
里也、かち道ハ四里也、
- 一 梓ハ宇目之内屋なせ村ハ戌之方也、此道四里半計、屋
なせノとや山ハ酉ノ方也、

- 一 梓ハ宇目ノ内田代村ハ戌亥ノ方也、此道三里計、
- 一 梓ハ宇目ノ内蔵小野村ハ亥ノ方也、梓ハ宇目へ之下着
ノ在所也、此道三里計、
- 一 梓ハ宇目ノ内田野村ハ子丑ノ方也、梓ハさかり村へ行
下着之在所也、此道式里半計、
- 一 梓ハ宇目之内すいか谷ハ戌ノ方、梓峠ハすいか谷之古
屋敷迄式拾七八町計、上赤村ハくすの木峠を越シすい
か谷を通り長谷へ出る道有、
- 一 梓ハ宇目之内きり畠村之鳥屋山戌亥ノ方也、此道志里
半計也、

- 一 梓ハ宇目之内城ノ越しノ古城ハ子ノ方也、梓ハ田野村
蔵小野村へ下申候三辻也、
- 一 梓ハ宇目之内駒なき峠亥ノ方也、宇目之内中津留村ハ
蔵小野村へ越ス峠也、峠ニきふねと云城山あり、山の
いたたきせばし、薩摩もの打入三年已前ニ岡ノ城ハは
り番を置候所也、此道三里、
- 一 梓ハ宇目之内ふくが嶽ハ卯ノ方也、此間式里半計、梓
ハ道なし在所なし、
- 一 梓ハ宇目之内惣太郎村寅ノ方此間式里計、是も梓ハ道
なし、
- 一 梓ハ宇目之内屋が嶺ハ寅ノ方也、此山ハ東ハ日向領地、
西ハ豊後ノ内御領分也、此間三里計、是も梓ハ道なし、
- 一 梓ハ宇目之内大原村ハ丑ノ方也、尾か嶺をこす道ノ下
着也、此間四里半計、
- 一 梓ハ宇目之内内田村ノ朝日嶽と云城山丑ノ方也、薩摩
もの打入之年拵申由也、山ノ頭せばし、
- 一 梓ハ宇目ノ内千束村ノとび山ノ古城ハ子ノ方也、薩摩
もの打入已前ハり番を置候由也、此道四里計、

- 一 日向之上赤村ハ宇目ノ内桑原越ニ道有、荷馬ノ通る道
也、此道ハ木浦へも田原村へも出る也、木浦ハ桑原迄
式里計、桑原ハ梓山之大杉迄式里半計、
- 一 同上赤村ハ梓山之内長谷へ出る道有、舟わたりノ川有、
長谷ハ上赤村迄道志里半斗、荷馬ノ通る道なり、上赤
村ハ此方御領分楠峠へ出、すいが谷を通り長谷へ出る
也、
- 一 同くづわ村ハ此方御領分惣太郎村へ出る道有、但かち
道也、
- 一 同屋カ内ハ屋が嶺越ニ道有、宇目ノ内大原村へ出る道
也、荷馬ノ通る道也、此屋が嶺ハ有馬殿領分とこの方
御領分と嶺分ニ堺也、森市三郎殿領分も少山ノ尾筋ニ
てさかふ也、宇目ノ内大原村ハ日向之内屋カ内村迄三
里計、此屋カ内ハあかたへ出る道筋竹のくし越本道也、
又川内通りくづわ村へ出てせ口村に而竹のくし越と出
合申也、荷馬も通る道也、日向ノ八戸村式里行て野嶺
と云村にてこの屋カ内通りノ道梓こしノ本道ニ出合
也、
- 一 日向と佐伯と境ノ山ノ出さき海はた迄続也、此でさき
梓ハ卯辰ノ方之由也、日向ハ佐伯へ越ス道三筋有之由
也、此道筋、
- 一 日向ノ加ち地村ハさいきノ内赤木村仁田原村へ出
るかち道也、
- 一 日向ノ内三河内村ハさいきノ内かた、村へ出るか
ち道也、
- 一 日向ノ内宮ノ浦ハさいきノ内まるいちび浦へ出る
道有、寸馬ハ通る道也、
- 一 右日向ハ豊後へ越ス道筋共梓越ニ増たる道ハ無之由
也、
- 一 岡ノ御城ハ梓山ハ辰巳ノ方也、梓山ハ御城戌亥ノ方

梓山近辺日向ハ豊後へ越スわき道

一 岡ノ御城ハ梓山ハ辰巳ノ方也、梓山ハ御城戌亥ノ方

也、岡ノ御城あづさ山ノ豊後杉迄拾四里也、此壹里
杭立所、

壹里 草深野村 貳里 諸方ノ下自在村

三里 川宇田村ノ内 四里 こしろの村

五里 松が平 六里 奥島村

七里 留返しノ坂下 八里 宇目ノ内

九里 小野市村内 拾里 さかり村

拾一里 重岡村 拾二里 梅木山之内

拾三里 わりこ谷 拾四里 梓山豊後杉

一 梓があがた有馬殿居城ハ巳午ノ方也、豊後杉あかたノ城迄七里也、あかたがさ、野迄七里也、此さ、野村ハ有馬殿と秋月殿との堺也、耳川が壹里余あかたノ方也、右梓ノ大杉があがたノばくろう町まで七里ノ壹里杭立所、

大杉が壹里 八戸ノ内小河原 二里 八戸ノ内

三里 ゆふぶ村 四里 長井之内

五里 すさ村 六里 むしか村

七里 あがたノばくろう町

一 梓がさいきの森市三郎殿居城ハ丑寅ノ方也、此道拾壹里、

一 梓がうすき稲葉殿居城ハ子丑ノ方也、此道拾三里、

一 梓が府内竹中殿居城ハ亥ノ方也、此道拾七里、

一 宇目

梓山之覚書 壹冊

〔三拾五〕

二 豊後国古城蹟并海陸路程

○『大分県郷土史料集成』地誌篇

稲葉能登守領分

(大野郡野津院古城)

一 野津院之内、垣河内村が東ニ当りて、道壹里脇ニ、ほしがうと云山有。高さ坂之内三町、上ニ而場之広さ、三拾間余、横八九間有り。此山、岩立ハへ山也。東西が二口有。山上ニ水なし。谷ニ水有。四方ニ高さハへ山有。此山、古しへ百姓等取上り申候場の跡也。白杵城下ハ五里、本道筋、野津院市村がほしがう山ハ、辰巳ニ当りて貳里半。谷道せつしよ。但、麓迄ハ牛馬の通道。

(大野郡三重松尾古城)

一 三重之郷之内、松尾村古城之跡、山上へ之坂之内、壹町半。本口ハ丑寅之方ニ有。南の方ニ裏口有。此山小松山也。上ニ而、場の広さ、長さ東西二三拾間、南北へ拾四間、山上ニ水無し。谷ニ水有。東西山かさ有。本道筋、三重市場村ヨリ平地貳拾町有。白杵城下ハ六里。但、牛馬之通吉。

(戸次利光城)

一 戸次之庄之内、利光村古城之跡、松山也。麓今山上迄、坂之内貳町半。上ニ而場の広、長さ拾五間、は、拾壹間、北ニ本口有。南の山尾続きニ、裏口有。左右山続也。麓今三町斗、西の方ニ川有。此河下へ八町さかり船渡り也。川のハ六拾間。但シ細川肥後守領分、竹長村

へ越。利光古城迄、白杵城下ハ四里。

毛利市三郎領分

(古市、田市村古城)

一 古市郷之内、田市村ニ古城跡の山有。坂之内三町貳拾間。木戸口卯の方ニ有。小柴山上之場の広さ、北南三拾間、西東貳拾壹間有。南北尾続也。山之上ニ水なし。谷ニ水有。城下より陸路三拾町。但、田市村が未之方ハ、中川内膳正領分みあかり村堺め迄五里。牛馬の通ひ吉。此間ニばんぜう川の瀬、広さ四拾間、深さ貳尺。其外溝川之瀬五瀬有。

中川内膳正領分 大道筋

(緒方、柏野城)

一 右道筋ニ緒方之内、柏野切寄山有。岡城が卯方道法壹里貳拾五町。麓今山之高さ六拾間、内ニ岩立も有。西北ハ大川歩渡りもなし。上ニ而場の広さ、南北へ百拾間、東西二百拾五間、在家六軒有。少ハへ山也。山上ニ水なし。戌の方、山のこしニ水有。又、午ノ方ノ谷ニ水あり。南ニ入口有。牛馬かよひあり。南ニ高さ山有。切寄山よりさし渡し式町有。大道迄貳拾五町。能登守領。岩戸川境迄貳里貳拾七町有。

(小牧城)

一 同所道筋之内ニ、小牧切寄山有。岡城が卯ノ方道法三里半。山之高さ麓今西の方五拾五間。北ハ川より七拾

式間。東南ハ六拾間、上ニて場の広さ、南北五拾間、東西四間半。又、三間之所も有。南ニ入口有。牛馬の通ひ有。東西北ハ大川ニ而歩渡りもなし。亥ノ方ニ高き山有、さし渡し三町、卯辰ノ方ニも高き山有。さしわたし壹町八反。小牧山ハ大道迄、八町有。稲葉能登守領、岩戸川境迄壹里三町。

(大野城)

一右之道筋ニ、御嶽と申、神山有。岡城ハ辰ノ方道法五里。南ノ方谷ハ山之上迄三町。岩立也。西北高き五町。又、七八町之処も有。上ニ而場之広さ東西壹町拾間。南北六間。内ニ少堀切有。東西ニ入口有。牛馬かよひあり。山上ニ水なし。北の方、山のこしニ少たまり水有。谷ニ水有。と、ろ村道筋迄式拾町有。

(大野、城)

一右之道筋、一万田村之内ニ、小無礼と申切寄有。岡城ハ寅ノ方道法式里半。高さ三拾五間、此内ニ岩立拾間程有。上ニ而場之広、南北ヘ七拾五間。東西拾三間。腰ニ長さ七拾間、横四間の跡有。北の方地続入口有。西南川也。広七間、深壹尺五寸。又東の方、川広六間、深サ壹尺諸々渡り多し。牛馬の通ひ有。南の方ニ高き山有。其間七拾間ほど有。山上ハ水なし。谷ニ水有。いニシヘ百姓等取あかり申場の跡也。

(大野城)

一右之道筋、田原村之内、舞田と申、平山有。岡城ハ寅ノ方道法七里。東西南ハ大川、渡りなし。川ハ山の上迄、高さ四拾式間之内、拾間岩立也。上ニ而場の広さ東西五町式拾六間、南北式町三拾間。西の方ニ入口有。は、

拾五間、入口の左右ハ谷。北ノ方ノ谷拾四間、南ノ方ノ谷拾式間。山上に水なし。北のこしに水有。(岡、細川、白井)細川肥後守領分。柿ヶ追村境、大道迄廿八町拾八間。稲葉能登守領、境ハ麓の川半分わけ也。

(大野、城)

一右之通筋藤北村之内、鎧嶽と申山有。岡城ハ丑の方道法四里三拾壹町、山之高さ麓ハ九町拾間、上ニ而、場の広南北六拾間、東西式間、寅の方ニ入口有。牛馬の通ひなし。鎧嶽南の方ニ熊のかくらと申山有。高さ鎧嶽と同前。山上ニ水なし。西の方の腰ニ、三町下り。水少有。鎧岳ハ田中村大道迄。式拾町、細川肥後守領分。矢野原村迄式里有。いニシヘ百姓等取あかり申場の跡也。

岡城ハ三佐、船津江出ル道筋。

(直入、城)

一右之道筋ニ木無礼と申古城有。岡城ハ西ノ方、道法壹里三町。山之高さ北ノ方拾式間、岩立也。是ハ下ノ谷深さ壹町式反有。南の方岩立高さ拾五間、上之場の広さ、東西三町四拾三間、南北式拾七間。又ハ拾八間。拾五間之所も有。東の方ニ入口有。牛馬の通有。山上ニ水なし。北の方麓六拾九間下ニ少し水有。麓ハ大道也。古シヘ百姓等取あかり申由申伝候也。

(直入、城)

一右之道筋、朽網郷之内、山之城と申切寄山、岡城ハ戌ノ方道法四里半。高さ三拾間。東西の方ハ岩立也。北ノ方ハ谷小川也。広さ壹間程。又、式間、三間の処も有。深さ五寸、又ハ九寸の処も有。谷之深さ壹町四反有。

木山也。南ノ方谷也。深さ壹町三反。上ニ而場の広さ、東西三町四拾間。南北四拾五間。西ノ方ニ入口有。牛馬の通ひも有。山上水なし。谷ニ水有。東ノ方ハ尾続堀切有。深さ三間、広拾四間。西ノ方ニ今なり山と云、高山有。切寄山との間、三町有。いニシヘ百姓等取あかり申場の跡也。

小道筋

(直入、城)

一右之道筋、門田村の内、つかむれと申切寄、古城有。岡城ハ未ノ方道法壹里三町。高さ南ノ方七拾間。北ノ方百八拾間。但、なたれ山也。東西岩立七間。入口西ノ方ニ有。上ニ而場の広、東西三拾間、南北拾九間。山上ニ水なし。谷ニ水有。南の方ニ式三間下り、尾崎有。広、東西六拾五間、南北拾間。是ニも山上ニ水なし。

(直入、城)

一右之道筋、神原村之内、小松尾切寄者。岡城ハ南ノ方、道法四里拾町山の高さ南東七町。木山西北ハ、なたれ山。其内ニ岩立四間有。上ニ而、場の廣さ東西ヘ三間半。南北四間半。入口未ニ有。山上ニ水なし。谷ニ水有。南ニ祖母嶽と云高山有。

細川肥後守領分

(直入、城)

一同所町村ハ未之方ニ古城有。麓ハ山之高さ式百間。

又八百八拾間、又ハ式百四拾間之処も有。上二而場の
広さ堅百三拾壹間、横拾八間有。入口三方二有。一口
ハ巳ノ方、一口ハ戌ノ方。此二口人馬之通ひ有。一口
ハ寅卯ノ方二有。難所人馬の通なし。山上ニ水式ケ所
有。但少し之出水也。大道ハ八町脇、百姓等家居六軒有。
三口之外ハ惣曲輪立岩なり。

(大分、城)

一野津原村ハ酉戌ノ方ニ野々台と申所有。之山の高さ麓
ハ嶺迄壹町式拾間、長さ四百間。横の広さ、広き所百間、
迫き所式拾間。口二口有。戌ノ方午ノ方ニ向、四方岩
立也。但牛馬之通ハ有之。家居八軒有。大道ハ拾五町
式拾間脇也。

(大分、城)

一同所ハ坤ノ方ニ梯野山古城有。松山麓より山の高さ
三拾間。上二而場の広さ、堅式百四拾間、横八拾六間。
四方岩立也。西ノ方ニ向ひ入口有。山上ニ水なし。牛
馬の通ひ有。大道ハ四拾五間脇也。古、百姓等取あか
り申由申伝候。

(大分、城)

一同所ハ巳午之方ニ鷲ヶ台と云山有。高さ麓ハ式拾八間、
上二而場広さ堅百四拾間、横拾九間。四方岩立也。入
口北ノ方二有。山上ニ水なし。岩四間下ニ水少有之。
大道より四町脇也。いニシへ百姓等とり上り申場の跡
也。

(大分、城)

一稲葉能登守領分、戸次庄利光古城より壹里西の方ニ

雨面と申山有。山の高さ、麓ハ拾四町四拾六間。上二
而場広さ壹反五畝。土手築廻し申跡有之。土手惣曲輪
百四拾間。口式方二有。壹ツハ坤ノ方ニあり。一ツハ
卯辰ノ方ニ有。峯ハ東ノ方式町下ニ式間、三間之小池
在。之深さ五尺。但出水也。いニシへ百姓等、取あか
り申由申伝也。

(海部、城)

一佐賀関ハ申酉之方ニ烏帽子嶽城山有。高さ麓ハ東西百
八拾間。同北方より四拾四間。但、山統同南ノ方式百
間上ニ而、長さ壹町式拾間、横広き処七間、六間、惣
曲輪百八拾式間。入口一ツ有、内壹ツ寅卯ニ向。壹ツ
ハ申酉ニ向。山上ニ水なし。谷ニ水あり。本道ハ拾町四
拾間。山上へハ牛馬のかよひなし。麓迄ハ牛馬のかよひ
あり。昔一乱之砌、百姓等とりあかり申由申伝候也。

一伯殿領

(大分、城)

一同屋敷ハ未ノ方曲村迄七町。此村之戌亥の脇ニ守岡と
云古城有之。高さ坂之内五拾五間、上の広さ東西へ式
町、南北へ壹町五拾間、作場也。山のひら所々ニも作
場有。北ニ道有。東南北ハ牛馬の通よし。山の上ニ水
なし。北の方谷ニ水少有。此山南のひら少ハ松平将監
領分。

松平将監領分

(速見、城)

一同郡龜門庄小浦村、東ニ当り海門寺山跡出崎有。小路
口屋敷下より船路五里、陸路六里壹町。内四里山坂谷
道難所也。寺山西の麓ニ豊前への道有。寺山の高さ海
際より山上迄、坂の内式拾壹間。上の場の広さ、南北
へ式拾九間、東西へ式拾間。山上ニ水なし。谷ニ水有。
南老方口山の尾つ、き、人馬通有。東北海岸高く、
巖石ハへなり。西ニ入江有。入江の長さ式百間、横ハ、
八拾間。但ひかた也。満汐ニハ、から船入申候。入江
山岸岩立ハへなり。寺山より坤ニ当り、四町五反隔高
山有。丑寅の方ニも式町計隔、久留嶋丹波守領、頭成
山堺高山有。寺山いニシへ百姓等とりあかり申候場の
跡也。

(玖珠、城)

一玖珠郡山田郷之内、野上村みつむれ城山跡ハ小路口屋
敷下拾三里。内拾壹里山坂谷道難所也。冬大雪ニハ
牛馬かよひなし。城山、南の麓ニ日田道有。山の高さ
麓ハ山上迄坂の内六町。上の場の広さ、東西へ式拾間、
南北へ拾八間。山上ニ水なし。中段の谷ニ水あり。本
口辰巳(カ)うら口申酉ニ向、山の中段迄牛馬かよひ有。城
山より南東の山ひきし麓ニ入居有。西北ニ七八町ほど
つ、隔、高山有。みつむれ山より丑寅ニあたり拾八町
へだて、右田村青谷山有。

(玖珠、城)

一同郡山田郷之内、町田村小倉ヶ嶽中段の尾崎ニ城跡有。
小路口屋敷下拾四里三拾町、内拾式里三拾町山坂道
難所也。冬大雪ニハ牛馬通ひなし。此山西の麓ニ、肥
後の道有。山の高さ、麓より山上迄坂の内、八拾間。

上の場の広さ、東西へ七拾八間、南北へ拾八間、山上ニ水なし。谷ニ水有。東一方口、牛馬かよひなし。南北岩立ハへ也。西ニ川有。川ハ、七八間切岸高く、人馬渡りなし。川むかひ耆町五反隔、高山有。北ニ人居有。田地有。小倉嶺分坤ニ当り、式里隔、田野村屋敷城跡有。

(同郡、城)

一同郡飯田郷之内、田野村乾ニ当り、屋敷城跡有。小路口屋敷下より拾五里。内拾三里山坂谷道難所也。冬大雪ニハ牛馬かよひなし。屋敷城より坤ニ当り、耆里隔、日田道有。城跡高さ、谷そこより上迄耆町。切岸也。上の場の広さ、東西へ式拾四間、南北へ拾三間。上ニ水なし。谷式拾間下ニ水有。東地つ、き。一方口。但牛馬かよひなし。此道ハ、耆間、長さ式町五反。両脇切岸岩立ハへなり。南北西巖石ハへなり。西より北へ廻り、谷そこニ小川有。兩岸岩立人馬渡りなし。城跡四方ニ式三町程つ、へたて山かさ有。

(直入、城)

一直入郡田北村之内、橘木村分拾九町隔、西戌ニ当り、松むれ城山跡有。小路口屋敷下分七里三拾町、松むれ山東ニ耆里九町八反隔て、石合村ニ肥後大道有。但難所也。此道筋之内、溝川三ヶ所有。松むれ山の高さ谷そこ分山上迄、坂の内四町式反。上の場の広さ、東西式拾八間、南北へ六間。山上ニ水なし。谷五拾間下ニ水有。東の尾続、六七町隔て山有。南北西谷々岩立ハへ也。西の麓ニ小川有。川ハ、式三間。但岩川なり。川むかひ六七町隔て、日根野織部正領山有。松むれ山いニしへ百姓等とりあかり申候場の跡也。

(大分、城)

一大分郡之内、阿南之庄瀧原村乾ニ当り、城山跡有。小路口屋敷下より五里半。内式里ハ山坂谷道難所也。城山跡分辰巳ニ当り耆里半隔て、肥後大道有。山の高さ麓分山上迄、坂之内耆町、上の場の広さ、東西へ式拾間。南北へ拾間。山上ニ水なし。南耆方口。但巖石難所なり。牛馬かよひなし。三町ほとへたて、高山有西東北三方岩立ハへ也。東北の麓ニ川有。川ハ、拾町拾五間下ニ而、人馬渡り有。川むかひハ細川肥後守領大瀧村也。城山跡より丑寅ニ当三里半隔、雄城村城跡あり。

(同郡、城)

一同郡殖田庄、雄城村城山跡迄、小路口屋敷下より式里有。城山南の麓ニ肥後大道有。山の高さ麓より山上迄坂之内耆町、上の場の広さ東西へ式町五反。南北へ式町四反。山上ニ水なし。谷へ拾八間下り水有。本口坤へ向ふ。耆方人馬通有。南五町隔、津留へ落る川有。川ハ、拾五間、人馬渡り有。川むかひ中川内膳正領中村也。北ハ稲葉能登守領、拾式町へたて津留へ落る川有。川ハ、耆町、人馬渡り有。東西ニ八町つ、隔、稲葉能登守領有。八幡田村、宗方村、殖田市村なり。東南の麓ニ人居田地有。拾町斗の内ニ山なし。

木下縫殿助領分

(速見、城)

一山口村之内、古城山之跡、山之上へ麓分坂之内式町、三方ハ尾続、山之上迄牛馬通有。北の方ハ麓迄、牛馬通なし。但柴竹山也。山ノ上ニ水なし。麓ニ水有。上

二而、場の広さ長さ、東西へ式拾式間、南北へは、十三間。中ニ小谷有。本道筋分古城の麓、平地の間耆町。但山口居所より式町半。麓之北ニ川有。廣さ四反之内、深さ式尺斗。右日出筋一筋川也。

(山口城)

一吉野渡より山口古城の麓、日出道迄、同川筋也。此川、名も無之。

筑紫右近佐領

(速見、浜脇城)

一同村分未ノ方ハ、浜脇村之内、鍋山古き要害有。先年之大地震ニ嶺残分、南北ニ式拾間、東西五間。但表口ハ南、裏口ハ北也。山上ニ水なし。北の谷ニ水有。水の有所迄式町坂也。但日照ニハ水なし。此山より未申ニ当り、かさ山有。此間五拾四間、西方ニもかさ山有。此間式町。但深き谷有。人馬の通ひハあり。東の方ハ谷田地也。人馬の通ハ自由也。別府村迄九町。此間、道ニ通有。何も坂道也。

久留嶋丹波守領分

(玖珠、城)

一玖珠郡之内、久留嶋丹波守在所、森村分戌亥之方ニ、角牟礼山古城有。東西北ハ岩立、高さ百八拾間。又ハ百間程南ノ方切岸石垣麓、丹波守屋敷分山上迄、高さ坂之内六町六間。南ニ口有。内三町三拾六間ハ牛馬の

通ひなし。本丸広さ東西六拾間、南北五拾貳間、二ノ丸東西八拾間、南北四拾四間、三ノ丸東西貳拾壹間、南北貳拾七間、山上ニ水有。東の方麓ニ小川有り。同方ニ豊前国へ出る大道筋有。

大道筋

(玖珠、城)

一右之道筋、内匠村ノ町西ノ方ニ多賀山と云柴山有。岩立高さ東西南ハ五拾間余。此ノ方ニ山のかさ尾続有。東ニ口有。坂之内壺町。牛馬かよひなし。上ニ而場の広さ長さ南北へ三拾間、東西へ七八間、山上ニ水なし、麓ニ水有。此山いニしへ百姓等取上り申場の跡也。

(玖珠、城)

一右之道筋、日出生村ニ山野上と云ハへ山有。四方岩立。辰巳ノ方ニ口有。坂ノ内壺町半。牛馬かよひなし。高さ八拾間程、又ハ五拾間の所も有。山上ニ而南北へ貳百四拾間余。東西へ谷相指渡し九拾間程。南北之方ニ谷有。上ニ而場広さ八間、又ハ三間程つゝ、谷の深さ四拾間余。此谷ニ水有。麓ニ西分北へ流山川有。広さ五間、深さ壱尺五寸。東の方ニ山のかさあり。いニしへ百姓等取あかり申場の跡也。

御藏納分

(日田、城)

一日田郡之内、夜開郷城内村之内、長山古城、前者、石

川主殿頭居城。高さ拾四間。上ニ而場之広、東西三拾壺間、南北拾七間之場有。此場より三間下、北ニ東西九間。南北貳拾四間の場有。此所ニ水有之。此麓ニ東西七拾間、南北貳拾間之場有。城の廻り三百七拾貳間。同四方ニ堀有。広拾貳間、深貳間、南ニ道有。此山の麓分八拾間。南ニ小川有。歩渡り多。此川ニ添て町有。此城より東ニ当り、高城と申山あり。道法六町、又北西ニ山有。此間七八町程御座候。

(日田、城)

一日田郡石井郷之内、庄手村之内、隈山古城高さ拾貳間。上の場、東西三拾貳間、南北九間。此場分三間下、馬場有。東西五拾間、南北八間。此場分四間下ニ東西七拾間。南北五間の場有。城の麓廻り三間也。此山の辰巳より大川流出、城の麓ニ而、山を中ニ置。南北ニ別城分拾五町下ニ而落相申候。此城分北川は、かち渡り多く、南川ハ、かち渡りなし。城より北川を隔、道法五拾間有て町有。此城初より一筋牛馬の通有。長山と隈山との間、道法拾八町御座候。

一日田郡大肥之庄、中嶋村之内、ハリめと申山有。高貳町、山九分目程あかり、丸三ツ有。壱ツハ筑前領、壱ツハ御藏入之内、両山の間五拾間御座候。上の場、南北貳拾四間、東西貳拾間之場有。筑前領之山ハ、御藏入の山分少し広見え申候。東西ニ道貳筋有。牛馬の通よし。城の上ニ水少も無御座候。上分壱町下戌亥ニ当て谷水少御座候。日てりニハ無之由申候。山続ハ東南ニ次第下りニ有。此山より隈山・長山両城へハ貳里ほと御座候。

大分県文化財調査報告書 第148輯

大 分 の 中 世 城 館

第一集 文献史料編 1

2002年 3月29日

発行 大分県教育委員会

〒870-8503

大分市府内町 3丁目10-1

097-536-1111 (内5498)
